

小砂子遺跡

—北海道桧山郡上ノ国町—

1979

上ノ国町教育委員会



例　　言

- 1 本書は、北海道桧山郡上ノ国町小砂子（ちいさご）に所在する。
- 2 本遺跡の発掘は、小砂子港整備とともになう道路建設工事による事前調査である。
- 3 現地の発掘調査は、昭和 53 年 4 月 20 日から 6 月 30 日まで実施した。整理期間は、遺物の洗浄、注記が 7 月 1 日から 10 月 30 日。その他の業務は 11 月 1 日から昭和 54 年 3 月 31 日まで実施した。
- 4 調査は、大場利夫を団長とし、調査員野村嶽、加藤邦雄、上野秀一、羽賀憲二、調査補助員、田部淳、金井邦彦、右衛門佐時雄が参加して実施した。
- 5 本書の執筆は、調査に参加したもの責任で執筆し、文末に責任を明示した。文章は、各執筆者が責任を持つこととし、文体、内容等について特に改めて協議して統一することなく、各執筆者の意向どおりとした。即ち、文章の間違い、内容等については、すべて各執筆者の責に帰するものである。
- 6 発掘調査には、小砂子地区、石崎地区の人々が作業員として参加した。
- 7 整理作業は、田部淳、金井邦彦、右衛門佐時雄を中心として下記の人々があった。
 - ・出土遺物洗浄、注記（苅田たまみ、高橋美知子、佐藤宏子、出口珠実、渋谷友恵、中島一枝、河村静枝、西条美智枝、池田夢都子）
 - ・接合・分類（朝日征行、朝日章、苅田たまみ、高橋美知子、浦口謙）
 - ・土器拓影（朝日征行、朝日章、苅田たまみ、高橋美知子、池田和子、近野広子、西条美智枝、野瀬恵美子、浦口謙）
 - ・トレース（西条美智枝）
 - ・石器実測及びトレース（横地桂子）
 - ・土器実測及びトレース（田部淳）
 - ・遺物写真撮影（羽賀憲二）

（以上順不同敬称略）
- 8 石器の石質の肉眼鑑定には、北海道開拓記念館研究職員赤松守雄氏にお願いした。
- 9 発掘及び整理業務にあたって、上ノ国町及び上ノ国町教育委員会、札幌市教育委員会には、多くの御協力を得た。

目 次

第1章 発掘調査に至る経過	1
第2章 遺跡の位置と環境	3
第3章 発掘区の設定と遺跡の層序	7
第1節 発掘区の設定	
第2節 遺跡の層序	
第4節 遺構及び遺構出土の遺物	11
第1節 竪穴住居跡	
第2節 埋 瓢	
第3節 ピット	
第5章 発掘区出土遺物	68
第1節 土 器	
第2節 石器・石製品	
第6章 結 語	177

挿図目次

第1図	遺跡付近地形図.....	X
第2図	遺跡地形図.....	5
第3図	発掘区配置及び遺構関連図.....	9
第4図	セクション図.....	8
第5図	第1号竪穴住居跡.....	12
第6図	第1号竪穴住居跡出土石器.....	12
第7図	第1号竪穴住居跡出土土器拓影.....	12
第8図	第2号竪穴住居跡.....	14
第9図	第2号竪穴住居跡出土土器実測図.....	16
第10図	第2号竪穴住居跡出土石器.....	16
第11図	第2号竪穴住居跡出土土器拓影.....	18
第12図	第3号竪穴住居跡.....	20
第13図	第3号竪穴住居跡出土土器実測図.....	20
第14図	第3号竪穴住居跡出土土器拓影.....	22
第15図	第3号竪穴住居跡出土石器.....	23
第16図	第4号竪穴住居跡.....	25
第17図	第4号竪穴住居跡出土土器実測図.....	25
第18図	第4号竪穴住居跡出土石器.....	25
第19図	第4号竪穴住居跡出土土器拓影.....	26
第20図	第4号竪穴住居跡出土石器.....	26
第21図	第5号竪穴住居跡.....	28
第22図	第5号竪穴住居跡出土石器.....	28
第23図	第5号竪穴住居跡出土土器拓影.....	30
第24図	第5号竪穴住居跡出土石器.....	30
第25図	第6号竪穴住居跡.....	32
第26図	第6号竪穴住居跡出土石器.....	32
第27図	第6号竪穴住居跡出土土器拓影.....	33
第28図	第6号竪穴住居跡出土土器拓影.....	34
第29図	第6号竪穴住居跡出土石器.....	34
第30図	第7号竪穴住居跡.....	37
第31図	第7号竪穴住居跡出土土器実測図.....	38
第32図	第7号竪穴住居跡出土土器・石器.....	38
第33図	第7号竪穴住居跡出土土器拓影.....	40
第34図	第7号竪穴住居跡出土土器拓影.....	41
第35図	竪穴住居跡出土石器(7; DW 6, 8; DW 7)	43
第36図	第7号竪穴住居跡出土石器.....	44
第37図	第7号竪穴住居跡出土石器.....	45
第38図	第7号竪穴住居跡出土石器.....	46

第39図	第7号竪穴住居跡出土石器	49
第40図	第8号竪穴住居跡	50
第41図	第8号竪穴住居跡出土石器	50
第42図	第8号竪穴住居跡出土土器拓影	51
第43図	第8号竪穴住居跡出土石器	51
第44図	第8号竪穴住居跡出土石器	52
第45図	第9号竪穴住居跡	54
第46図	第9号竪穴住居跡出土石器	54
第47図	第9号竪穴住居跡出土土器拓影	55
第48図	第10号竪穴住居跡	57
第49図	第10号竪穴住居跡出土土器実測図	57
第50図	第10号竪穴住居跡出土石器	57
第51図	第10号竪穴住居跡出土土器拓影	58
第52図	第10号竪穴住居跡出土石器	58
第53図	埋甕	62
第54図	埋甕実測図	63
第55図	ビット	65
第56図	第1号ビット出土石器	66
第57図	第3号ビット出土土器拓影	66
第58図	第3号ビット出土石器	66
第59図	発掘区出土土器実測図	77
第60図	発掘区出土土器拓影	78
第61図	発掘区出土土器拓影	79
第62図	発掘区出土土器拓影	80
第63図	発掘区出土土器拓影	81
第64図	発掘区出土土器拓影	82
第65図	発掘区出土土器拓影	83
第66図	発掘区出土土器拓影	84
第67図	発掘区出土土器拓影	85
第68図	発掘区出土土器拓影	86
第69図	発掘区出土土器拓影	87
第70図	発掘区出土土器拓影	88
第71図	発掘区出土土器拓影	89
第72図	発掘区出土土器拓影	90
第73図	発掘区出土土器拓影	91
第74図	発掘区出土土器拓影	92
第75図	発掘区出土土器拓影	93
第76図	発掘区出土土器拓影	94
第77図	発掘区出土土器拓影	95
第78図	発掘区出土土器拓影	96
第79図	発掘区出土土器拓影	97
第80図	発掘区出土土器拓影	98

第81图	发掘区出土土器拓影	99
第82图	发掘区出土土器拓影	100
第83图	发掘区出土土器拓影	101
第84图	发掘区出土土器拓影	102
第85图	发掘区出土土器拓影	103
第86图	发掘区出土土器拓影	104
第87图	发掘区出土土器拓影	105
第88图	发掘区出土土器拓影	106
第89图	发掘区出土土器拓影	107
第90图	发掘区出土土器拓影	108
第91图	发掘区出土石器	119
第92图	发掘区出土石器	120
第93图	发掘区出土石器	121
第94图	发掘区出土石器	123
第95图	发掘区出土石器	124
第96图	发掘区出土石器	126
第97图	发掘区出土石器	127
第98图	发掘区出土石器	129
第99图	发掘区出土石器	130
第100图	发掘区出土石器	131
第101图	发掘区出土石器	133
第102图	发掘区出土石器	134
第103图	发掘区出土石器	136
第104图	发掘区出土石器	137
第105图	发掘区出土石器	138
第106图	发掘区出土石器	142
第107图	发掘区出土石器	143
第108图	发掘区出土石器	144
第109图	发掘区出土石器	145
第100图	发掘区出土石器	146
第111图	发掘区出土石器	147
第112图	发掘区出土石器	148
第113图	发掘区出土石器	149
第114图	发掘区出土石器	150
第115图	发掘区出土石器	151
第116图	发掘区出土石器	152
第117图	发掘区出土石器	153
第118图	发掘区出土石器	154
第119图	发掘区出土石器	155
第120图	发掘区出土石器	156
第121图	发掘区出土石器	157
第122图	发掘区出土石器	158

第123図 発掘区出土石器	159
第124図 発掘区出土石器	160
第125図 発掘区出土石器	161
第126図 発掘区出土石器	162
第127図 発掘区出土石器	163
第128図 発掘区出土石器	164
第129図 発掘区出土石器	165
第130図 発掘区出土石器	166
第131図 発掘区出土石器	171
第132図 発掘区出土石器	172
第133図 発掘区出土石器	173
第134図 発掘区出土石器	174

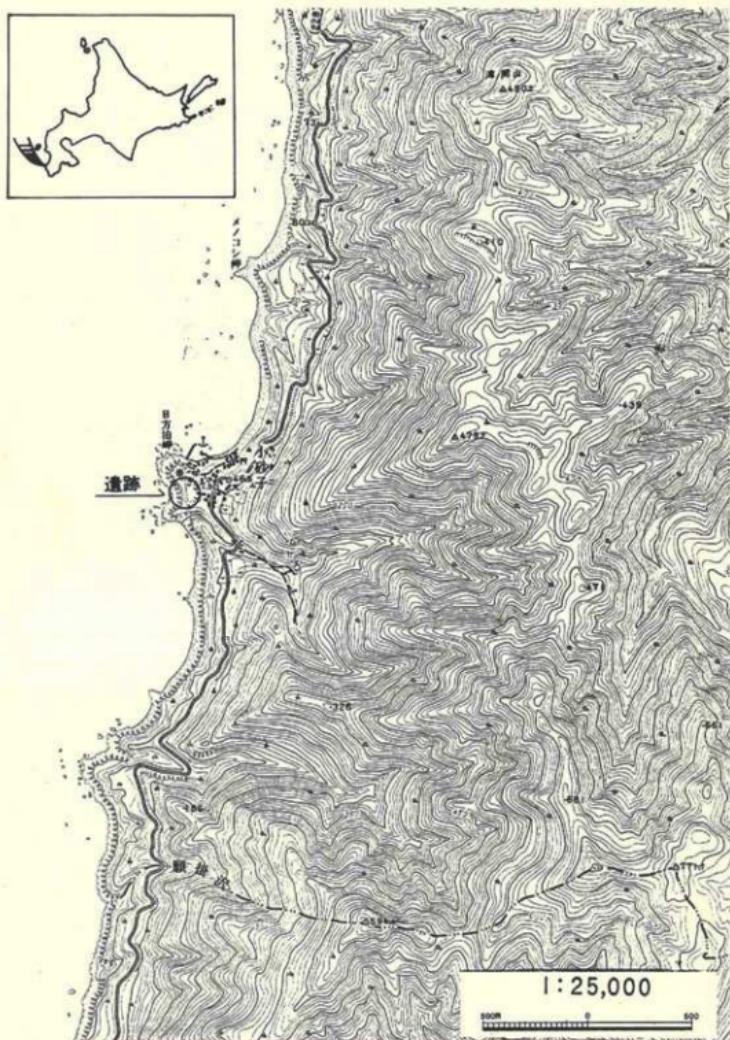
挿表目次

第1表 積穴住居跡一覧表.....	179
第2表 ピット一覧表.....	179
第3表 造構内出土石器計測一覧表.....	180
第4表 発掘区出土石器・石製品計測一覧表.....	182

図版目次

図版 1 A 遺跡遠景	193
B 発掘風景	193
図版 2 A セクション	194
B 第3号竪穴住居跡	194
図版 3 A 第2号竪穴住居跡	195
B 第2号竪穴住居跡石組炉址	195
図版 4 A 第4号竪穴住居跡	196
B 第10号竪穴住居跡	196
図版 5 A 第7号竪穴住居跡	197
B 第7号竪穴住居跡出土海獣骨	197
図版 6 A 第8号竪穴住居跡	198
B 第8号竪穴住居跡床面出土石棒	198
図版 7 A 墓壙	199
B 第1号ピット	199
C 第2号ピット	199
図版 8 第2号竪穴住居跡出土土器	200
図版 9 竪穴住居跡出土土器	201
図版10 竪穴住居跡出土土器	202
図版11 墓壙	203
図版12 竪穴住居跡出土土器	204
図版13 竪穴住居跡出土土器	205
図版14 竪穴住居跡出土土器	206
図版15 第7号竪穴住居跡出土土器	207
図版16 竪穴住居跡、ピット出土土器	208
図版17 竪穴住居跡、ピット出土石器・土製品	209
図版18 第7号竪穴住居跡出土石棒	210
図版19 第7号竪穴住居跡出土石器	211
図版20 第7号竪穴住居跡出土石器	212
図版21 竪穴住居跡、ピット出土石器	213
図版22 竪穴住居跡出土土器	214
図版23 発掘区出土土器	215
図版24 発掘区出土土器	216
図版25 発掘区出土土器	217
図版26 発掘区出土土器	218
図版27 発掘区出土土器	219
図版28 発掘区出土土器	220
図版29 発掘区出土土器	221
図版30 発掘区出土土器	222

图版31	发掘区出土土器	223
图版32	发掘区出土土器	224
图版33	发掘区出土土器	225
图版34	发掘区出土土器	226
图版35	发掘区出土土器	227
图版36	发掘区出土土器	228
图版37	发掘区出土土器	229
图版38	发掘区出土土器	230
图版39	发掘区出土土器	231
图版40	发掘区出土土器	232
图版41	发掘区出土土器	233
图版42	发掘区出土土器	234
图版43	发掘区出土土器	235
图版44	发掘区出土土器	236
图版45	发掘区出土石器	237
图版46	发掘区出土石器	238
图版47	发掘区出土石器	239
图版48	发掘区出土石器	240
图版49	发掘区出土石器	241
图版50	发掘区出土石器	242
图版51	发掘区出土石器	243
图版52	发掘区出土石器	244
图版53	发掘区出土石器	245
图版54	发掘区出土石器	246
图版55	发掘区出土石器	247
图版56	发掘区出土石器	248
图版57	发掘区出土石器	249
图版58	发掘区出土石器	250
图版59	发掘区出土石器	251
图版60	发掘区出土石器	252
图版61	发掘区出土石器	253
图版62	发掘区出土石器	254
图版63	发掘区出土石器	255
图版64	发掘区出土石器	256



第1図 遺跡付近地形図

この地図は、国土地理院発行の2.5万分の1地形図（原口）を使用したものである。

第1章 発掘調査に至る経過

札幌市教育委員会の埋蔵文化財調査室では、昭和47年度以来、札幌市中の破壊されゆく埋蔵文化財包蔵地の保護に微力ながらも尽力してきた。しかし、その体制が調査員3名であるという実情で、当初は統発する発掘調査に当るには不十分であるところから、昭和49年から嘱託調査員として、高橋和樹・内山真澄の両氏を嘱託調査に当ってきた。両氏は、札幌市教育委員会の調査の少ない時期には、調査を主体的に実施したりあるいは協力という形のもとに北海道各地の発掘調査に参加して来た。例へば、瀬棚町における南川遺跡の発掘調査などがそれである。

このような調査室の現状のもとで、昭和52年度には、上ノ国町教育委員会が主体者となって実施する国道228号線の改修工事にともなう相泊遺跡の発掘調査では、松崎水穂氏の指導のもとに両名が協力参加することになった。しかし、高橋和樹氏は北海道教育委員会へ職を得て転出し、内山真澄氏のみが調査員として発掘終了まで調査に参加した。それとともに松崎氏からの要請と当方の希望によって、昭和51年から当調査室の発掘に参加している札幌大学卒業の金井邦彦君、52年度から参加している田部淳君の2名も併せて松崎氏に指導を受けることとなった。このような経緯のもとで、上ノ国町教育委員会と当調査室は、かなり緊密な相互協力体制を持つに至った。

その後、昭和53年1月12日当調査室は、上ノ国町教育委員会青柳隆教育長の来訪を受け、小砂子遺跡の発掘調査についての協力依頼があった。青柳教育長と札幌市教育委員会原子文化課長の話し合いにより、札幌市教育委員会の事情の許す限り、最大の協力体制を確立するとの決定を見た。しかし、その後内山真澄氏は、寿都町教育委員会職員として遺跡の発掘調査に当ることとなったために、当調査室の現有メンバーで小砂子遺跡の発掘調査を実施することは困難であるとの判断から、札幌商科大学人文学部長大場利夫博士を団長とする調査団を編成し、調査員として北海道開拓記念館野村崇、札幌市教育委員会加藤邦雄、上野秀一、羽賀憲二が交互に現地にて指導に当り、札幌市教育委員会埋蔵文化財調査室臨時職員田部淳、金井邦彦を専從調査補助員とし、同、右衛門佐時雄を現場の状況に応じて派遣する体制とし、発掘調査を実施することとした。また冬期間の整理作業には、札幌市教育委員会の了承を受け同埋蔵文化財調査室の一室を使用することとした。

昭和53年4月に調査団と上ノ国町教育委員会との間で調査実施にあたっての合意があり、4月20日から6月30日迄の調査期間を定めて調査を実施する運びとなつた。

尚、小砂子遺跡の発掘調査の実施にあたっては、上ノ国町、上ノ国町教育委員会青柳教育長、佐藤文化課長及び、札幌市教育委員会はもとより、小砂子地区、石崎地区の皆様方には一方ならぬ御協力を賜わつた。特に小砂子地区的作業員の方々は言うに及ばず、その他の多くの方々からは、公私共にわたって、格別の御協力を受けたことは、調査に参加した者にとって長く忘れることができ

ない暖かい思い出となるであろう。

更に、末筆ながら御多忙な御身にもかかわらず発掘調査団長も快よく承諾していただいた上に、現地までお越しいただいて御指導を賜わった大場利夫博士、ならびに御多忙にもかかわらず現地で種々有益な御指導と御尽力を賜わった松崎水穂氏、斎藤邦典氏、野辺地初雄氏には、衷心より感謝の意を表したい。

(加藤邦雄)

第2章 遺跡の位置と環境 (第1, 2図)

本遺跡は、北海道桧山郡上ノ国町字小砂子に所在する。

遺跡を乗せる通称日方泊岬は、北海道南西部の渡島半島の西海岸に位置し、松前から江差に至る海岸線のほぼ中間に位置する。松前から江差にかけての海岸線のうち、原口、石崎間は、渡島山地の比高30m~80mの丘陵が海岸線にせり出しており、通称十三曲と称する交通の難所となつてゐる為に、平坦地は僅かしか見る事が出来ない。

本遺跡の存在する台地は、北、西、南の三方が、海平面との比高約30mの崖を形作って日本海に接し、東側は渡島山地へと連なっている。台地上は、西から東にかけて比高差約10mの緩斜面を見せてゐるが、その向背はかなり急な斜面を形作っている。更に、台地の渡島山地へと連なる基部に当たる部分には、北側から南側に伸びる沢が形成されていたと思われる痕跡を認める事が出来る。現在の小砂子部落はこの沢を埋めて形成されたものである。地元の人の話によれば、この地域に移住した当時は、台地上の強風に耐え得る程頑強な家屋を建築する技術を持たない為に、風当りの少ない沢に家屋を建てたとの事である。

遺跡地は、かつて小砂子部落を形成して行く過程でかなり破壊されており、強風の当たる台地上の部分のみが、辛うじて今日まで残されている。しかし、近年は建築様式も一段と進み、強風に耐え得る堅牢な住宅を建築する事が可能になった事から、敷地面積の狭い現在地に変わって、台地上に家を新築する事が多くなり、残余の部分の遺跡も破壊の危機にさらされている。

遺跡地は、現在耕作地となっている為に多数の遺物が地表面上に散乱している。その表面採集の結果を見ると、台地の基部の沢に向かうに従って遺物が多く見られ、縄文時代當時も、台地の先端よりもこの沢を利用して生活していた事が窺われる。この表面採集による予察は、発掘調査によつても充分確認する事が出来た。

尚、本遺跡の南方約100mには、国道228号線の改修工事に伴つて、上ノ国町教育委員会が発掘調査を実施した相泊1, 2遺跡、また直線距離にして北方約1kmには、同じく国道228号線の改修工事により事前調査したメノコシ遺跡が見られる。当地域は、人間の生活に適するのに充分な台地は数少ないのであるが、遺跡の数はその割に多く見る事が出来る。

渡島半島の日本海沿岸は、古くからニシン漁により発達した地域であり、上ノ国町の主たる産業は、檜山林の伐採事業とニシン漁で始まり、その生活も主としてニシンに依存した為、沿岸一帯の集落形成もこの事が基盤となっている。小砂子の沿岸漁業による漁獲量は多く、イカ、マス、タラ、カレイ、ホッケ、マグロ等の魚類、コンブ、ワカメ、ノリ等の海草や、アワビ、ウニ等が豊富であり、山野では、フキ、ワラビ等の山菜、クリ、クルミ等の堅果類、シカ、クマ、ウサギ、キツネ等

の動物も豊富である。

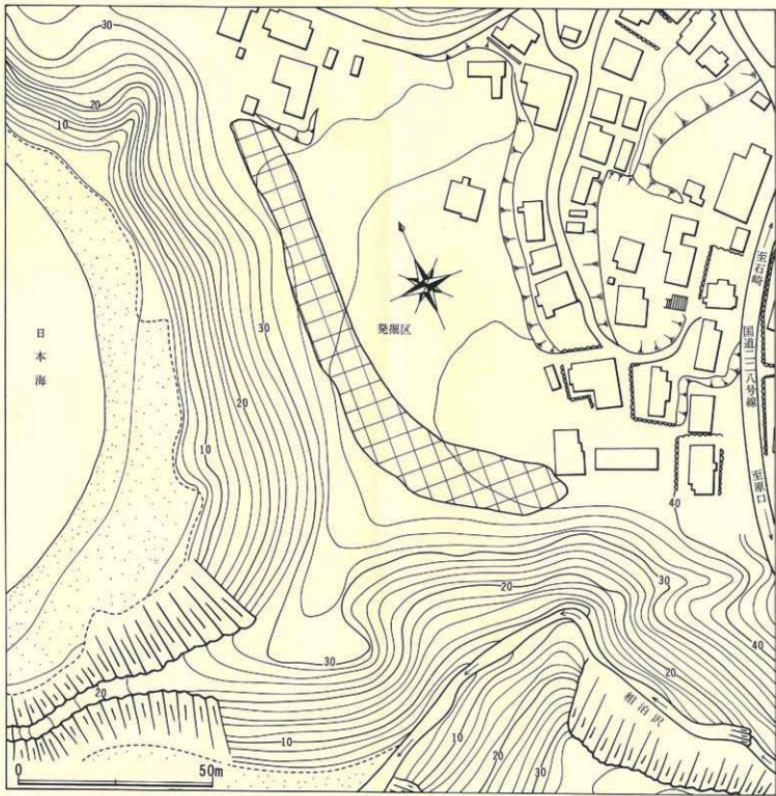
東に渡島山地、西に日本海、山と海にはさまれたこの台地は、北に奥尻島、西に渡島大島を望み、繩文時代においても、人々は自然の恩恵を充分に与えられ、山も海もより多くの幸を与えたであろう。それ故この台地は、人々の生活空間として誠に良好な場であったと思われ。数千年にわたる人々の足跡がとどめられている。

上ノ国町は、松前藩の始祖武田信広公の居城があった事や、地理的に北海道の南端に位置し、本州の文化がより早く移入された関係もあり、北海道文化発祥の地として遺跡、史跡が多い。現在、畑作地あるいは住宅の密集地となっているこの台地も、上ノ国町で現在確認されている76個所の埋蔵文化財包蔵地の内の一つであり、今回の発掘調査区域はこの包蔵地の一部に過ぎない。

(金井邦彦)

引用参考文献

- 松崎岩穂 1956 「上ノ国村史」
「わたしたちの町上ノ国」福集委員会編 1978 『かみのくにの歴史散歩』



第2図 遺跡地形図

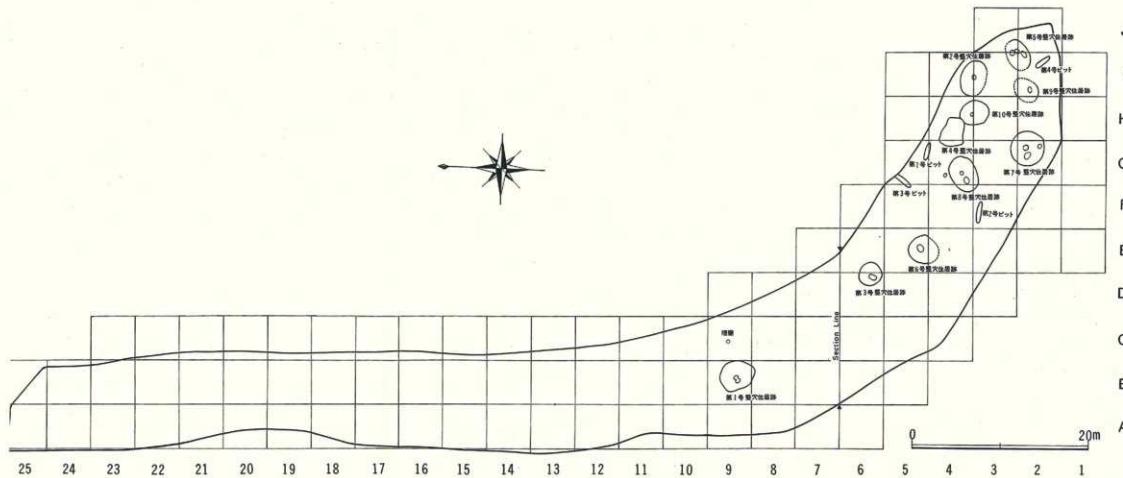


図5 図 発掘区配置及び連絡開通図

第3章 発掘区の設定と遺跡の層序

第1節 発掘区の設定 (第2、3図)

本遺跡の発掘調査は、小砂子港港湾整備事業により、日方泊岬の様に沿って、小砂子港まで下る周回自動車道路の敷設用地内の工事に先立って行なわれた事前調査である。

本遺跡の発掘調査対象地は、自動車道路敷設により破壊される地域の約 1900 m² である。

発掘区は、自動車道路の直線区間の南北の中心線を基線とし、網目をかぶせて発掘区を設定した。一つの発掘区の大きさは、5 m × 5 m を 1 単位とし、長軸方向は南から北へ向かって 1 から 25 までを算用数字、短軸方向は西から東へ向かって A から J までのアルファベット符号で記し、第3図の A～J、1～25 区にかけての部分を完掘した。但し、道路の幅員の関係から、一つの発掘区に隣接した他の発掘区の一辺が 1 m 程しか取れない発掘区については、これを個別に発掘することなく他の発掘区に帰属させて同時に発掘した。例えば、第2図中台地先端部近くの A 列の発掘区の西部部分及び、B 列の発掘区の東側部分等は、全て A 列、B 列の発掘区と一緒に取り扱って発掘を行なった。

尚、本報告書における実測図の方位は、国土地理院発行の原図による第1図を除いて、全て磁北のままである。

第2節 遺跡の層序 (第4図) (図版2A)

本発掘区における層序と旧地形把握の為、第4図に掲載したセクション図 (B-7 南壁～E-7 南壁) を作製した。本遺跡の遺跡包含層は、第I層 (黒色を呈する耕作土層) から第III層 (褐色粘質土層) までであり、縄文時代早期より晩期にかけての遺物が確認された。

縄文時代前期から晩期の遺物は、第I層から第III層までに包含されており、縄文時代早期の遺物は、主として第III層から発見されたものである。

本遺跡で発見された縄文時代中期の竪穴住居跡は第III層から確認された。しかし、第II'層、第III層の層位の識別は極めて微妙であり、また竪穴住居跡内の覆土と周囲の土の識別も、降雨の直後等の好条件が整わない限り極めて困難なものであった。その為に平面から遺構を確認する事が難しく、掘り過ぎにより竪穴住居跡の一部のセクションが発掘区に露出した後、初めてこれを確認し得るという事態が度々生じた。今回の発掘調査によつては、竪穴住居跡全体の形状を損う事なく発掘を完了した例は極めて少ない。何れにしても、この識別困難な層については、発掘期間中の晴天とも相

まって、調査員一同の頭痛の種であった。

発掘区における標識的な層序を示すと以下の如くである（第4図）。

第I層：黒色土層（耕作土）

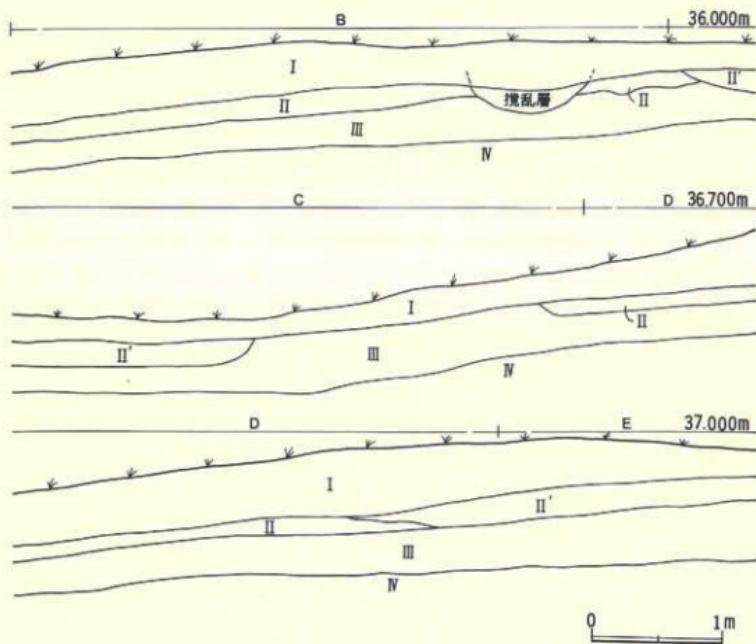
第II層：黒褐色土層

第II'層：暗褐色土層（堅い）

第III層：褐色粘質土層

第IV層：黄褐色粘質土層（基盤面であり、部分によっては礫層が露出している、直上にて貝殻文
土器が認められる。）

（金井邦彦）



第4図 セクション図

第4章 遺構及び遺構出土の遺物

第1節 壇穴住居跡

第1号壇穴住居跡（第5図）

本住居跡は、B-8, 9区にあって、付近の地形は海岸に向ってゆるく傾斜している。本遺跡の層堆積状態は、前章でも触れた通り、基盤は黄褐色粘（質）土層（第IV層）で、その上部は砂質分が多く、下部は均質で粘性の強い粘土層である。その上はほぼ同色系統の黄褐色粘質土層（第III層）がのる。この粘質土層の特徴は、乾くと縦にクラックがあり、また所により堅い土粒と砂粒の含有量が異なり微妙な変化を示す。そこに包含された遺物も、各時期のものが混じっている所から、本層の基質層は、基盤の粘土層に由来し、その二次堆積した層の可能性が強いと考えられる。従って、乾いた状態においては、両者の層の分離すらも困難な場合が多かった。

本住居跡は、基盤面まで発掘区を下げた段階で、基盤面に食い込んだような状態で、25~40cm 大の円礫がみつかったことから、その存在が明らかになったものである。

交叉するセクションベルトを残し発掘したが、南東側を除いては、周囲の基盤は、上部の砂質分の多い粘土層であったことと乾燥状態が長く続いたため、覆土の粘土層との分離は非常に困難であった。しかし、南東部においては、下部の均質な粘性の強い粘土層が堆積していたため、覆土との硬度差から、明瞭な立上りを確認した。さらに、南南西側においては、基盤中に包含されている小角礫群を認めたため、その限界をほぼ明らかにした。結局、覆土の主体層は、基盤に比べ、水分を含むと、やや暗い黄褐色粘土層であった。

セクション図に従って、層名を示せば、

第I層：暗黄褐色粘土層（下部には、若干の炭と焼土粒を含む）。

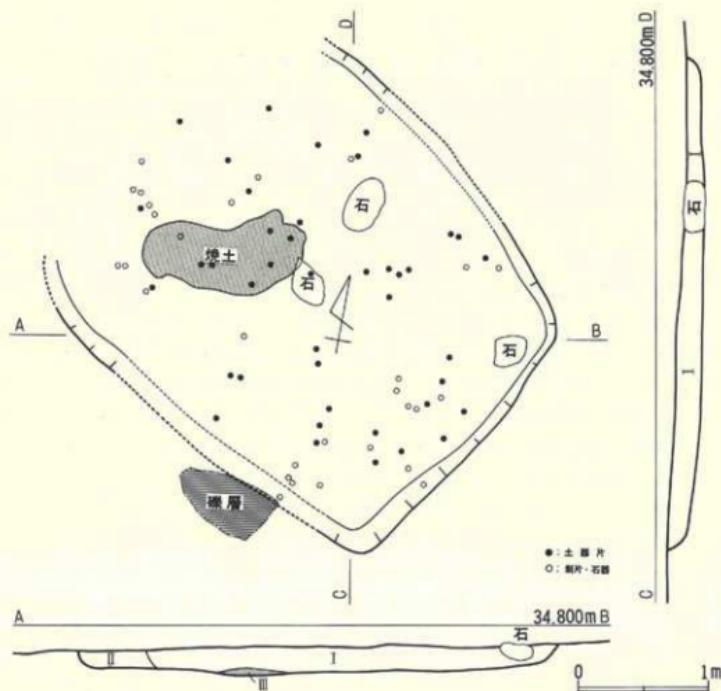
第II層：暗黄褐色粘質土層（炭、焼土粒は含まない）。

第III層：暗黄褐色粘質土層（多量の焼土、炭粒を含み、炉址の部分の堆積層である）。

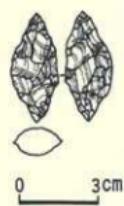
全体のプランは、北西側が、傾斜の下部に当っていたため明らかにはできなかったが、南東側に長軸の一辺をおく、長方形ないし五角形に近い形態を呈していたのではないかと考えられる。現存の大きさは、長軸 3.4m、短軸 3m である。深さは、遺構確認面より 20cm 程である。住居跡中央には、1.25×0.6m、厚さ 5cm の不整形の第III層の分布が認められ、炉址かと考えられる。

遺物は、住居跡内全體から、石錐 1 点と数多くの土器片、剝片類がみつかっている。また、整状の円礫が、床面について炉址付近に 2 個、東隅に 1 個あった。

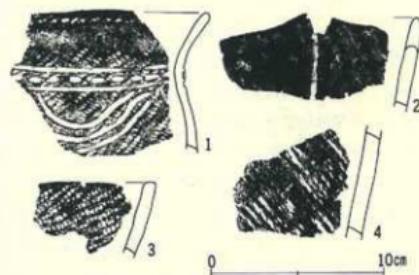
（上野秀一）



第5図 第1号竪穴住居跡



第6図 第1号竪穴住居跡出土石器



第7図 第1号竪穴住居跡出土土器拓影

第1号竪穴住居跡出土土器 (第7図) (図版12)

全点、覆土層中より得られたものであり、総数は少ない。

平縁で、口縁部が大きく外反するもので、口唇は丸味を帯びている。口唇直下に一段の撻糸圧痕文がめぐり、頸部には、2本の沈線文がめぐりその間に列点文が1cm間隔程でめぐらされる。その下位には、3本の沈線が、大きくU字状に弧を描くよう配される。地文として単節斜行繩文が地文されている(1)。

山型突起を有する波状口縁となり、口縁部は若干外反している。口唇は丸味を帯びている。器面には、縦位の条痕様の文様(整形痕?)がみられる(2)。

口縁部は、平縁でやや外反する、単節斜行繩文が地文として施文されるもの(3)。

胴部片で、やや擦りのもどった原体を使用する、単節斜行繩文が地文として施文される(4)もの等がある。

いずれも胎土中には、砂粒を多く含み、焼成も比較的良好で硬い。色調は1~3が暗褐色を呈し、4は明るい褐色である。器厚は、8mm内外である。

第IV群B類土器に属するものである。

(羽賀憲二)

第1号竪穴住居跡出土石器 (第6図) (図版17)

剥片は、数多く得られているが、石器は少ない。

石鏃(1)

入念に両面加工の施されたものであり、比較的太く、全体的な形状として紡錘形をなしている。かえし部分の脛り出しが顕著ではなく、やや丸味を帯び基部へと連って行く、基底部は尖っている。

(羽賀憲二)

第2号竪穴住居跡 (第8図) (図版3)

I-3区、I-4区に存在する。

長径4.5m、短径3.12m、現存深さ約25mである。平面プランは、卵形に近い。長軸方向は北東-南西である。

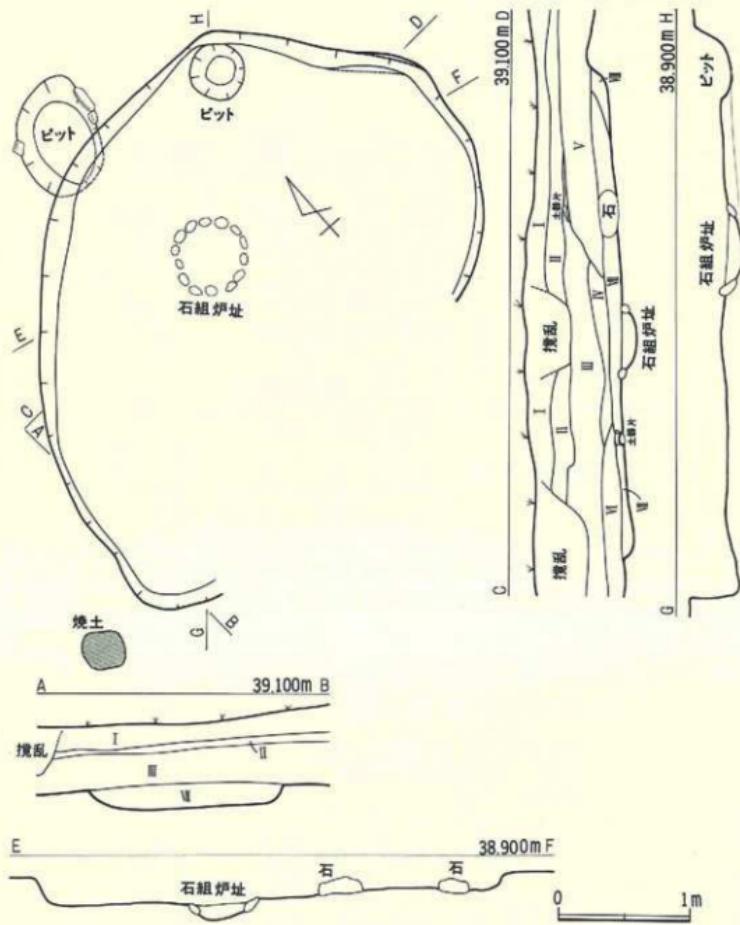
南側の壁の一部が発掘時の掘り過ぎにより不明となっている。現存する壁は、西、北、東にかけては、良好な状態である。床面には地山の礫がところどころに見られ、炉址の周囲は特に堅密に踏み固められた状態である。やや西側に傾斜している。

炉は、住居跡の長軸線よりやや北に偏して存在する。14個のやや細長い石の小口面を並べて、直径約50cmの円形に構築している。炉内の焼土は、最大約10cmの厚さで確認することができた。

北側の壁外、床面上にそれぞれ1個の浅いピットが発見された。壁の外に存在するピットは、本住居跡を構築する際に切断されているために、明らかに本号よりは古いものであると思われる。床面上に存在するピットは、本号に附属する1つの施設であろう。

本号の層序は以下のとおりである。

第1層：耕作土



第8図 第2号竪穴住居跡

第II層：黒褐色土

第III層：黄褐色土

第IV層：暗褐色土

第V層：黄褐色粘質土

第VI層：暗褐色粘質土

第VII層：暗褐色粘質土（炭化物、焼土混入）

第VIII層：暗褐色粘質土（第VI層に近く炭化物、焼土の混入は少ない）

本号確認は、第IV、V、VI層を取り除いて始めてそのプランを確認することができる。しかし、第IV層以下の層は、相互に相近似しており、本号のプランを確認するにあたっても、住居跡内の覆土中にわずかに存在する炭化物、焼土の存在によって確認し得たにすぎない。

本号からの出土遺物は、炉のやや上層から第10図1に示す土器、北側のピット脇から第10図2に示す土器が出土している。特に第10図2に示す土器は、本住居跡の構築年代を示すものとして取り扱えよう。以下に出土遺物の概要を記す。

（加藤邦雄）

第2号竪穴住居跡出土土器（第9、11図）（図版8、9、12）

比較的多くの土器が得られており、覆土層中、床面より出土している。

復元土器（第9図）（図版8、9）

1. 口径26cm、胴部最大径25cm、現存高約30cmの比較的大型の深鉢型土器であり、底部を欠損している。器厚は、8mm内外である。

口縁は、平縁であり、口唇の断面形は丸味がある。

口縁部は、若干外反しており、頸部は直立に近く、以下胴部中央にて若干脹み丸味を帯びつつ底部へ向けすばまって行く。

器内面には、口縁から頸部にかけては横位の、以下には縦方向の調整痕がみられる。器面は、口唇部付近を除き全面にわたり、単節斜行繩文が地文として施文されている。

胎土中には、砂粒を多く含み、纖維を混入した痕跡は認められない。焼成は、良く硬い。色調は、口縁から頸部にかけて褐色を呈し、胴部中央は暗褐色、底部付近では褐色となる。

本遺跡出土土器第IV群B類に属する。

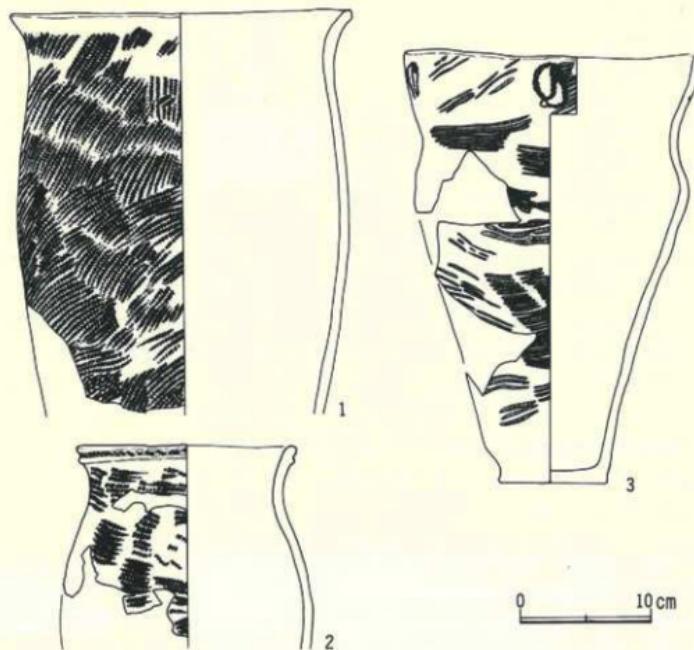
2. 口径15.5cm、胴部最大径19cm、現存高15cm弱の口縁より胴部が脹んだ形をなす深鉢型土器であり、底部を欠損している。器厚は、8mm内外である。

口縁は、平縁であり、口唇上は平らに整形されている。

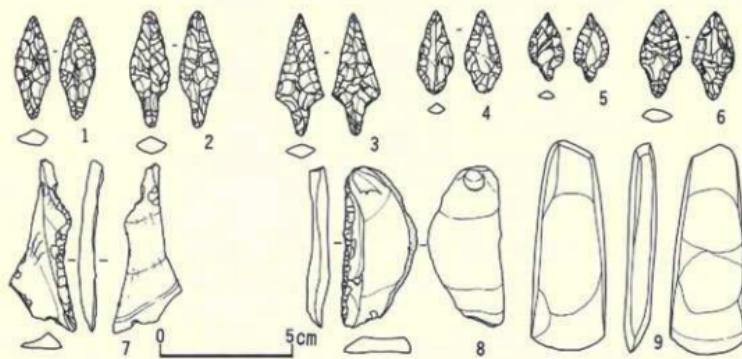
口唇直下には、1cm程の幅の肥厚帯がめぐっており、その上に一段の燃糸圧痕文をめぐらす。頸部はややくびれ、直立に近くなり、以下胴部中央に向けしだいに脹み、胴部中央にて最大径をなすようになり、また底部に向かう間にすばまって行く。

器内面には、口縁から頸部にかけては横位の、以下には縦位の調整痕がみられる。

器面には、全面にわたって単節斜行繩文が地文として施文されている。



第9図 第2号竪穴住居跡出土土器実測図



第10図 第2号竪穴住居跡出土石器

胎土中には、砂粒を多く含み、繊維を混入した痕跡は無い。焼成は、良く、硬い。色調は、全体的に暗褐色を呈するが所々に明るい褐色となる部分もみられる。

本遺跡出土第V群B類に属する土器である。

3. 口径 22.5 cm、胴部最大径 21 cm、高さ 32.5 cm の、比較的大型の深鉢形土器である。器厚は、8 mm 内外である。

口縁は、平縁であり、口唇の断面形は丸味を帯びている。

口縁部は、外反しており、頸部にて若干くびれ、肩部分が脹り出し、以下底部へ向けしだいにすぼまり、底面が外側へ若干張り出す。

器内面では、口縁部から胴部中央にかけては横方向の、それ以下では縦方向のへら等によると思われる調整痕がみられる。

器面には、口縁部に 4 個、等間隔に単節の撚糸をまるめ「9の字」状に押圧したスタンプ文が施文され、口縁以下には全面にわたり横走する無節の斜繩文が地文として施文されている。

胴部の大部分は、風化の為か器面が磨滅しザラザラになっている。

胎土中には、砂粒を多く含んでおり、繊維を混入した痕跡は認められない。焼成は、比較的良好で、先に記したように風化により器面が荒れザラザラになっている部分も多く存在している。色調は、口縁部から肩、胴部中央にかけ炭化物が付着し暗褐色を呈し、以下底部では茶褐色を呈している。

本遺跡出土第VI群土器に属するものである。

1~7 は、撚糸文が特徴的であり、第II群B類土器に属する。

1~4 は、口唇部が丸味を帯び、口唇上に撚糸原体を使用するきざみ目を付ける。5 には、きざみ目は無い。

1, 2, 4 は、口縁に 2~3 条の撚糸文を一単位に数段めぐらす。2 は、文様帶の下位に単節斜行繩文を地文として施文する。

3, 5 は、撚りの方向の異なる 2 本の撚糸を並行してめぐらし、これを一単位として数段施文する。

6 は、格縫体压痕文が 2 段程みられるもので、7 は縦位に撚糸文が施文され、さらに横位の数条の撚糸文を配している。

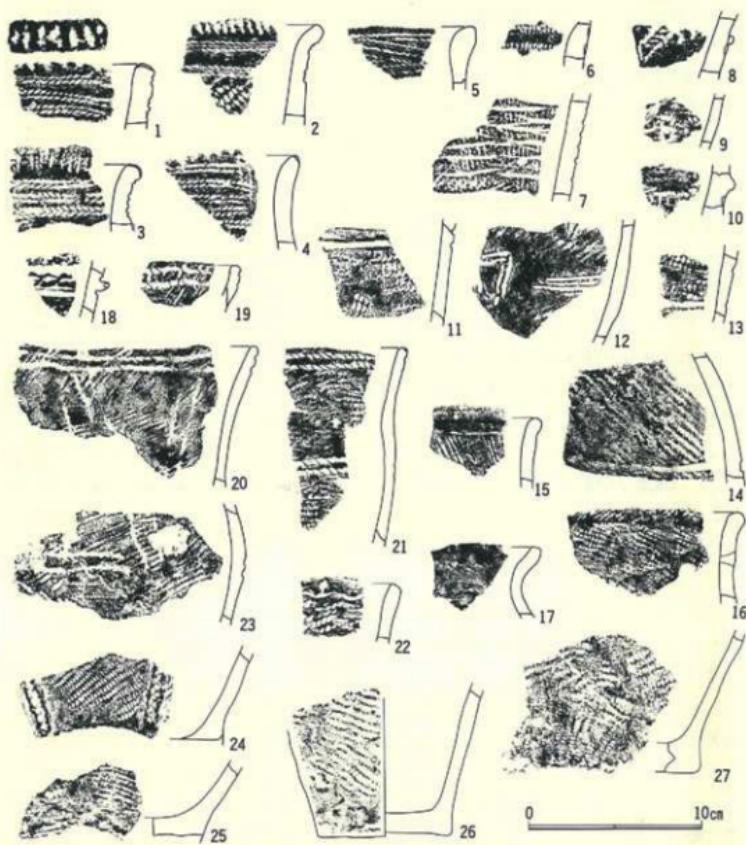
胎土中には、砂粒と繊維を含んでおり、焼成は良好である。色調は、3, 5, 6 は器面に炭化物が付着し暗褐色を呈しており、他は褐色である。器厚は 1.2~1.5 cm 程である。

8~10 は、貼付紐、馬蹄形压痕文、爪形文が特徴的なもので第III群C類に属するものである。いずれも胎土中に繊維と砂粒を含んでいる。小破片が若干よりなく概要は不明である。

11~17 は、沈線文が特徴となる薄手土器のグループで第IV群C類に属するものである。

11~14 は、沈線が直線的に施文され、文様を構成する。11~13 は、地文としての単節斜行繩文が施文される。

15~17 は、平縁であり、口唇はやや部厚く丸味がある。15, 16 は、右下りの単節斜行繩文が施文



第11図 第2号堅穴住居跡出土土器拓影

され、17は、無文である。

胎土中には、砂粒を多く含み、焼成も良く硬い。色調は、全例暗褐色を呈している。器厚は、8 mm程度である。

18~24は、撚糸圧痕文が特徴となるグループであり第V群B類に属するものである。

18のみ、趣を異としており、沈線文・貼付紐、貼付紐上に列点文を施文する。

19~24は、口縁部、胴部に撚糸圧痕文が数条めぐらしに継、数条の撚糸圧痕文を配するものである。24は、縦位に貼付紐を數本付けその上に撚糸圧痕文を施すものである。全例の単節斜行繩文を地文としている。胎土中には、砂粒を多く含み、焼成も比較的良く硬い。色調は、23のみ暗褐色、他は褐色を呈する。器厚は、8 mm内外である。

25~27は、第IV群、第V群に属する土器の底部である。

(羽賀憲二)

第2号竪穴住居跡出土石器(第10図)(図版17)

总数で9点得られている。いずれも覆土層中、床面より得られたものである。

石鏃(1~6)

6点あり、いずれも入念な両面加工が施されており有茎である。

1、4は、柳葉形をなし、3は、尖頭部が二等辺三角形状をなし基底部に舌状の茎部を作り出される。2、5、6は、かえし部の脇り出しが顯著ではなく丸味がある。全例、硬質頁岩を素材としている。

削器(7, 8)

剥片の一側縁部に剥離加工を施したもので、主剥離面には一切の加工は施さない。7、8ともに縦長剥片を素材としており、硬質頁岩を用いている。

石斧(9)

比較的小型のもので、入念な研磨加工が両面にわたって施されている。

刃部は、やや渋曲し丸味を帯びている。断面形より見ると片刃に近い形状となる。

緑色片岩を素材としている。

(羽賀憲二)

第3号竪穴住居跡(第12図)(図版2B)

D-6区、E-6区にまたがって、発見されている。

規模は、長径3.5 m、短径3.1 m、深さは、遺構確認面より最大で20 cm程である。

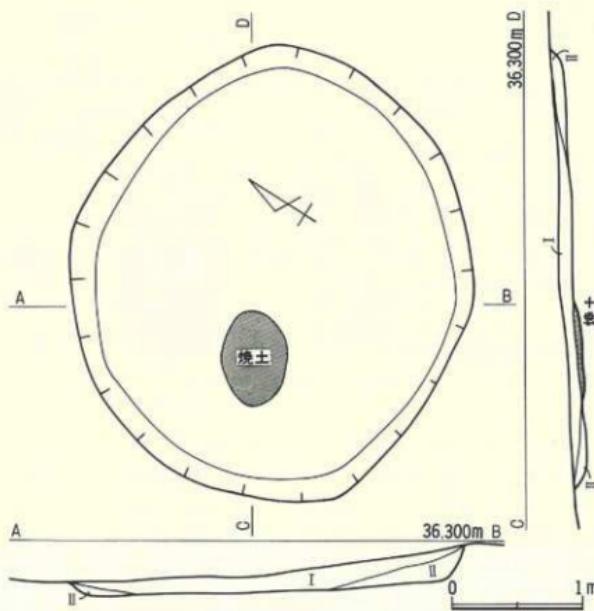
プランは、楕円形を呈する。

長軸方向は、北東-南西である。

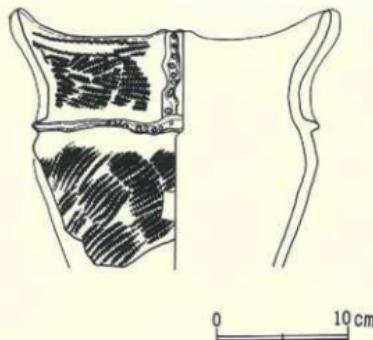
床面は、比較的硬く、平坦であるが、南西部にむけて若干傾斜している。

床面の中央より南西部部分には、70 cm×50 cm程の範囲に炉址と考えられる焼土の集積が認められた。

壁はやや傾斜し、床面と接する部位にて丸味を帯び、床面へと連って行く。



第12図 第3号竪穴住居跡



第13図 第3号竪穴住居跡出土土器実測図

本竪穴住居跡の内部を覆った埋土の状況は下記の通りである。

第Ⅰ層：暗褐色土

第Ⅱ層：褐色土

(羽賀憲二)

第3号竪穴住居跡出土土器（第13、14図）（図版9、12）

比較的多くの土器が得られている。

復元土器（第13図）（図版9）

口径25cm、胸部最大径21.5cm、現在高18cm内外の深鉢形土器であり、底部を欠損している。口縁部には、4個の山型突起を有し、波状口縁となる。口唇上は、平らに整形されている。突起部には、垂下する太い貼付紐が付けられ、さらに肩部上をめぐる太い貼付紐に接続している。貼付紐上には5mm内外の間隔にてやや乱雑な刺突文を付けている。口縁はやや外反し、頭部にてくびれ、肩部にて最大径をなすよう脹み、胴部から底部にかけてしだいに痙攣まで行く。

口唇直下には一段、単節の撚糸圧痕文がめぐり、口縁部、胸部には全面にわたり単節斜行縄文が地文として施文されている。ただし貼付帶の付近は、縄文が磨り消されている。

器内面には、横方向のへら等による調整痕がみられる。

胎土中には、砂粒を多く含み、繊維を混入した痕跡はみられない。焼成は良好であり、硬い。色調は、口縁部、胸部、貼付帶上には炭化物が付着し暗褐色を呈し、頭部ではやや明るい褐色を呈している。

本遺跡出土土器第V群A類に属する。

1は、撚糸文が縦・横方向に交差し付けられるもので、胎土中に繊維を含んでいる。第II群B類に属するものである。

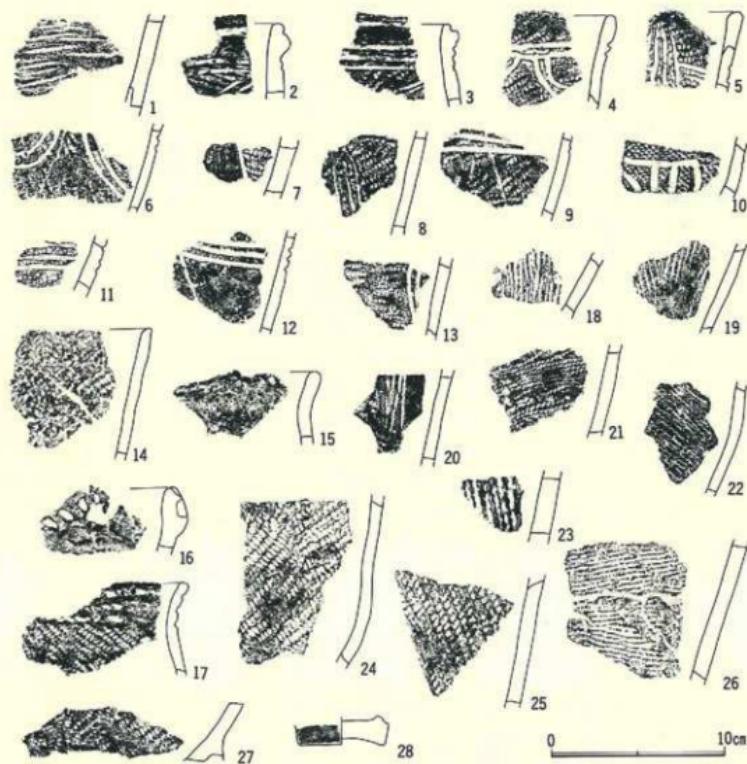
2~13は、沈線文を有するグループで、曲線、直線を器面に描くといった特徴を有している。第IV群C類に属する土器である。2、3は、口唇がやや肥厚し、沈線を一段めぐらす。波状口縁で、やや内反する。4は平縁であり、5は山型突起部を有し、波状口縁となる。地文として単節斜行縄文が施文される。

14~16も、2~13と同群に属するものであろう。平縁(14)、波状口縁(15、16)を呈し、16は口唇上にきざみ目があり、突起上に刺突文的なくぼみが付けられる。14には単節斜行縄文が地文として施文されている。

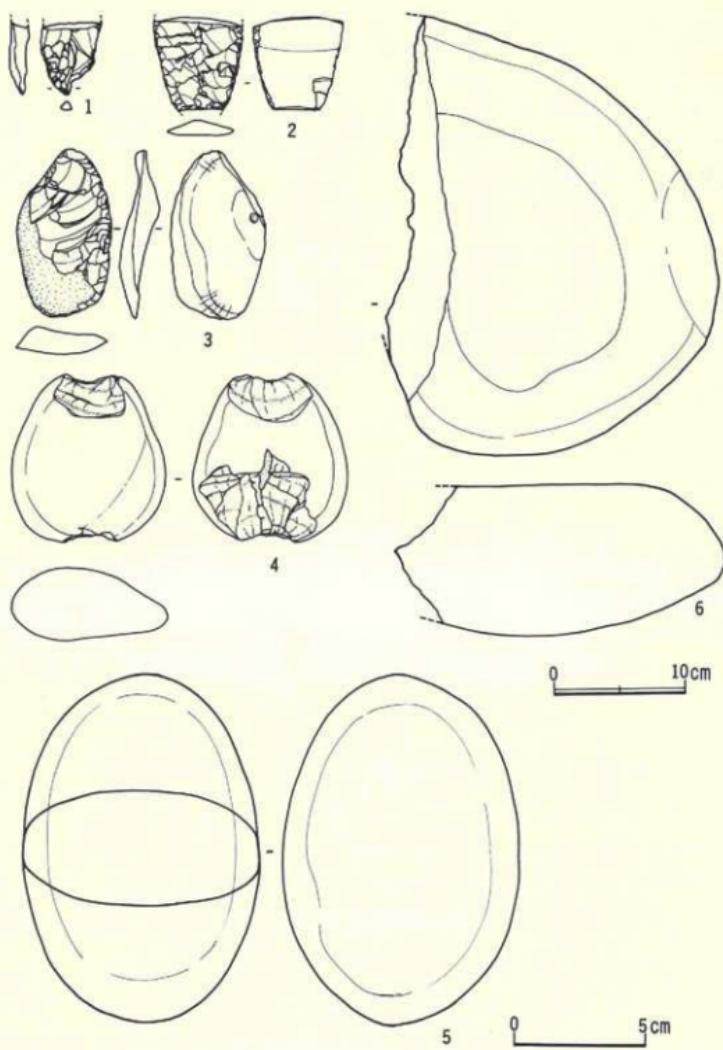
いずれも胎土中に砂粒を含み、焼成も比較的良い。色調は、3~5、7、10、14~16は器面に炭化物が付着し黒褐色を呈し、他はやや暗い褐色となる。器厚は、8mm内外である。

17は、口縁は平縁で外反しており、口唇は丸味を帯びている。口縁に3段の撚糸圧痕文をめぐらし単節斜行縄文を地文として施文する。第V群B類に属するものである。

18~26は、第IV群、第V群土器の胸部であり、地文として撚糸文(18~23)単節斜行縄文(24)、無節縄文(26)、複節斜行縄文(25)が施文されている。胎土中には砂粒を含み、焼成は良く硬い。



第14図 第3号竪穴住居跡出土土器拓影



第15圖 第3号竪穴住居跡出土石器

色調は、暗褐色（18, 19, 23~25）褐色（20~22, 26）を呈する。器厚は8 mm内外である。
27, 28は、第IV群、第V群土器の底部である。27は、底面がやや脹り出している。（羽賀憲二）

第3号竪穴住居跡出土石器（第15図）（図版17, 19, 22）

总数で、6点得られている。

石錐（1）

縦長削片を素材に、下端部に尖った部分を作り出している。尖頭部の剥離面及びエッジ部は、使用の為と思われる磨滅し丸味を帯びた状態がうかがえる。断面形はやや丸味を帯びた三角形を呈している。

硬質頁岩を素材としている。

削器（2, 3）

2は、石匙の刃部破片かとも考えられ、片面に入念な加工が施されている。主剥離面のエッジ部にも若干の加工が施されているものである。

3は、表皮を多く残した幅広削片を素材に一側縁に剥離加工を施し刃部としてある。主剥離面には一切の加工痕はない。

両者とも硬質頁岩を素材としている。

石錐（4）

円形に近いやや偏平な河原石の長軸両端に数度の打ち欠きを行いえぐり込みを作り出したものである。重量は、133 gある。（羽賀憲二）

擦石（5）

偏平な橢円形の自然石であるが、住居跡内から出土したので、特に図示した。

石皿（6）

一部を欠失しているが、海岸に見られる大型な石を使用している。片面のみ使用で、やや中央部が底くなる程度に使用している。（加藤邦雄）

第4号竪穴住居跡（第16図）

G-4区、H-4区にまたがり、発見されている。

規模は、長径3.25 m、短径2.65 m、深さは、遺構確認面より最大で25 cm程ある。

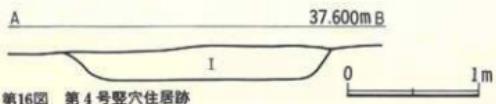
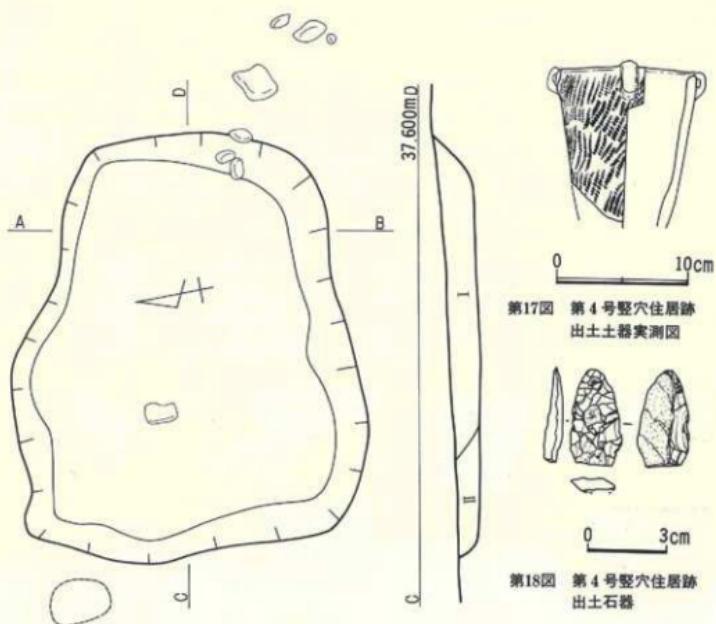
プランは、隅丸方形に近いが、壁面は波うており不整である。

長軸方向は、ほぼ東-西である。

床面は、軟弱であり明確ではない。壁面の状況も、他に発見されている竪穴住居跡に比較するとやや確実性に欠ける。

また、床面上に炉址と考えられる焼土の集積も無く竪穴住居跡とするには、多くの条件に欠ける遺構である。

本遺構の内部を覆った埋土の状況は下記の通りである。



第Ⅰ層：暗褐色土

第Ⅱ層：褐色土

(羽賀憲二)

第4号竪穴住居跡出土土器 (第17, 19図) (図版9, 13)

覆土層中より、若干の土器が得られたにすぎない。

復元土器 (第17図) (図版9)

口径12cm、現存高12cm内外の、小型な深鉢型土器で、底部を欠損している。

口縁は、平縁であり、口唇の断面は丸味を帯びている。口縁には、4個程の釣手があったと思われ、口縁部と口唇上にその痕跡が残っている。

器形は、口縁が最も広くし、だいに底部に向かってぼんやりと円筒形を呈している。

器内面には、口縁から胴部中央にかけては横方向の、下部には縦方向の調整痕がある。

器面には、全面にわたり単節斜行繩文が地文として施文されている。

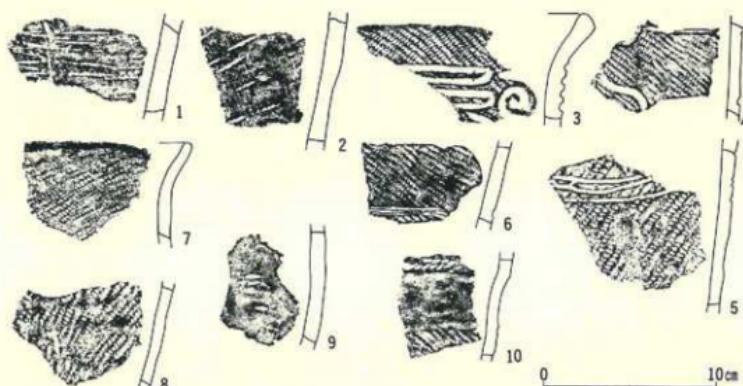
胎土中には、砂粒を多く含み、繊維を混入した痕跡は認められない。焼成は、良好であり硬い。

色調は、口縁部付近では炭化物が付着し、暗褐色を呈し、以下は、やや明るい暗褐色を呈する。

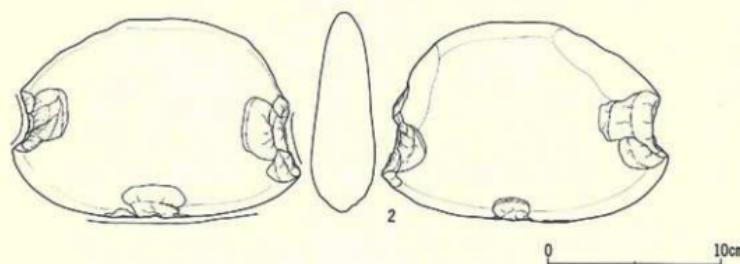
本遺跡出土土器第Ⅳ群B類土器に属する。

1・2は、第II群B類に属するものである。いずれも胴部片であり、1は横走する撚糸文が数段施文され、2は縦位に密に施文される撚糸文上に横走する撚糸文を數重ね施文されたものである。胎土中には、砂粒と繊維を含み、焼成も比較的良好である。色調は、1は褐色、2は器面に炭化物が付着し暗褐色を呈している。器厚は、1 cm内外である。

3~9は、第IV群A類に属するものである。



第19図 第4号整穴住居跡出土土器拓影



第20図 第4号整穴住居跡出土石器

口縁は、平縁でやや外反しており、口唇部は若干肥厚する。口縁部には、工字文風の沈線文とうす卷状の沈線文が組み合わされる。地文として単節斜行繩文が施文される（3）。

平行する沈線文と曲線を描く沈線文が複合して施文される（4～6）。

口縁は、平縁でありやや外反している。地文として単節斜行繩文が施文される（7）。

10は、文様が一部磨り消される部分がみられるものであり、第VI群土器に含まれる。

8・9は、地文としての繩文のみみられる胴部である。

いずれも胎土中に砂粒が多く含んでおり、焼成も良い。色調は、3、8～10は明るい褐色を呈し、4～7は、器面に炭化物が付着し暗褐色を呈する。器厚は、0.8～1 cmである。（羽賀憲二）

第4号竪穴住居跡出土石器（第18、20図）（図版17、19）

総数で2点得られている。

両面加工のナイフ状石器（1）

頁岩製で入念な両面加工が施されているが、背面部が大きく剥脱しており、との形状は明らかではない。（羽賀憲二）

擦石（第20図2）

長軸の両端にかなり深い抉りを入れておりこの部分には、磨耗を認めることができる。また、長軸に沿う一辺には、わずかな磨擦の痕が見られるが、明瞭な磨擦面を形成するには至っていない。磨擦の加えられている面の一点に打撃が加えられており、この結果、両方の面に小さな剥離が生じている。第7類（加藤邦雄）

第5号竪穴住居跡（第21図）

I-2区、I-3区、J-2区、J-3区にまたがり発見されている。

本竪穴住居跡は、全体の3分の1程度の壁より検出されておらずその概要は、明確ではない。

規模は、残された壁面よりの推定で、長径3.5 m内外、短径2.8 m内外、深さは、遺構確認面より最大で20 cm程である。

プランは、橢円形を呈するものと思われる。

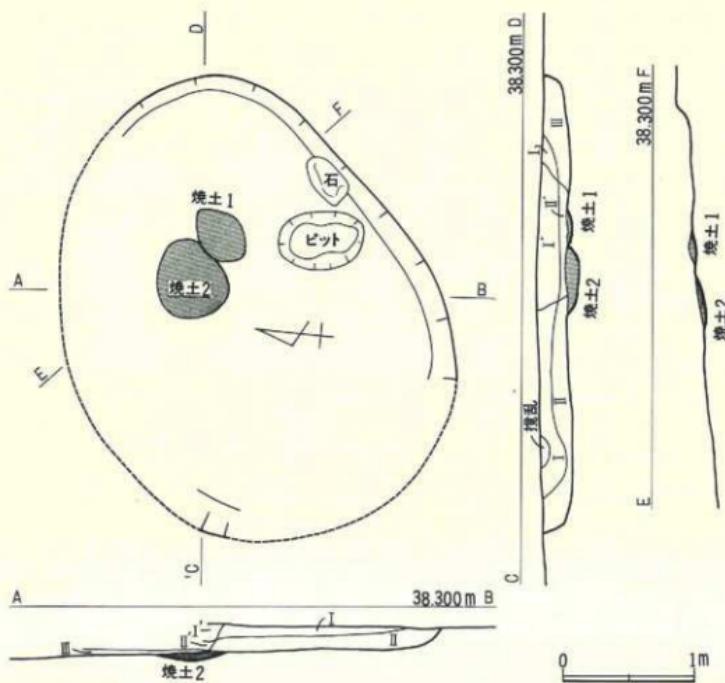
長軸方向は、北東-南西をとる。

床面は、比較的硬く平坦であるが北側に向け若干傾斜している。床面の北東部分には、炉址と考えられる焼土が2ヶ所存在し、その範囲は、35 cm×50 cm（焼土1）60 cm×60 cm（焼土2）である。南西部壁沿には60 cm×50 cm深さ10 cmの橢円形のプランを呈する小ピットが検出されている。

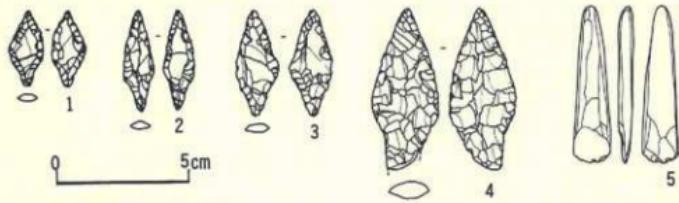
残存している壁の状況は、直立に近く下り床面と接する部分にて丸味を帯び、床面へと続いている。

本竪穴住居跡内を覆った埋土の状況は、下記に示した通りである。

第1層：暗褐色土



第21図 第5号竪穴住居跡



第22図 第5号竪穴住居跡出土石器

第Ⅰ層：Ⅰ層よりやや暗くボソボソした感じのする暗褐色土

第Ⅱ層：褐色土

第Ⅲ層：やわらかい褐色土

第Ⅳ層：暗褐色砂礫まじり土

(羽賀憲二)

第5号竪穴住居跡出土土器（第23図）（図版13）

いずれも覆土層中より得られたもので、数は少ない。

1、2は、比較的厚手であり、絡織体圧痕文、撚糸圧痕文が特徴的な土器群であり、後述する第Ⅱ群B類に属するものである。

平縁で口唇は丸味を帯び、口縁は直立に近い。口唇上に絡織体にてきざみ目を付し、口縁部には3段の絡織体圧痕文がみられる（1）。口唇上に単節の撚糸を押し付けたきざみ目を施し、口縁には3段の撚糸圧痕文を施す（2）。

胎土中には、いずれも砂粒、多量の纖維を混入したと思われる痕跡を有している。器面にはいずれも若干の炭化物が付着しており、暗い褐色を呈している。焼成は比較的良好。器厚は1.2—1.5cm程度である。

3—9は、薄手で沈線文が文様の主体となり、第Ⅳ群B類に属するものである。

口縁は、やや内傾し、口唇直下に肥厚帶を配し、その椎ぎ目に一段の沈線をめぐらす。さらに口縁に3本の沈線文がめぐらし、地文として単節斜行纏文が施文される（3）。

口縁は、やや外反し、山型突起部を有する。口唇は肥厚し、口唇上には棒状工具を使用する沈線化したきざみ目を配する。口縁部には一段の沈線文がめぐらる（5）。

地文として単節斜行纏文が施され、横位に一段の弧を描く沈線文がみられる（4）。

縱位に走る細かい条痕様の文様が施文される胸部で薄手の土器（7—9）等がある。

いずれも胎土中に砂粒を多く含み、器面はザラザラしている。焼成も比較的良好、硬い。色調は、3、5、6は、器面に炭化物が付着し暗い褐色を呈し、4は明るい褐色、9は褐色、7、8は、茶褐色を呈している。器厚は、3—5は、8mm内外、6—8は、6mm以下である。（羽賀憲二）

第5号竪穴住居跡出土石器（第22、24図）（図版17、19）

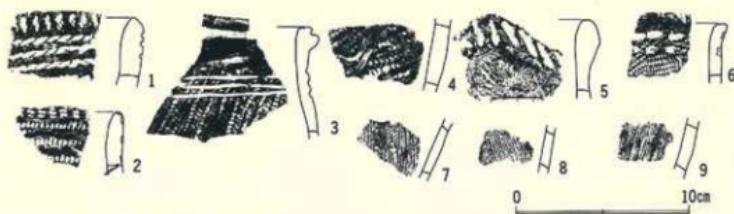
总数で、8点得られている。

石鎌（1～3）

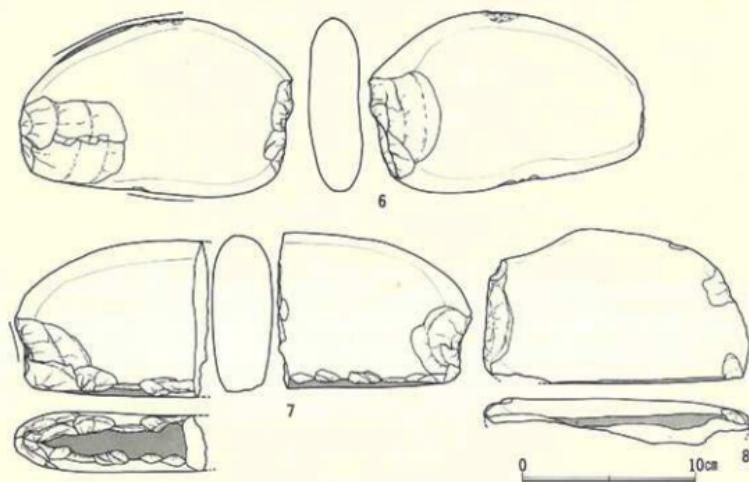
いずれも有茎であり、入念な両面加工が施されている。2は、若干かえし部が脹り出しているが、1、3は、柳葉形をなし、かえし部は丸味を帯び、かえし部よりしだいにせまくなり茎部となる。全例、硬質頁岩を素材としている。

鉈先（4）

入念な両面加工が施され、前述の石鎌と形態のうえでは同じであり、大型となる。有柄で、かえし部の脹り出しあは少なく丸味を帯びている。太く長い柄部が作り出されており、一部を欠損してい



第23図 第5号竪穴住居跡出土土器拓影



第24図 第5号竪穴住居跡出土石器

る。重量は 11 g と石斧の数倍の重さをもつ。素材は、硬質頁岩である。

石斧（5）

全長 6 cm、最大幅 1.3 cm、最大厚 6 mm と、非常に小型の石斧である。

入念な研磨加工が全面にわたってなされており、刃部はやや幅広となり、断面形は両刃となる。刃先は、使用の為か部分的に欠け落ちさらに縱方向の擦痕？と思われるものがみられる。（羽賀憲二）

擦石（第 24 図 6～8）

6 は、長軸の両端に、かなり荒い打ち欠きを、それぞれ片面にのみ加えている。長軸に沿う 2 辺には、わずかに認められる程度の磨擦面を見る事ができるのみで、擦石としての積極的な用途に使用したものとは認める事ができない。第 6 類。

7 は、半分に欠損しているが第 3 類に分類できよう。長軸端に見られる打ち欠き部には、磨耗の痕が認められる。また、磨擦面は、かなり幅広くなるまで使用されており、磨擦面に加えられている打ち欠きは、わずかに痕跡をとどめるのみである。

8 は、磨擦面が明瞭に形成されてから後に、磨擦面方向からの大きな打撃により半分に割られている。現存部分では、長軸端の片方のみ打ち欠きが認められている。第 3 類に属する。

（加藤邦雄）

第 6 号竪穴住居跡（第 25 図）

E-4 区、E-5 区にわたり発見されたものである。

本竪穴住居跡の南部分は、発見時にすでに削りとられており、全体的なプランは不明であるが、残存する壁より推定するならば楕円形に近いプランを呈するものと思われる。

規模は、長径 3.0 m 以上、短径 3.1 m、深さは遺構確認面より最大で 20 cm 程ある。

長軸方向は、南一北である。

床面の北部分には炉址と考えられる焼土の集積が 80 cm × 80 cm の範囲に認められた。

また東側壁付近には、直径 15 cm、深さ 5 cm 程の柱穴状小ピットがある。

床面の状態は比較的硬く、平坦である。壁は、若干傾斜しつつ下り、床面近くに至って丸味を帯び床面へと接している。

竪穴住居跡内を覆った埋土の状況は、下記に示した。

第 I 層：暗褐色土

第 II 層：茶褐色土

第 III 層：褐色土

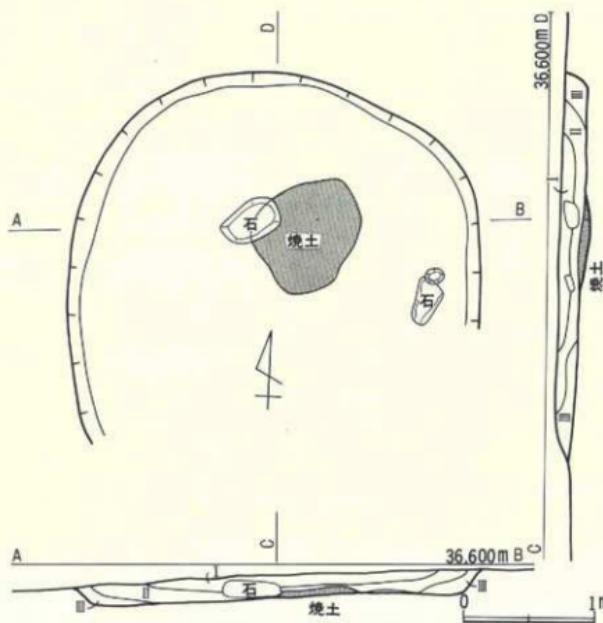
（羽賀憲二）

第 6 号竪穴住居跡出土土器（第 27、28 図）（図版 13、14）

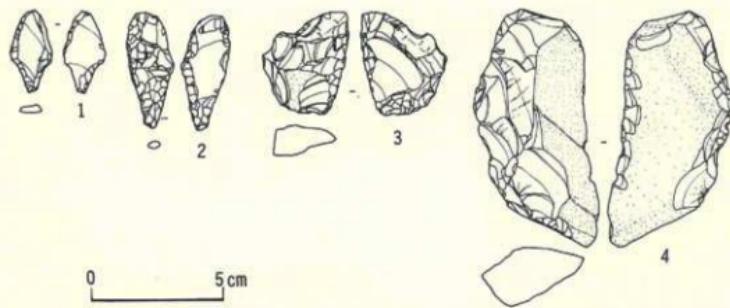
比較的多量の土器が、覆土層、床面より得られている。

1～5 は、撚糸文が特徴的な土器群で、第 II 群 B 類に属するものである。

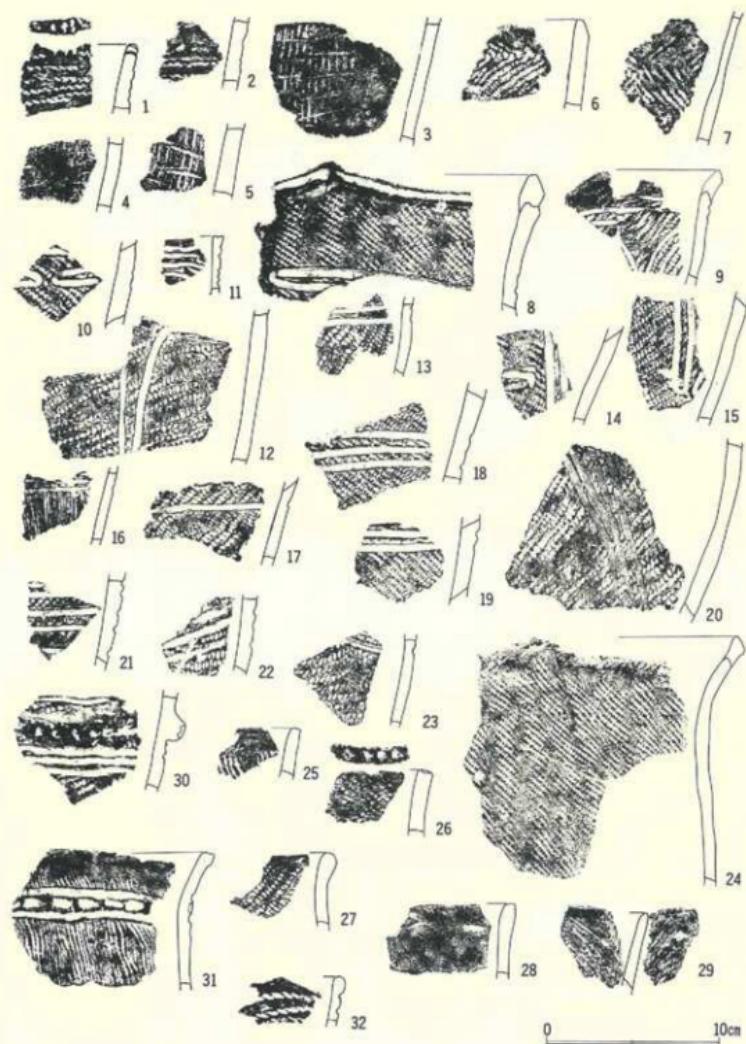
1 は、波状口縁で口唇上には、撚糸を押圧したきざみ目が施される。1、2 は、口縁に數段撚糸圧痕文がめぐる。3～5 は、胴部片で縱位の撚糸文上に横位の撚糸文が重ねられ施文され地文とな



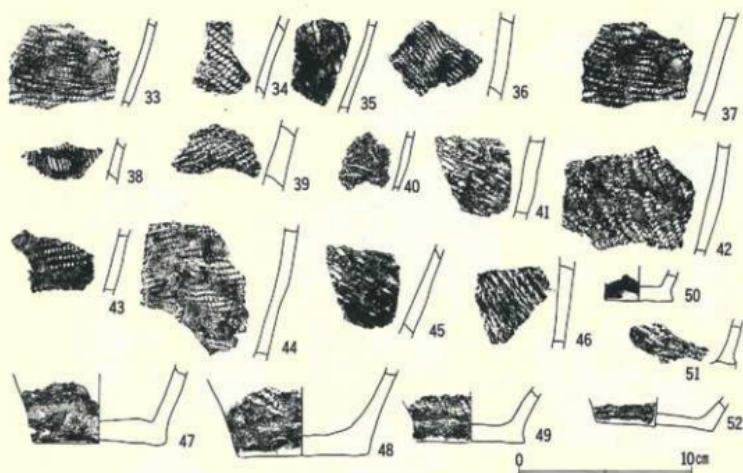
第25図 第6号竪穴住居跡



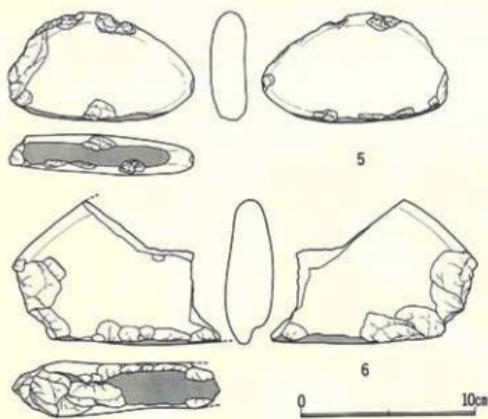
第26図 第6号竪穴住居跡出土石器



第27图 第6号竖穴住居跡出土土器拓影



第28図 第6号竪穴住居跡出土土器拓影



第29図 第6号竪穴住居跡出土石器

る。胎土中には砂粒と纖維を含んでおり、焼成も良い。色調は、褐色を呈し、器厚は8 mm～1 cm程である。

6, 7は、羽状繩文が地文として施文されたもので、第III群土器に属する。6は、平縁でやや外反する口縁である。

8～29は、第IV群土器に属するものであり沈線文が主体となるグループ、地文としての繩文のみのグループの2類に分類される。

8～23は、沈線文が直線、曲線を描いて施文されるもので、波状口縁(8, 9) 平縁(11)を呈し、口縁はやや外反する傾向がある。第IV群C類土器に相当しよう。

地文として左下りの単節斜行繩文(8～10, 12～15, 17～23)、縦位の擦痕様の文様(16)が施文されている。胎土中には、砂粒を含み、焼成も良い。9のみ滑石を含み、灰褐色を呈し、他の物より軽い。他の色調は器面に炭化物が付着し黒褐色となるもの(8, 19) 暗褐色(12～14, 16, 20, 23)、やや明るい褐色(10, 11, 15, 17, 18, 21, 22)等を呈している。器厚は、6 mm～1 cm程である。

24～29は、波状口縁、平縁でやや外反する口縁を有している。26は、口唇上にやや太い工具を使用した刺突文が施されている。

地文として、単節斜行繩文の施される(24～27)、条痕文(29)、無文(28)等がある。

胎土中には砂粒を含み、焼成も良好である。色調は、26, 29が器面上に炭化物が付着し黒褐色を呈し、他は暗褐色となる。器厚は、8 mm内外である。

30～32は、貼付帯、列点文、沈線文、撚糸圧痕文が特徴となるグループで、第V群B, C類に属するものである。

30は、沈線が数段めぐり、貼付帯がありその上に半截竹管による連続刺突文が施される。31は、平縁で口縁はやや外反し、口唇上に連続刺突文が一段、口縁部に2本の沈線がめぐりその間に連続刺突文を一段めぐらす。32は、波状口縁でやや外反しており、口縁部に数段撚糸圧痕文を配する。30は、地文として左下りの単節斜行繩文が施されており、31は地文として無節斜行繩文が施文されている。胎土中には、砂粒を含み焼成も良い。30, 31は、器面上に炭化物が付着し黒褐色を呈しており、32は、褐色である。器厚は、6 mm～1 cm程である。

33～46は、第IV群、第V群土器に属する胸部である。単節斜行繩文(33～37, 41～44)、撚糸文(38, 46)、無文(40)等が地文である。胎土中には、砂粒を含み、焼成も良い。色調は、器面に炭化物が付着し黒褐色(34, 35, 38, 41, 43)、茶褐色(33, 46)等を呈し他は褐色である。器厚は、8 mm内外である。

47～52は、やはり第IV群、第V群土器に属する底部である。52のみ底面は張り出さず他は若干底面が張り出している。50は、小型である。

(羽賀憲二)

第6号堅穴住居跡出土石器(第26, 29, 35図)(図版17, 19)

全例で、7点得られている。

石鏃（1）

幅広剝片のエッヂ部に若干の加工を施し、尖頭部と茎部を作り出したものである。主剝離面を大きく残している。

石錐（2）

縦長剝片を素材に、バルブ部分に尖頭部を作り出してある。尖頭部のエッヂは、磨滅により丸味を帯びている。硬質頁岩を素材としている。

削器（3, 4）

3は、部厚い幅広剝片の一側縁のエッヂ部に剝離加工を施し刀を作り出したものである。

4は、板状に割れた石の一側縁を打ち欠きジグザグの部厚い刀を作り出してある。後述する発掘区出土石器、削器eとしたものと同類と考えられる。

(羽賀憲二)

擦石（第29図5, 6）

5は、本遺跡出土の擦石としては、極めて小形のものである。長軸に沿う一辺に磨擦面を有している。長軸の片方に打ち欠きが見られる。更に、磨擦面と反対の辺にも、こまかく打ち欠いた痕と、敲打痕が見られる。第4類。

6は、山形を呈する偏平の石の長辺の部分に磨擦面の見られるものである。その半ばを欠失しているが、現存部の長軸端には、打ち欠いた痕を認めることができる。磨擦面に加えられる打撃により生じた大きな打ち欠きが認められるが、この打ち欠いた後にも使用されたものと思われる。第3類。

石皿（第35図7）

その大半を欠失しており、周囲の原石面は図示するもののうち、上と下にしか残っておらず、全体の形を窺うことはできないが、相当に大型の原石を使用したものと思われる。片面のみを使用している。破損の状況を見ると、擦面が形成された後、割れたものであろうと推測される。

(加藤邦雄)

第7号竪穴住居跡（第30図）（図版5）

G-2区、G-3区、H-2区、H-3区にまたがり発見されたものである。

規模は、長径4.2m、短径4.0m、深さは遺構確認面より最大で35cmと、他に発見されている竪穴住居跡群に比較して大型である。

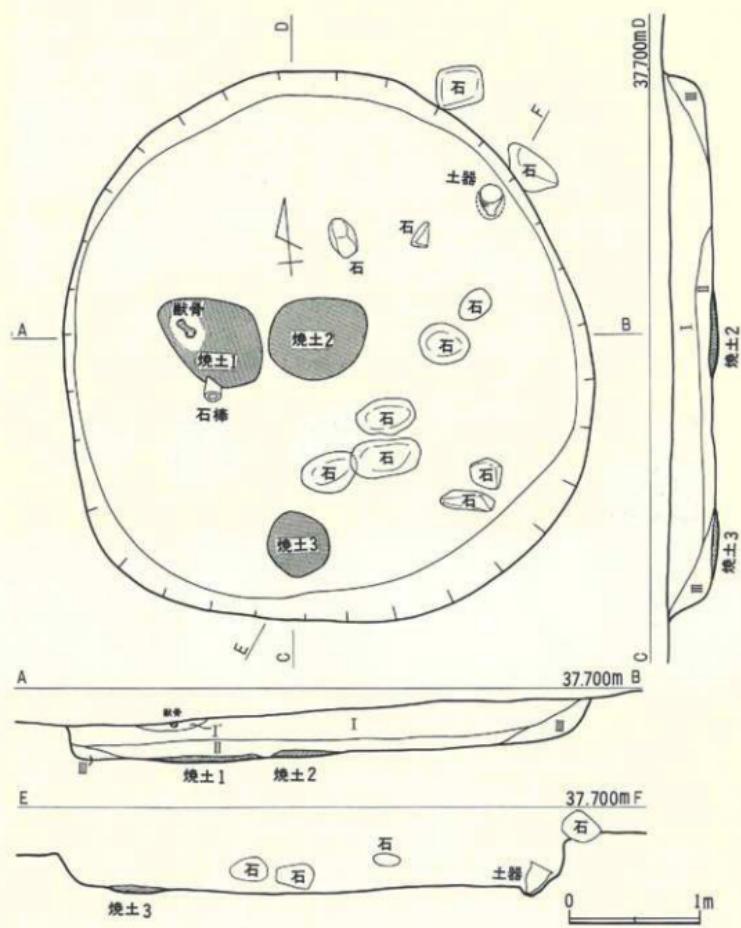
プランは、やや不整ながら円形を呈している。

床面は、硬く平坦である。床面中央には2ヶ所の炉址と考えられる焼土の集積が認められ、さらに南側壁沿いにも1ヶ所焼土の集積が認められている。それらの規模は、70cm×65cm（焼土1）、80cm×60cm（焼土2）、直径50cm（焼土3）である。

北東壁沿いには、完形土器が直立して発見されており、焼土1の南側には大型の石棒があった。

壁は、直立に近く、硬くしっかりしている。床面と接する部分にて丸味を帯び床面へと連って行く覆土中には、人頭大程の大きな石が10数個検出されている。

遺構確認面のA-Bセクションライン上には、比較的保存状態の良好な、海獣骨が発見されてい



第30図 第7号竪穴住居跡

る。

床面、覆土層中より出土した遺物は非常に多い。

本竪穴住居跡内を覆った埋土の状況は下記に示めした通りである。

第Ⅰ層：灰、焼土まじりの暗褐色粘質土

第Ⅰ'層：灰層であり、炭化物も多い。

第Ⅱ層：茶褐色土

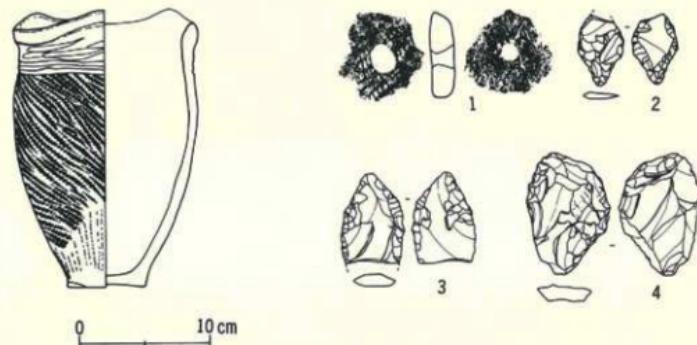
第Ⅲ層：褐色土（焼土粒、炭化物粒が混入している）

（羽賀憲二）

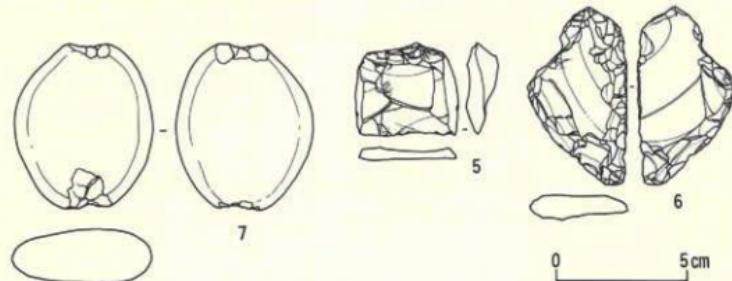
海獣骨（図版5B）

第7号竪穴住居跡の、第Ⅰ'層（灰層）より検出されたもので、本遺跡より検出された唯一の自然遺物である。

発見時においては、破損もなく原型を保っていたが、とり上げ時の乾燥が充分でなく、若干破損



第31図 第7号竪穴住居跡出土土器実測図



第32図 第7号竪穴住居跡出土土製品・石器

させてしまった。

この資料については、北海道大学大学院生西本豊弘氏に鑑定していただいた。

種類は、トドのメスの右上腕骨で、成獣であるという。

(羽賀憲二)

第7号竪穴住居跡出土土器（第31、33、34図）（図版10、14、15）

床面より出土した完形土器を含め、多数の土器が、覆土層中及び床面より得られている。

完形土器（第31図）（図版10）

口径14cm、胴部最大径13.5cm、高さ21cmの深鉢形土器である。

口縁部に、3個の山型突起を有し、口唇の断面形はやや丸味を帯びる。

口唇直下には、肥厚帯がめぐっており、やや部厚い口縁となる。

口縁は、外反しており、頸部は直立に近く以下若干脹み、しだいにすばまり底部と連って行く。

底面は、中央部が若干くぼむ。

口縁部には、2本の沈線文がめぐり、この沈線文と口唇にある肥厚部の間には、数条の沈線が所々を磨り消されながら見られるが、規則的には配されていない。

器内面には、胴部中央までは横方向の、さらに下位では縱方向の調整痕がある。

文様帶下には全面にわたり單節斜行繩文が地文として施文されている。

胎土中には、砂粒を多く含み、器面はザラザラした感触である。焼成は、比較的良い。

内面及び口縁より胴部中央にかけては、器面上に炭化物が付着し黒褐色を呈しているが、以下底部は暗褐色である。

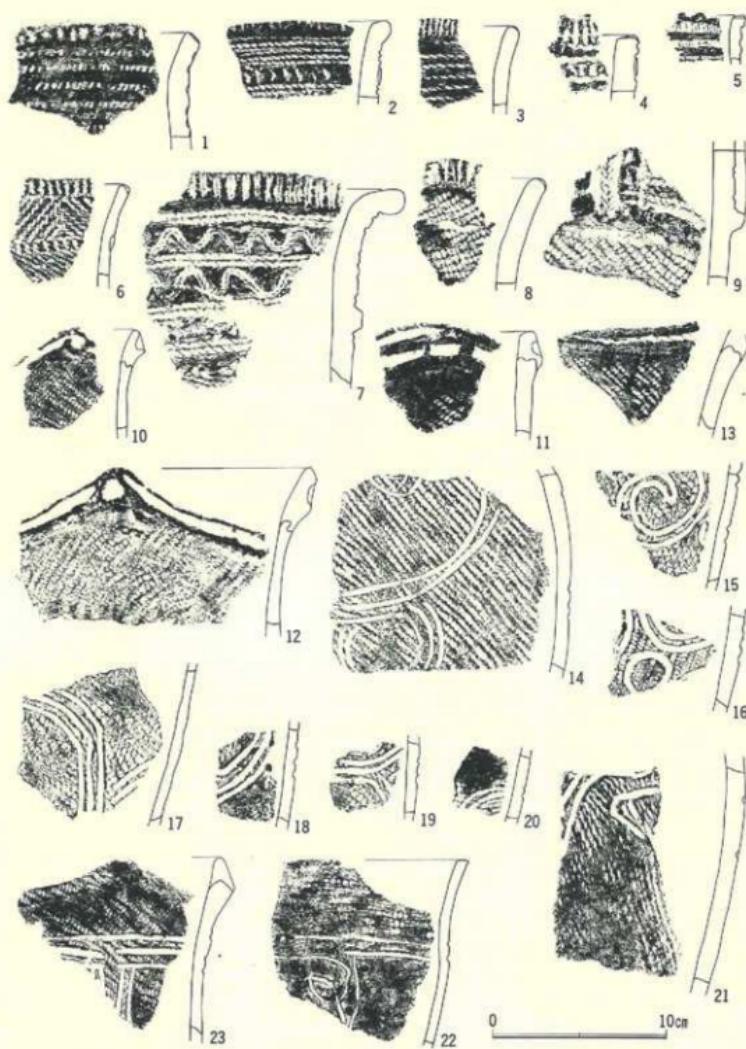
本遺跡出土土器第IV群B類に属する。

1~5は、平縁で、口縁は直立に近く、口縁部に絡繩体圧痕文、撚糸圧痕文が施文されるものである。第II群B類に属する土器群である。1~5は絡繩体圧痕文が施文され、口唇上まで絡繩体によるきざみ目を付ける。2~4は、撚糸圧痕文に絡繩体圧痕文が組み合わされて施文されるものである。3は、撚糸圧痕文のみられるものである。

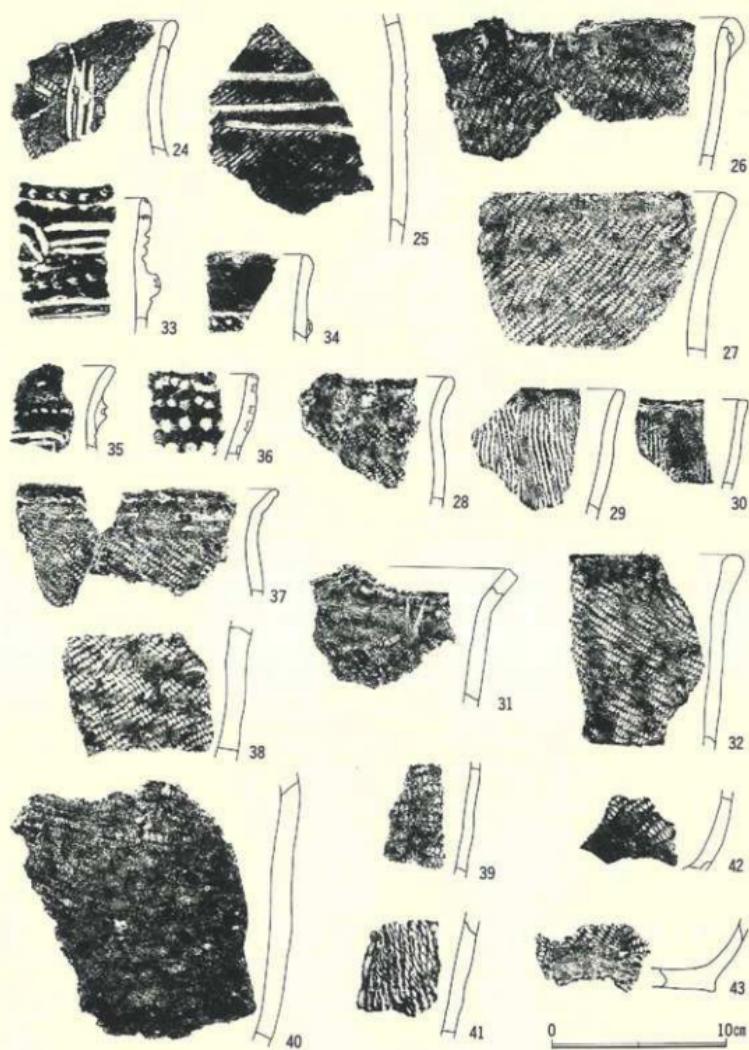
いずれも胎土中に砂粒と纖維を含んでおり、焼成も良い。1~2は、器面上に炭化物が付着し、暗褐色を呈するが他は茶褐色となる。器厚は、1~1.2cmである。

6~9は、口縁部に段を有し、撚糸圧痕文、貼付帯が特徴となるもので、第III群土器に属するものである。

6は、口縁に山型を呈する撚糸圧痕文が施文されるもので口唇部、貼付带上にも撚糸圧痕にてぎみ目を付ける。7は、大きく口縁部が外反し、同一方向に撚った2本の撚糸を一単位として口唇にきざみ目、波形、口縁に平行と數段の撚糸圧痕文を配する。8は、平縁であり若干外反している。口唇に撚糸を押しつけたきざみ目があり地文としての単節斜行繩文が施文されている。9は、貼付帯と、撚糸の異なる2本の撚糸を一単位とした圧痕文を施す。貼付帯以下には単節斜行繩文が地文として施文されている。



第33図 第7号竪穴住居跡出土土器拓影



第34図 第7号竪穴住居跡出土土器拓影

いずれも胎土中に、砂粒と少量の纖維が含まれ、焼成は比較的良好。色調は、褐色（6）、茶褐色（7～9）を呈する。器厚は、1～1.5 cmである。

10～25.31は、沈線文が特徴となり直線、曲線、うず巻き等を構成するものである。第Ⅳ群A・B類に属する土器群である。

10～13、31は、突起部を有する波状口縁であり、口縁部は外反している。口唇はやや肥厚しており、沈線をめぐらす。突起中央には、うず巻きを真似た大きい刺突文を付けている。13のみ沈線が撚糸文に置き換えられている。

14～21は、曲線をえがく沈線文が特徴となり、22～25は、直線で文様を構成する沈線文が主となる。

地文として単節斜行繩文（10～14、16、22～25）、複節斜行繩文（15、17～20）、撚糸文（21）等が施文されている。

胎土中には、いずれも砂粒を含んでおり、焼成も比較的良好。色調は、10、15～20、22～24、31は器面上に炭化物が付着し黒褐色を呈し、他はやや暗い褐色である。器厚は、8 mm内外である。

26～30、32は、沈線等の文様が無く、地文としての繩文、撚糸文のみしかみられないものである。鉤手付きのもの（26）、突起部を有し波状口縁となるもの（28）等があり、他は平縁であり、口縁は若干外反する。

地文は、単節斜行繩文（26～28、32）、撚糸文（29、30）等が施文されている。胎土中には、砂粒を含み、焼成も良い。色調は暗褐色（26、28、29）、褐色（30）、茶褐色（27、32）を呈している。器厚は、8 mm内外である。第Ⅳ群土器である。

33～37は、貼付帯、列点文、撚糸压痕文が施文されるもので、第Ⅴ群A・B類に属するものである。

33～35は、波状口縁であり、貼付帯と列点文が特徴となる。33、35は、沈線文も加わる。

36は、竹管による刺突文がある、37は、口縁部に3条の撚糸压痕文がめぐる。地文として単節斜行繩文が施文されている。全例胎土中には、砂粒を含み、焼成も良く、器面には炭化物が付着し黒褐色を呈している。器厚は、8 mm内外である。

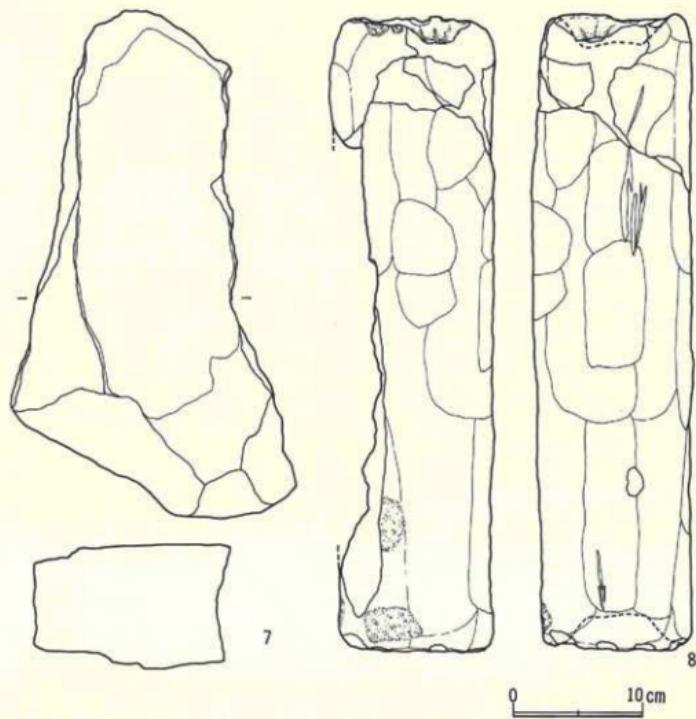
38～41は、第Ⅳ群、第Ⅴ群土器の胴部であり、単節斜行繩文（38～40）、撚糸（41）等が地文として施文されている。

42、43は、第Ⅳ群、第Ⅴ群土器の底部である。43は、底面が若干張り出している。（羽賀憲二）

第7号竪穴住居跡出土製品（第32図）（図版17）

覆土層中より出土したもので、第Ⅰ群B～G類土器の胴部片を素材とし、中央部に器面側より穿孔し、漏斗状の穴があけられている。周囲は、丸味を帯びるように打ち欠き、さらには削り円形を呈するよう整形している。

器面上には、地文の単節斜行繩文が施文されており、内面側は条痕的な調整痕が残されている。胎土中には、砂粒を多く含み、焼成は比較的良好が器面は風化しザラザラした感じがする。色調



第35図 穫穴住居跡出土石器 (7; DW 6, 8; DW 7)

は、茶褐色を呈し、器厚は8 mm程である。

いわゆる「有孔土製円盤」と称されるものである。

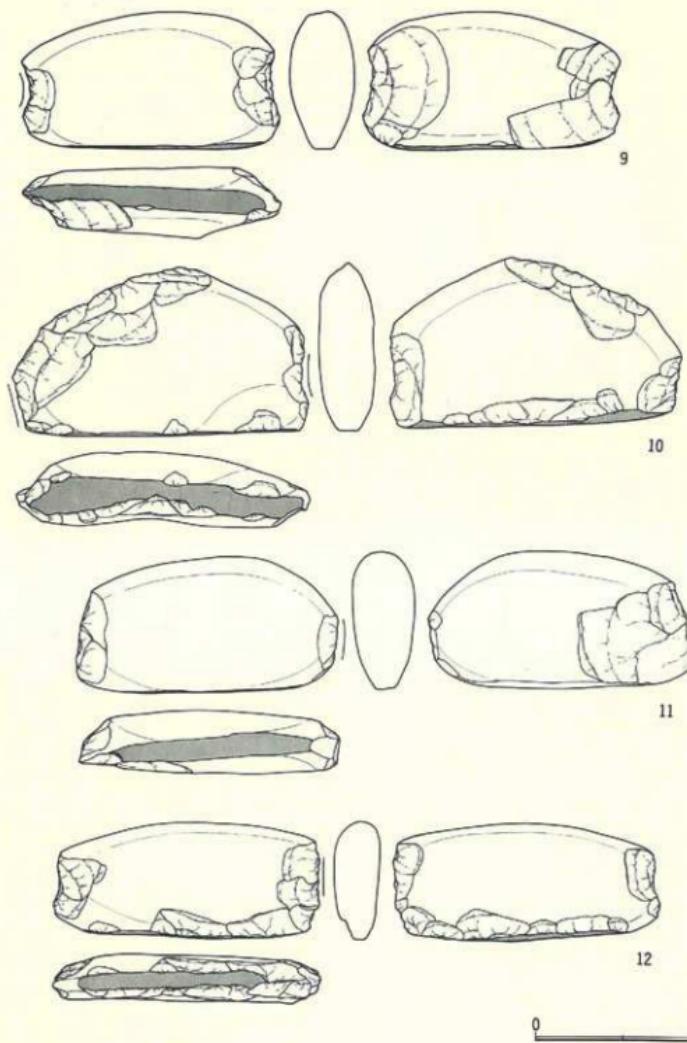
(羽賀憲二)

第7号竪穴住居跡出土石器 (第31, 35~39図) (図版17, 18, 20~22)

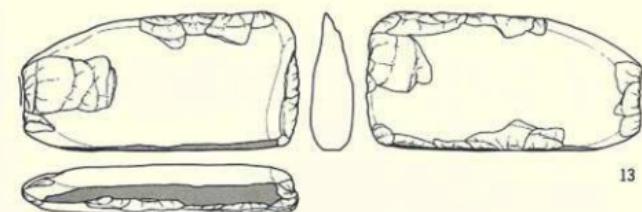
総数で、20点得られている。

石器 (1)

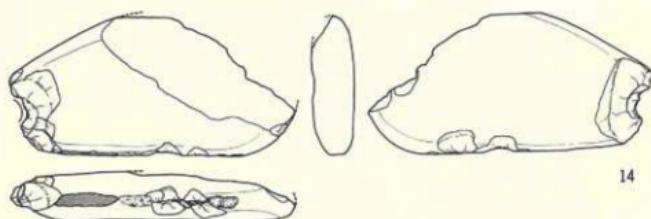
幅広剝片を素材に、エッジ部に剥離加工を施し尖頭部と茎部を作り出してある。尖頭部の一部を欠損しており、尖頭部の形状は明らかではない。茎部はやや太く、かえし部は若干脹り出している。硬質頁岩を表材としている。



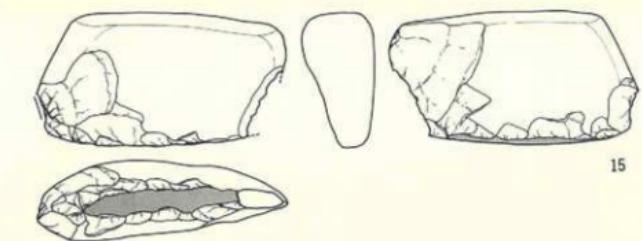
第36図 第7号竪穴住居跡出土石器



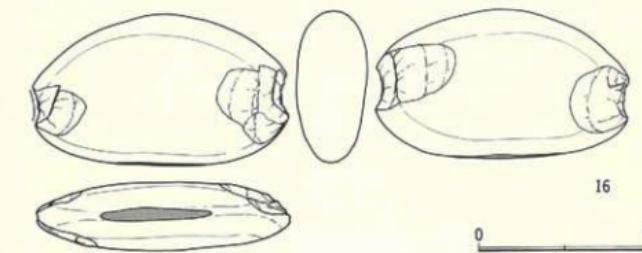
13



14



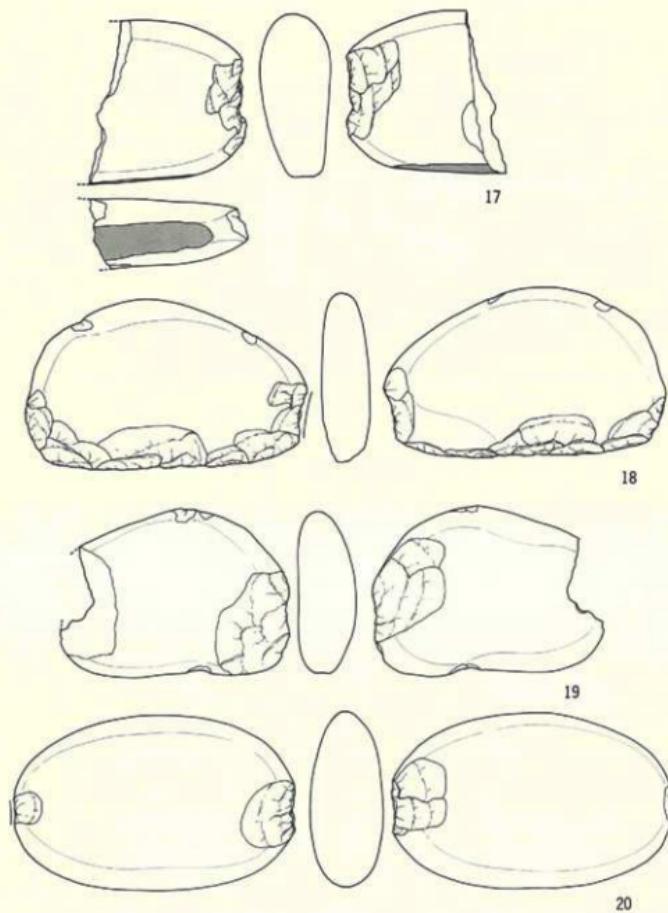
15



16

0 10cm

第37図 第7号竖穴住居跡出土石器



0 10cm

第38図 第7号竪穴住居跡出土石器

削器（3～6）

いずれも硬質頁岩を素材としており、幅広形状の剥片のエッジ部、片面に剥離加工を施したものである。

2. 5には、主剥離面側のエッジにも加工が施されている。

石錐（7）

安山岩の偏平、橢円形状を呈する河原石の長軸両端に数度の打ち欠きを加え、えぐり込みを作り出している。重量は、106 gある。

（羽賀憲二）

石棒（第35図8）（図版18）

全長約48 cm、直径約12 cmである。原石の周囲を削り取って、あちこちにやや稜のある丸味を形成している。3個片に割った状態であり、そのうち2個片が発見され、長軸に沿って破損している部分は発見できなかった。両端に深さ2.5 cmの凹みを作り出している。また、表面のところどころに敲打の痕が見られる。

擦石（第36図9～第38図20）

9は、長軸の両端にかなり大きな打撃による抉りがあり、この部分は、かなり磨耗している。長軸の辺の1つに、磨擦面がある。第3類。

10は、山形の原石の底辺に磨擦面の見られるものである。長軸両端に打ち欠きが加えられており、この部分は、両端ともに磨耗している。磨擦面の見られる辺両側にもわずかながら打ち欠いた痕が残されており、また山側にあたる部分には、かなり強い打撃による打ち欠きが見られる。第4類。

11は、長軸両端に打ち欠きが見られ、一辺に磨擦面の存在するものである。長軸端の打ち欠きのうち片方は、こまかい敲打による整形と言った方が適当であろうか。第3類。

12は、長軸の一辺に磨擦面を有し、両端に打ち欠きを加えるものである。打ち欠きの片方は、磨耗の痕が明瞭に認められる。また磨擦面の両側にはかなりこまかな打痕が全面的に見られる。第3類。

13は、やや短冊形に近い石を使用し、長軸の両端に打ち欠きを加えるとともに、一辺に磨擦面を作っている。両端の打ち欠きのうち、片方には磨耗が認められる。磨擦面の両側にも、こまかな打痕が見られ、更に、この反対の辺には、調整とは思えない打ち欠きが加えられている。第4類。

14は、約半分を欠失しているが、山形の原石を使用しているものと思われる。長軸端に見られる抉りには、磨耗が著しい。底辺を磨擦面として使用しているが、敲打による痕と打ち欠いた痕も認められる。第3類。

15は、短冊形に近い原石を使用しており、両端に打ち欠きが加えられている。そのうち片方には、磨耗の痕が見られる。磨擦面の両側には、こまかな打ち欠きが見られる。第3類。

16は、長軸端の打ち欠きを中心として対称形をなす形をするもので第7類に属する。片方の打ち欠いた抉りには磨耗痕が見ることができる。磨擦面は、それ程大きくはなく、わずかな使用時間であったと思われる。

17は、おおよそ半分を欠失しているが、長軸端の打ち欠きより対称となる第7類に属すると思われ

る。一辺に、やや幅広い磨擦面を有する。

18は、山形の原石を使用し、その長軸の両端に打ち欠きによる加工を行っているものであり、その一方は磨耗している。山形の底辺にあたる部分から両面向て打ち欠き刃部の如く作出を行っているのみで、磨擦による使用のあとは認められない。第5類。

19も、18に類似するものであるが、両端の打ち欠きに磨耗の認められない点、及び底辺に刃部様の作出を行なわない点が異なる。第5類。

20は、磨擦面の見られない石錘とも言える形態のもので第8類に属する。両端の打ち欠きのうち一方は大きな力による打撃ではなく、敲打の繰り返えしによって生じたものと言えよう。

石皿（第39図21）

長辺約36cm、短辺約27cm、厚さ約9cmである。平面形は、ほぼ方形を呈する。両面ともに使用の痕が著しい。片面は長辺に平行に、他の面は短辺に平行に使用している。四周は、自然石のままである。
(加藤邦雄)

第8号竪穴住居跡（第40図）（図版6）

F-3区、F-4区、G-3区、G-4区にまたがり発見されたものである。

規模は、長径4.05m、短径3.1m、深さは遺構確認面より最大で18cm程度ある。

プランは、橢円形を呈している。

長軸方向は、北東-南西方向である。

床面は、やや硬く、平坦である。

床面中央部には、長軸方向に沿って2ヶ所炉址と考えられる焼土の集積が認められた。その範囲は、45cm×60cm（焼土1）、70cm×80cm（焼土2）である。さらに竪穴住居跡の外都北壁付近にも30cm×60cmの範囲にわたり焼土の集積が認められている。

竪穴住居跡の床面中央部には、住居跡の長軸方向と同一方向に向けた石棒が発見されている。また床面北東壁付近には、直径15cm、深さ10cmの柱穴状小ビットが1個だけ検出されている。壁は、やや傾斜しており、床面と接する部分にて丸味を帯び床面へと連なる。

本竪穴住居跡内を覆った埋土の状況は、下記に示した。

第I層：暗褐色土

第I'層：非常に硬い褐色土

第II層：茶褐色土

第III層：焼土粒・炭化物を含む褐色土

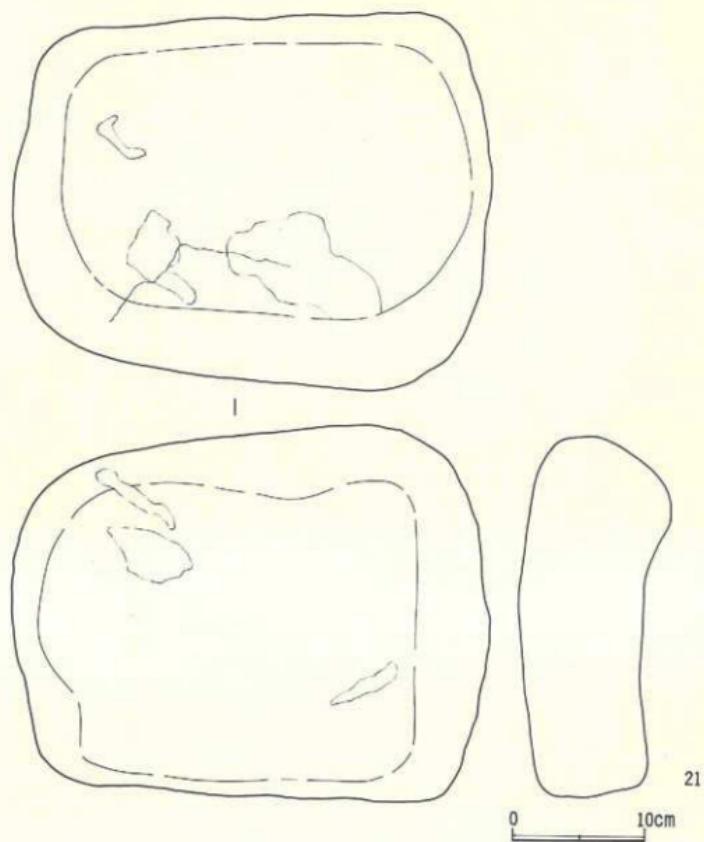
(羽賀憲二)

第8号竪穴住居跡出土土器（第42図）

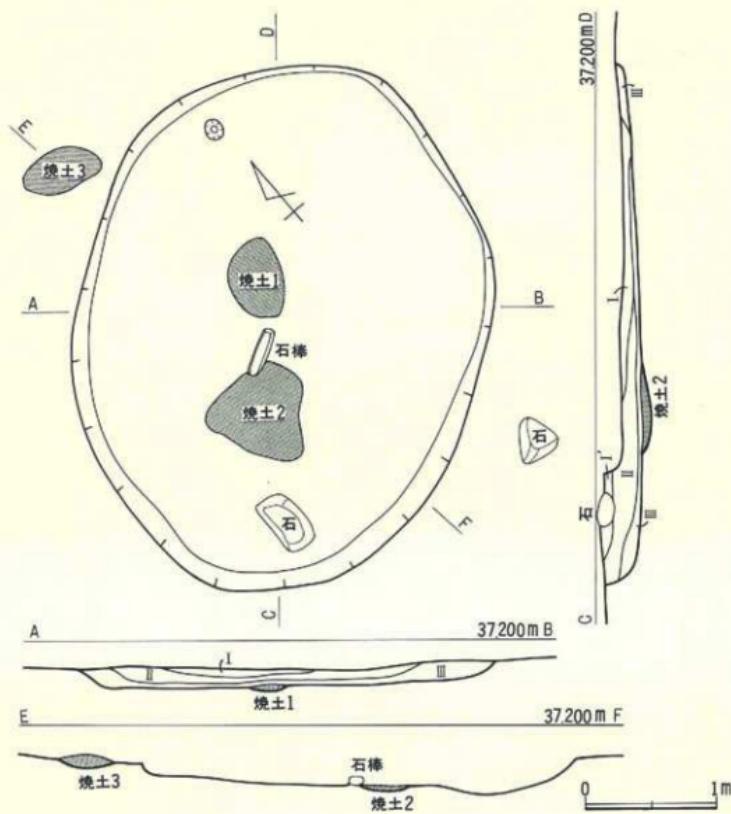
総数は少なく、覆土中より得られたものである。

全例第IV群A類に属する。

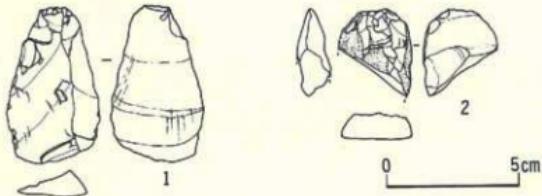
口縁に山型の突起部を有し、口縁は外反する。



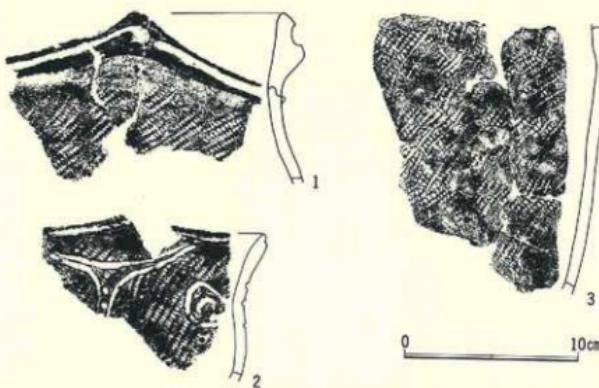
第39図 第7号竪穴住居跡出土石器



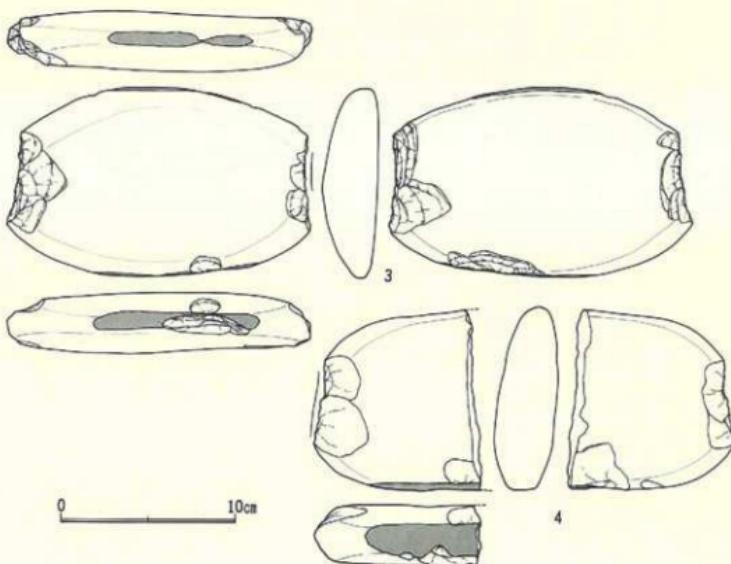
第40図 第8号竪穴住居跡



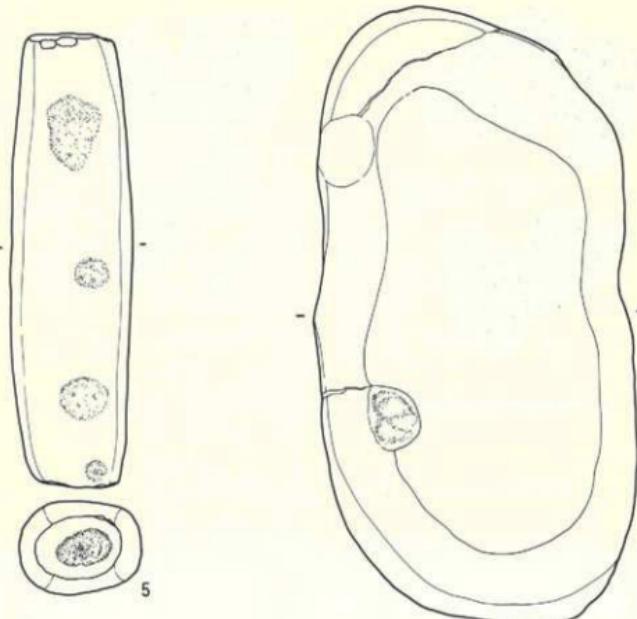
第41図 第8号竪穴住居跡出土石器



第42圖 第8號堅穴住居跡出土土器拓影



第43圖 第8號堅穴住居跡出土石器



0 10 cm

第44図 第8号竪穴住居跡出土石器

1は、口唇部が肥厚し、肥厚帶上に一段の沈線をめぐらし、突起頂にてうす巻き状になる。2は、肥厚した口唇上に撫糸文を一段めぐらし、口縁部には三叉文的な沈線文と、うすまき様の沈線文を配し、三叉文的な沈線間には縱位に列点文を配している。

1～3とも、單節斜行繩文を地文として施文している。

胎土中には、いずれも砂粒を含んでおり、焼成は良好である。色調は、1が明るい褐色を呈し、2・3は器面に炭化物が付着し暗い褐色となる。器厚は8mm内外である。
(羽賀憲二)

第8号竪穴住居跡出土石器(第41、43、44図)(図版17、19、21、22)

総数で6点得られている。

削器(1、2)

1は、縱長剥片で一切の加工は施されていない。2は、一端に主剥離面側からの剥離加工の施されたものである。下部を欠損している為原形は不明である、比較的部厚い。
(羽賀憲二)

両者とも、硬質頁岩である。

石棒(第44図5)(図版19)

長さ約35cm、最大径約9cmの断面形がやや楕円を程し、両端にいくにしたがって細くなる形である。周囲は磨擦によって整形されている。表面の片側と小口の一方に敲打による痕が認められる。

石皿(第44図6)(図版22)

長径約46cm、短径24cm、厚さ12cmの大型製品である。表面は、使用によって軽く湾曲を見せている。一部に敲打痕が見られる。他の面は、何ら調整を加えることなく自然面そのままである。

擦石(第43図3、4)(図版21)

3は、長軸の両端に打ち欠きを有し、第7類に属する石錘に似た擦石である。片方の打ち欠きには、やや磨耗が認められる。長軸に沿う2辺ともに磨擦面が見られる。片側の磨擦面には、ここから加えられた打撃による打ち欠いた痕が存在する。

4も第7類に属するものである。その半分以上を消失するが、残存部の長軸端の打ち欠き部分には、磨耗の痕が認められる。一辺にやや幅広い磨擦面が存在する。
(加藤邦雄)

第9号竪穴住居跡(第45図)

H-2区、I-2区、I-3区にまたがり発見されている。

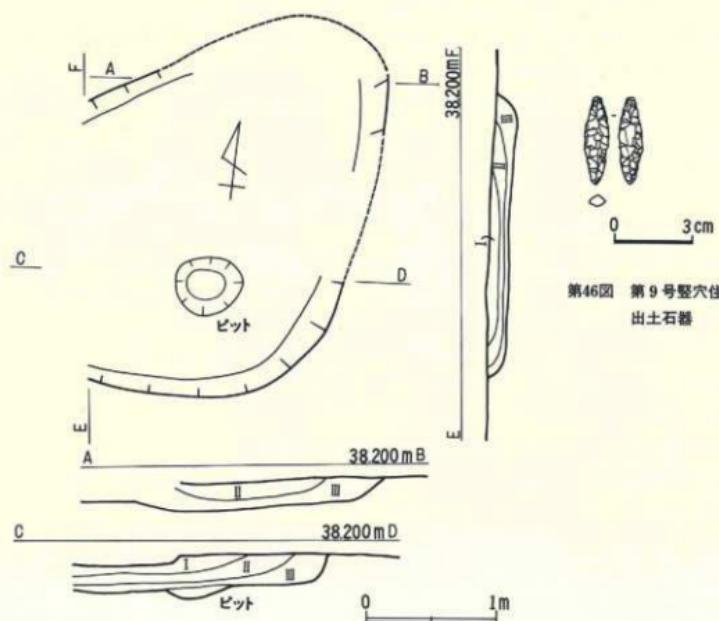
第5号竪穴住居跡と隣接しており、一部の壁より確認されていない。

プランは、残存する壁より卵形に近い楕円形をなすものと推定される。

長軸方向は、北北東～南南西をとる。

規模は、推定だが、長径3.5m内外、短径2.5m内外、深さは、遺構確認面より最大で25cm程度であった。

床面の状態は、比較的硬く、平坦である。床面の南部分には、炭化物、焼土、骨片等がまじり合った灰と思われる内容物がつまつた直径50cm、深さ10cm程度の小ビットが検出されている。



第45図 第9号竪穴住居跡

壁は、直立に近く、床面と接する部分にて若干丸味を帯び、床面へと続いて行く。

本竪穴住居跡内を覆った埋土の状況は、下記に示めした。

第Ⅰ層：黒褐色土

第Ⅱ層：暗褐色土

第Ⅲ層：褐色土

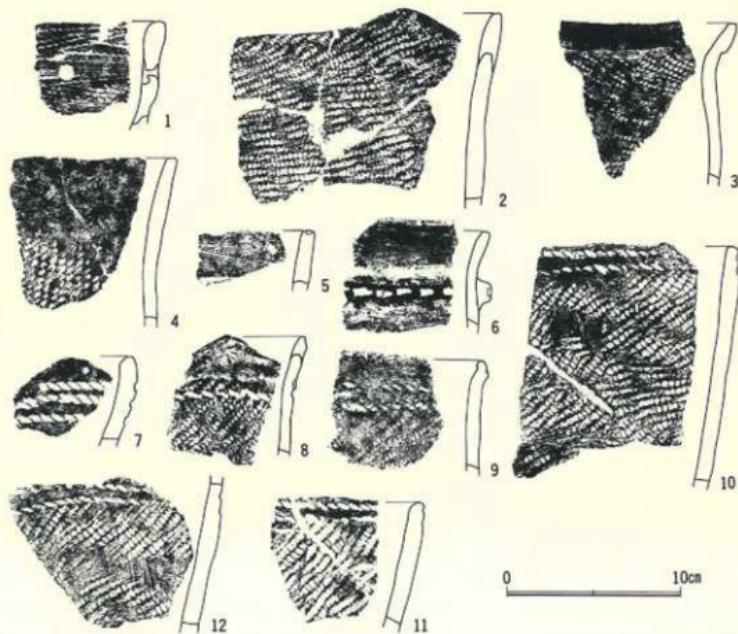
ピット内容物：炭・焼土・骨片まじり褐色土

(羽賀憲二)

第9号竪穴住居跡出土土器（第47図）（図版16）

全例、覆土層中より得られたものである。

1は、第II群B類に属する土器で、直立に近い口縁部で段がある。口唇上は丸く、口縁及び段の部分には数条の撚糸圧痕文をめぐらす。補修孔が器面側より削孔されている。胎土中には、砂粒と纖維を含み、焼成も良い。色調は、褐色を呈する。器厚は、1cm内外である。



第47図 第9号竪穴住居跡出土土器拓影

2~5は、第IV群B類に属する土器である。突起部を有し波状口縁となり口縁は、やや外反する(2, 3)。3は、口縁部に肥厚帯を有しこの部分は無文となる。4は、平縁であり、口縁が若干外反する。地文として、単節斜行繩文(2, 3)、複節斜行繩文(4)が施文される。5は、口縁部は平縁でやや外反する。口唇上は丸味を帯び列点文を施す。地文として横位の条痕様の文様を施す。

胎土中には、いずれも砂粒を多く含み、焼成は良く硬い。色調は、2, 4は、器面に炭化物が付着し暗褐色を呈し、3, 5は、褐色を呈する。器厚は、8 mm~10 mmである。

6~12は、第V群B類土器に属するものである。

6は、平縁で、やや外反する。口縁部に太い貼付帶がめぐり、貼付帶上には、工具を斜に押し付けた列点文が付けられる。貼付帶下に地文としての単節斜行繩文が施文される。胎土中には、砂粒が多く含まれ、焼成も良い。色調は明るい褐色である。器厚は、8 mm程である。

7~12は、口縁部に2~3条の撻糸圧痕文をめぐらす特徴を有するもので第V群B類に属する。

7・8は、山型突起部を有し、9~11は、平縁である。地文としていずれも単節斜行繩文が施文されている。胎土中には、砂粒を含み、焼成も良く硬い。色調は全例暗褐色を呈する。器厚は、1 cm内外である。

(羽賀憲二)

第9号竪穴住居跡出土石器（第46図）（図版17）

1点のみ覆土層より得られている。

石鎌（1）

入念な両面加工が施されており、比較的部厚い、柳葉形を呈しており、かえし部分の脛り出しが弱く、長い茎部が作り出されている。素材は、硬質頁岩が用いられている。

(羽賀憲二)

第10号竪穴住居跡（第48図）（図版4B）

H-3区、H-4区にまたがり発見されたものである。

本竪穴住居跡の約4分の1にあたる北西部を削平した段階で焼土の集積が認められ、さらに削平したカッティングの面に竪穴住居跡の壁。床面のセクションが確認され、竪穴住居跡と断定された。したがって本竪穴住居跡は全体プランの北西部分4分の1は破壊してしまい壁の状況は調査されていない。

規模は、長径2.9 m、短径2.3 m、深さは遺構確認面より最大で15 cm程ある。

プランは、楕円形を呈している。

長軸方向は、北北東-南南西をとる。

床面は、比較的硬く平坦である。床面の北西部に40 cm×50 cmの範囲にわたる炉址と考えられる焼土の集積が認められた。

壁面は直立に近く床面と接する部分にて丸味を帯び床面へと続いて行く。

本竪穴住居跡内を覆った埋土の状況は、下記に示した。

第I層：暗褐色土

第II層：茶褐色土

第III層：褐色土

第IV層：黄褐色粘質土

(羽賀憲二)

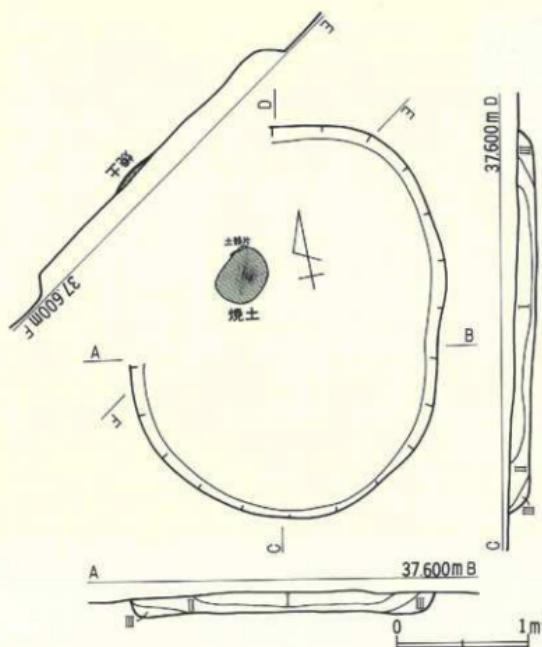
第10号竪穴住居跡出土土器（第49、51図）（図版10、16）

遺物は、非常に少なく復元された土器と土器破片のみである。

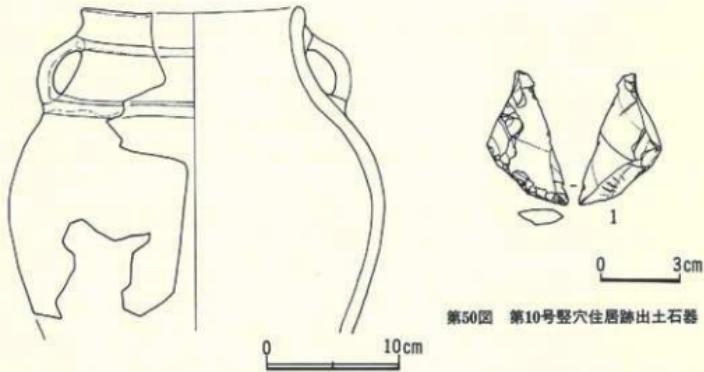
復元土器（第49図）（図版10）

口径17 cm、胴部最大径28 cm、現存高24 cm程のやや大型の壺形を呈するが、一般的にはカネ棺と称される土器である。底部は欠損しており、器厚は1 cm内外である。

口縁は平縁で、外反しており、頸部はくびれ、胴部中央にて最大径をなすようしだいに脇んで行く。頸部の上下には、2本の太い三角形状の貼付帯がめぐらし、この2本の貼付帯を結ぶように4個

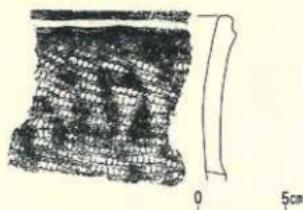


第48図 第10号竪穴住居跡

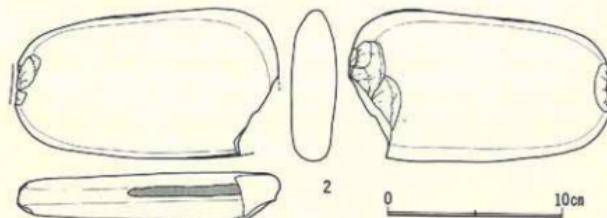


第49図 第10号竪穴住居跡出土土器実測図

第50図 第10号竪穴住居跡出土石器



第51図 第10号竪穴住居跡出土土器拓影



第52図 第10号竪穴住居跡出土石器

程度の橋状把手がある。

胴部の中央部は、大きく脹み、口径の 17 cm に対して 28 cm 径と特異な器形となる。

無文であり、器面には所々に調整痕を残す。器内面には、口縁部では横方向の、以下では縱方向の調整痕がある。

胎土中には、砂粒を多く含み、纖維等を混入した痕跡は無い、焼成は良好であり、色調は全体的に明るい褐色を呈する。

本遺跡出土第Ⅶ群に属する。

第51図に示めたものは、第Ⅳ群B類に属するもので、平縁で口縁はやや外反する。口唇が肥厚し、この部分に一段の沈線文をめぐらす。地文として半節斜行繩文を施文する。胎土中には、砂粒を多く含み、焼成も良く硬い。色調は褐色を呈し、器厚は 1 cm 内外ある。
(羽賀憲二)

第10号竪穴住居跡出土石器（第50、52図）（図版17、21）

总数で、2点得られている。

削器（1）

剥片の形をそのままに一側縁のエッヂ部に若干の剥離加工を施し刃部を作り出したものである。素材には、硬質頁岩が用いられている。
(羽賀憲二)

擦石（第52図2）

第6類に属するものである。長軸の両端に打ち欠きを有する。片側の打ち欠きには、磨耗の痕があり明瞭に認められる。一边に若干使用したと思われる程度の磨擦面が作られている。また、他の邊には、敲打に使用することによって生じたと思われる痕を認めることができる。（加藤邦雄）

前述してきたように、本遺跡の発掘調査に於いては、非常に土質の条件が悪く、その検出が困難であったにもかかわらず10軒の竪穴住居跡が発見されている。

それぞれの竪穴住居跡の構築・使用時期については、竪穴住居跡内の覆土層中、床面上より得られている土器群より推定されるが、明確に竪穴住居跡に伴ったと確認された資料はごく微量であり、確定性に乏しい。

また、各竪穴住居跡のプラン・構造に關しても、土質の惡条件よりその確認が困難を極め、完掘された竪穴住居跡も2軒程度と明確にはなっていない。

上記の事実を考慮し、竪穴住居跡内の覆土層中・床面上より得られた土器群より考えてそのおおよその時期を考えるならば次の様になる。

第1号竪穴住居跡：第IV群B類土器が主体をなしている。

第2号竪穴住居跡：第V群B類土器が主体をなしている。

第3号竪穴住居跡：第IV群B類土器が主体をなしている。

第4号竪穴住居跡：第IV群B類土器が主体をなす。

第5号竪穴住居跡：第IV群B類土器が主体をなす。

第6号竪穴住居跡：第IV群B類土器が主体をなし、他に第V群B類土器が一部含まれている。

第7号竪穴住居跡：第IV群B類土器が主体をなし、第V群B類土器が若干ある。

第8号竪穴住居跡：第IV群B類土器が主体をなしている。

第9号竪穴住居跡：第V群B類土器が主体をなし、他に第IV群B類土器がごく一部含まれる。

第10号竪穴住居跡：第IV群B類土器が得られ、第V群B類土器に属する縄文時代後期の大形の甕形土器が得られている。

出土土器の様相より考えるならば、今回発見された10軒の竪穴住居跡は、時期的には第IV群土器・第V群土器の時期に構築使用されたものが全てと推定される。

後述する発掘区出土土器の項にて述べているように、第IV群土器は、「大木8b式土器、大木9式土器」を含みこの土器群の系統をたどることが可能なうず巻文等を構成する沈線文が特徴的な土器群であり、近隣の遺跡では、元和遺跡出土D群土器が同種の土器群としてあげられる（大沼他1976）。

第V群土器は、口縁部・胴部に繩線文がめぐる等が微細とされる土器群であり函館市西桔梗遺跡（千代・加藤1974）、函館市西股遺跡にて得られた「ノダップII式土器」（松下・森田他1974）のグループに属する土器群である。

第IV群土器とした「大木9式土器」の系統をたどることの可能な土器群を出土する竪穴住居跡が比較的多く得られている遺跡では、「元和第3地点遺跡」（大沼他1976）がある。第4号・6～8号・

10~12号竪穴状遺構と報告されたものが同時期の所産と考えられる。プランは、橢円形・五角形・方形とバラエティにとんでおり、その構造についても、床面中央部に炉址と考えられる焼土層の集積が認められるものが多く、その規模に応じて柱穴と考えられる小ピットが配列しているようである。炉址部分は、焼土のみの存在であり、石を組み合わせた石組炉は無い。

本遺跡（小砂子遺跡）にて発見された、第2号竪穴住居跡を除く竪穴住居跡群にプラン・構造とも類似しているといえよう。

第V群土器と分類された土器群は、いわゆる「ノダップII式土器」が主体をなしており、この種の土器群を出土する竪穴住居跡の発見例は最近比較的多く得られている。

函館市西桔梗E2遺跡（千代・加藤 1974）では、第1号竪穴住居跡～第6号竪穴住居跡の6軒の同時期の竪穴住居跡が発見されている。また函館市西股遺跡では、第1号竪穴住居跡～第9号竪穴住居跡の9軒の同時期の竪穴住居跡が発見されている。

西桔梗E2遺跡にて発見された竪穴住居跡群の様相は、五角形を基本としたプランを有しており、床面中央部南寄りに偏在して河原石を方形に並べた石組炉を例外なくもうけているようである。

西股遺跡に於いて発見された9軒の竪穴住居跡は、プランについては、橢円形・円形・隅丸方形と、西桔梗E2遺跡にて発見されている竪穴住居跡群よりバラエティにとんでいるが、床面中央部には、西桔梗E2遺跡の例と同様に方形に河原石を組んだ石組炉が例外なくもうけられている。

竪穴住居跡のプラン・構造のみからその類例をたどるならば、本遺跡（小砂子遺跡）より発見された唯一石組炉址が床面中央に存在する第2号竪穴住居跡が、いわゆる「ノダップII式土器」期に属する竪穴住居跡と結論されよう。また竪穴住居跡内より得られた土器群についても、第V群B類土器が主体を占めており異論は無いであろう。

しかし、第9号竪穴住居跡では、石組炉はみあたらず、床面上に焼土層の集積もなく、焼土まじりの灰がつまつた小ピットのみが発見されたのみであるが、出土した土器群は、第V群B類土器が主に得られており、大きな差位が感じられる所である。

円筒上層式土器群とさらにこれに後続する土器群（サイベ沢V～VI式・見晴町式）の竪穴住居跡の発見例は今の所非常に少ないが、床面上に焼土層の集積がある地床炉が主であり、「ノダップII式土器」における竪穴住居跡には、石囲いの炉が普遍的に存在するといった大きな構造的差位についてはすでに加藤氏によって指摘されている所である（千代・加藤 1974）。

同様の論は、本遺跡にて得られている。第IV群土器とした「大木9式土器」を含む。これに系統付けられる土器群（元和遺跡、D群とした土器群）における竪穴住居跡の炉址のあり方と、「ノダップII式土器」を主とした第V群土器における竪穴住居跡の炉址との差位についてもいえるのではなかろうか。

本道南西部における縄文時代中期の竪穴住居跡については、その初頭と考えられる日ノ浜遺跡、川上遺跡（吉崎 1965）にて発見されている勝山館III式土器にともなう竪穴住居跡のプラン・構造、すなわち橢円形の掘り込みの中にさらに野球のホームベース状に一段下った床面を有するベンチ構造の竪穴住居跡がまずあげられ、サイベ沢VI式。さらにこれに後続する見晴町式にも同様の形態の

豎穴住居跡が発見され(高橋・森田 1967), 繩文時代中期における豎穴住居跡の一般的構造と考えられるに至った。

しかし、森越遺跡にて発見された豎穴住居跡からは、円筒上層式土器d及びそれ以降の土器群が併出しており、これらの豎穴住居跡の構造は必ずしも、ベンチ構造を有するいわゆる日ノ浜型を呈さないという事実が明らかにされている。プランについても、五角形が基本的な形をなすといわれているが、むしろ楕円形・隅丸方形が主体をなすようである(峰山・大島他 1975)。

本遺跡にて発見されている10軒の豎穴住居跡は、時期的には、前述の遺跡より下るが、第2号豎穴住居跡の五角形を基本とした卵形(一方がすばまる楕円形)のプラン等は、五角形を強く意識して構築されたものと考えられる。

一方木大9式土器系統と考えられる土器群(第IV群土器と分類)がある。この土器群については、サイベ沢W式土器に並行すると考えられており(高橋・森田 1967), その編年的位置等についても最近に至って研究が行われはじめられたといつても過言ではない状況にある。この為、北海道南西部における円筒上層式土器群の終末と、この種の土器群との関連についてかならずしも万人が一致した考えを示しているわけではなく、さらに豎穴住居跡等の遺構については、構造を分析した例は非常に少ない。

本遺跡(小砂子遺跡)、元和第3地点遺跡にて発見された当該時期の豎穴住居跡の構造等を考えるならば、円筒上層式土器群にしばしばみられるベンチ構造を有するものは無いが、石囲いをもたない地床炉の存在、さらにそのプランについても、楕円形・円形・方形・五角形とバラエティに富んでいるが、大略的には円筒上層式土器群の伝統をなんらかの形で引き継いだものと考えられよう。

(羽賀恵二)

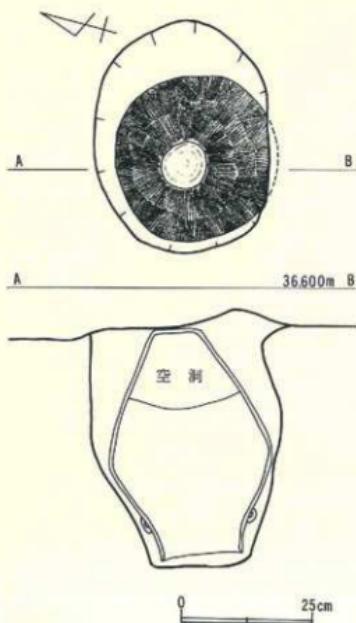
引用参考文献

- 大沼忠晴他 1976 「元和」
- 加藤邦雄・千代麻他 1974 「西桔梗」
- 高橋正勝・森田知忠 1967 「サイベ沢B遺跡調査報告」
- 松下亘・森田知忠他 1974 「西般」
- 峰山巖・大島直行他 1975 「森越」

第2節 埋 瓢

第1号埋甕(第53図)(図版7A)

C-9発掘区に存在する。高さ約42cm、口径約16cmの土器を倒立して埋設してあった。土器を埋設するビットは、第II層を握り込んでおり、その大きさは、長径44cm、短径33cmの楕円形の平面プランを呈する。ビットの断面形は、現存する上部径が広く、下部では狭くなり約18cmである。ビット内の土層は、一層のみで周囲の土に比べて、やや黒色をおび軟らかい。また、土器の中には、黒色土が入れられているが、上部は空洞となっていた。この土器内部の黒色土中からは、



第53図 埋土

ている。しかし、本ビット群の深さは、遺構確認面より最大で50cm内外と浅く、陥穴と考えられているいわゆる「Tビット」と称されるビット群の埋土の状況とは大きく趣を異としている。「Tビット」は、その大部分が、1m～2mと深く掘り込まれており、その埋土の特徴として壙底面上に、黒色を呈する腐植土層が薄く存在する。また長軸の断面形は、壙底面は平坦に近く、壁は直立もしくはややオーバーハングする傾向にある。

本遺跡にて検出されたビット群は、深さ、埋土の状況、壙底面の状態等、いわゆるTビットと称されるビット群とは、ちがった様相を示めしている。

調査時においても、陥穴と考えられる「Tビット」と称されるビット群とは形状では類似するが、別種のビットとしてとりあつかうこととした。

尚、本ビット群中よりは、若干の遺物より検出されていない。

肉眼の観察による限りでは何も発見できなかつた。

土器（第54図）（図版11）

器高42cm、口径16cm、底径9.5cm、胴部最大径31.5cmの胴部が大きく膨らむ器形の土器である。口唇部の一部を欠失するのみである。口縁部に無文帯を有し、その下部には二条の隆帯を巡らし、この隆帯間を結ぶ橋状把手が4個所につけられている。体部上半は、曲線の沈線によって圍まれる繩文を残す8個の文様と磨消部を有する。その下部は、波形状の繩文帯を配し、以下繩文となる。（加藤邦雄）

第3節 ピット（第55図）

本遺跡の発掘においては、長楕円形のプランを呈する溝状のピットが4基発見されている。

本ピット群の様相は、近年道内各地から関東地方にかけ発見されている陥穴と考えられているピット群に形状において類似し

第1号ピット（第55図）（図版7B）

G-4区、G-5区にまたがり発見されたものである。



第54図 墓塗実測図

地山の層序は、

- A層：黄褐色土
- B層：暗褐色粘質土
- C層：硬い茶褐色砂質土
- D層：砂礫層

第2号ピット（第55図）(図版7-C)

F-3区にて発見されている。

規模は、開墳部で長径2.5m、短径54cm、墳底部で長径2.42m、短径17cm、深さは遺構確認面より最大で70cm程であった。

プランは、長楕円形を呈し、長軸方向は、東-西である。

長軸の断面形は、開墳部がやや広がり東壁は直立しており、西壁はオーバーハンプグしておらず、円形に近くえぐられている。墳底面は平坦であるが、西から東に向かってやかに傾斜している。

規模は、開墳部で長径2.01m、短径50cm、墳底部で長径1.81m、短径18cmあり、深さは遺構確認面より最大で50cm程ある。

プランは、長楕円形を呈し、長軸方向は、東-西方向である。

長軸の断面形は、開墳部はやや広がり、東壁は直立に近く、西壁はややオーバーハンプグし、墳底面へと至っている。墳底面は、西側が若干低く、東から西へゆるやかに傾斜している。

短軸の断面形は、開墳部がやや広がり、U字状の形状をなしている。

埋土の状況は

第I層：硬い黒褐色土

第II層：褐色土

本ピットの壁面に現われた

短軸の断面形は、開墳部がやや広がり、U字状をなしている。

埋土の状況は

第Ⅰ層：硬い黒褐色土

第Ⅱ層：褐色土

第Ⅲ層：軟い褐色土

第Ⅳ層：軟い褐色土

本ビットの壁面に現われた地山の層序は、

A層：黄褐色土

B層：暗褐色粘質土

C層：暗黄褐色土

D層：硬い茶褐色砂質土

E層：砂礫層

第3号ビット（第55図）

G—5区、F—5区にまたがり発見されている。

尚本ビットの北端部分は、今回の発掘調査区域外にまで延びるため、一部は未発掘である。

規模は、開墳部にて長径2.0m以上、短径54cm、墳底部では、長径1.5m以上、短径15cmで、深さは遺構確認面より最大で54cmであった。

プランは、長楕円形を呈するものと考えられる。長軸方向は、北東—南西である。

長軸の断面形は、南西壁はなだらかに傾斜し、墳底面へ接しており墳底面は平坦となっている。

短軸の断面形は、開墳部が若干広がり、U字状を呈する断面形となっている。

本ビットの埋土の状況は

第Ⅰ層：黒褐色土

第Ⅱ層：褐色土

第Ⅲ層：黄褐色粘質土

本ビットの壁面に現われた地山の層序は、

A層：暗褐色土

B層：粘質に富む暗褐色土

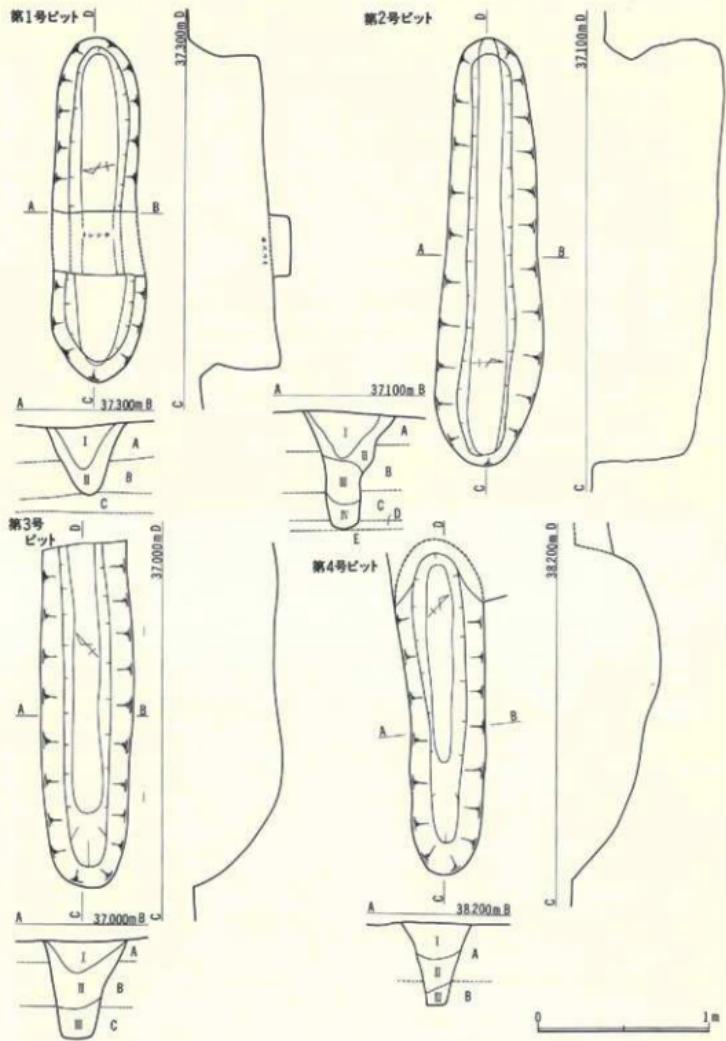
C層：黄褐色粘質土

第4号ビット（第55図）

I—2区にて発見されている。

規模は、開墳部にて長径1.96m、短径45cm、墳底部では長径1.1m、短径15cmあり、深さは遺構確認面より最大で45cmであった。

プランは、長楕円形を呈しており、長軸方向は、北西—南東である。



第55図 ピット

長軸の断面形は、南東壁がなだらかに傾斜して墻底面へ至り、墻底面は丸味を帯び、北西壁へ若干傾斜しつつ立ち上がる。

短軸の断面形は、開墻部が若干広がった、U字状の断面形を呈する。

本ピットの埋土の状況は、

第Ⅰ層：暗黄褐色土

第Ⅱ層：暗褐色土

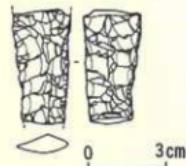
第Ⅲ層：硬い暗黄褐色土

本ピットの壁面に現われた地山の層序は、

A層：暗黄褐色土

B層：砂礫層

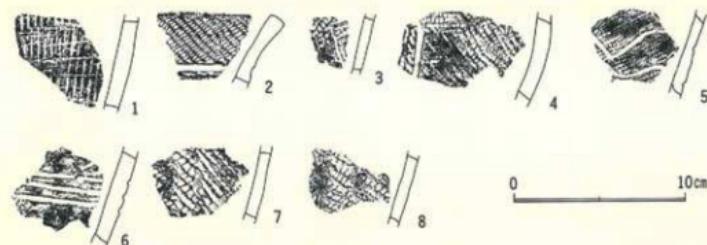
(羽賀憲二)



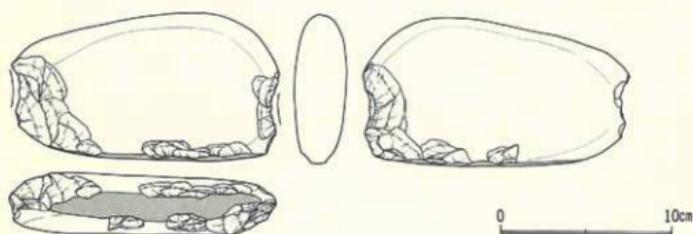
第56図 第1号ピット出土石器

第1号ピット出土石器 (第56図) (図版17)

縦長剥片を素材とし、やや薄手の入念な両面加工の施されているもので、両端部を欠損している為原形は不明である。裏面のエッヂ部付近では、剥離面に刀と平行する擦痕(傷)が観察され、



第57図 第3号ピット出土土器拓影



第58図 第3号ピット出土石器

ナイフ状石器の欠損品の可能性が最も高いと思われる。素材には硬質頁岩が用いられている。

(羽賀憲二)

第3号ピット出土土器（第57図）（図版16）

少數が、覆土中より検出されたもので、本ピットの構築使用年代を示すものではない。

1は、撚糸文が、縦位に施文されたものにさらに横位の撚糸文を重ねた地文を有し、第II群B類に属する土器である。胎土中には、砂粒と繊維を含み、焼成は良好である。色調は、やや暗い褐色を呈する。器厚は8mm程である。

2～6は、沈線により文様を構成するもので、第IV群B類土器に属するものである。

2は、口縁は平縁で、若干外反している。

地文として、単節斜行繩文が施文されている。

胎土中には、砂粒を含み、焼成は良好である。色調は、3、6は器面上に炭化物が付着し、黒褐色を呈する他は、やや暗い褐色である。器厚は、8mm程である。

7、8は、第IV群土器の腹部であり、両者とも単節斜行繩文が地文として施文されている。胎土中には砂粒を含み、焼成も良好である。色調はやや暗い褐色を呈し、器厚は、8mm内外である。

(羽賀憲二)

第3号ピット出土石器（第58図）（図版21）

擦石

長軸の両端に打ち欠きを有し、一辺に磨擦面を作るもの。両端の打ち欠き部分には、かなり明瞭な磨耗が認められる。磨擦面の両側には、打ち欠いた痕が見られる。第3類。

(加藤邦雄)

第5章 発掘区出土遺物

本遺跡の発掘調査によって遺構以外から発見した遺物は、かなり多量である。出土土器は、縄文時代早期から晩期までの各時期にわたって発見された。その中でも特に中期に属する土器の量が最も多い。これらの土器については、第I群から第VII群までに分類した。また出土石器のなかでは、特に擦石とした礫石器の数の多さが目立つ。以下にその概要を記す。

第1節 土 器

第I群土器（第61図1～45）（図版26）

本群は縄文早期に位置するものであり、個々の文様構成、施文により、A～Iまでの9類に分類される。

A類（1, 2）

貝殻腹縁文を地文とするもので、器面に縦位の貝殻腹縁文を0.1～0.3cm間隔で、連続的に押圧し、さらにその下位に横位の貝殻条痕文を施文している。口唇下に先端が径0.2cm程の円形の工具を、1～1.5cm間隔に刺突する。この各間隔は、工具を引きする為、浅い沈線状をなす。口縁は、口唇上を平らに整形し、波状頂部に0.1cm間隔の細い刻み目を施す。内面は横位の貝殻条痕文が整形痕として残されている。器厚は、1cm前後で、色調は暗褐色を呈し、焼成は良好で堅い。胎土中には、砂粒を多く含み、器面上に0.1cmほどの砂粒が浮き出て器面がザラザラしている。

B類（3～5）

數条の組紐圧痕文を地文とした類で、器面に縦横に組紐圧痕文を組み合せて文様を構成している（4, 5）。縦位の組紐圧痕文と横位に施文したものとの各条の接点に先端部が円形で径5mm程の工具を使用した列点文を配する（3）。器厚は、0.4～0.5cmほどで、色調は暗褐色を呈し焼成は良好で堅い。胎土には、0.1～0.3cmの砂粒を多量に含み、器面裏面に僅かの炭化物の付着がみられる。

C類（6, 7）

撚糸によるきざみのある横位の隆起線を持つ類である。6, 7とも隆起線上に0.5cmほどの間隔で撚糸による縦位のきざみ目が施されている。6は、この隆起線をはさむ様にして上端部に1～2条、下端に3条の横位の組紐圧痕文が押圧され、さらにその上位及び下位には、短縄文が施文されている。7は、この隆起線を口唇下1cmほどに配し、その下位に1.5cmほどの短いLRの斜行縄文が施されている。色調は暗褐色を呈し、器厚は、0.5～0.6cmほどで、焼成は良好で堅い、胎土中

に砂粒をわずかに含む。

D類 (8~15)

横位の隆起線を持つ類である。本類は、横位の隆起線を1~1.5 cm間隔で、数段施しその隆起線間に斜行繩文、短繩文、絡繩体圧痕文が施されるものである。8, 9は、RLの斜行繩文が施されている。10は、斜行繩文が施されている。11は、絡繩体圧痕文が施されており、12~15の様に短繩文が施されているものもある。その中で短繩文が施されるものには、隆起線文の上位及び下位に、数条の綾絡文が施され、器面には所々に不明瞭なLRの繩文が施されている。器厚は0.5~0.6 cm程で色調は褐色を呈し、焼成は良好で堅い。胎土には、多量の砂粒が含まれるが、9~15に含まれるのは僅かである。

E類 (16~26)

綾絡文が横位に施され、地文に羽状、あるいは斜行をなす撚糸文、繩文を持つ類である。16, 17は、綾絡文を数段めぐらして、地文に撚糸文を施している。18~20, 23, 24は、数条の綾絡文を数段めぐらして地文に羽状の撚糸文を施している。21, 22は、一条ないし二条の綾絡文をめぐらし、地文にLRの繩文を施している。26は、口縁部に四条の綾絡文をめぐらし、その下位に数条の綾絡文を2 cm程の間隔で数段めぐらし無文である。25は、5 cm程の間隔で、繩文原体の先端部を使用して、数列の点列文を施し、その下位に綾絡文を施している。23は、0.2 cm程の間隔で横位に施されるものがある。器厚は、0.6~0.9 cmで、色調は褐色および暗褐色を呈し、焼成は良好で、胎土には砂粒を含む。

F類 (27~29)

絡繩体圧痕文を持つ類である。3例とも口縁部である。29は、山型突起を有している。いずれも口唇に口縁部と同様の絡繩体を使用して、原体を縦位に押圧し、きざみ目を施している。器厚は、0.6 cm程で色調は褐色および暗褐色を呈し、焼成は良好で胎土には砂粒を含む。

G類 (30~33)

捺りの方向のそれぞれが異なる撚糸を二条を一束として継位と横位に押圧するものである。焼成は良好で、色調は暗褐色を呈する。器厚は、0.6 cm~0.8 cm程であり、砂粒をわずかに含む。

H類 (37~42)

羽状に構成される撚糸文を、横位に何段も施すものである。焼成は良好で、色調は褐色を呈し、胎土には砂粒を多量に含む。器厚は、0.6 cm程である。

I類 (34~36, 43~45)

34~35は、太い節を持つ撚糸文と思われる施文が数条、器面に施されている。34は、器厚が1.2 cm程で、やや厚く胎土には砂粒を多量に含み、機械が若干含まれている。焼成は良好で器面は暗褐色、裏面は褐色を呈している。36は、底部の資料で、平底と思われる底面と底部角より上位3 cm程に、一条ずつの太い節を持つ絡繩体圧痕文が施されている。器形は、やや丸みを帯びた立ち上がりを呈し、胴部・口縁部は不明である。焼成は、やや良好で、胎土中に0.5~3 mm程の砂粒を多量に含み、器面に露出してザラザラしている。裏面は、横位のナデ整形がなされている。44は、口縁

に二列の径 0.3 cm 程の円形の先端部を持つ撚紐を使用し、0.7 cm 程の間隔で連続して刺突し、その下位に羽状に施文された撚糸文が施される。焼成は良好で、胎土中には、ごくわずかに砂粒を含む。色調は暗褐色を呈し、器厚は 0.5 cm 程である。45 は、口縁上は平に整形されている。器面には、口縁より 1.5 cm 程下位に、径 4 mm 程の円形の先端部を持つ工具を使用して斜方向より 0.5~0.6 cm 程の間隔で、横位に刺突されている。口縁とこの刺突文との間には、縦位に近い右下がりの 1.3 cm 程の幅の撚糸（短纏文？）が施され、刺突文の下位 0.8 cm より 2 cm 程の幅に同様の施文がなされる。さらにその下位には、右下がりの R L の斜行縞文が施される。裏面には、羽状を呈する R L の斜行縞文が口縁より 4 cm 程の幅に施文されている。色調は、暗褐色を呈し焼成は良好で、胎土に砂粒ごくわずかに含む。器厚は 0.4 cm 程である。43 は、太い撚糸文が施され、裏面に貝殻条痕文が施されるもので、焼成は良好、色調は暗褐色を呈し、砂粒を大量に含むこれらの土器は、類別が少なく、くわしくは不明である。

第 II 群土器（第 62 図 46~第 63 図 102）図版 26

所謂円筒下層式に属するもので、器形は円筒状の深鉢形を呈し、口縁は平縁か、波状を呈する。口縁部には文様帶が構成され、不整縫緒文を横位に密に施し文様帶をなすものと、細い隆起帯あるいは連続する刺突文を口縁部に周回させ、その上位に撚糸文、格縄体压痕文を施文した文様帶をなすものがある。

前述の土器群を A 類、後述の土器を B 類として分類し、B 類を文様帶の特徴により、a~d の 4 種に区別した。

A 類 (46~49)

本遺跡よりの出土は、この 4 点のみである。いずれも小破片の為、全体の器形は不明である。46~48 は、口縁部で、口縁は平縁で、口唇上は平らにナデ整形がなされている。胎土は、0.5~3 mm 程の砂粒と纖維が多量に混入している。焼成は、良好で暗褐色を呈している。裏面には、横位ないし斜位の刷毛目状の整形痕が残されている。口唇下 3 cm 程の幅に横位の数条の不整撚糸文（不整縫緒文）が施され、文様帶をなしている。その下位には、地文として、縦位の撚糸文が施されている。49 は、胴部片と思われる。組成・焼成・文様とも、46~48 と同様であるが、縦位の地文をなす撚糸文に横位の不整撚糸文、不整縫緒文が明瞭に交錯している。

B 類 (50~102)

器形はいずれも小破片の為、不明である。50~102 まで全て、口縁部片である。口縁部の形状は、50, 51, 70 を除き、全てゆるやかに外反している。口唇に撚糸及び、格縄体による刻み目が施されているものが主体を占める。51, 53, 58, 78, 79, 80 は、刻み目が施されていない。器厚は、0.6~1.5 cm 程のものであるが、1 cm 前後のものが主体をなしている。胎土には、全て砂粒を含み、径 5 mm 程の小礫を含むものもある。纖維は多量に含むものと小量含むもの、全く含まないものがある。裏面の調整は、横位の整形がなされている。

a (50) 口唇下 4 cm 程の所から外側に強く屈曲し、いわゆる肥厚帶状をなす直立した口縁部の文

様帶は、口唇より始まる横位の二条一束の撚糸文を4段施し、その幅1cm程の各間隔に上位から一条の波状をなす撚糸圧痕文、斜行するLRの撚糸文、一条の波状をなす撚糸圧痕文の施文がなされている。

b (51) 口縁部がやや肥厚し、口唇下3cm程の所に口縁部のくびれによって作出された胴部と文様帶とを区分するゆるやかな隆帶を持っている。文様帶は、数条の横位と斜位の撚糸文が幾何学的な構図をなすと思われる。

c (52~57) 胴部と文様帶を区分する隆起帶もしくは4~5mm程の円形の先端部を持つ工具によって、0.5~1.2cm間隔に押圧された隆帶のかわりをなす列点文を施すものである。56は半截竹管を工具とする列点文を持つ。52~55は、二条一束の撚糸文を横位に2条~6条施し、文様帶をなしている。56, 57は、4~10条の横位の絡繩体圧痕文を持っている。

d (58~102) 64, 66, 69~80は、二条一束の撚糸文を数条横位に押圧したものである。67, 68は、二条の互いに撚りの異なる撚紐を一束として押圧したものである。81~87, 94, 98は、絡繩体圧痕文を横位に数条施したものである。91~93, 99~100は、太い撚糸文を横位に数条施したものである。88は、二条一束の一条の撚糸文と4条の絡繩体圧痕文とを横位に施したものである。90は、4条の太い撚糸文と2条の絡繩体圧痕文とを横位に施されたものである。

第三群土器（第59図1、第63図103~第65図195）（図版23-1、図版27, 28）

いわゆる円筒上層式に属するもので、器形は円筒深鉢形であるが、口縁部は外反し、2~4個所に山型突起部を有するものが多い。突起部は、弁状、二又状、肩状を呈する。口縁部文様帶には撚糸圧痕文、絡繩体圧痕文、馬蹄形圧痕文、刺突文、貼付帶が施され、突起部の下位に垂下する多様な垂下帶が貼付される。

本群は、円筒上層a, b式に属するものをA類、円筒上層c式に属するものをB類、地文だけのものをC類、分類不明のものをD類として説明を加えることとした。

A類（第59図1）（103~137）

復元土器（第59図1）

器形は、円筒深鉢形である。口縁部は外反し4か所に二又突起を持ち、口縁と頸部には、縦位に細い撚糸をならべて押しつけた刻み目を持つ貼付帶が周回している。二又突起の頂部より頸部貼付帶へと垂下するX字状の垂下帶が、口縁部の文様帶を4分割している。この分割される文様帶は、口縁に平行するかの様に2条の波状の撚糸圧痕文が施され、さらにその撚糸文をはさむ様に1, 2条の撚糸圧痕文が施される。胴部には、結節を持つRLの斜行繩文が施されている。

110, 111, 113, 115~119, 120~123, 127, 129, 131, 135は、2~4条の撚糸圧痕文を数段口唇部に平行する様に施されている。110は、単体である。129は、撚りの異なる原体を3条1束として1cm程の間隔をおき、横位に数条施され、その間に馬蹄形圧痕文が点列状に施文されている。121, 131は、山並突起下に半円筒状の貼付瘤が施されている。115は、縱横に走る撚糸圧痕文により文様

帶がある。120は、第59図-1と同様の文様要素を持ち、垂下帶が、O字状の下端に長さ2cm、幅0.5cmの横位の貼付瘤を持ち、その垂下帶内に縦位に2列の長さ8mm、幅1~2mmの点列文を2条の縦位の撚糸圧痕文をはさむ様に、橢円形状に施されている。104~109、114、117、118、130、134は、撚糸圧痕文を横位に数条施文した文様帶を持つものであり、2~4を一束とした撚糸圧痕文を数条施文したものが主体となっている。122は、単線、134は、原体の異なる撚糸圧痕文の組み合わせたものである。132、133は、2~3条一束の撚糸文を1~1.5cmの間隔で横位に数段施し、その間に馬蹄形圧痕文が点列状に配されている。104、114、130は、垂下降帶のかわりに縦位の撚糸圧痕文が数条施されているものである。124は、弁状突起部で突起頂部には指頭様の工具によって窪み状に整形がなされ、さらに「キ」の字状の沈線文が施されている。突起部表面には、幅2cm、長さ3cm程の三条の縦位の刻みの施された貼付帶が貼付されている。突起部裏面には、一列の爪形文が施文されている。125は、二又状突起部の一部である。突起頂部は、右方に窪みを持たせながら、後方に傾斜して行くものである。また、突起部左方より右下がりに、撚りの方向のたがいに異なる二条の撚糸を一束として、二束二段に押捺されている。126は、肩状突起部で、突起部には二条の横位の5mm程の幅を持つ貼付帶が貼付されている。この貼付帶上には、撚糸が押圧されている。突起頂部にも撚糸の押圧がみられる。127は、二又状突起部の一部で口縁には縦位の撚糸による刻み目が施されている。文様帶には、二条の撚糸圧痕文と一条の絡繩体圧痕文が施文されている。128は、弁状突起部から垂下帶の一部をなすように思われる部位で、縦長の長方形をなす貼付帶と、この貼付帶の内側にそって撚糸圧痕文が施されている。129も、二又突起の一部である。突起部の左側面上位には、口縁の貼付帶を周回させた時に作出された窪みが、そのまま残されている。その貼付帶には、縦位の撚糸による刻みがつけられており、この突起の右部には、大きな剥落痕が残っている。131は、大きな抉り込みのある二又部突起を持つものである。この土器は、口縁に肥厚帶を持たず、数条の撚糸圧痕文を横位に施文し文様帶としている。二又突起部下位に、幅2.2cm、長さ3cm程の半円筒状の貼付帶が横位に貼付され、この貼付帶には縦位に5条の撚糸圧痕文が施されている。この文様帶の下位には、貼付帶の剥落痕がある。136、137は、文様帶に、貼付帶による波状の連続する文様が施されるものである。136は、外反する口縁に縦位の外反する刻み目を施し、その口縁に接し連続する波状の貼付帶が施されている。さらに、その下位には、横位の撚糸圧痕文の施文も見られる。137は、この連続する波状の貼付帶と横位の貼付帶の組み合わせを持つものである。

B類 (138~147, 151)

口縁部に施文が施されず、幅1cm程の縦位の撚糸圧痕文の施された貼付帶で文様を描き、その隙間に馬蹄形圧痕文、あるいは半円形刺突文が施されるものである。138、139、140~143は、この貼付帶と馬蹄形圧痕文が施文されるもので、143は、突起部である。この突起部には、貼付帶による文様が施され、その下位には馬蹄形圧痕文が二列押圧されている。144、145、146、151は、この貼付帶と半円形状の刺突文とが施されるものである。144は、4条の横位の貼付帶が施され、その一対の貼付帶を連結する縦位の短い貼付帶が施されている。また、その貼付帶によって区画された隙間に半円形状刺突文が施される。146は、肩状に貼付された貼付帶の各隙間に半円形の刺突文が、施され

るものである。147は、横位に施された各間隔に撚糸圧痕文の施されたものである。151は、細い爪形状の刺突文が施されている。

C類 (148~150, 152~155, 157~195)

本類は、地文だけのグループである。148は、縱位の撚糸文が施されている。149, 152~155は、羽状文が施されるものである。150は、RLの繩文が施される。157~195は、縱位の撚糸文と横位の撚糸文が交錯しているものである。

D類 (156)

器形は大きく湾曲する器面に幾条にも横位の絡繩体圧痕文が施されるもので、焼成はやや良好で、色調は赤褐色を呈し、砂粒を多量に含む。この部位が口縁であるならば、第II群B類に分類なされるが、一応このIII群の末尾においてD類として説明を加える事とした。

第IV群土器 (第59図2~6, 第60図13, 第66図196~第80図646) (図版23, 2~図版24, 6図版28~図版38)

本群は中期末の土器群で、大木8b式、大木9式、楕林式に相当するものをA類、文様が硬化し直線的、あるいは幾何学的な文様を構成するものをB類として分類した。

さらにそのA・B二類を、文様構成施文等の特色によりA類をa~iまでの9種に分けB類をa~mまでの13種に分けた。繩文、撚糸文、条痕文だけが施されるグループをB類に含め説明することとした。

A類 (第59図2) (196~310, 313~324, 326~377, 380, 390~394, 414, 417~435, 437, 439~441, 444~446)

器形は口縁が外反し、3~4個の山型突起を持つ波状口縁をなすもの、山型突起には渦巻文、あるいは渦巻文の簡略化されたものが施文されるものである。頭部には二~数条の沈線文が周回するものが多い。頭部、胴部には渦巻文、長楕円形文、弧状文などの曲線的な沈線文を持つ文様が施される。焼成は良好で硬い。色調は暗褐色か褐色を呈し胎土には、砂粒を多量に含む。地文は斜行の繩文が多く、縱位に近い斜行の繩文や撚糸文、横位の繩文や撚糸文、縱位の条痕文もみられる。

復元土器

第59図2は現存高22.5cm、口径33.0cm、胴部径30.0cmである。口縁は波状をなし、4個の山型突起を持つ。口縁部はゆるやかに外反し、胴部がわずかにふくらむ円筒形に近い器形を呈している。底部は欠損している。器面には口縁の下位5cm程のところに二段の長楕円形文と、二重の長楕円形文とを組み合わせたモチーフと、二段の長楕円形文を二列組み合わせたモチーフが平行に交互に配される。さらにその下位に左端部が渦巻状をなす三条の沈線文の谷部が鋭角的な波状を描きながら横走する。この波状の沈線文をはさみこむ様に、一対の円形文が施されている。地文は、の撚糸文が全面に施されている。焼成は良好で、色調は暗褐色を呈す。

第60図13は現存高8cm、口径9.8cm、胴部径10.3cmである。口縁は平縁で胴部が大きくふくらみ器形は深鉢形を呈している。口縁下1cm程の所に一条の沈線が口縁部を周回する。

肩部には横位の長楕円形文を平列に数個周回させる。長楕円形文の相対部の下位において左右より接近する二本の沈線文が弧を描き接し垂下する。この長楕円形文の内部は明瞭ではないが、横なでに磨消し状に地文が消されている。焼成は良好で硬い。色調は暗褐色を呈し胎土には砂粒を含む。器厚は0.6cm程で、器面裏側は丁寧な整形がなされ黒色を呈し、所々に炭化物が付着している。器面の口縁部にはやや厚く炭化物が付着している。地文はLRの斜行繩文が器面全面に施されている。この土器はA類のC種に区分される。

a (196~218, 434, 435, 439) 口縁部の大きく肥厚した山型突起部に、溝巻文、あるいは溝巻文の簡略化された沈線文が施される、この沈線は溝状をなし、器面口縁上を周回する。202, 204, 206~211, 213, 215の口縁部には数条の沈線文が横位に施され、202, 207では、さらにその下位に二条の垂下する沈線、横長のコの字状の沈線文がそれぞれ施されている。突起部の溝巻文の形状はそれぞれに異なる。196, 197は明瞭な左巻きの溝巻文が肥厚部右の沈線文と接続する。198~200, 202の様にやや溝巻きの弱まる右巻きの溝巻文が右側の沈線文へ接続するもの、205, 206, 210の様に明瞭な右巻きの溝巻文が左側の沈線へと接続するもの、211~218, 434は溝巻文が簡略化され、刺突文状になっているものでこれらは全て左側の沈線文へと接続する、435, 439はこのモチーフの一部である。地文は、196, 197, 210, 213, 214, 217はLRの斜行繩文で、198~202, 205~208, 211, 212, 215, 218はRLの斜行繩文、203, 204では口縁部の地文が磨消されている。焼成は総じて良好で、色調は暗褐色か褐色を呈している。胎土には、0.2~1mm程の砂粒が多量に混入している。211は焼成が悪く赤褐色を呈し、器面には0.2~1mm程の砂粒が浮き出している。207には補修孔が削孔されている。207, 215の裏面、口縁に炭化物の付着がみられる。

b (219~263) 溝巻文が溝巻文の変形による円形文を主体とした曲線文を描くものである。219, 222, 231は縱位の一対の円形文を配し、その回りを一対の沈線が左右より肉彫り的に囲み垂下するもので、ひょうたん形かメガネ形に似たモチーフが描かれている。219は胴部にさらにそのモチーフを囲む様に隅丸の二重の区画文が周回している。231はこのモチーフが頭部を周回すると思われる三条の横位の沈線文が施され垂下する。220, 223~225, 227, 238, 241の様に円形文のかわりに溝巻文が使用されるもので、一対の沈線いずれかにこの溝巻文が接続する。220はこのモチーフを平列に施しその右端にこのモチーフに接する横位の弧状文を配するもので、225, 227, 238, 241もこのモチーフの一部である。223は三条の沈線文が溝巻文を含んで斜行するものとなる。221, 226は一・二条の直線文と二重の円形文とが交差するものである。236, 237, 244, 245, 250, 255, 344は溝巻文と直線文との組合せを持つもので、236, 237, 245の様に横位に二条の沈線文を施しその下位の沈線の端部が溝巻状を呈するもので、237の様に長楕円形文との組合せを持つものもある。244, 250, 257は同様のモチーフであるが、直線文が斜行している。232~234, 240, 246, 251~253, 261は溝巻文を主体とする曲線文との組合せを持つものである。235, 239, 247, 249, 252, 256, 257, 261は二条の沈線で施される溝巻文を持つもの、254, 258~260は、溝巻文と径5mm程の円形の先端部の工具を使用した列点文との組み合わせを持つもので、254, 259は横位の二条の沈線文の間隔に列点文が施されるもの、258の様に溝巻文の空間に施されるもの、二条の沈線文で描かれる溝巻文の上

位に施されるものがある。

e (264~300, 336, 338, 343, 348, 353, 371, 376, 390, 431, 433, 437) 長楕円形か、あるいはコの字状の沈線文が施されるものである。269~275は、コの字状の沈線文が弧状、曲線状を描くもので、270, 271, 273, 275の様に二段に施されるものが主体をなす。279, 280, 283, 285~287, 292, 293, 330, 336, 338, 347, 431, 433, 437は、口縁部及び頸部に施された二段の長楕円形文を主体となすもので、279の様に、横位に施される長楕円形文の対応部下位に弧状の沈線文が施されるもの、285の様にその下位に、横位に三条の波状沈線文が施されるもの、286の様にその下位に長楕円形文の対応部より、ハの字状に垂下する沈線が施されるもの、338の様に横位の頭部と胴部とを周回すると思われる4条の沈線文との組合せを持つもの。431の様に口縁に太い横状の沈線文を持ち、頸部に二段の横位の長楕円形文が施され、さらにその下位に、横位の弧状文が施されるもの、433, 437の様に口縁の太い溝状の沈線内に斜方向より丸みを持つ、先の尖った工具を使用し、連続的に刺突した刻み目が施される。口縁部には、横位の長楕円形文が施され、その両端にコの字状の弧状文が接する。277, 289の様に長楕円形文と円形文との組み合せを持つもの、281, 283, 298, 336の様に横位の沈線文との組み合せを持つもの、295, 299, 300は、長楕円形文とその両端の下位に弧状を呈する沈線文が施されるもので、295の様に平縁の口縁部に2.5 cm程の幅に地文を磨消し、このモチーフを施し、さらにその横位に渦巻文が施されている。299, 300はこのモチーフの一部である。

d (301~309, 313, 315~317, 319, 320, 322~324, 326, 331~334, 354, 357, 368, 373) 曲線的な文様を施したものでバラエティに富んだモチーフを持っている。301は、頸部に横位の馬蹄形状をなす二重の沈線文が平列に繰り返し描かれると思われる。302~305は、楕円形状と思われるモチーフを持つもので、302は、綴位に、303~305までは、横位に施されている。306は、Pの字に似たモチーフに対して配している。307は、浮彫形に施されるモチーフの一部と思われる。308は、底面の中央部の湾曲部が肥厚し、その肥厚部は、二条の沈線によってはさまれ、さらに2 mm程の先端部を持つ工具によって上段は、円形、下段は、楕円形の列点文が二段に施される。309にもこのモチーフが施されている。313, 317は弧状文が描かれるもので、313, 317は、口縁の肥厚部に沈線が施され、313の沈線は、5 cm程の間隔で分断されその右端部は、下降肥厚する。

e (310, 314, 318, 345, 347, 349, 351, 352, 432) 頸部に2~3条の横位の周回すると思われる沈線が施されるものである。318は頸部の沈線文より、口縁部の山形突起部に三条の山形沈線が施される。310, 314, 345, 347, 349, 351, 352, 432は、頸部の沈線文より胴部へと二条の弧状文が施される。

f (321, 327~329, 335, 337, 391~394) 垂下する数条の沈線が施されるもの。321, 327の様に蛇行する沈線文が描かれるもの。328, 329, 335, 393は、垂下する沈線の下端部が、U字状をなすものである。

g (440, 441, 444~446) 明瞭な折り返しの口縁を持つもので、440, 441, 444~446は、2.5 cm程のバンド部の明瞭な返し部を持つもので、444は、折り返し部が剥脱している。445は、幅狭であるが明瞭な折り返し部がつく。446は、やや不明瞭である。

h (414, 417~430) 擦糸文を地文として、二条を一束とした沈線による、蛇行ぎみに曲線文を描くものである。

i (346, 350, 355, 356, 358~367, 369, 370, 372, 374, 375, 377, 380) A類のモチーフの一部と思われるものである。355, 356, 359, 361, 380には、太い横位の沈線が施されている。

B類 (第59図3~6) (311, 312, 325, 378, 379, 381~389, 395~413, 415, 416, 436, 438, 442, 447~451, 454~500, 502~506, 508~646)

文様が硬化し幾何学的に構成されるものである。元和B遺跡(大沼他1976)で述べられる所のE群の資料の一部もこの群に含まれる。また器面に地文だけが施されるものもこの群に含め説明を加えた。

この類の土器は、器形、焼成、胎土、地文、器厚等A類と同様である。

復元土器

第59図3は、現存高10.5cm、口径12.8cm、胴部径8.4cmの円筒形の深鉢形の土器である。口縁は、2個の山型突起を持つ波状口縁をなすもので、器面には1.3cm程の幅の施文具を使用し、全面に縱位の条痕文を施文している。器厚は、0.6cm程である。焼成は、良好で硬い。色調は、褐色を呈し、所々斑状に黒褐色を呈する部分がある。胎土には、砂粒をわずかに含む。

第59図4は、器厚20.3cm、口径16.2cm、胴部径15.5cm、底径6.4cmの口縁部のやや広がる深鉢形を呈している。口縁部には、4個の山型突起を持つ。口唇上には、口縁に沿って擦紐が押圧されている。山型突起部の下位4cm程の頸部付近に周回する二条の沈線文が施される。この二条の沈線文は、山型突起部の下位において、上位の沈線が垂下し、さらにそれを囲む様に下位の沈線も垂下し、胴部の横位の沈線文と接し文様帶を4分割する。この4分割される文様帶の1箇所において、垂下する沈線文に平列する様に沈線が垂下なされている。

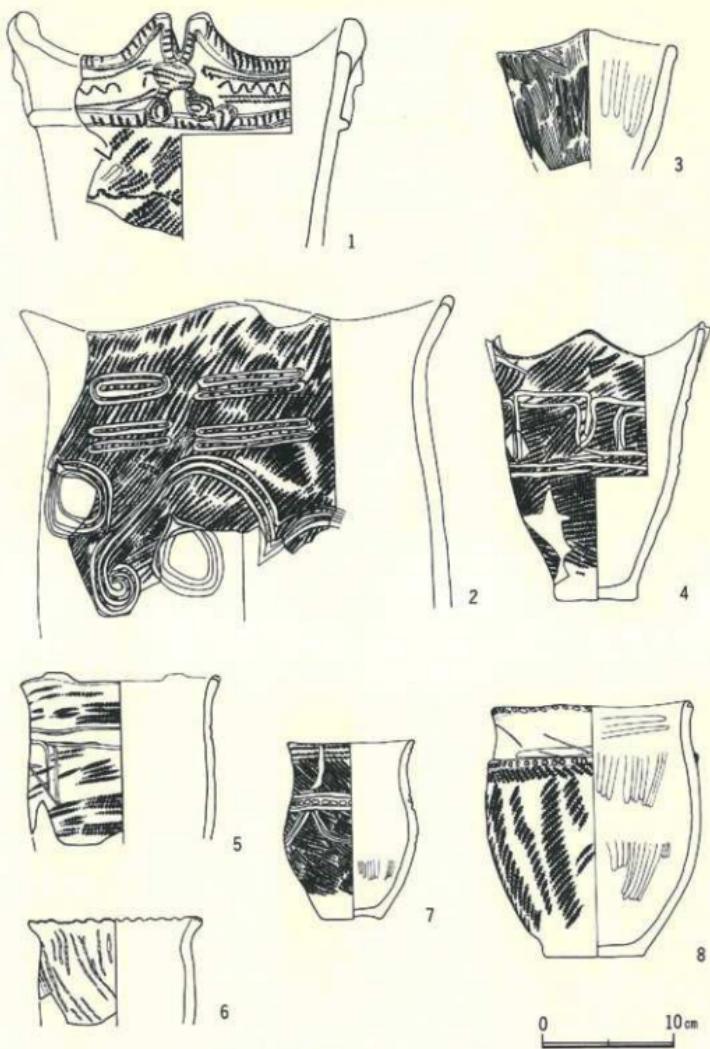
焼成は、良好で硬い。色調は、胴部より上位は、暗褐色を呈し、下位は、褐色を呈している。胎土には、砂粒が多量に混入している。器厚は、0.6cm程で器面裏側の胴部付近、器面の口縁部から胴部にかけて炭化物の付着がみられる。地文は、横位に近い擦糸文が施されている。

第59図5は、現存高15.0cm、口径15.0cm、胴部径8.4cmの口縁の數箇所に小突起を持ち口縁部がわずかに外反する円筒形の深鉢形を呈している。口縁より4cm程下位に周回する二条の沈線が施され、小突起部の下位において、下位の沈線に接する二条の沈線が垂下しさらに垂下した沈線は斜傾へと接する。器厚は、5mm程で色調は、暗褐色を呈し、胎土には、砂粒を含む。地文は、横位の擦糸文が施されている。

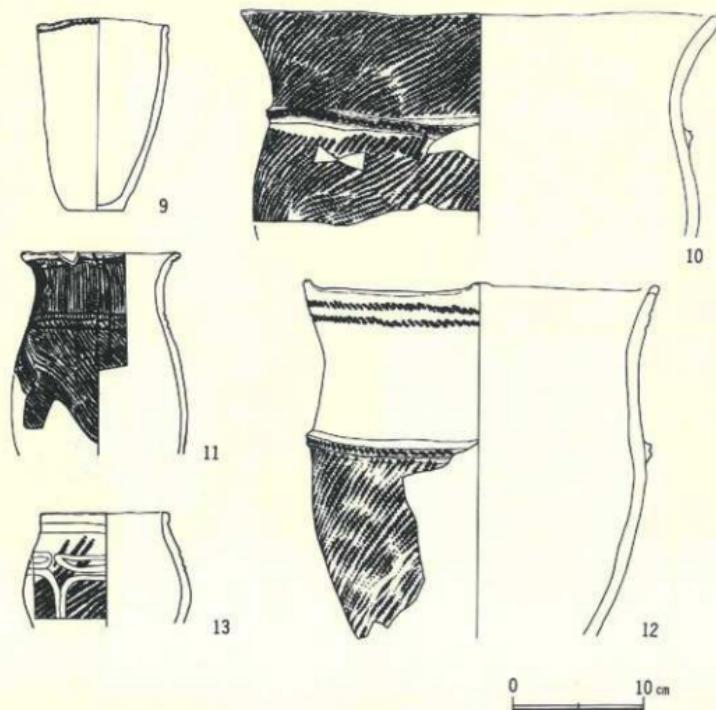
第59図6は、現存高10.4cm、口径13.0cm、胴部径12.7cmの、平縁で大きく外反する口縁部を有する深鉢形を呈している。口縁上には、竹管様の工具による連続する刺突が施され凸凹状をなしている。焼成は、良好で硬い。色調は、黒褐色を呈し、胎土には、砂粒をやや含む。器厚は、0.6cm程で、器面裏面は、丁寧な整形が施され、器面裏面には、炭化物の付着が顯著にみられる。

a (311, 312) 不規則な沈線文が、施されるもの。

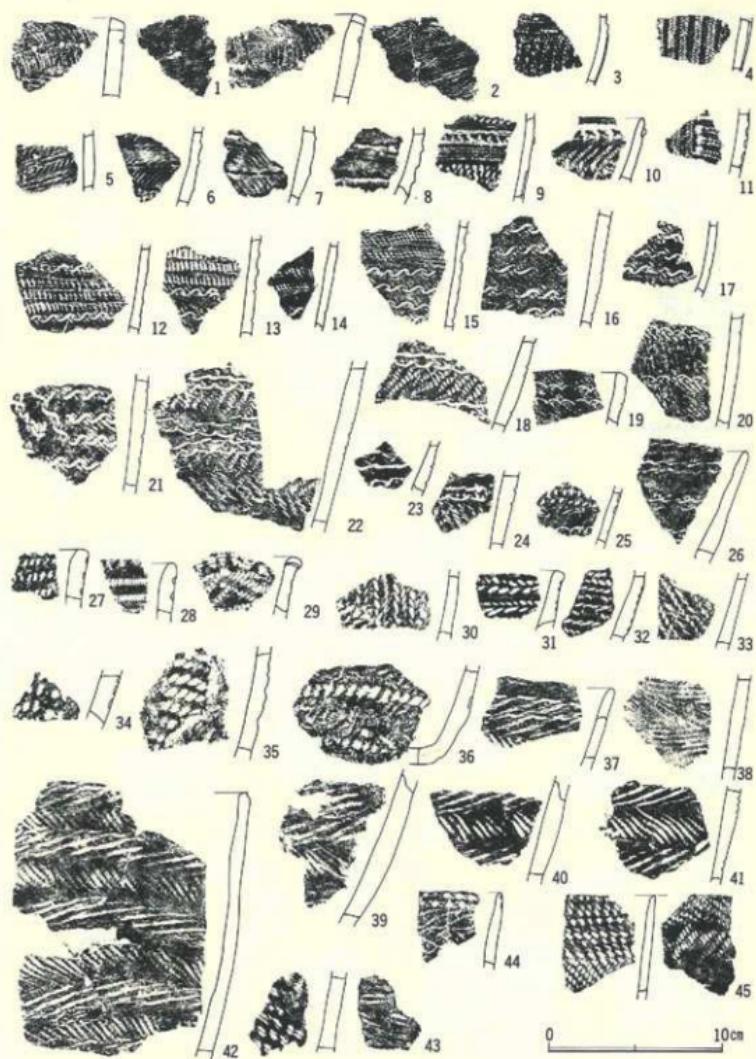
b (325) 口縁が肥厚して外反し、頸部には、三条の横位の沈線文が周回し、この沈線文より、二



第59圖 發掘區出土土器實測圖



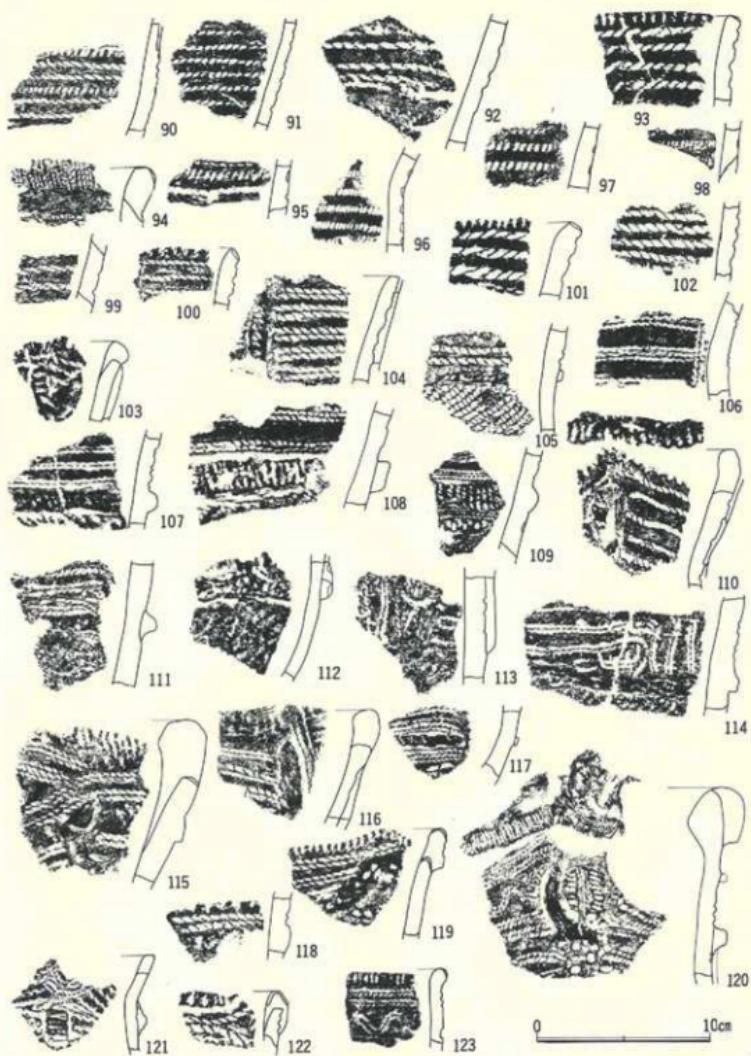
第60図 発掘区出土土器実測図



第61図 発掘区出土土器拓影



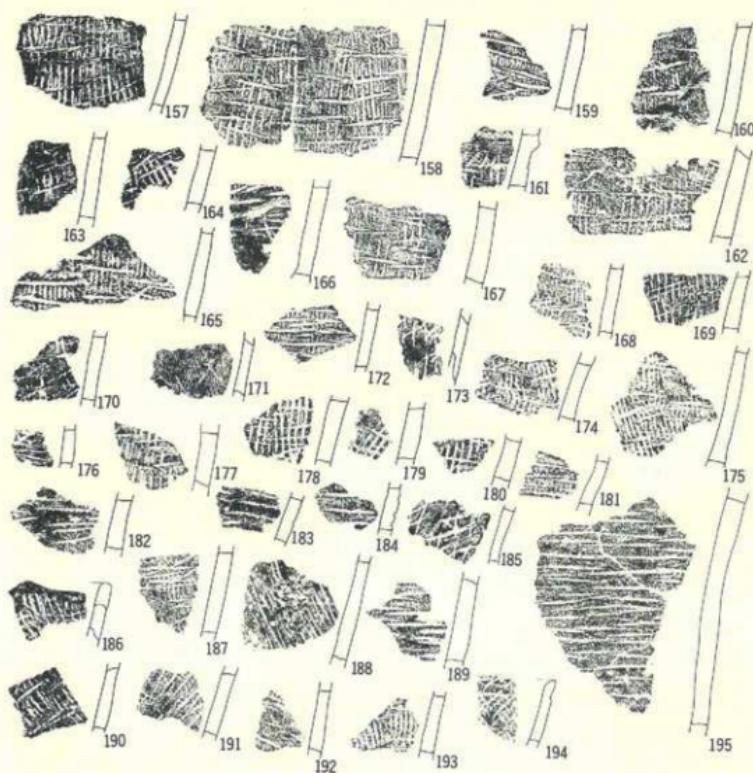
第62図 発掘区出土土器拓影



第63图 先秦区出土土器拓影



第64図 発掘区出土土器拓影

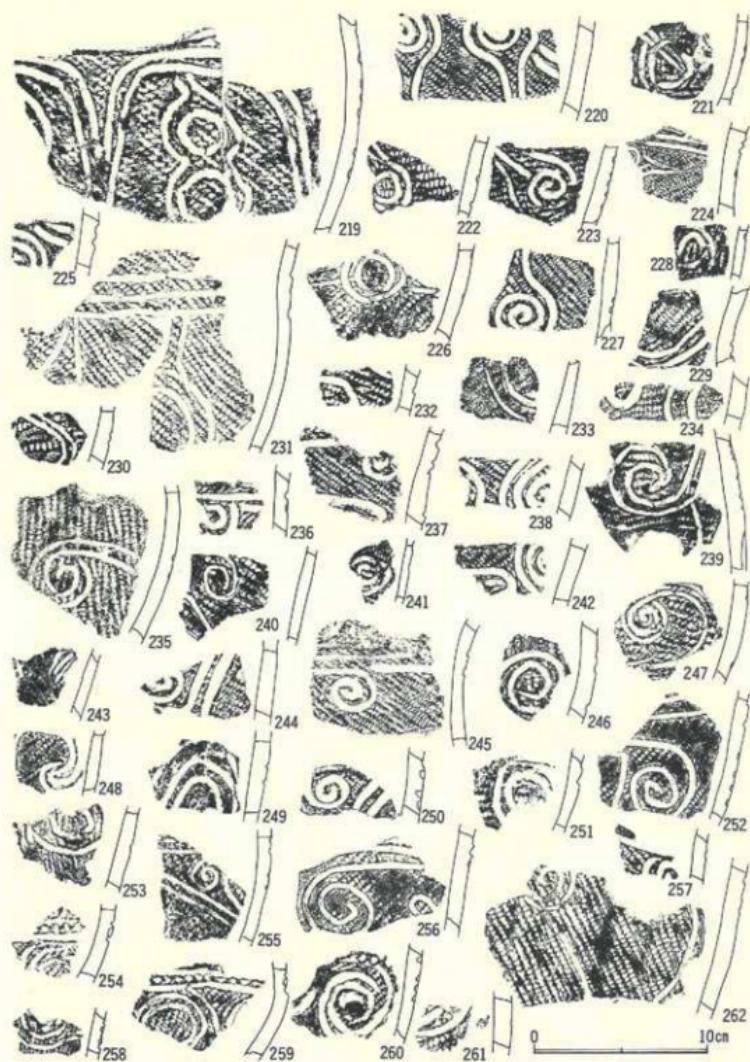


0 10cm

第65図 発掘区出土土器拓影



第66図 発掘区出土土器拓影



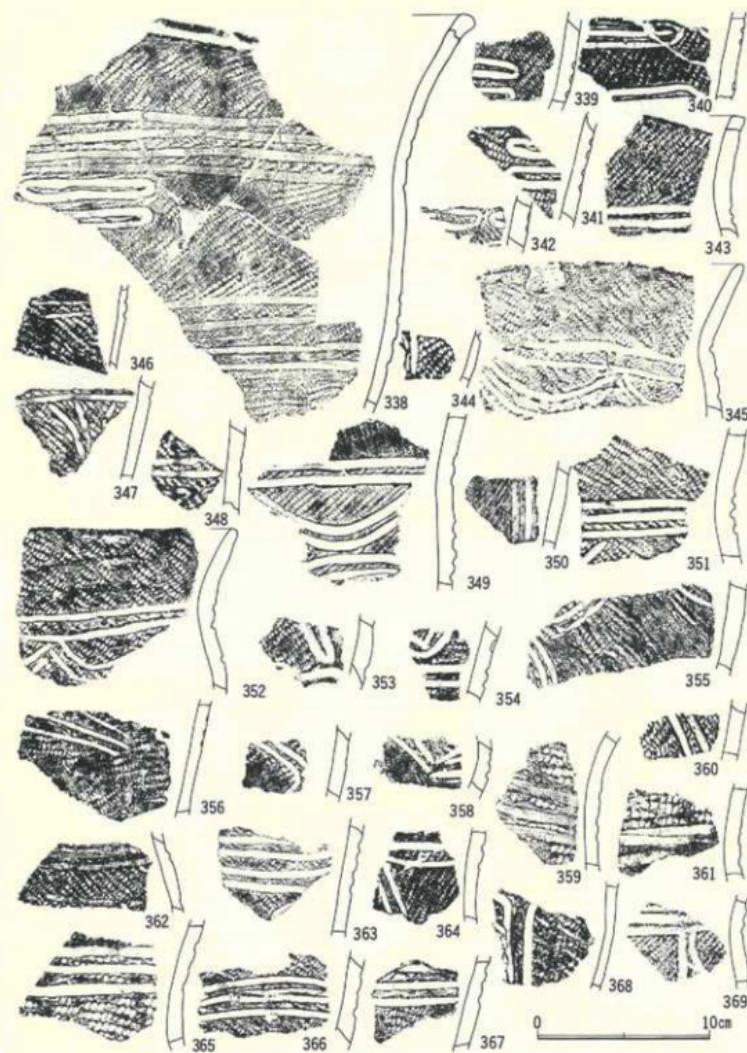
第67図 発掘区出土土器拓影



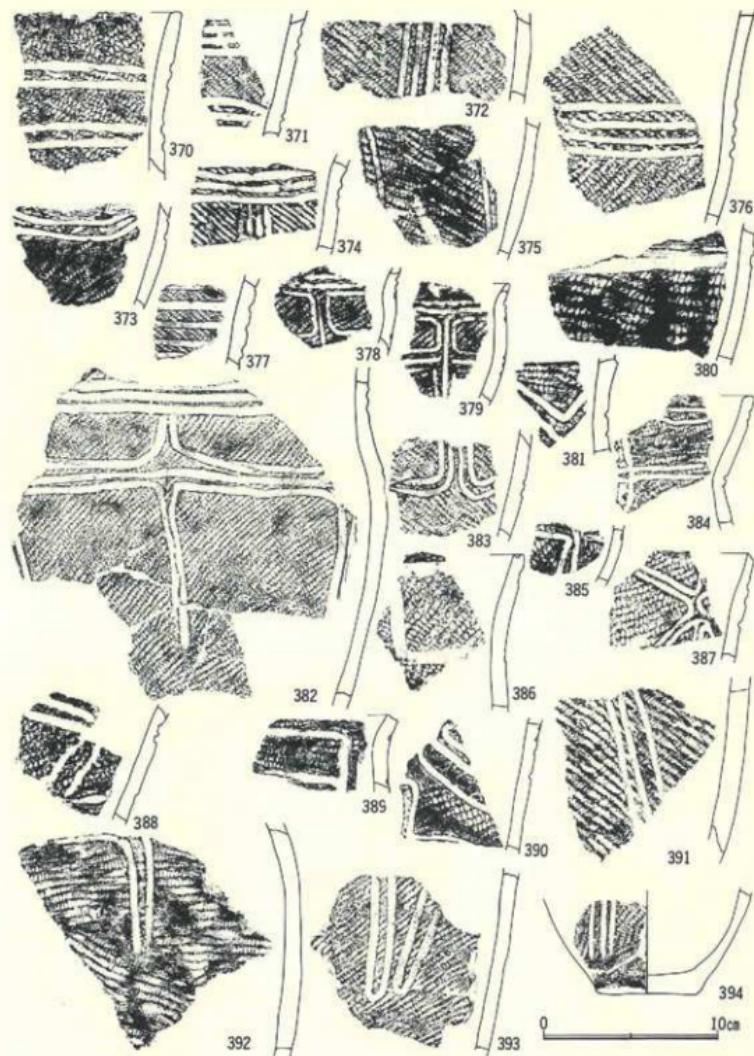
第68図 発掘区出土土器拓影



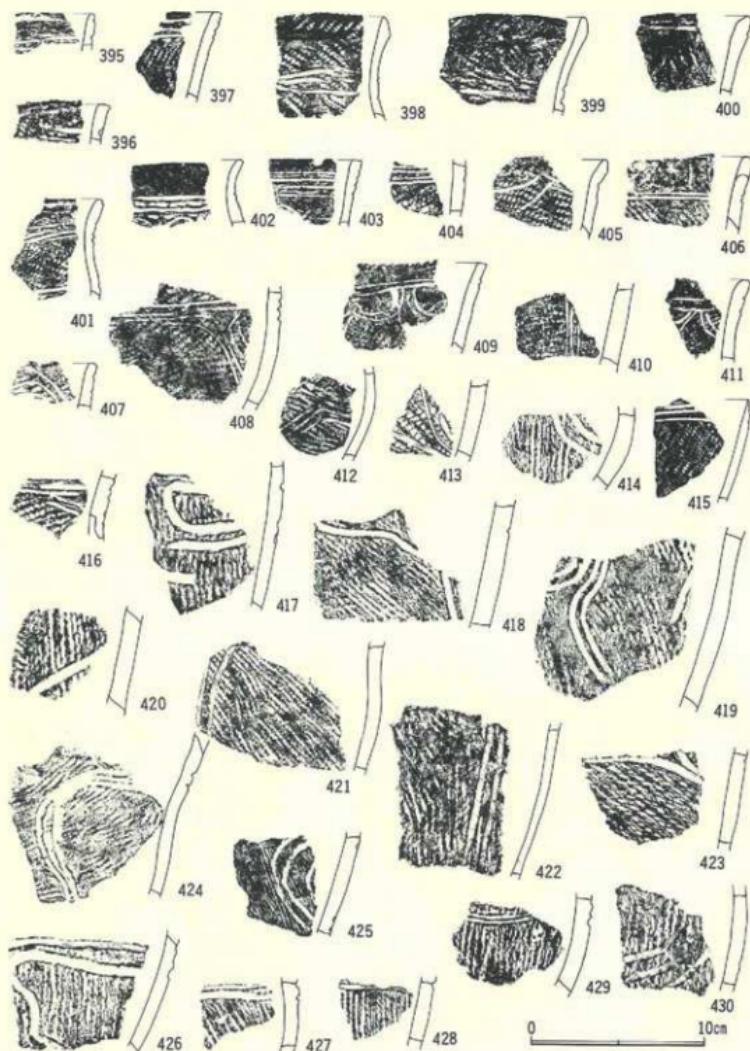
第69図 発掘区出土土器拓影



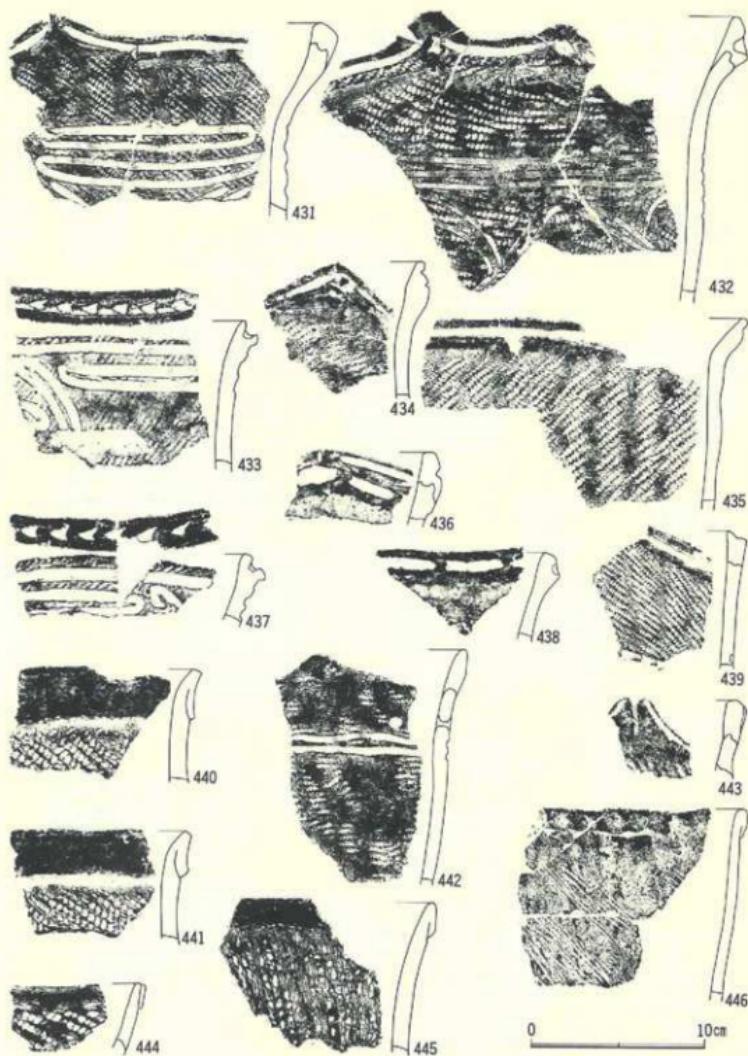
第70図 発掘区出土土器拓影



第71図 発掘区出土土器拓影



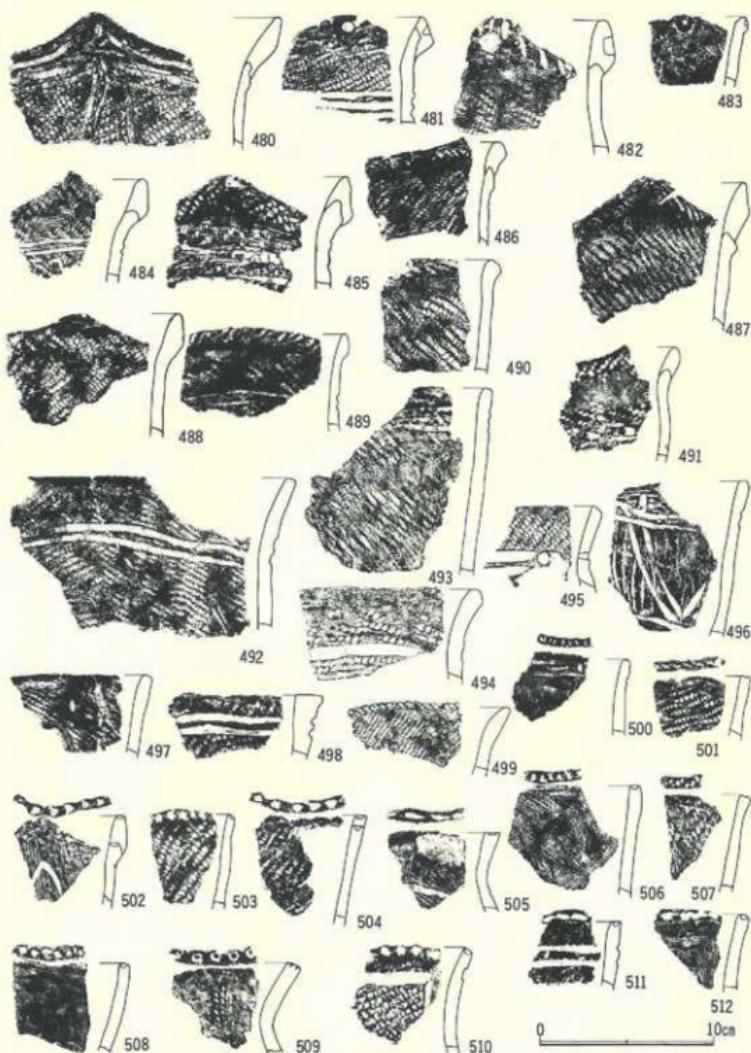
第72図 発掘区出土土器拓影



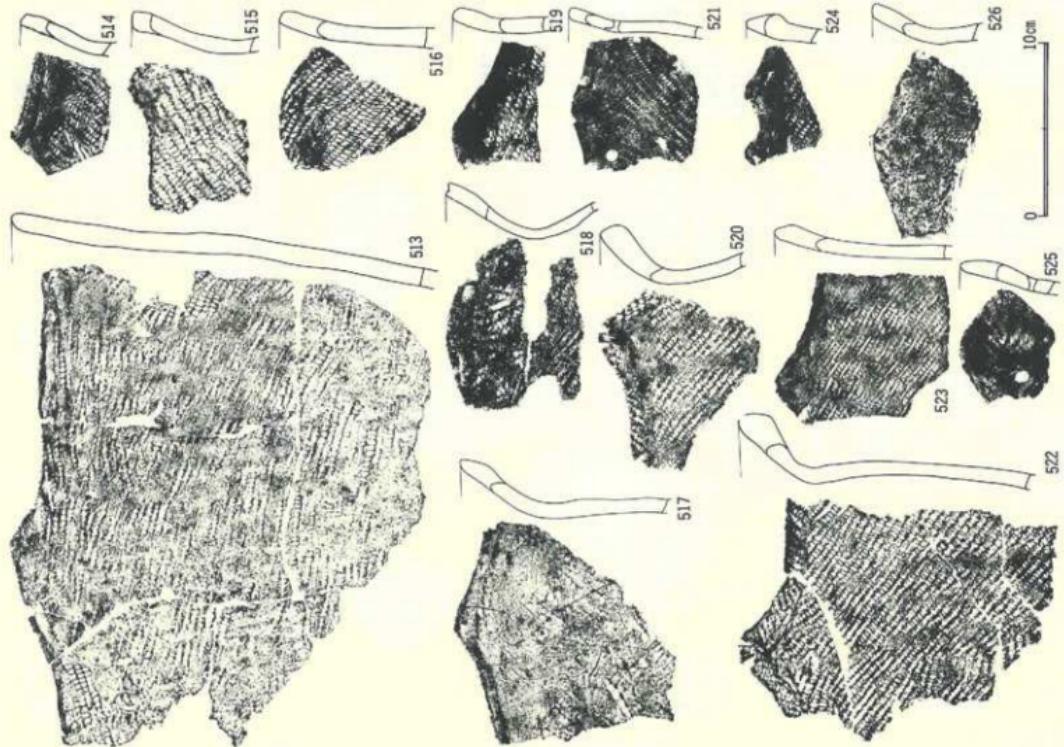
第73図 発掘区出土土器拓影



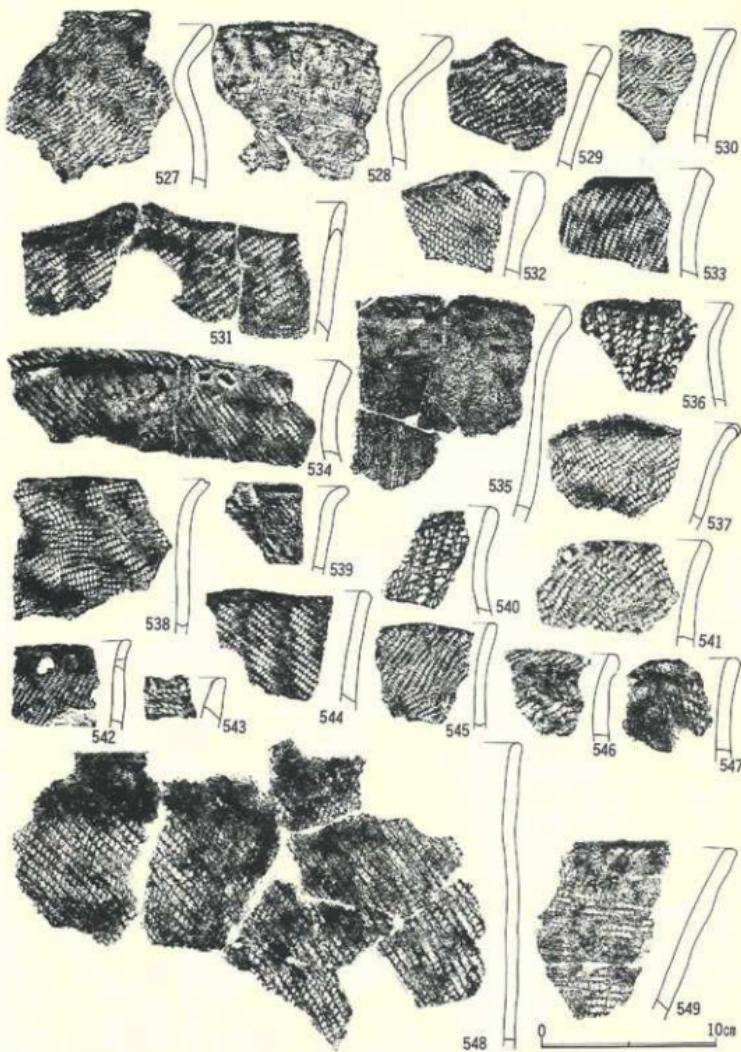
第74回 発掘区出土土器拓影



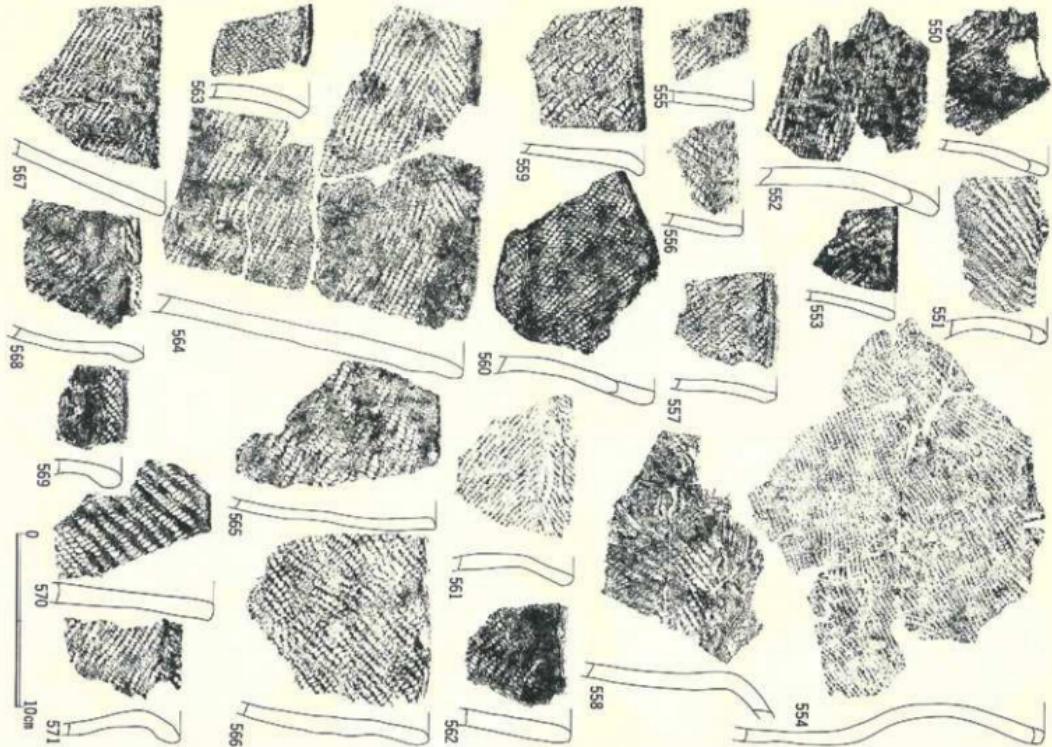
第75图 挖掘区出土土器拓影



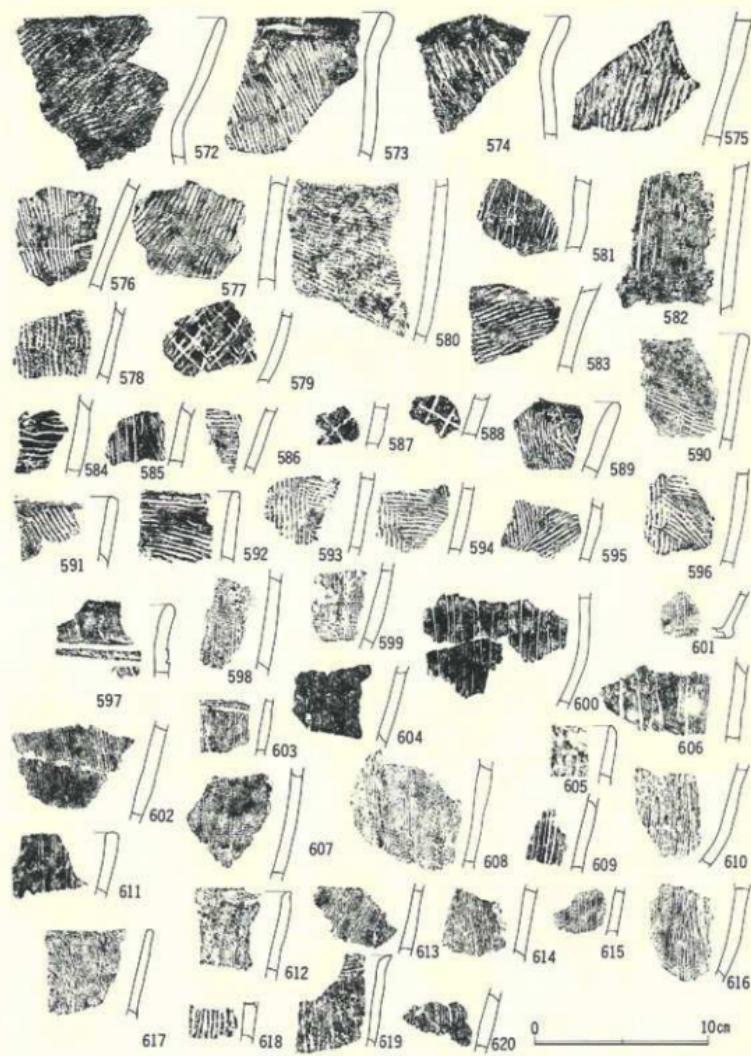
第76圖 余姚區出土土器拓影



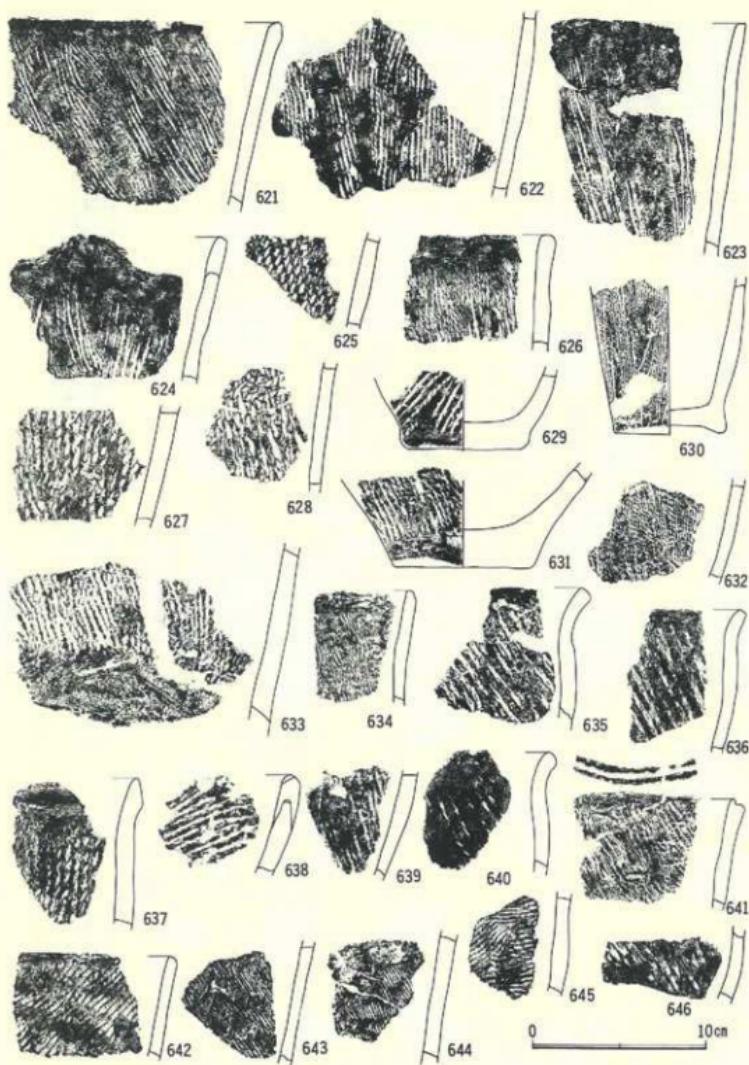
第77圖 發掘區出土土器拓影



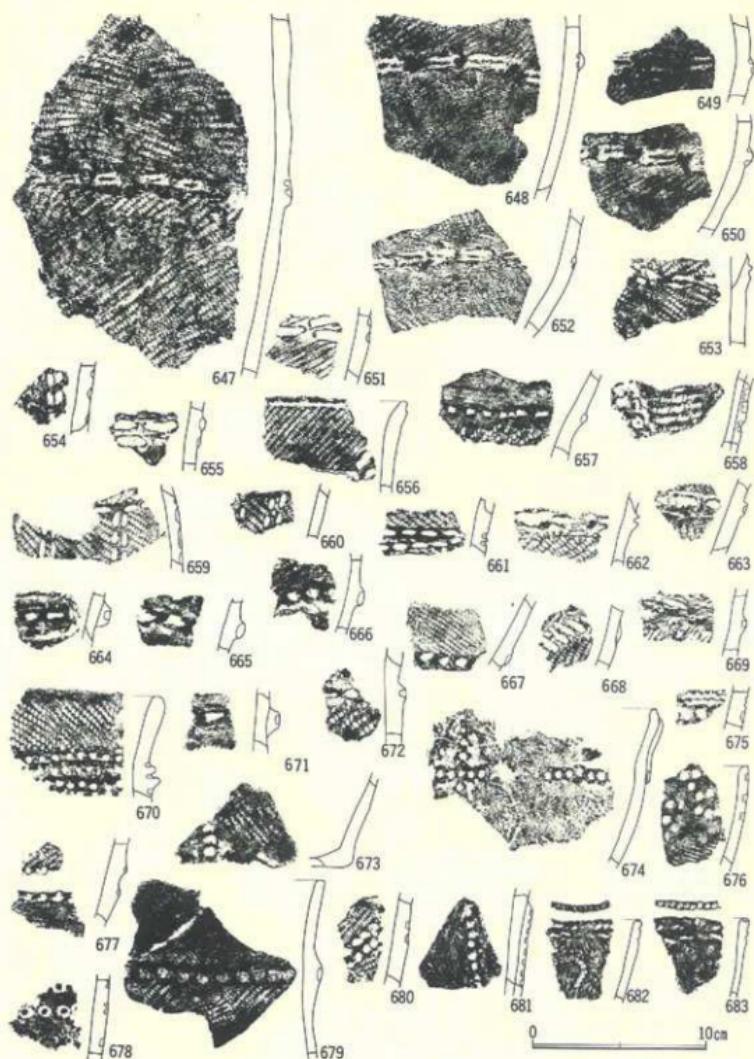
第78圖 爰根區出土土器拓影



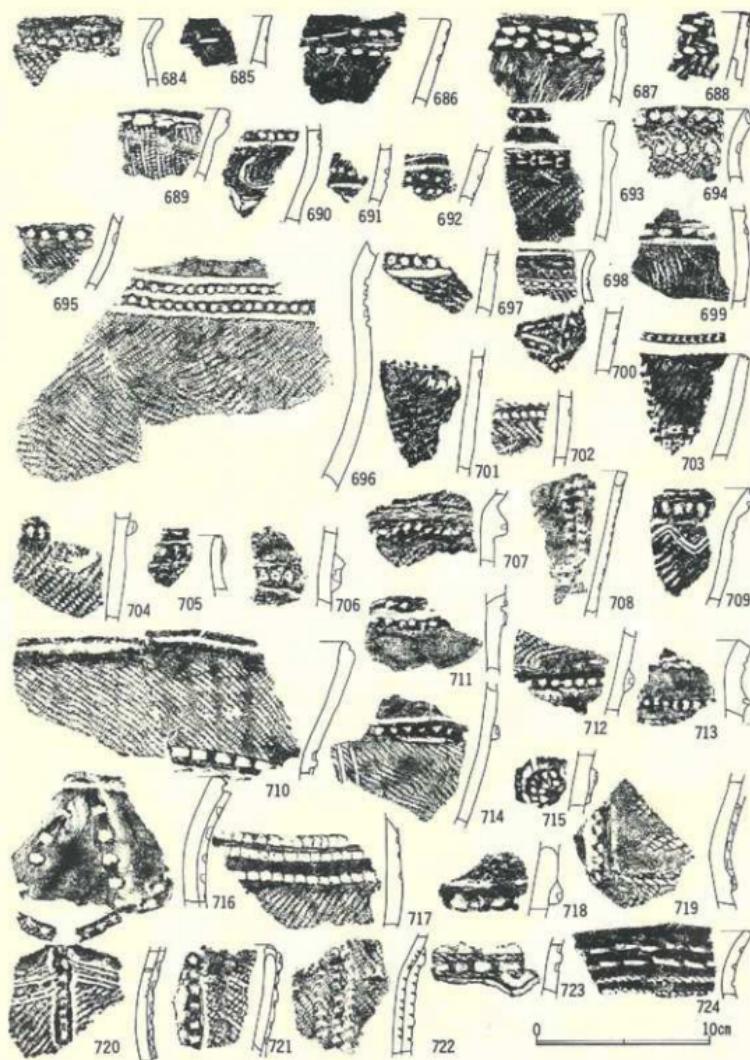
第79図 発掘区出土土器拓影



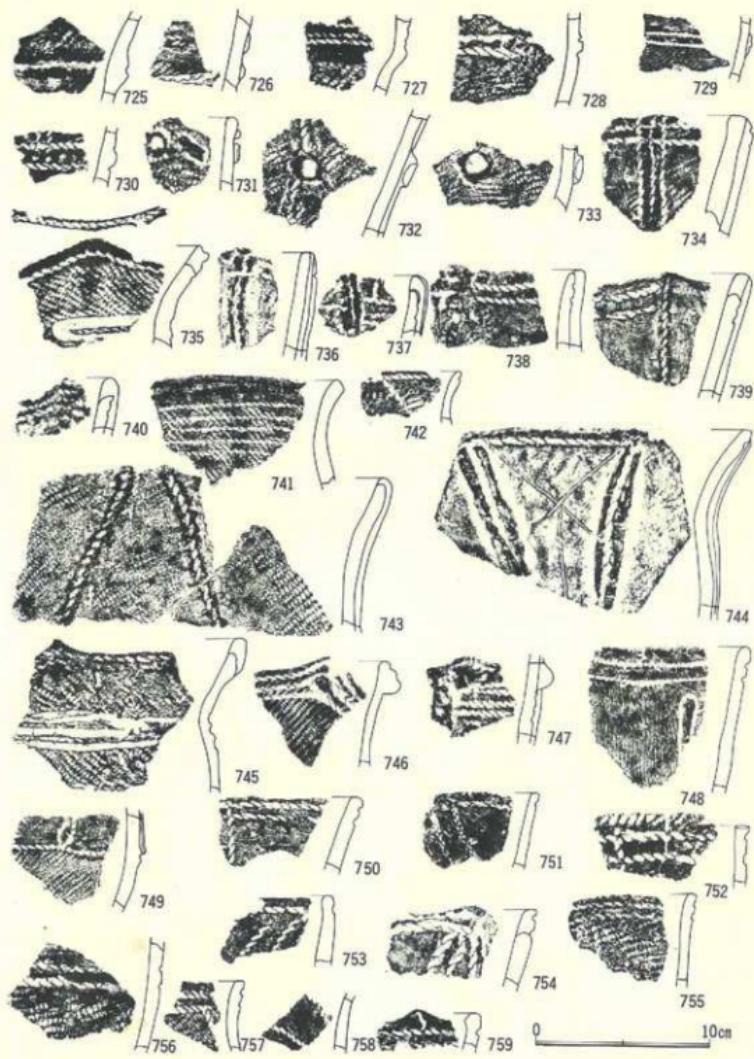
第80図 発掘区出土土器拓影



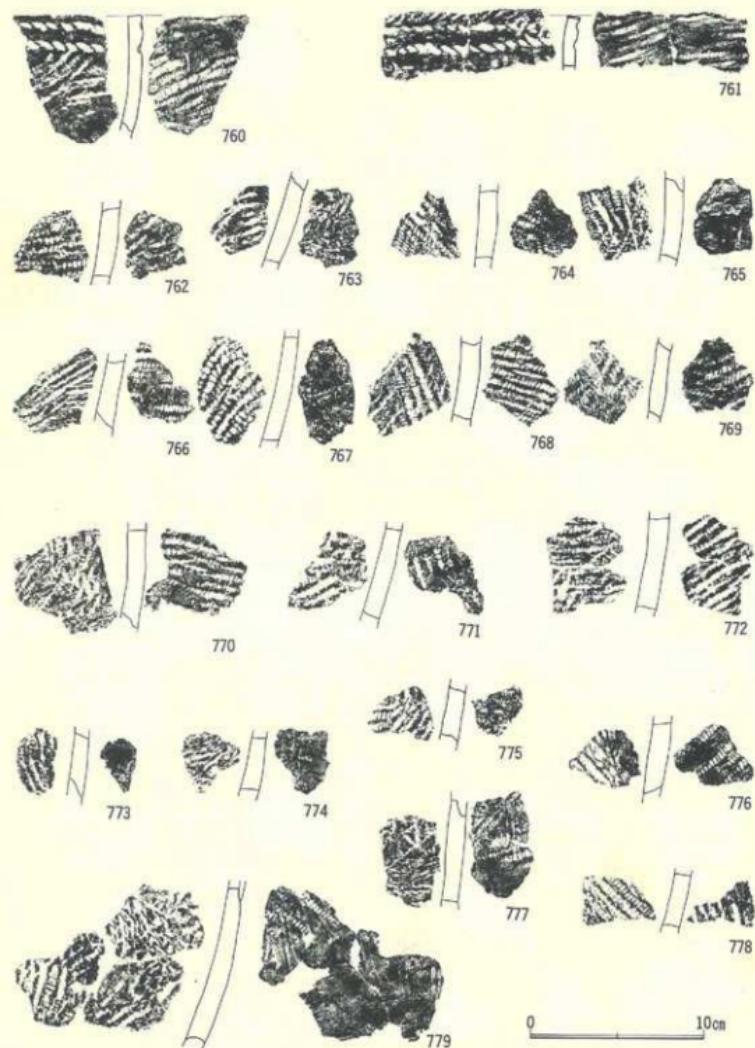
第81図 発掘区出土土器拓影



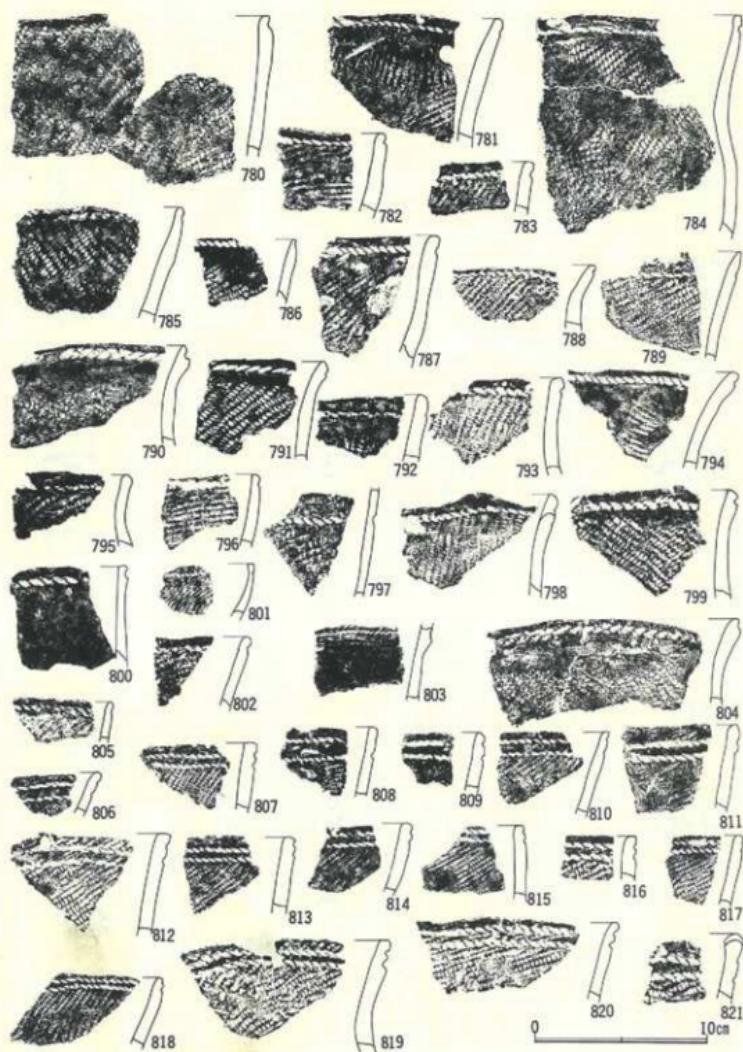
第82図 発掘区出土土器拓影



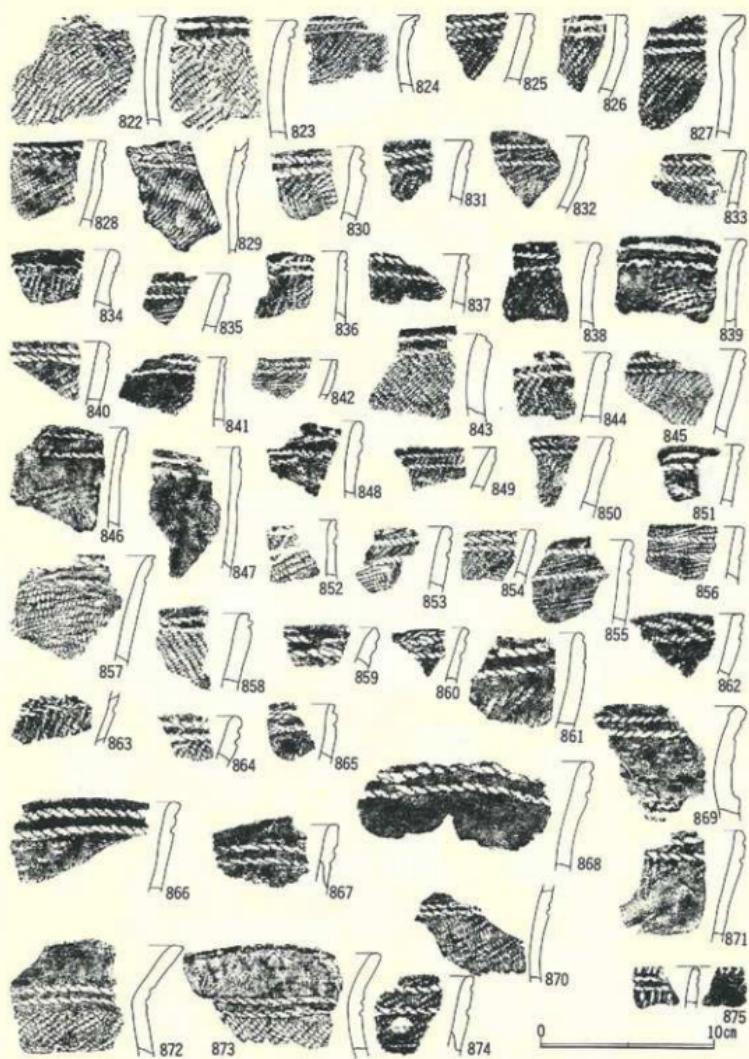
第83圖 發掘區出土土器拓影



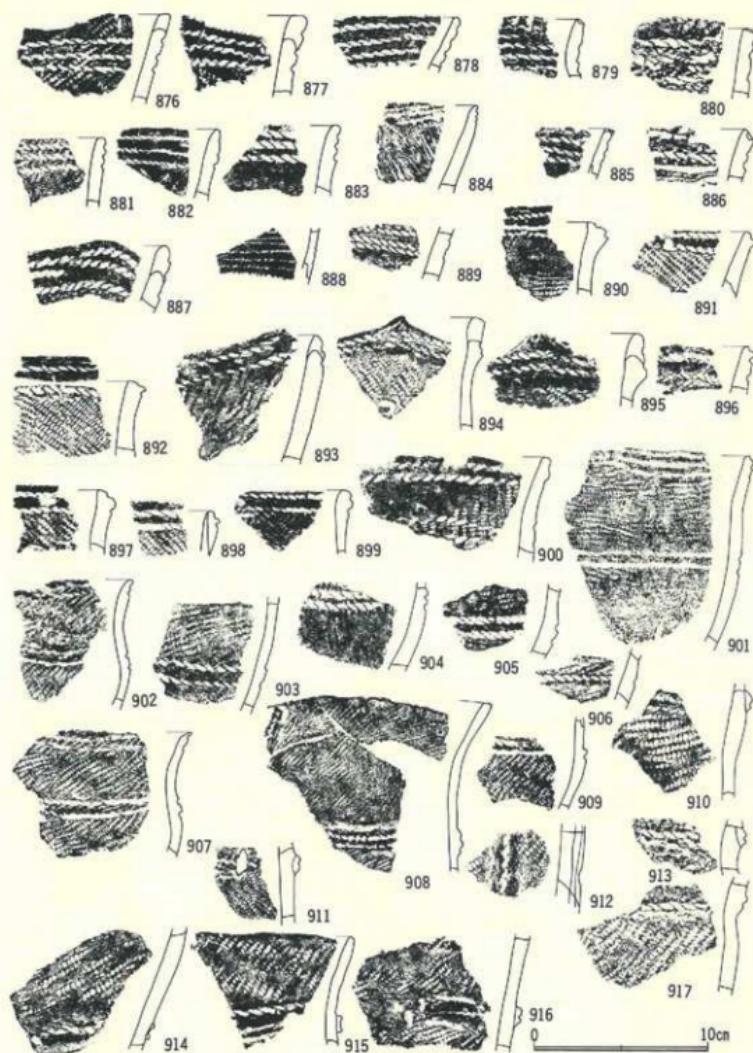
第84図 発掘区出土土器拓影



第85図 発掘区出土土器拓影



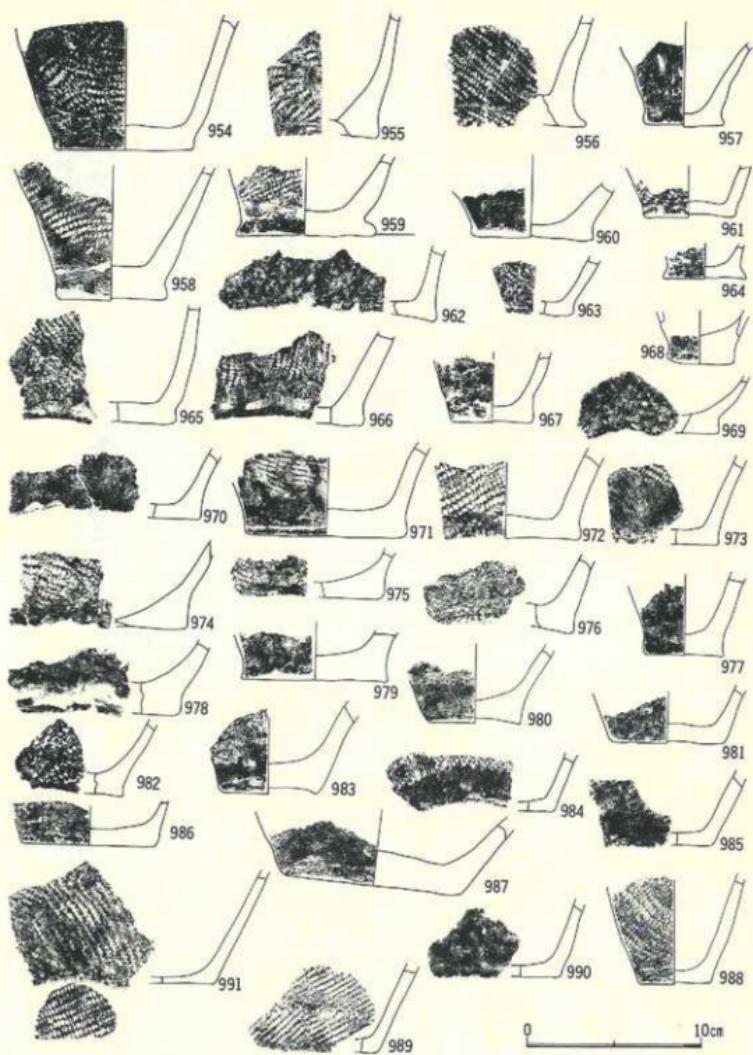
第86図 発掘区出土土器拓影



第87圖 白堊區出土土器拓影

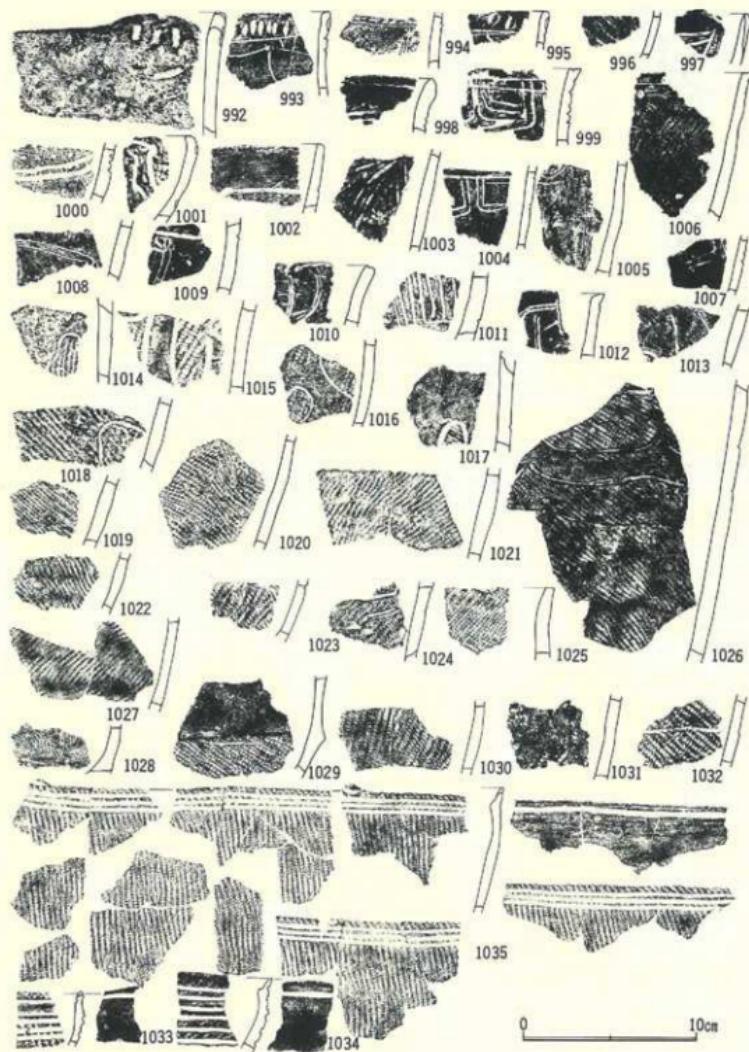


第88図 発掘区出土土器拓影



0 10cm

第89図 発掘区出土土器拓影



第90図 発掘区出土土器拓影

重のY字状の沈線文が垂下するもの。

c (378, 379, 381~389) 区画文が施されるもので、378, 379 の様に頸部に、二列の斜方向よりの連続する刺突文を持ち、その下位に、十文字に区別される胴部の上位に、隅丸の長万形の区画文が施され、下位には角のある区画文が施されると思われる。381は胴部のややふくらむ壺形を呈し、頸部に三条の横位の沈線文が周回し、さらに胴部の張り出し部にも一条の横位の沈線文が周回する。頸部の横位に沈線文より垂下する二条の沈線文が、胴部の横位の沈線文にそって左右に分化する。さらに胴部の横位の沈線文にそって左右から接近し垂下する。383は垂下し左右に分化するモチーフを持つ。384は口縁部と頸部に二条の横位の沈線文が施され、口縁部より垂下する二条の沈線文が口縁部を区画する。385は半截竹管を使用した沈線が描かれている。386, 389は5~7 mm 程の太い沈線が描かれている。387は口縁部で円形文を中心とし、放射状に直線の伸びる沈線文が肉彫り状に施されるもの。388は二重の区画文が施されるものである。

d (395~413, 415, 416) 細い沈線文が、頸部を周回する。395, 398~400は口縁が肥厚するもので、395には口縁にも横位の沈線文が施される。398, 399は肥厚部には胴部と逆方向の繩文が施されている。397は口唇上が平らに整形されている。405, 407, 413は頸部に弧状文が施されている。406は半截竹管を使用し、頸部に沈線を施している。408は肩部に施された横位の二条の沈線文に沿って、左右より接近垂下する二条の沈線文を持つ。409, 410には頸部に二条の横位の沈線文に接する二重の弧線文が施される。401, 412, 416には直線的な沈線が施されている。

e (436, 438) 断続する太い溝状の沈線文が口縁に施されるもので、436の口縁内側に、さらに一条の沈線が施されている。

f (480, 481) は山型突起部に0.5 cm~0.8 cm 程の円形の先端部を持つ工具によって刺突が加えられるもので、480は山型突起部の口縁に沿って、二条の沈線文が施され、その下位の沈線が山型突起部の下位に垂下する4条の沈線文と接するもの、481は頸部に横位の沈線文がみられる。

g (483) 径1.0 cm 程のドーナツ状の貼付瘤を、ゆるやかな山型突起部に貼付されるもので、器形は小形の深鉢形をなす。

h (447~451) 口縁の山型突起部に、指頭による径1 cm~2 cm の円形文が指圧されるもので、447, 449, 450には、爪痕が残されている。頸部はくびれ、口縁は肥厚し、口縁部が大きく外反した器形を呈している。447の口縁には、斜位の撚糸文が施され、頸部には横位の沈線文が見られる。地文は、447に綾位の撚糸文、449には撚りは不明であるが繩文が、450, 481にはLRの斜行繩文が、施されている。448の円形文の周囲には棒様の工具による連続する刺突が施されている。焼成は全て良好で、器面は暗褐色を呈し、裏面は褐色を呈している。447, 449, 450の表面には炭化物の付着がみられる。

i (454~479, 482) 口縁に刻み目が施されるもので、器形は、454, 455, 458, 461, 463の様に、ゆるやかな丸みを持った山型突起部を持っている。口縁には、先端部が三角形状をなす工具によつて4~6 mm 程の間隔で点列文が施文されている。口縁より1 cm ほど下位に口縁に平行な一条の沈線が施され、ゆるやかに外反し、口縁部と胴部とを区分する。頸部には、二~三条の横位の沈線

が施される。458には、補修孔がある。461には、山型突起部と頸部を周回する沈線との間に、横位の楕円形状の沈線文が描かれる。頸部を周回する三条の沈線の内、上一条は直線的に引かれ、下二条は口縁の傾斜に沿う直線となる。さらに山型突起部下位より、この沈線に接して、二条の縱位の沈線が垂下している。456, 457, 460, 466, 467, 469, 472は、口縁の山型突起が三角形状を呈し、わずかに外反する口縁部に横位の数条の沈線を施すものである。456は、口縁に撚糸による刻み目が、施されている。山型突起部の下位3cm程の所には、馬蹄形の先端部を持つ工具による刺突文が施され、さらにその刺突文をはさむ横位の沈線文と、それに平行する沈線文が、その下位8mm程に施される。刺突文から1.5cm程下位には、垂下する二条の縱位の沈線文が施す。457は、横位の数条の沈線より斜めに垂下する二条の沈線を持つものである。459は、口縁に山並み形(二叉状)の小突起を持ち、横位の数条の沈線を持つものである。460は、山型突起部の下位2cm程の所にラフな二条の細い沈線を持つものである。467の口縁は、肥厚している。469は、口縁に太い沈線文を施こし、その下位の口縁のへりにあたる部位に撚糸による8mm程の間隔の刻み目を持つものである。462, 464, 466, 470, 471, 473, 474, 475は、平線の口縁を持つと思われるもので、頸部には沈線が施されず、無文のものである。454~478, 482の地文については、次の通りである。454, 455, 458, 459, 461, 463, 467の地文は、右方向に傾いた縱位の撚糸文、475は、斜行の撚糸文が施され、456, 466, 468, 472, 473は、斜行のRL、457, 465, 469, 470, 471, 476, 478, 482は、斜行のLR、460, 462, 464, 474は、横位のRLで、465は、口縁部に斜行のRL、胴部には、横位のRLの地文が施される。焼成は全般に良好で、褐色を呈している。471は、胎土に0.5~2mmの砂粒を多量に含んでいる。

j (484~491, 499, 520, 522, 534, 546, 561, 567~569, 571) 口縁に纏文を施すものである。484~486, 489は、三角形状の突起部を持つ山型の外反した口縁部を持ち、頸部には、数条の横位の沈線文を施すものである。口縁は肥厚している。484には、横位の三条の沈線文の下位の沈線が垂下している。486は、口縁に平行な横位の二条の沈線が山型突起部においては山型をなすと思われるものである。487の山型突起頂部は、やや強く肥厚している。489, 568の口縁の肥厚部の側面観はやや丸みを持っている。490, 546, 567, 571の口縁部の地文は磨消されている。520は口縁部が強く外反し、山型突起部が横転したかの様な側面観を呈し、突起頂部が肥厚突出した口縁を持つ、頸部がわずかにくびれ、胴部がわずかにふくらむ器形を呈している。534は口縁の裏から表にかけて0.3cm程の細い粘土紐がX字状に貼付されている。

k (442, 492~498, 513~519, 521, 523~533, 535~545, 547~560, 562~566, 570) 口縁部に地文だけが施され、口縁に施文をなさないものである。442, 492~496は山型突起を持ち、頸部に二~三条の沈線が周回するものである。495には、補修孔が削除されている。513は口縁に小突起を持つ推定30~40cm程の口径を持つ円筒状の深鉢形である。516, 560は丸みを持つ山型突起をなし、口唇は平らに整形がなされている。517は大きく外反する口縁部を持ち口唇の断面形が三角形状をなす様に外反する、口縁器面側を平らに垂直な整形がなされている。518, 527, 528は口縁部が大きく張り出し頸部が強くくびれる。深鉢形を呈している。521, 524は二叉状の突起部を持ってい

る。542には、補修孔が削孔されている。533は口唇上が平らに整形されている。551, 552の山型突起頂部には、小さな抉入がみられ、552の頭部はくびれ、胴部がふくらむ深鉢形を呈している。557は口縁の大きく外反する器形を呈している。564は平縁の円筒状の器形を呈している。

I (479, 500, 502~506, 508~512) 口縁に刺突文が連続的に施されているもの。497, 502, 505, 511, 512の様に、斜方向の刺突文が加えられるもので、479は平縁の口縁に半截竹管の内面を使用した沈線文と、先端部による刺突の二種の異なる施文がなされ、くびれを持った頭部には二条の横位の沈線文が施されている。505の頭部にも横位の沈線文が施され、口縁の刺突文には円形の棒様の工具が使用されている。502は山型の口縁を持ち、やや肥厚する。口縁には、口縁を意識した山型の沈線文が施されている。503は頭部に竹管による、円形刺突文の施された小突起を持つもの、511の様に口縁部が磨消され、横位の二条の沈線文が施されるもの、512は口縁の刺突文には半截竹管が使用されている。500, 506は口縁に横円形状の先端部を持つ工具によって刺突されたもので、500の口縁部には二条の横位の沈線が施されている。508~510は口縁には、5~6mm程の径を持つ竹管文が施されている。508の器面は、ヘラにより地文が磨消されている。509は口縁部が外反し、頭部がくびれた器形を呈している。511は口縁より、1cm程下位に横位の1cm程の太い沈線が施され、口縁と沈線間は磨消されている。502, 512は地文に条痕文が施されている。

m (572~646) 地文に繩文、撚糸文、条痕文が施されるもの。撚糸文が施されるもの (572~596・621~646) この内無節のものは、575, 577, 583, 591~596, 621, 623, 641, 645, 646である。撚糸の原体の太さは0.5mm~3mmで1撚り1撚りのものがあり、1撚りが主体をしめる。単節のものは、572~574, 576, 578~582, 584~590~622, 624~640である。LR・RLの撚りのものがあり、RLのものが主体をしめる。縦位。あるいは縦位に近い斜位に施されるものが主体を占め、横位あるいは横位に近い斜位、また縦横に施されるものもある。地文に条痕文が施されるものは(597~620)で、条痕の太さは0.2~1mmで密に施されるものと、粗に施されるものとがあり密に施されるものが主体をなす。施文は縦位に施され、横位の条痕文と交錯するもの。642~644は無節のLR撚りの繩文が施されている。

第V群土器 (第59図7, 8, 第60図9~12第81図647~第88図938)

(図版24~7~図版25~12, 図版39~43)

ノダップII式に近似するもので、断続的な沈線文、刺突文、隆起帯、貼付帯、縦縫文の施されるものでIV群とともに本遺跡の主体をなす。

器形は、口縁が外反し、頭部のくびれる深鉢形、広口の壺形、円筒状の深鉢形を呈している。地文は横走か斜行の繩文が多く縱行のもの、無文、あるいは地文が磨消されるもの、撚糸文等がみられる。

この群の土器は、断続的な沈線文、刺突文を持つものをA類、繩縫文を持つものをB類として分類した。さらにそのA・B、二類を、文様構成施文の特色によりA類をa~jまでの10種に分け、B類をa~hまでの8種に分けた。このうちB類のiにはA、B両類の分類基準を持つものを該当

させた。

A類（第59図8）（647～724, 918～938）

第59図8は、口縁部を若干欠損した完形土器である。器高、19.5 cm、口径、14.5 cm、胴部径、15.5 cm、底径、6.9 cm、器厚は、胴部で0.6～0.7 cm程である。底部は、平底である。器形は、平縁で、口縁はやや外反し、頸部は、ややくびれ、口径部より胴部の張り出しがありゆるやかな曲線を呈する。口唇は、器面向かって三角形状に肥厚している。焼成は、良好である。器面の口縁下10 cm程をばら境に、下位が赤褐色、上位が、暗褐色を呈している。胎土には、砂粒を多量に含む。口縁は、ヘラ様の工具の先端部によって、斜方向に施される刻み状の刺突文が、0.5 cm程の間隔で施されている。さらに口縁より4 cm程下位に肩部を周回する。幅0.8～1.0 cm程の貼付帯がある。この貼付帯上には、0.8 cm程の間隔で竹管による、径0.4 cm程の刺突文が施されている。貼付帯によって区分される口縁部の無文帯には、横なでによる整形痕と斜方向の擦痕が残されている。貼付帯より下位2 cm程の幅にRLの右下がりの斜行繩文が施され、さらにその下位に、RLの左下がりの斜行繩文の地文が施される。

a (647～650, 652, 653, 673, 722) 胴部に周回する隆起帯。あるいは貼付帯をめぐらし、その隆起帯上に、半截竹管様の工具を使用した断続的な沈線文が施されるものである。648は、断続的な沈線文の各間隔に貼瘤が施されるものもある。647は、隆起帯によって区分される胴部に、上位は横位、下位は斜位の繩文が施されている。673、722の様に、半截竹管を連続的に刺突したもののみられる。

b (658, 666, 669, 674, 706, 712, 719) 貼付帯に竹管様の工具による円形の刺突が施されるものである。674は、刺突文の施された貼付帯が肩部を周回し、口縁より垂下する同様の貼付帯と直交するもので、左端に貼瘤が施されている。658、666は、この一部である。699は、横位の隆起帯に、2 cm程の間隔を持たせた刺突文が施されるもの、706は、幅広の横位の貼付帯が施される。719は、頸部を周回すると思われる横位の繩文の施された隆起帯に、口縁部を垂下する貼付帯が接するものである。

c (665, 671, 677, 721) 隆起帯あるいは、貼付帯上に竹管様の工具によって、斜方向より刺突が施されるもので、677は、横位の1.5 cm程の沈線によって作出された、二条の隆起帯に刺突文が施されている。721は、口縁は、小波状を呈し、山型突起頂部に4 mm程の太さの刻みを施し、その下位より丸みのある上端部を持つ貼付帯が、垂下するものである。

d (657, 662～664, 667, 670, 672, 679, 681, 704, 707, 711, 713～716, 718) 隆起帯、あるいは、貼付帯上に刺突文の施されるものである。657、679は、横位の隆起帯で区分された器面上に、磨消しが施されるもので、679の隆起帯の刺突文は、8 mm程の太い工具が使用されている。670は、横位の2 cm程の幅を持つ幅広の貼付帯の中ほどに太さ4 mm程の溝線中に連続する刺突を施し、さらにその溝線を挟む様に、貼付帯の上に、二列の連続する刺突が施されている。681は、隆起帯が、無文か磨消帶を垂下するもの、707は、頸部に隆起帯が施されるもの、711は、一条の横位の沈線(溝線)によって作出された二条の隆起帯が、713は、二条の横位の繩文の施されるもの(組

み合わせを持つもの), 貼付帯が区分する胴部の上位には, 磨消しが施され, その下位には, 二条の縦位の沈線文が施されるもの, 715は, 刺突文を持つボタン状貼付を持つもの, 716は, 口縁に一条の横位の繩線文が施され, 無文か, 磨消しがなされた口縁部に, 貼付帯が, 波状に貼付されるものである。

e (651, 654~656, 659~661, 668, 675, 680, 683) 竹管様の工具か, 棒様の工具を使用して器面に断続する沈線, あるいは, 刺突が施されるものである。651, 655, 656は, 器面に棒様の工具を使用して, 断続する沈線が施されるもので, 沈線文の各間隔に沈線文を描くさいのもりあがりがみられ, 656は, 口縁下3mm程の所に, 横位の繩線文が施され, 頭部には周回すると思われる沈線が施されている。この沈線に接し, 斜位の断続する沈線文が施される。654, 659~661は, 斜方向より刺突される。そのうち, 659は, 頭部を周回する数条の繩線文の下位に, 横位の一列の刺突文を施し, その刺突文より, 脊部を区画すると思われる二列の刺突文が垂下するものであり, 660は, その一部と思われる。また, 661, 680は, 二条の沈線文に刺突文が施されるものである。683は, 沈線文が, 刻み目状に縦位に施されるものである。

f (684~689, 693, 694, 705, 709, 724, 920) 口縁部に断続する沈線文や刺突文を横位に周回させるものである。684は, 頭部に施されるものである。685は, 頭部に一条の横位の沈線が施され, 口縁部に一列の断続する沈線文が施される。686~688は, 二列の斜方向からの刺突が施されるもので, 686には, ラフな2mm程の波線文が施されている。689は, 口縁の肥厚部上に, 半截竹管様の工具による斜方向からの刺突が施されている。693は, 口縁より1.3cm程下位に半截竹管様の工具による斜方向よりの刺突を持つ横位の貼付帯が施され, その上位に横位の沈線文が施される。口縁には, 連続する刻み目が刺突されている。694は, 頭部に一条の沈線を施し, 断面観が, 三角形状をなす口縁と口縁部に, 横位の, 径7mm程の太い刺突が施されるもので, 705, 709, 920は, 口縁が肥厚し, 口縁と肥厚部に横位の刺突文が施され, 頭部に横位に半截竹管による波状の沈線文が施されるもので同一個体である。724は, 無文か磨消しがなされた口縁部に横位の二列の棒様工具による断続的な沈線文が施され, その下位に二条の横位の繩線文が施されるものである

g (710, 717, 723) 頭部に二~三条の横位の竹管様の工具を使用した5mm程の幅の広い斜方向より施された, 沈線様の刺突文が施されるもので, 710の口縁には, 繩線文が施される。

h (676, 678, 682, 701, 703, 708) 器面に竹管様の工具および半截竹管様の工具を使用した, 連続する刺突文で文様を構成するものである。676, 678は, 無文帶に竹管による刺突文が施されている。682は, 脊部と同様の工具による刺突文の施される口縁を持ち, 口縁部には, 二条の横位の繩線文が周回する。頭部には, 竹管様の工具による円形状をなすモチーフの刺突文が施される。701, 703, 708は, 半截竹管様の工具を使用し, 横位, あるいは, 縦位に刺突なされるもので, 703は, 山型突起より三列の刺突文を, 口縁部の無文帶を垂下させ, 横位の二列の刺突文と接する。708も同様のモチーフを持つと思われる。703, 708の口縁には, 脊部と同様の工具による刺突文が施されている。

i (690~692, 695, 696~700, 702, 720, 918, 919, 921, 922, 923, 924~934, 936~938)

直線的な文様構成の沈線文と竹管状か棒様の工具を利用した連続する刺突文が施されるもので、696は、頸部に横位の二列の竹管様の工具による刺突文が施され、それを挟む様に、三条の沈線文が施される。この頸部の文様帶によって区分される口縁部には、胴部の繩文が磨り消されている。690, 697, 698, 699, 918, 922, 929はこのモチーフの一部である。695, 919, 925, 926, 928, 932は、平行する二条の沈線文の間に刺突文が施される。その刺突文を挟み、二条を一束とする沈線文が、口縁と頸部を周回する様に施されている。さらに口縁部を区画する口縁部より、垂下する沈線文が施されている。921, 927, 933, 936, 937は、曲線的な沈線文が多用され、その間隔に棒様の工具を、連続して刺突されるものである。936は、ラフな曲線文が施されている。973, 695は、胴部に、縱位の二条の沈線に挟まれた刺突文が施されるものである。

J (935) 口縁が緩らかに外反し、胴部がふくらむ縱長で深鉢形を呈すると思われるもので、口縁はヘラ様の工具で平らに整形されている。胴部の張り出し部に一条の横位の1.2cm程の幅を持つ貼付帯が周回する。この貼付帯には、繩文原体の先端部を使用した連続的な刺突が施されている。

B類 (第59図7, 第60図9~12) (501, 507, 725, 727~734, 736~740, 742~747, 749~917)
繩線文や、繩線文の施された隆起帯、あるいは、貼付帯が施されるものである。

復元土器

第59図7は、器高13.5cm、口径9.7cm、胴部径8.4cmの平縁の深鉢形土器である。底部径は4.5cmで、底面は湾入し、揚底状になっている。口縁部には三条の周回する繩線文を施し、その間に0.5cm程の先端部を持つ工具によって、斜方向より連続的に刺突されている。この沈線文の下位に接し、二条の弧状をなす沈線文が器面肩部を5分割する様に描かれている。地文は、LRの斜行繩文が底部より2cm程上位より器面全面に施文されている。器厚は0.6cm程である。焼成は良好で堅い。色調は口縁部が暗褐色、胴部が褐色を呈し、胎土には砂粒を多量に含んでいる。

第60図9は、表採資料で器形は、深鉢形を呈し、口縁部には一条の横位の繩線文が施される。無文で、色調は茶褐色であり、所々まだら状を呈する。焼成は不良でもろく、胴部には多量の砂粒を含み、器面には細かなクラックが入っている。

第60図10は、平縁で、頸部は大きくくびれる。底部を欠失しているが、深鉢形の器形を呈すると思われる。口唇は、平らにヘラ様の工具で整形され、頸部には、横位に貼付帯が周回する。貼付帯上には、繩線文が施される。地文には、RLの斜行繩文が施され、色調は暗褐色を呈し、焼成は良好で堅い。胎土には多量の砂粒を含み、裏面の口縁部にはミガキ整形が施されている。器面内部には、炭化物の付着がみられる。

第60図11は、平縁で、口縁部が大きく外反し、胴部がふくらむ深鉢形を呈する。口縁部に、二条の繩線文を、肩部にも三条の繩線文を横位に周回させ、さらに、口縁部を四分割する二条の繩線文が口唇より口縁部と肩部の横位の繩線文と直交し、胴部まで垂下する。地文は、肩部の繩線文により区分される。口縁部に、縱位の撚糸文が施され、胴部には、斜行の撚糸文が施される。色調は、暗褐色で、胴部より下位は褐色を呈する。焼成は良好で堅い。胎土には、砂粒、火山灰を含み、

裏面には、なで整形が施されている。

第60図12は、口唇に4個の小突起を持ち、口唇が外反して胸部でふくらむ深鉢形の土器である。口縁部には、二条の周回する繩線文が施され、肩部に繩線文の施された貼付帯が横位に周回する。この貼付帯と口唇の間は、幅広く地文が磨消されるか、あるいは、無文帯となっている。貼付帯の下位には、LRの斜行繩文が地文として施される。色調は褐色を呈し、焼成は良く堅い。胎土には、砂粒・火山灰を多量に含み、器面はざらざらした感じを呈する。裏面は、ナデ整形がなされ、器面口縁部、貼付帯に炭化物の付着がみられる。

a (725, 906, 909~917)

繩線文の施される隆起帯、あるいは、貼付帯が横位に施されるもので、914, 915, 917は、頭部に一条の繩線文の施された横位の隆起帯、または貼付帯を持つものである。916は、胸部と思われる部位に横位の隆起帯、あるいは、貼付帯が施されている。725, 906, 910, 913もこれら的一部である。

b (727~730, 902~905, 907, 908) 横位の隆起帯および貼付帯を挟む様に、二条の繩線文が施されているものである。902, 907, 908は、平縁の外反する深鉢形の土器と思われる。これらの胸部には、横位の隆起帯が施される。727~729, 905は、この文様モチーフの一部である。730の隆起帯には、棒様工具を利用した、連続する刺突文が施される。

c (734, 736~739, 740, 743, 744, 749) 口縁部に一条の繩線文が施された隆起帯、あるいは、貼付帯が縦横に施されたものである。736, 737, 739は、口縁の山型突起部に平行な二条の繩線文が施され、山型突起頂部より垂下する貼付帯を持つ。734は、さらに、その貼付帯を挟むように二条の繩線文が施されたものである。743は、外反する口縁部に、一对の貼付帯が、八の字に施され、その上端部が平縁の口縁よりわずかに突出する。744は、地文の磨消された外反する口縁部に、一条の横位の繩線文が施され、その下位に一对の貼付帯が彌のハの字状に施される。この貼付帯の間に細い沈線がX字状に引かれ、さらに、その交点より一条の沈線が垂下する。749は、器面を磨消し帯と区分する横位の隆起帶に、この磨消し帯を垂下する隆起帯が接する。

d (731~733) 器面にボタン状貼付が施されるもの。732は、貼付帯の交点に施されている。

e (746, 747) 口縁の山型突起部に貼付帯を施し、さらに、その上に、口縁に平行な数条の繩線文が施されるものである。

f (742, 750~779) 口縁部に無文帯、あるいは、磨消帯を設け、その磨消帯には、繩線文を縱横に施し文様帯を構成するものである。口縁部は、二条の口縁部に平行な繩線文と、縱位、あるいは、斜位の繩線文とが交差し接する。759は、山型の小突起部を持ち、その頂部には、横位の繩線文に接する、短い縱位の繩線文が施されている。また、752, 760~779の土器表面には、斜行ぎみのラフな繩線文が施されている。748, 755, 757は、口縁部に無文帯を画さないものであり、748の様に、胸部に逆のU字状の繩線文が施されているものもある。

g (501, 507, 780~893, 896~901) 口縁部に、一条ないし、数条の周回すると思われる繩線文が施されるものである。780~805は、口縁部に、一条の繩線文が施されるもので、792, 797を除いて、全例、口縁より5mm程の口縁直下に施されている。790, 791, 804は、口縁が肥厚するも

ので、その肥厚帯に繩線文が施される。798は、山型の突起部を持つ。806～868、870、871は、口縁部に二条の繩線文が施されるものである。827、834、835、846、848、855、861、866～868は、二条の繩線文の間が口縁部の地文を磨消している。857の器面口縁部には、土器作製の際の粘土紐の痕跡が明瞭に残されている。855は、二条の繩線文の間隔が幅広い。872、873は、大きくくびれる頸部に二条の横位の繩線文が施され、その繩線文によって区分される口縁部の地文を磨消している。口縁は、ヘラ様の工具で平らに整形されている。876～889は、口縁部に三条ないし、数条の繩線文が施されている。876、877、887は、山型の突起を持つもので、876の様に、突起頂部に口縁裏面より施文される縦位の繩線文が、口縁部の横位の繩線文へと接するものもある。878、879、882、883、885、887～889の口縁部は、地文が磨消されている。889は、繩線が、二条を一束として施文されている。843、890～892、899は、口縁が肥厚し、断面形が三角形状を呈するもので、口縁と口縁部に、それぞれ繩線文が施されるものである。891は、口縁と口縁部の繩線文が接する。735は山型突起の口縁と、口縁に沿って二条の繩線文が施され、頸部には横位の長梢円形文が施されている、501～507は口縁上に繩線文が施されている。

h (745, 894, 895) 口縁は、鋭角的な山型突起を持ち、肥厚する口縁部に二条の横位の5mm程の幅広の沈線文が、周回する。さらに、その下位に二条の弧状文が施される。895は、山型突起が丸みを持っている。

第VI群土器 (第88図 939～953, 図版43, 44)

1～1.5cm程の幅を持つ貼付帯が口縁部を周回し、この貼付帯上には斜行繩文が施される。地文は、斜行繩文か横位に近い斜行繩文が施される。色調は暗褐色か褐色を呈し、焼成は良好で、胎土には砂粒が含まれる。器形は平底の円筒形をなす。本群はA, Bの2類に分類される。

A類 (939～942, 944, 946, 947, 949)

器面に一～二段の横位の貼付帯が口縁部を周回するものである。939の口縁の貼付帯は、折り返し口縁になっている。940の貼付帯の断面形は丸みをおびる。941, 949は、地文の斜行の向きと逆方向に貼付帯上に施文されているものである。946, 947は、口縁に一段の横位の貼付帯を施し、口縁は強く外反し、めくれ状を呈している。

B類 (943, 945, 948, 950～953)

貼付帯が縱横に施されるもので、その貼付帯は確に施されている。943は、口縁に繩線文が施されているものである。945, 948は、貼付帯の中央に、太く浅い溝状の沈線が施される。951～953は、縦位の貼付帯と横位の貼付帯が接するものである。952は、直角に折れ曲るものである。

第VII群土器 (第90図 992～1032) (図版44)

本群はA～Dの4類に分類される。

A類 (993～1012)

無文帶に細い沈線文が施されたもので、993, 995は、口縁の下位、1cm程の所に横位の沈線を施

し、その沈線の上位には縦位の爪形文、下位には弧線を使用し、沈線文が施される。997, 999, 1001~1005, 1007~1009, 1011は、直線的な文様が描かれるものである。999, 1004は、口縁部を区画する様な文様を持つものであり、1003, 1009~1011の様に弧線が描かれるものもある。

B類 (992, 1013~1018, 1026)

992は、山形突起部に縦位の三条の刻みを持つもので、山型突起頂部には小さな抉り込みがみられる。1013~1018, 1026は、磨消手法の認められるものである。1026は、胴部に所々が山形をなす横位の磨消帶がある。1013, 1014, 1016, 1018は、曲線的な文様を持つ磨消帶がある。

C類 (1029)

鉢形を呈する土器で、胴部の張り出し部を、断面形が三角形状をなす様に器面が整形されており、胴部の張り出し部より上位が磨り消されている。裏面には、1mmの厚さに炭化物が付着している。

D類 (1019~1025, 1027, 1028, 1030~1032)

地文だけのもので、擦りの細かい繩文が施されるものである。1019, 1020, 1021, 1023~1025, 1027, 1028, 1030は、LRの斜行繩文、1022, 1031は、RLの斜行繩文が施されている。1032は、一条の沈線が横位に施されている。

第VII群土器 (第89図 1033~1035) (図版44)

器形は浅鉢形と思われる。器厚は薄く、色調は褐色を呈し、焼成は良好で堅い。胎土には砂粒を僅かに含む。口縁は、内側に三角形状に肥厚し、内面肥厚部には横位の周回する沈線文が施される。1035は、口縁の数ヶ所に小突起が施され、口縁より1.5cm程の幅に、三条の横位の沈線文が器面を周回する。地文は、縱行繩文が施されている。1033は、口縁下5mmから1cm程の横位の磨消帶を施し、さらにその下位に三条の横位の沈線文を施す。

(田部 淳)

第2節 石器・石製品

本遺跡における、発掘調査では総計500余点に及ぶ石器類が得られている。しかし、土器群は前述したように縄文時代早期~縄文時代晩期に至るまでの土器が得られ、石器群がどの土器群に伴うものか明確にはされていない。

石器類の器種は、石鎌、鋸先、錐、両面加工のナイフ状石器、石匙、搔器、削器、石斧、石錐、敲石、敲き石、くばみ石、擦石、石皿等があり、特に半月状をなした擦石は、250点以上得られており、本遺跡における石器組成を考えるうえにおいて種々の問題点が指摘されよう。

土器群は、各時代にわたり出土しているが特に主体は、縄文時代中期中葉~末葉にかけてのものであり、石器群も大きく概観して見るならば、この時期に伴うと考えられるものが主体を示めるといえよう。以下器種別に分類しその概要を記して行く。

石鎌 (第91, 92図) (図版45)

全例で75点得られており、有茎のもの、有茎ではあるがかえし部分の張り出しが顕著でなく柳葉

形をなすもの、無基で基底部が平らかもしくは内側に若干湾曲し、尖頭部の形が二等辺三角形を呈するもの等大別して3グループに分けられる。

素材には、主に硬質頁岩が用いられ、他の石材は非常に少ない。

a 尖頭部の形が2等辺三角形をなし、平らな基底部に舌状の茎部がつく有茎の石鎚である。尖頭部の形が2等辺三角形となり底辺の角がかえし部となる。かえし部の脹り出しが比較的弱い(1~32, 35~37)。

全長は、23mm~45mm、かえし部の一番幅の有する部分で10mm~30mm弱、重量は0.5g~5gと比較的幅を有している。

4, 9, 10, 20~22, 24, 32, 33, 37は、尖頭部を欠損している。

b 有茎ではあるが、かえし部分の脹り出しが顯著でなく、全体的な形状として柳葉形をなすものである(38~70)。

a類と分類したものに比較して、かえし部分の形状が丸味を帯び、しかも茎部が長いといった特徴を有している。

また、全体的に太目であり、尖頭部の断面形が円形に近く、全体的な形状が紡錘形をなすものもあり、この類に含めた(52, 53, 59)。

59は、尖頭部の一部を欠損し、その後にこの部分に再加工を施し再使用されたと考えられる痕跡を有したものである。

本類に細分したものの大きさは、全長は、30~40mm前後、かえし部分の最大幅は12~15mm前後、重量は、1g~4gあり。a類と比較して全長に対するかえし部の幅の狭い点があげられる。

55, 60, 61は、尖頭部を欠損している。

c 無茎のものをe類とした(71~75)。

刃部(尖頭部)の形状は2等辺三角形をなし、基底部が平らとなる(71, 74)、基底部がやや内側に湾曲しえぐり込みのあるもの(72, 73, 75)の2種の形態がある。

大きさは、全長30mm~40mm、基底部でかえし部分にあたる最大幅で20mm前後、重量1~2gであり、比較的軽いという特徴があるものである。

71, 73は、尖頭部の一部を欠損している。

銛先(第93図76~83)(図版45)

やや大型の石鎚といった形状をしており、石鎚の重量の7~8倍程度の重量がある。

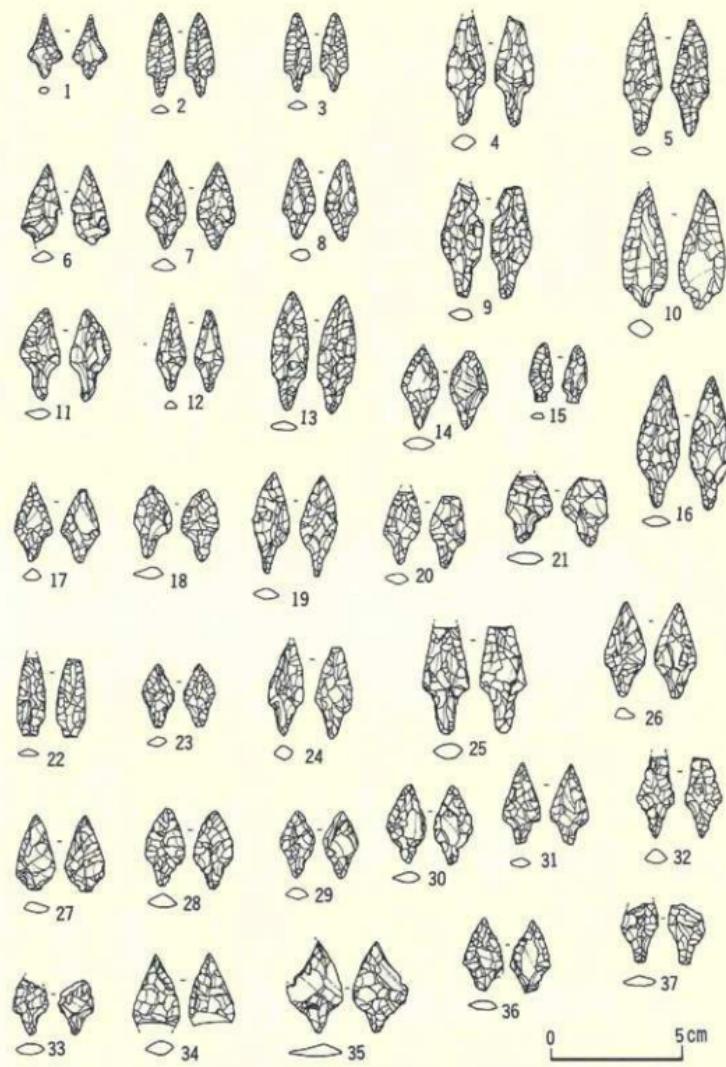
点数は少ないが、無柄で2等辺三角形を呈する薄味のものと、長く柄部が作り出されやや太い有柄のものの2グループのタイプがある。全例硬質頁岩製である。

a 無柄で、形状が2等辺三角形をなすものである。石鎚c類としたものとやや大型の点を除けば同種である(76~79)。

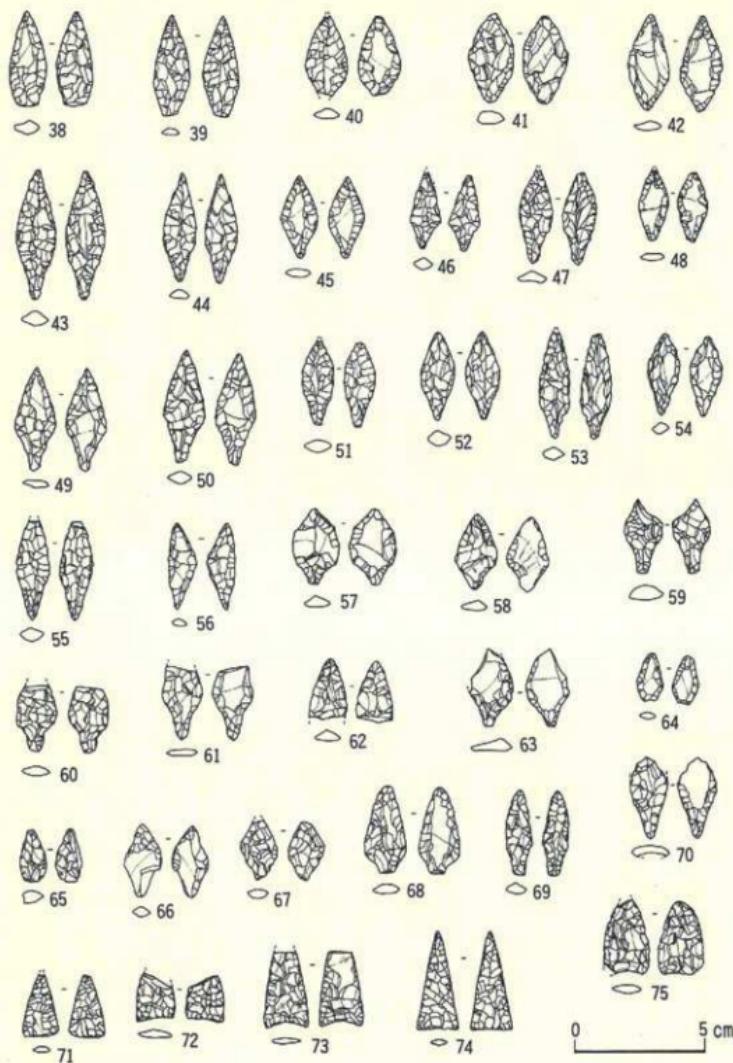
基底部の形状はやや内側に向け湾曲しており、えぐり込みがある。

b 有柄のもので、石鎚b類としたものと同種の形状である(80~83)。

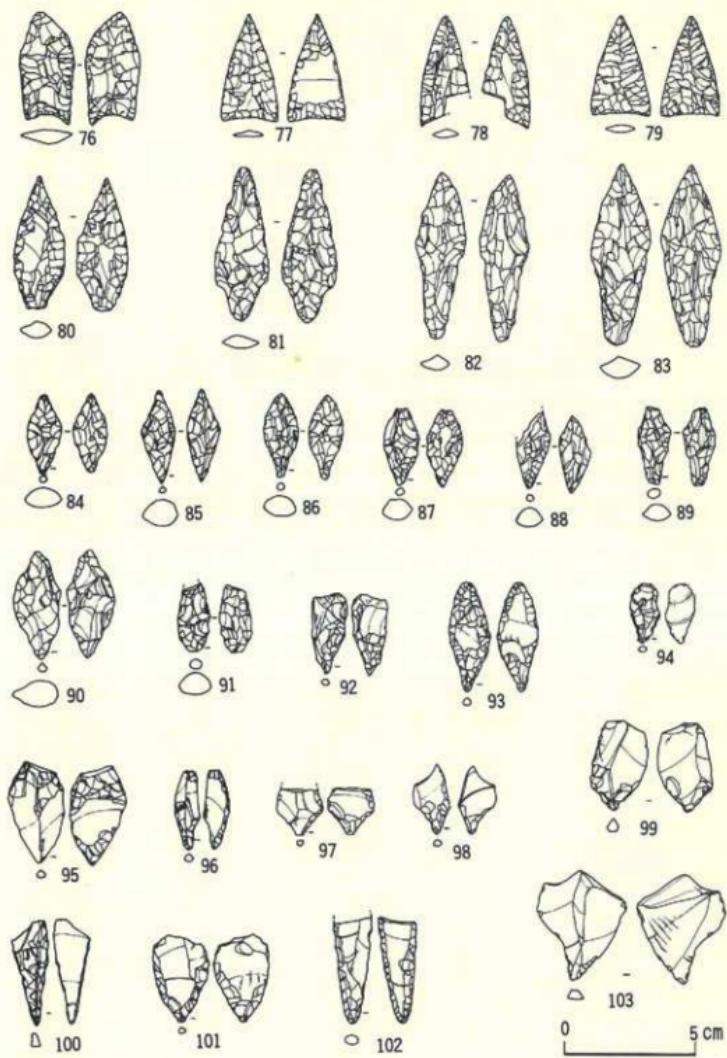
いずれもかえし部分の幅、脹り出しが少なく、やや太い。



第91図 発掘区出土石器



第92図 発掘区出土石器



第93図 発掘区出土石器

石鎚の重量の7～8倍の重量がある。

82, 83は、尖頭部は短かく、柄部は長い。

石錐（第93図～103）（図版46）

いずれも、一端ないし両端に尖った部分を有しており、この部分の断面形は円形に近くなり、エッヂ部分は磨滅し丸味を帯びトロトロになっているものも多い。

形状より2グループに細分した。全て硬質頁岩を素材としている。

a 入念な両面加工が施され、石鎚b類と細分したものと同一形狀である。

断面形は円形に近く太い、全体的な形狀は、紡錘形である。両端に尖頭部が存在し、エッヂ部は磨滅し、丸味を帯びている。ソケット等を介在し、もみ錐、刺突具として用いられたものであろうか（84～91）。

b 剥片の形をそのまま残し、一端に尖った部分を作り出したものである。不定形なつまみ部分が存在するものもある（92～103）。

いずれも使用部分と考えられる尖った部分のエッヂ部は磨滅し丸味を帯びている。

両面加工のナイフ状石器（第94図、第95図117～128）（図版46）

いずれも入念に両面加工が施された石器群で、削る、切る等の目的に用いられたと考えられるものである。これらの形狀は不定形であり、太い柄部が作り出された大型の石器群、やや小型で入念な両面加工を施し、木の葉状の形を呈するもの、入念な両面、片面加工が施され、短冊形、寛形に整形された石器群の3グループのものがある。

a 大型で、太い柄部が作り出され、入念な両面加工が施されている。いずれも左右は非対称形であり、幅の広い刃部を有している（104～108）。

105, 106は刃部を欠損している為全体的な形狀は不明である。

刃部は、全例比較的薄い。

全例硬質頁岩製である。

b 比較的小型で、入念な両面加工が施され、多くのものは木の葉状の形をなしている（109～122）。

全例比較的厚味があり、断面形は凸レンズ状をなしている。

119は、三角形の形狀をなしや特異な形態といえよう。

113, 114, 117; 121, 122は、破損品であり、本来の形態は不明である。

全例硬質頁岩を素材としている。

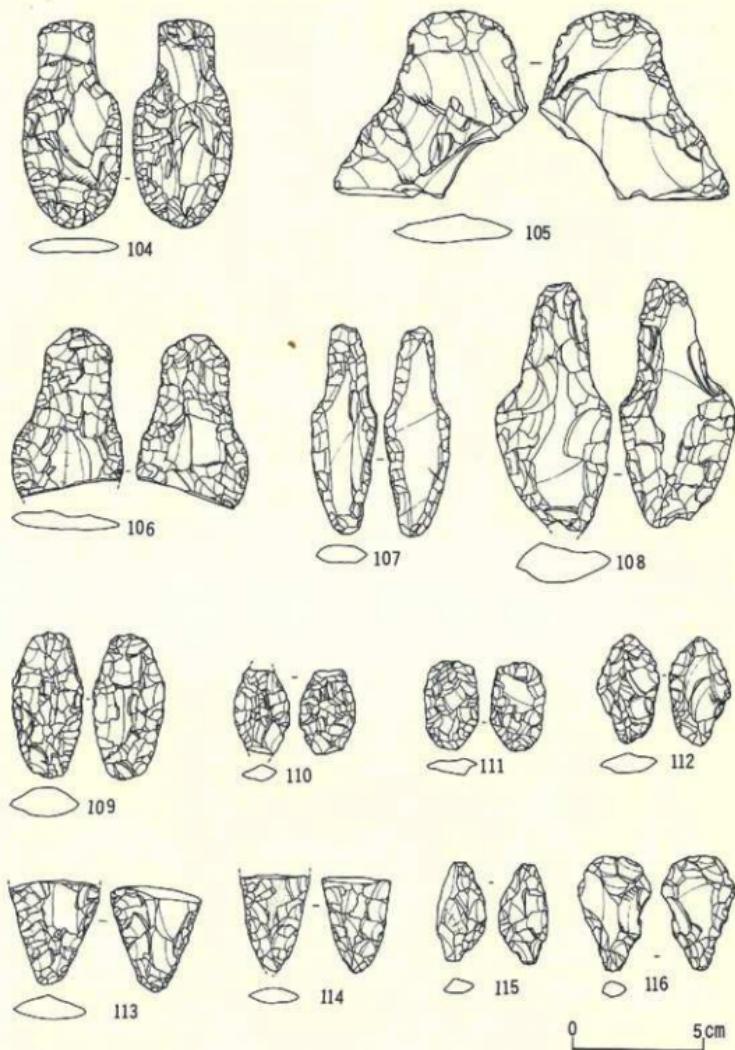
c 短冊形ないしは寛状の形狀を有する両面、片面加工が施された石器群である（123～128）。

本類の石器群は、いわゆる「石鎌」とされるものであろう。主に下端が刃部として用いられたと考えられ、この部分のエッヂ部を中心として側縁には、細かな擦痕の残るものもある。

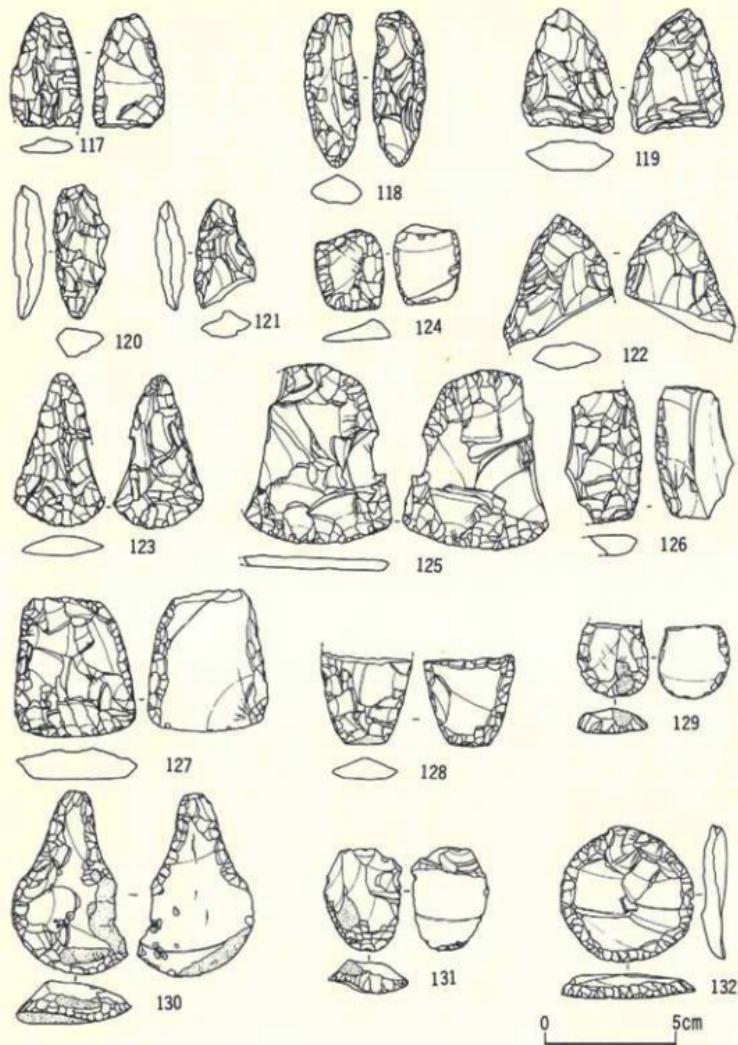
刃部の断面は、比較的薄手である。

搔器（第95図129～132）（図版46）

エンド・スクレバー、ラウンド・スクレバーと称される石器群である。



第94図 発掘区出土石器



第95図 発掘区出土石器

円形、縦長形状の剥片を素材として一端、ないしは全周に主剥離面側から背の高い面をもつよう剥離加工が施されたものである。

a 縦長剥片を素材とし、下端に主剥離面側から背の高い面をもつよう剥離加工の施されたもので、いわゆるエンド・スクレバーと称される石器である（129～131）。

130は、刃部の一部が石の節理面にあたり、使用中にこの部分が欠け落ち再度調整を施したと考えられるものである。

129、330は、左右の両側縁のエッヂ部にも加工が施されている。

全例硬質頁岩を素材としている。

b 剥片の全周を、主剥離面より剥離加工を施し、円形の刃部を有する石器としたものである。いわゆるラウンド・スクレバーと称される石器である（132）。

硬質頁岩を素材としている。

つまみ付のナイフ（第96、97図）（図版47）

いわゆる石匙と称される石器群である。

本遺跡より得られたものは、縦形に類するものが主体をなし、横形を呈するものは1点より出土していない。

入念な両面加工が施されるもの、片面のみのもの、剥片のエッヂ部を中心として側縁のみ加工の施されるもの、主剥離面に一切の加工がなされないもの、一部加工の施されるものなど6形態に分類される。

a 縦形を呈し、入念な両面加工が施され、つまみ部分が作り出された石器である（133、147）。

133は、刃部の断面が比較的薄く凸レンズ状を呈し入念に剥離加工がなされている。

147は、やや部厚くラフな加工である。両者とも左右は、非対称形となる。

b 全て大型の縦長剥片を素材としたもので、片面にのみ入念な剥離加工が施されている。主剥離面には、一切の加工がなされていない（134、136、140、158）。

いずれも左右は、非対称形である。

134、136は、ポジティブ・バルブ部分の左右両側縁のエッヂ部にえぐり込みをもつよう加工を施しつまみ部分を作出している。

140を除いて他は、狭長である。刃部の断面形は、全例半円形ないし平らたい三角形となる。158は、刃部の破片である。

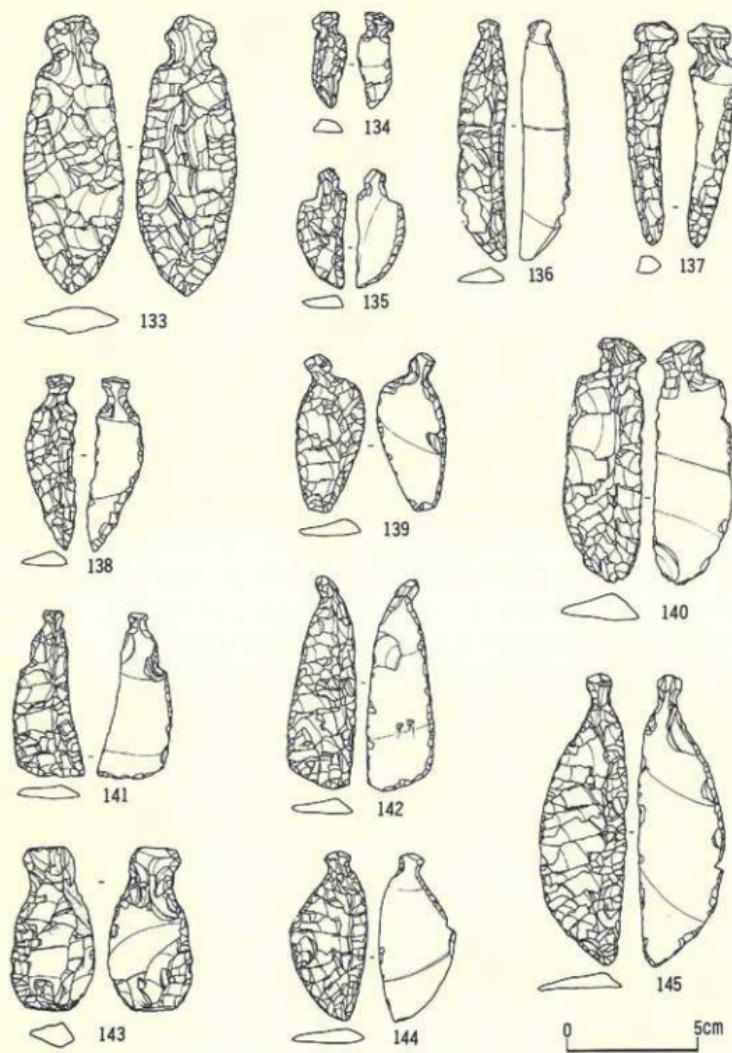
素材は、全例硬質頁岩である。

a 形態的には、bとしたものと同様に片面に入念な剥離加工を施しており、主剥離面では、一侧縁のエッヂ部に若干の加工を施したものである（135、137～139、141～145、148、149）。

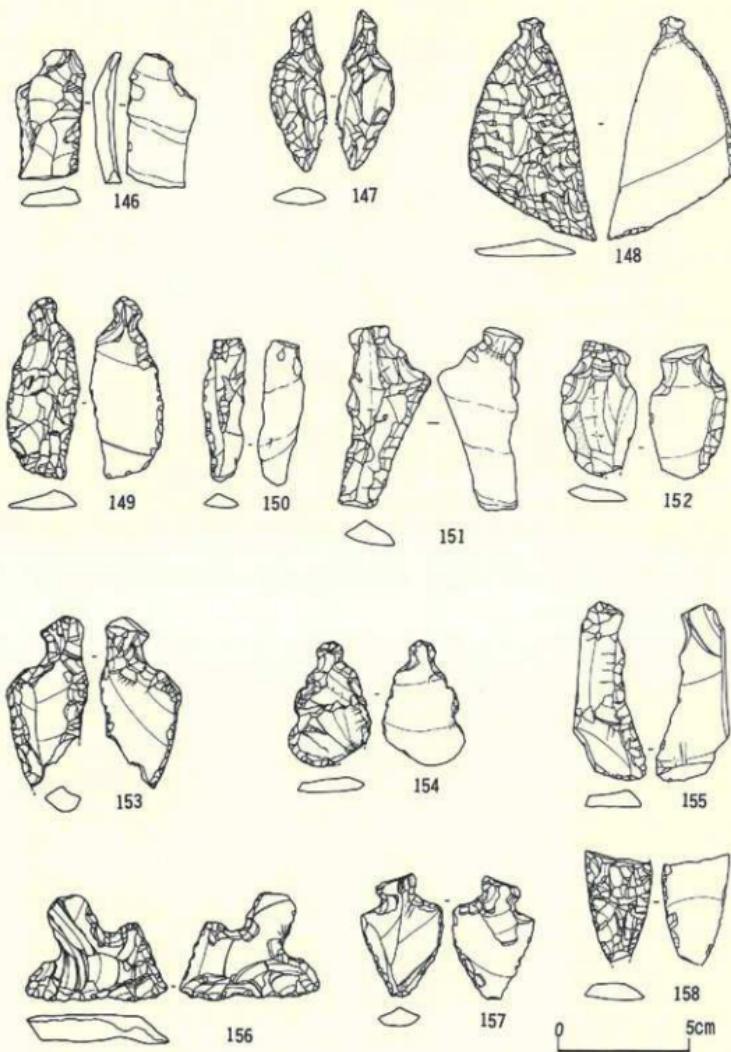
135は、若干小型であり幅広の剥片を素材としている。

137、138は、狭長である。135を除いて他は全て縦長剥片のポジティブ・バルブの部分につまみ分を作り出している。

左右は、全例非対称形である。



第96図 発掘区出土石器



第97図 発掘区出土石器

素材は、硬質頁岩が用いられている。

b 縦長形状の剥片を素材に、つまみ部分を作り出したもので、剥片の左右両側縁、もしくは一側縁のエッヂ部に剥離加工を集中してあるもので剥片の第1次剥離面を多く残している。尚主剥離面には一切の加工は無い（146、150、151、154、155）。

刃部の断面形は、素材である剥片の形に応じて三角形、台形を呈している。

素材には、硬質頁岩が主に用いられている。

c d したものと同様に、縦長剥片を素材につまみ部を作り出し、剥片の左右両側縁、一側縁のエッヂ部に剥離加工を施したもので、主剥離面のエッヂ部にも若干の加工が施されたものである（152、153）。

153は刃部を一部欠損している。

素材は、硬質頁岩が用いられている。

f いわゆる横形の石匙である。幅広の剥片を素材につまみ部分が作り出され、両面にわたる剥離加工が施されているものである（156）。

つまみ部分は、やや大きく、比較的厚手である。

素材は硬質頁岩を用いている。

削器（第98～100図、第101図209）（図版47～49）

縦長剥片、幅広剥片、円礫等を素材に片面、左右両側縁、一側縁のエッヂ部に剥離加工を施し刃部を作り出したものである。

不定形の小剥片の一部のエッヂに剥離痕のあるいわゆる使用痕のある剥片も若干存在しており、説明の都合上削器として含めた。

a 縦長剥片を素材に片面にのみ入念な剥離加工の施されたもので、主剥離面側においては、一部のエッヂ部に若干の剥離加工痕の残されているものである。刃部の作出状態より、つまみ部分を作り出していないだけいわゆる石匙と区別されるものである（175、176、182）。

b 比較的大型の縦長剥片を素材とし、剥片の左右両側縁、一側縁のエッヂ部に剥離加工が施され刃部としたものである（159～174、177～181、183～185、198、195、205、208）。

主剥離面には一切の加工がおよんでいないものと、一部のエッヂにのみ加工が施されるものがある。

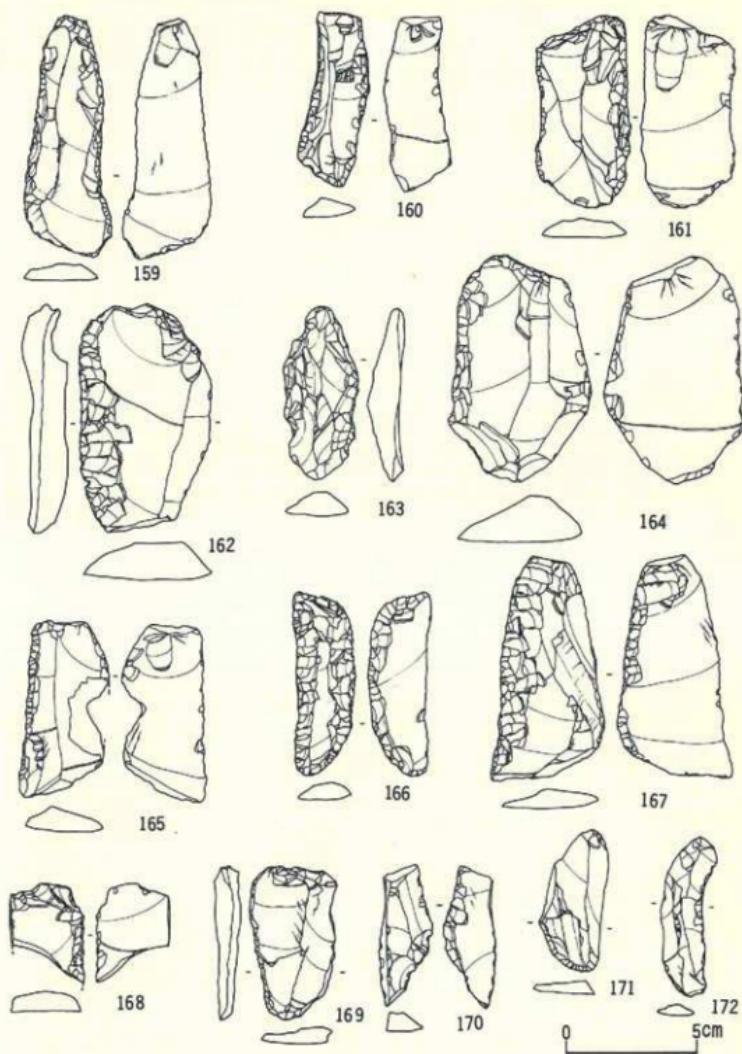
162、164は、特に大型で厚味がある。

全例、硬質頁岩を素材としている。

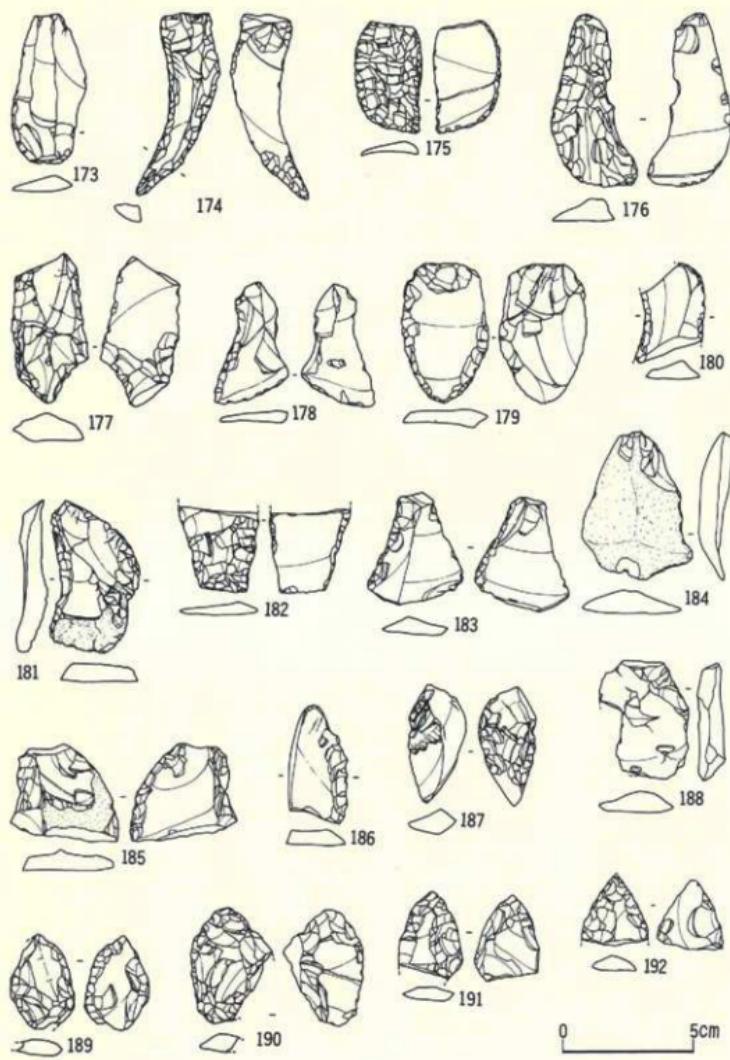
c 比較的大型の幅広剥片を素材としたもので、剥片の周囲のエッヂ部に剥離加工を施し刃部としたものである。

主剥離面には一切の加工を行わないものと、若干だが加工を加えるものもある（193、196、197、200～204、206）。

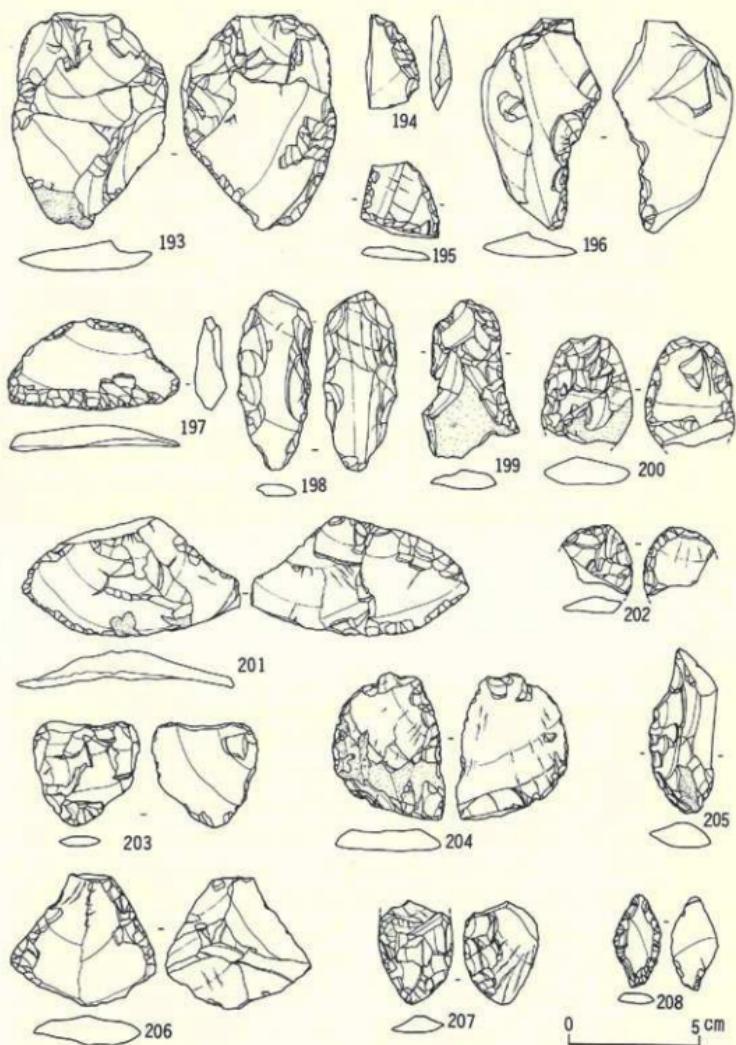
d 比較的小型の幅広形状の剥片の片面、周囲に剥離加工が施されたものである（186、187、189～192、194、195、202、207、208）。



第98図 発掘区出土石器



第99図 発掘区出土石器



第100図 発掘区出土石器

この中には、いわゆる使用痕のある剥片と称されるべきものも含んでいる。

全例定形化は無く、刃部の作り出される位置も様々である。

e 偏平橢状を呈する砾を素材とし、3側縁を打ち欠きくさび状の刃状を3方向に作り出したもので、いわゆる礫核削器と称されるものであろう（209）。

石斧（第101図210～214、第102図215）（図版49）

5点得られており、全例磨製である。

210は、全長に比較して刃部の幅がやや広く幅広の形状をなす。全面にわたる入念な研磨加工がなされている。刃部の形状は、直線に近いと思われるが、3分の2程を欠損している為原形は不明である。

211は、全面に入念な研磨加工が施されており、比較的小型である。刃はやや丸味を帯び、その断面形は片刃に近い刃角を示す。

212は、破損部分が多く原形は不明であるが、残存部には入念な研磨加工が施されている。

213は、唯一安山岩質の石を素材としたものである。形状は棒状に近く、細かな敲打による整形後に研磨され、両刃に近い丸味を帯びた刃部を作り出している。尚発掘時には、2個に分割して得られ、整理時に接合されたものである。

214は、やや大型の石斧であり刃部を大きく欠損している。入念な研磨加工が施されているが、所々に素材の有する節理面、整形時における敲打痕を多く残している。

215は、刃部のみの破損品であり、丸味を帯びた刃を有し、その断面形は両刃となる。入念な研磨加工が施されている。

五類・異形石器（第102図216～218）（図版49）

216は、滑石製であり入念な研磨加工が施されている。上部に両面から削孔した漏斗状の穴があけられている。穴の部分から上と下部が欠損しているため原形は不明である。

217は、薄い板状の砂岩を素材としたもので半分を欠損している。形状は、いわゆる块状耳飾と称されているものに類似している。下縁を除いて周縁には3mm間隔程の鋸歯状を呈するきざみ目をめぐらしている。下縁は、石鋸の刃部状をなしU字状の断面形となっている。

中心部より若干上には、両面より削孔した漏斗状の穴があけられている。

砂岩という素材より考えて、砾石あるいは、石鋸といった石器よりの再製品なのかもしれない。

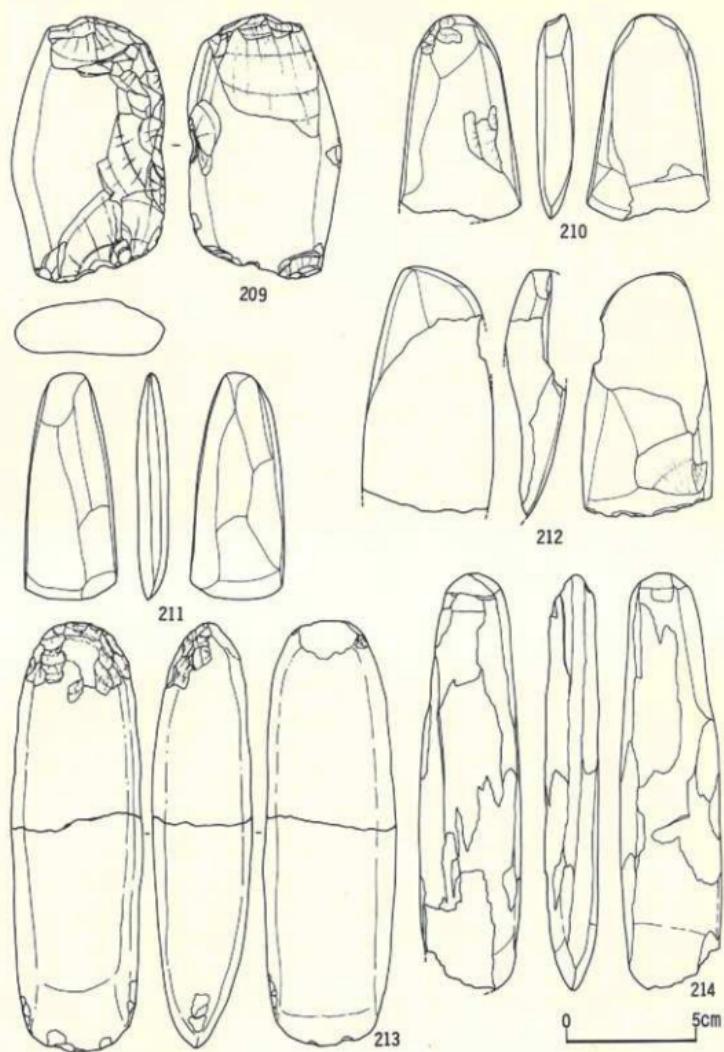
218は、薄く楕円形を呈する小型の河原石の短軸両端に数度の打ち欠きを行いえぐり込みを作り出してあり、全体的な形状として「だるま」形を呈している。

石錐かとも考えたが、小型でえぐり込みを作り出す位置が違い、重量も無く、石材も異っている為、異形石器として他と区別した。尚岩偶の可能性もうかがえるものである。

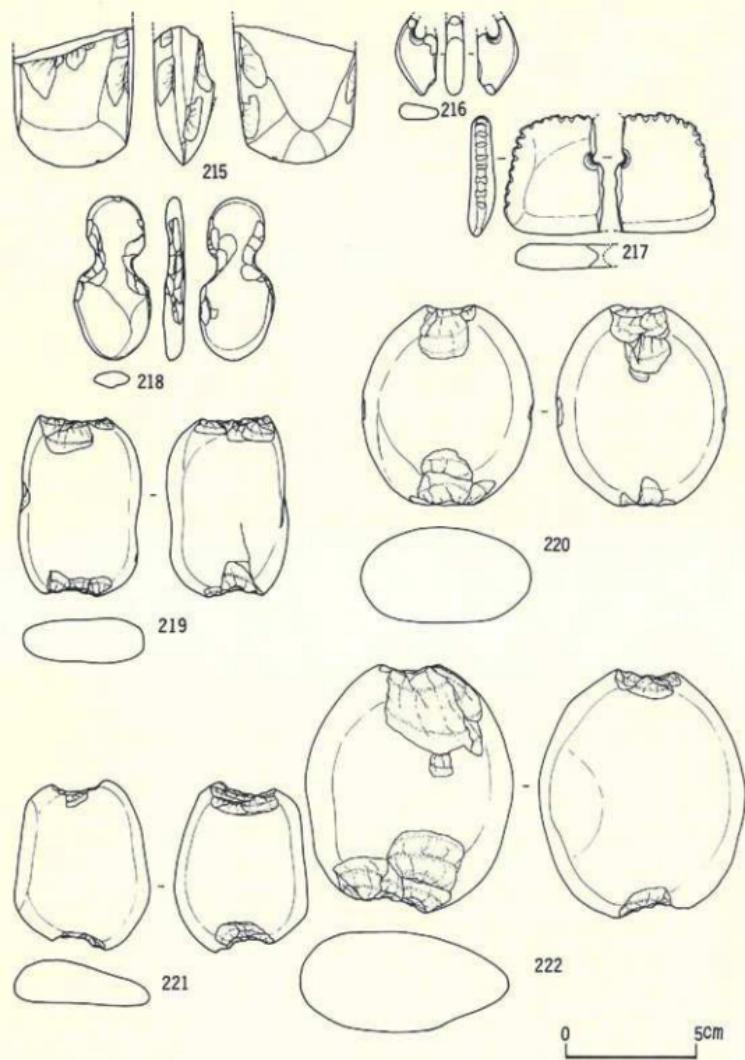
石錐（第102図219～222、第103図223～225）（図版49）

ここにあげた物の他に重量もあり、大型の物が多数得られているが、ここでは比較的小形のものを主にあっかっている。

a 小型のもので、重量は100g以下である。いずれも楕円形で偏平な河原石の長軸両端に数度



第101図 発掘区出土石器



第102図 発掘区出土石器

の打ち欠きを施しえぐり込みを作り出している(219, 221, 223, 224)。

b 中型のもので、重量は、200 g～500 g程ある。**a**としたものにくらべ数倍の重量をもつてゐる(220, 222, 225)。

aと同様に橢円形で偏平な河原石の長軸両端に打ち欠きを行ひえぐり込みを作り出している。

敲石 (第103図226, 227, 第104図228) (図版50)

棒状を呈する石が主に用いられ、下端部等に敲打のくりかえしによると考えられる表皮が剥脱したボロボロになった状態がみられるものである。

226は、偏平でやや細長い形状の礫の一端に敲打のくりかえしによると考えられる表皮が剥脱し、ボロボロになつてゐる状態がみられるものである。

227は、細長い棒状に整形されたもので一端に細かな敲打のくりかえしによると考えられるボロボロになった状態がうかがえるものである。敲打及び研磨により棒状に整形されており、原形は石斧であったものを、刃部を破損したため敲き石に転用された可能性もあるものである。

228は、鉈状を呈する偏平な河原石の一部の側縁部に敲打のくりかえしによるものと考えられる表皮が剥脱しボロボロになった状態がうかがえるものである。

砥石 (第104図229～232) (図版50)

4点得られており、全例砂岩が用いられた板状の形を呈している。

いずれも、多面にわたる研磨痕を残しており、その面は研磨痕の方向に直交する断面形では中央部がくぼみ両側縁が高くなるいわゆるコンケーブした形をなしている。

229は、4面にわたる擦面があり、表面には数条の細い浅い溝がみられる。

230は、表面と側面に擦面がある。

231は、両面に3面の擦面がある。

232は、表、裏、側面とほとんどの面が擦面として使用され、一部の面には数条の細い浅い溝状になる部分がある。

石斧、玉類の研磨加工に用いられたものと考えられるが、現代の砥石の基準で考えるならば荒砥と同じ程度の粒子である。

くぼみ石 (第105図233～236) (図版50)

4点得られており、いずれも橢円形状を呈する安山岩質の河原石の2面(表面・裏面)に数個ずつの敲打によるものと考えられるくぼみが残されているものである。

233は、長軸の両端を欠損しており、表面に2個、裏面に3個のくぼみがある。

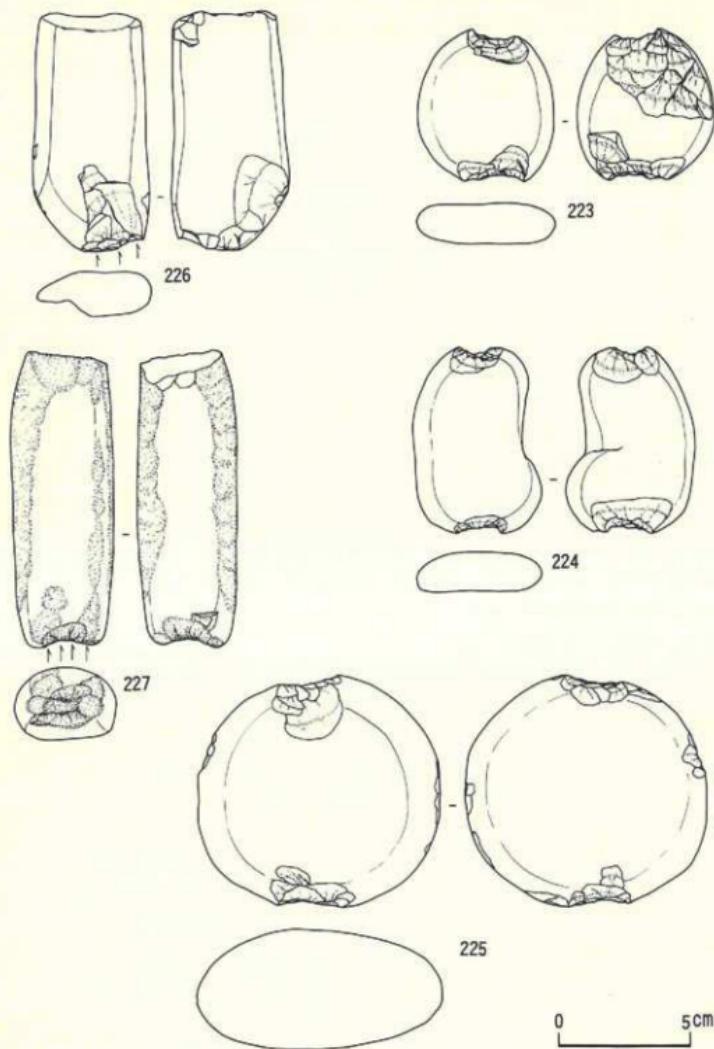
234は、表面に2個、裏面に3個のくぼみがある。

235は、表面に5個、裏面に4個のくぼみがある。

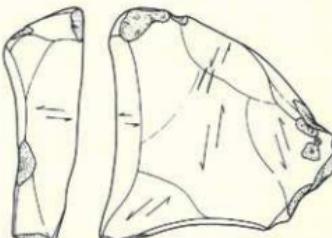
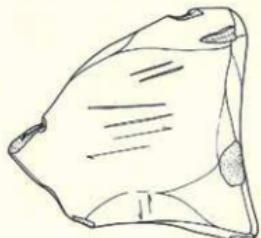
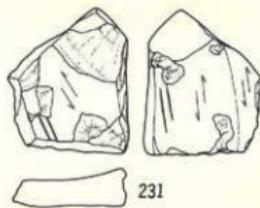
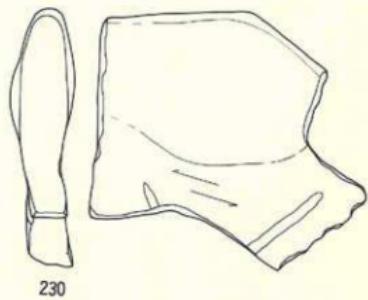
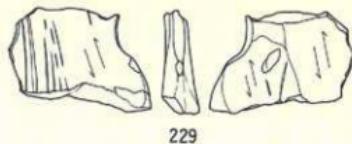
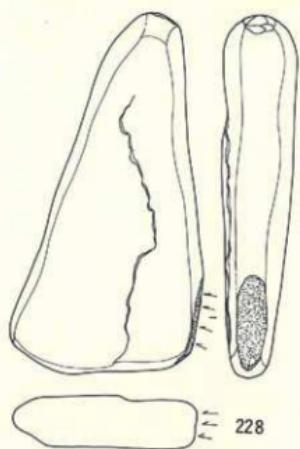
236は、表面に2個、裏面に2個のくぼみがある。

この種の石器は、かつては発火用具の火切臼であろうともいわれていた事があるが、現在では否定されており、敲打器の可能性が高いと思われるものである。

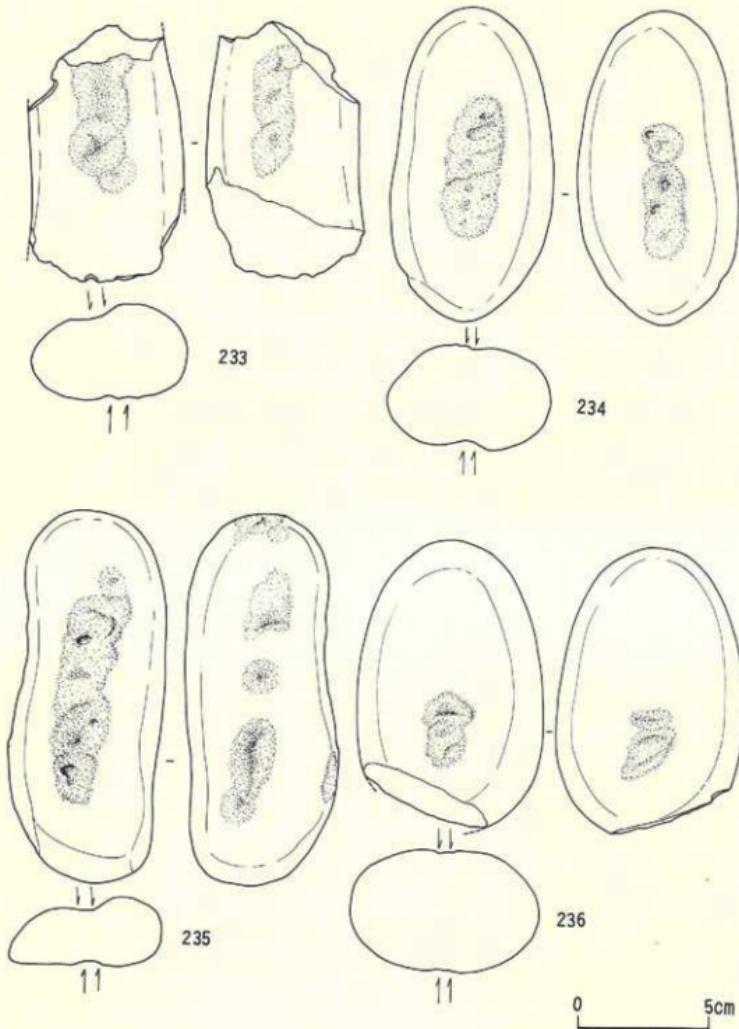
(羽賀憲二)



第103図 発掘区出土石器



0 5cm



第105図 発掘区出土石器

擦石

本遺跡からは、北海道で古くから北海道石冠と呼ばれている擦石、あるいは、東北地方北半地域で半円状偏平打製石器と呼ばれている石器と同様な形態的特徴を示す石器が数多く出土した。発掘区からの出土数のみでも 147 点出土した。以下に、その形態的特徴から便宜的に数類に分類して説明する。

第 1 類 (第 106 図 1~3, 6) (図版 51-1~3・6)

本類は、4 個のみしか見ることができない。断面形が三角形を呈する自然石の長辺の稜に磨擦面を有するものである。1 は、2 つの稜を磨擦面として使用している。1 辺の磨擦面には、この面から打撃を加えた打ち欠きが見られ、更に長軸の一端からの打撃による打ち欠きも見られる。磨擦面に見られる打ち欠きは、これが行なわれた後にも磨擦されたものと思われる。2 は、3 稲が磨擦面として使用されている。長軸端には、かなり強力な力を加えることによって生じた打ち欠きが見られる。また 2 稲の磨擦面の両側には、打ち欠きが見られる。これらの打ち欠きを行った後にも擦り石として使用している。3 は、断面形が菱形を呈する原石の 1 稲のみを磨擦に使用している。この稜及びこれと対称をなす稜には打痕が見られる。6 もやや菱形に近い石を使用している。その半分を欠いているが、この部分を欠いた後にかなり使用されている。また磨擦面には、敲打に近い力による痕が見られる。

第 2 類 (第 106 図 5, 第 107 図 7~11) (図版 51-5, 7~10, 図版 52-11)

本類は 6 個でありそのすべてを図示した。梢円形ないし、山形に近い自然石の長軸辺に磨擦面を有するもの。5 は、半ばを欠損しているので正確に本類に入るか不明である。長軸に磨擦面が見られ、この両側に打ち欠きが加えられている。7~10 は、磨擦面の両側に打ち欠きが見られる。7 は中央に見られる打ち欠きが行なわれた後、それ程長時間使用したものとは考えられず、打ち欠きの縁が鋭く残っている。8 は、7 より小型の原石を使用しており、磨擦面両側の打ち欠きは、かなり磨耗している。9・10 の磨擦面両側に見られる打ち欠きの痕は、9 ではそれ程磨耗しておらず、10 は磨耗が著しい。11 は、まだわずかしか磨擦面が見られず、その 1 部は、敲打によって生じた痕であろう。また長軸の一端には、かなり明瞭な敲打の痕が見られる。

第 3 類 (第 107 図 12, 第 108~115 図) (図版 52-11~21, 図版 53, 54, 55~45~47)

本類は総数 56 個が発見され、そのうち原形の半分以上を窺える 36 個を図示した。山形ないし梢円形の自然石の長軸辺に磨擦面を有し、更に長軸の両端あるいは一端に打ち欠きの見られるものである。長軸の両端に見られる打ち欠きに、いわゆる石錘の如くに抉りとなっているものもある。12~20 は、山形の自然石の長辺を磨擦面として使用している。20 を除いて、他のすべてが磨擦面の両側に打ち欠きが見られる。12 は、全面を敲打により調整している。長辺の磨擦面も、磨擦によって生じたものというより、敲打によって生じた状態を呈する。更に、長軸端の打ち欠きの一方も敲打により整形している。13 は、長軸両端の打ち欠き部がかなり磨耗しており、一端の打ち欠きはかなり大きく打ち欠きしている。磨擦面は、山形の原石の長辺を使用している。磨擦面両側には、こまかい剥離が見られる。14 は、その半分を欠失している。長軸端にかなり磨耗の著しい抉りがある。磨擦

面は、磨擦と敲打によって生じた痕跡が認められる。15は、山形の小型の石を原材としている。長辺を磨擦面として使用しており、この部分は滑らかでなく敲打の痕跡も認められる。また、磨擦面両側に打ち欠きが見られ、打ち欠き線は、かなり磨耗している。16は、長軸の一端の片側にのみ打ち欠きが見られる。磨擦面は、かなり幅広く、その両側には、かなり磨耗した打ち欠きの痕が見られる。17は長軸両端に、それぞれ片側にのみ打ち欠きを入れている。この部分は、著しく磨耗している。山形の原石の長辺に磨擦面が見られる。磨擦面の両側に打ち欠きが加えられているが、この部分は、両端の部分程磨耗していない。18は、長軸両端をそれぞれ片側にのみ大きく打ち欠いた後、反対の側をこまかく打って調整している。やや磨耗している。長辺に見られる磨擦面の片側に、調整とは考えられない打ち欠きが見られ、更に、磨擦面の一部に敲打痕が見られる。19は、片側をかなり欠失している。現存する長軸の端の両側に打ち欠きが見られる。磨擦面の使用は少ない。磨擦面両側の一部に調整とは思われない打ち欠きが、見られる。20は、長軸両端を打ち欠いて比較的大きな挟りをつけている。片側の挟りの上部は欠失しており明らかでないが、挟りの残存する部分、及びもう一方の挟り部分はかなり磨耗している。磨擦面は、長辺に作られる。本例のみが磨擦面に打ち欠きを見ることができない。

21~40は、情円形に近い石の長軸端に打ち欠きを有し、長軸辺に磨擦面を有するものである。21は、長軸の一方を欠損する。残存部の端には打ち欠きが行なわれている。磨擦面の両側には、多くの打ち欠きが見られ、この打ち欠きの後使用されたものである。また両面のところどころに敲打痕が見られる。22は、長軸両端とも、片側方向に大きな打ち欠きを行なっている。その一方は、かなり磨耗している。磨擦面は長軸の片側に顕著に見られ、その反対側は、打ち欠きが行なわれている。この打ち欠きの行なわれた後も磨擦面を使用している。23は、長軸両端に打ち欠きを加えており、その片側の挟り込まれた打ち欠きの部分は、磨耗している。磨擦面両側には、かなり磨耗した打ち欠きが見られる。24は、両端に打ち欠きが見られる。その片方は挟り込んでおり、もう一方は敲打により調整している。磨擦面両側に見られる打ち欠き痕も磨耗している。25は、両端の打ち欠きのうち、片方の磨耗が著しい。他的一方は、片面に大きく打ち欠いている。磨擦面は一部明瞭に見られるのみであり、他の部分は、片側に大きく打ち欠いた痕が見られる。この打ち欠いた部分は、わずかに擦痕が見られるのみで、明らかな面を形成するまでに至っていない。26も両端に打ち欠きを行ない、磨擦面の両側に打ち欠きが見られる。この打ち欠き面は、磨耗している。27は、両端の打ち欠きのうち、片側にかなりの磨耗が見られる。磨擦面に見える打ち欠きも、磨耗が著しい。28は、両端の打ち欠きに磨耗は認められない。磨擦面のほぼ中央部に片側に大きな打ち欠きが見られるが、これの磨擦面に位置するところは、磨耗している。29は、両端の打ち欠きのうち片方は、片面にの他方は両面に欠いている。この部分は、本類中でも最も磨耗が著しく、特に両面に打ち欠いている方は、それが敲打によって調整されているようである。磨擦面の片側に大きな打ち欠きがあり、これの磨擦面の部分は、磨耗している。30は、その半ばが折れた状態にある。ただ磨擦面と折れた面を見ると、これが折れた状態の後も擦石として使用したようである。片方の側の打ち欠きの極一部に磨耗が見られる。また、磨擦面両側の打ち欠きも磨耗している。31は、両端の打ち欠きに磨耗が

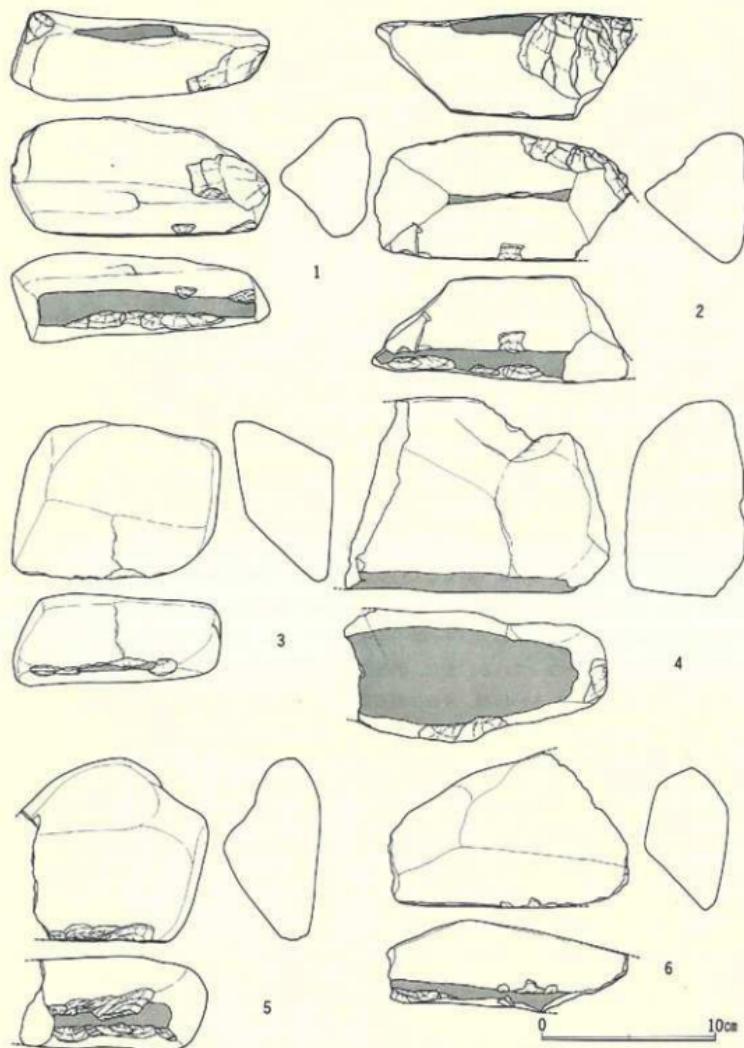
認められる。磨擦面は、かなり幅広になるまで使用されており、その両側に小さな剝離痕が見られるが、これは、当初打ち欠いたものが使用により磨耗しその痕跡を残しているものと思われる。32も、両端の打ち欠き部に磨耗痕の見られない点を除けば、おおよそ31と同じ状態を示す。33の両端の打ち欠きは、29と同様に磨耗が著しい。摩擦面はかなり長時間の使用を物語る程幅広である。片側に小さな打ち欠きが4ヶ所見られる。これの磨擦面の部分は、磨耗している。34も、両端の打ち欠きの磨耗が著しい。磨擦面の1ヶ所に調整とは思われない打ち欠きが存在する。35は、両端の打ち欠きのうち、片方にのみ磨耗が見られる。磨擦面は、かなり幅広であり、その両側に若干の打ち欠きが見られる。36は、両端をそれぞれ反対の面に大きく打ち欠いている。この部分の磨耗は、かなり進んでいる。磨擦面両側に打ち欠きが認められるが、これの磨擦面に接する部分は磨耗している。37の両端の打ち欠きのうち磨耗していない方は、原石のときからの自然のものと思われる。磨擦面の1ヶ所に小さな打ち欠きが見られる。38は、両端の打ち欠きのうち片方の磨耗が著しい。磨擦面両側には、小さな打ち欠きの痕が見られるが、これらは磨擦面の使用により小さくなつたものであろう。39は、両端の打ち欠きのうち片方が磨耗している。磨擦面片側には小さな打ち欠きが見られる。磨擦面に接する打ち欠きの部分は磨耗している。

40~47は、片面、あるいはそれに近い部分を大きく削っているものである。40は、片側のみに原石面を残す。この後に両端に打ち欠きを加えている。このうち片方に磨耗が見られる。磨擦面も半割した後に形成されている。更に、磨擦面から原石面側に打ち欠きを加えている。41も40と同様に片面のみに原石面を残している。一方の打ち欠き部に磨擦面が見られる。42は、片面が原石面であり、他の面は、こまかい剝離により調整している。その半分を使用後に半欠している。現存部の打ち欠きには、やや磨耗が見られる。磨擦面を見ると、片面の剝離により調整した部分と磨擦面の接する部分に磨耗が認められる。43も、その半分を欠損している。現存する長軸端は、打ち欠きにより刃部を形成した如くなっている。また、磨擦面も明瞭でなく、あたかも刃部を作り出したかの如く、両側を打ち欠いている。44は、片面に原石面を残し、裏面及びその半分を欠損している。磨擦面もそれ程磨耗はしていない。また裏面の半割は、磨擦面の形成された後に生じたものである。45は、約半を残すのみである。その半ばから欠損する際に裏面も同一の力により半割されている。磨擦面形成の後に欠損している。46は、本類というより、むしろ第1類に入れるべきものであるかもしれない。3稜ある辺のうち、1稜を打ち削っている。更に長軸の一部も欠失しているが、これは磨擦面の作られる以前のことである。47も片面のおおよそ半分を欠いている。長軸の一端に打撃を加えた打ち欠きが見られる。磨擦面の一部に打ち欠いた痕が見られる。

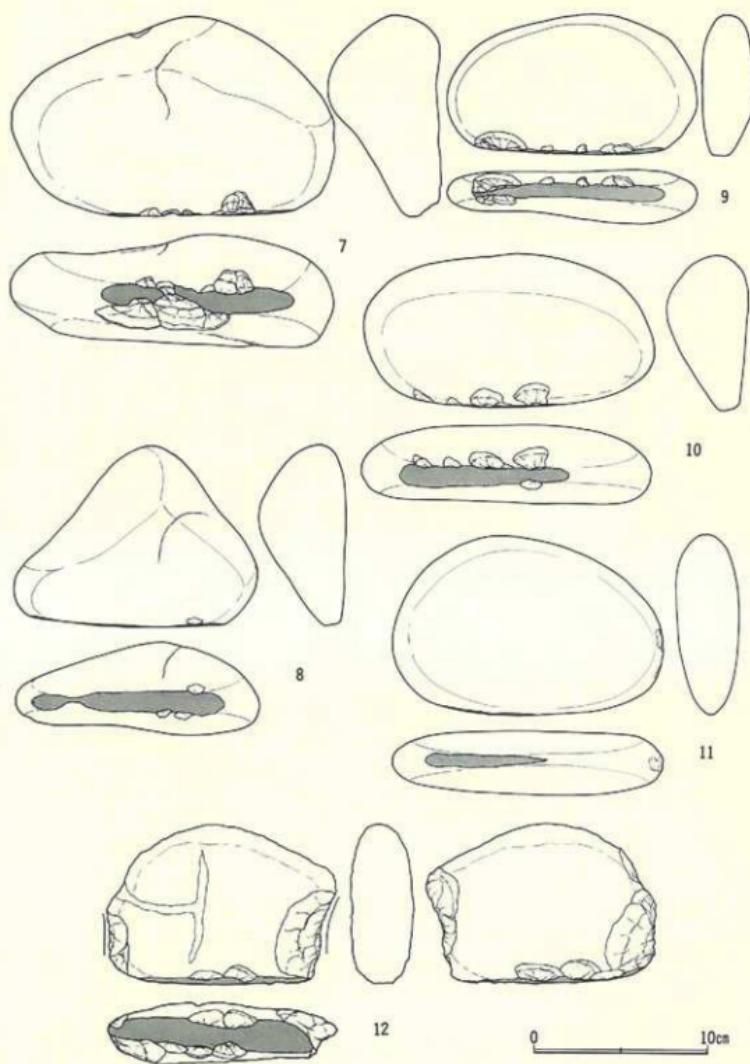
第4類（第116~119図、第120図64）（図版55~48~54、図版56）

本類は、21個出土しており、そのうち17点図示した。山形ないし横円形の石の長軸両端に打ち欠きを有し、更に長軸に添う辺に磨擦面を有し、他の部分にもほぼ全縁にわたって打ち欠きを有するものである。

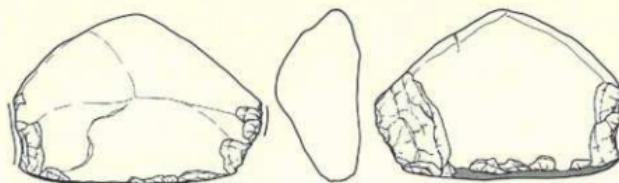
48~51は、第3類に分けることも可能であるが、山形の原石の頂部を欠失するので、取りあえず本類とした。48は、山形の原石の頂部と片面のはば全部を打ち欠いている。片面を半割した後に長



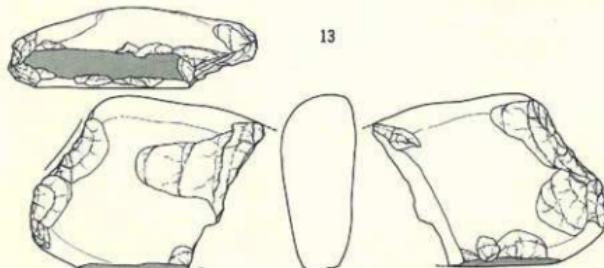
第106図 発掘区出土石器



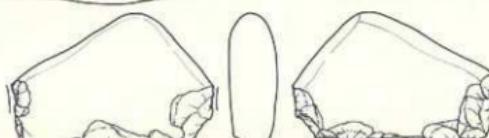
第107図 発掘区出土石器



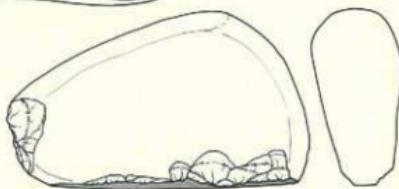
13



14



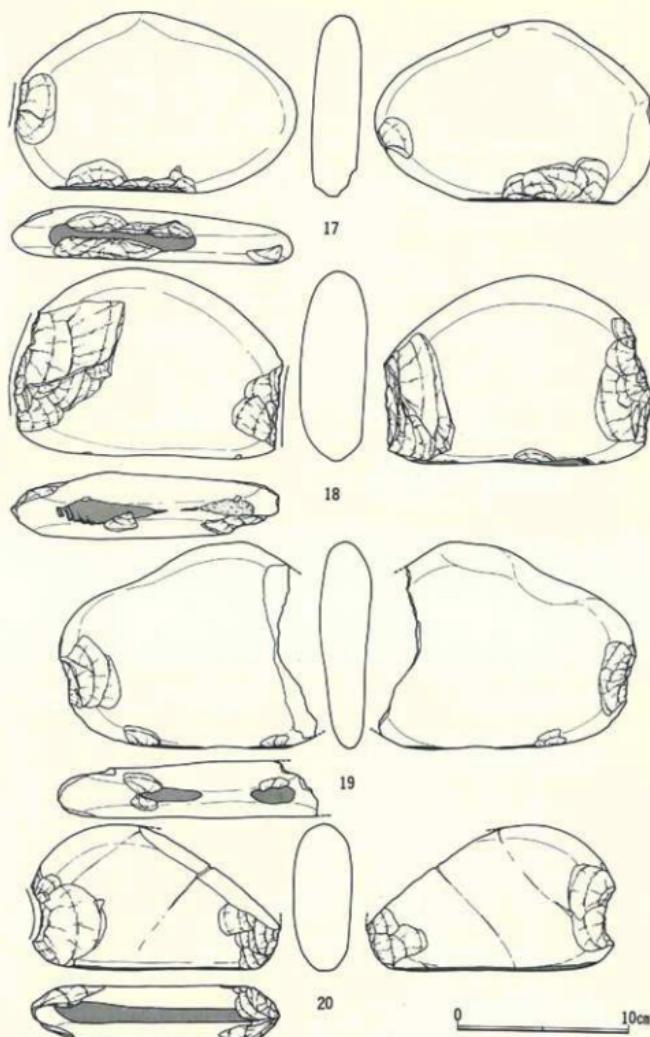
15



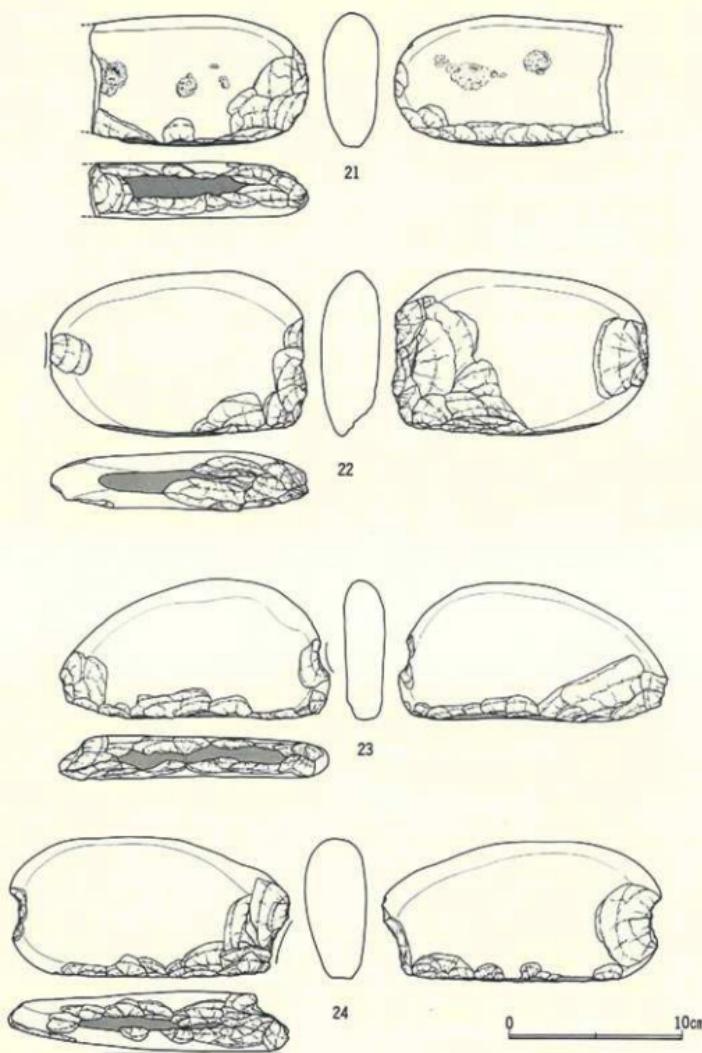
16

0 10cm

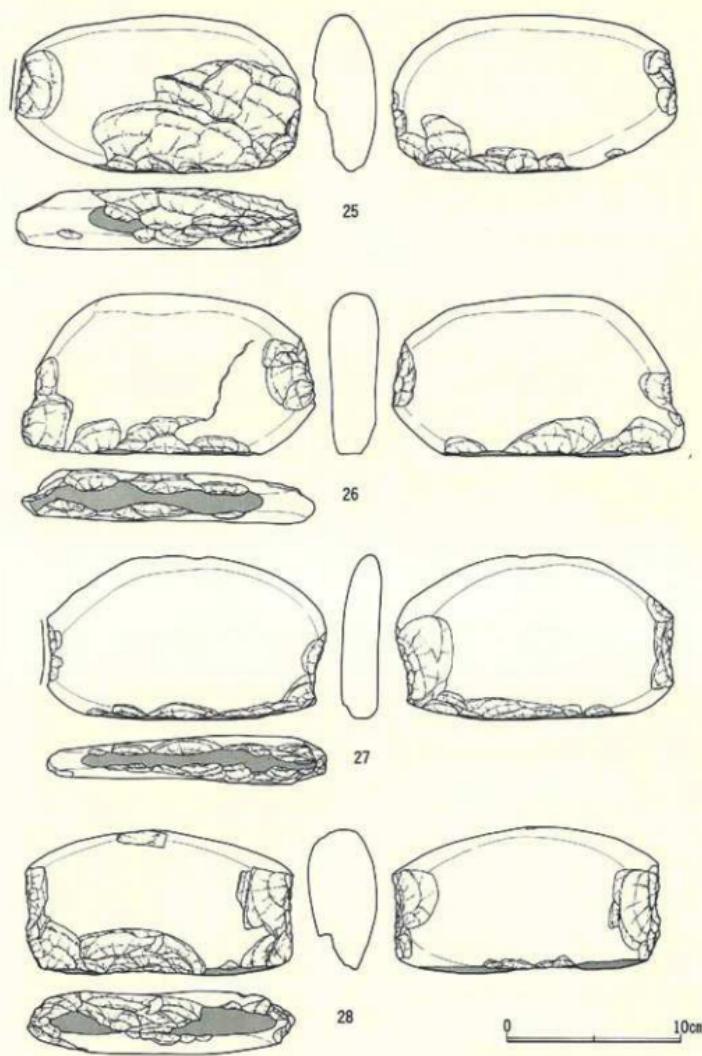
第108图 发掘区出土石器



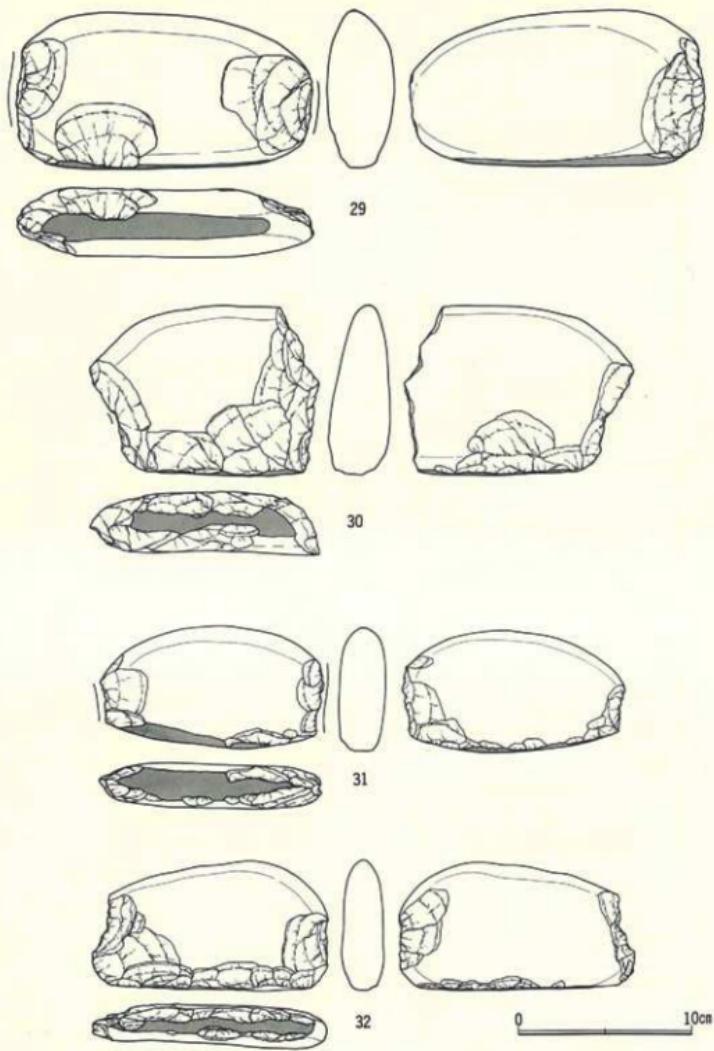
第109図 発掘区出土石器



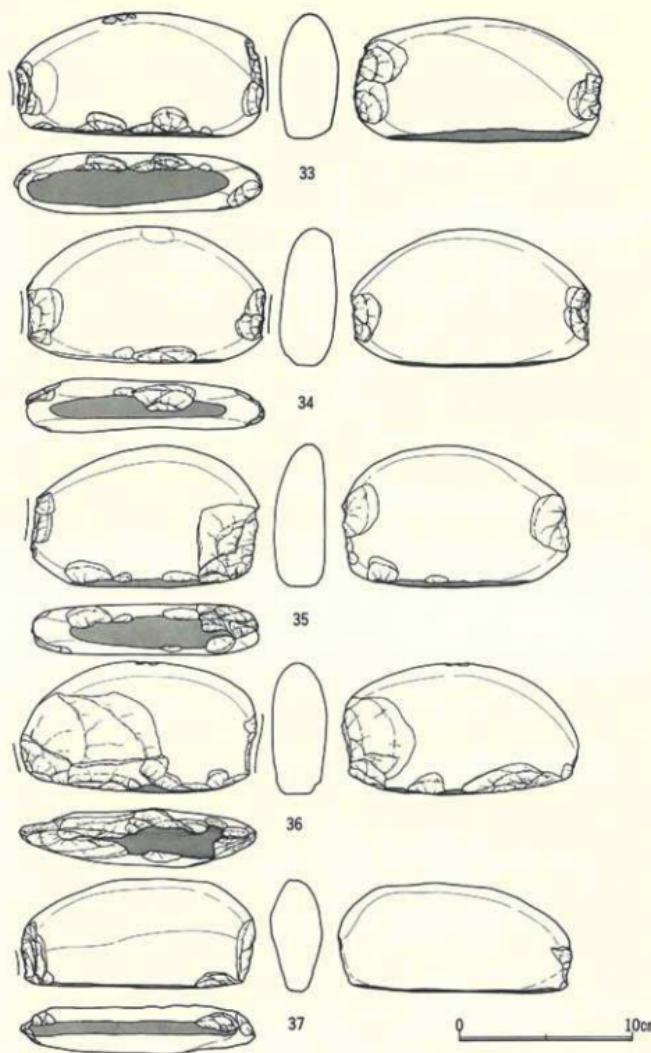
第110図 発掘区出土石器



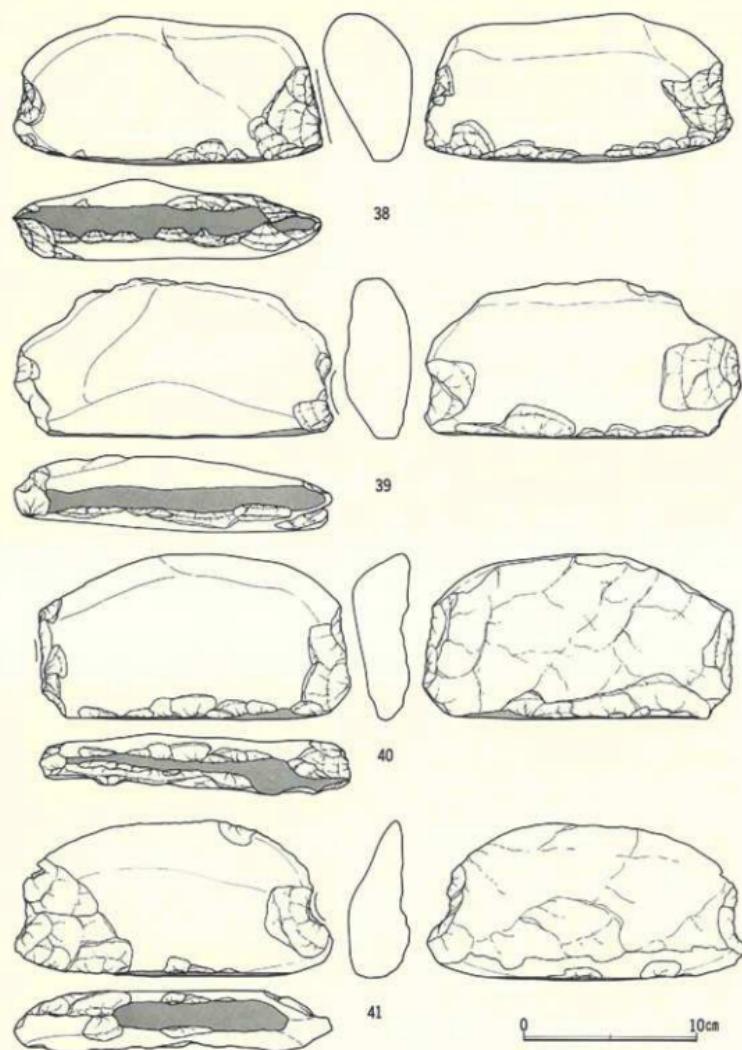
第111図 発掘区出土石器



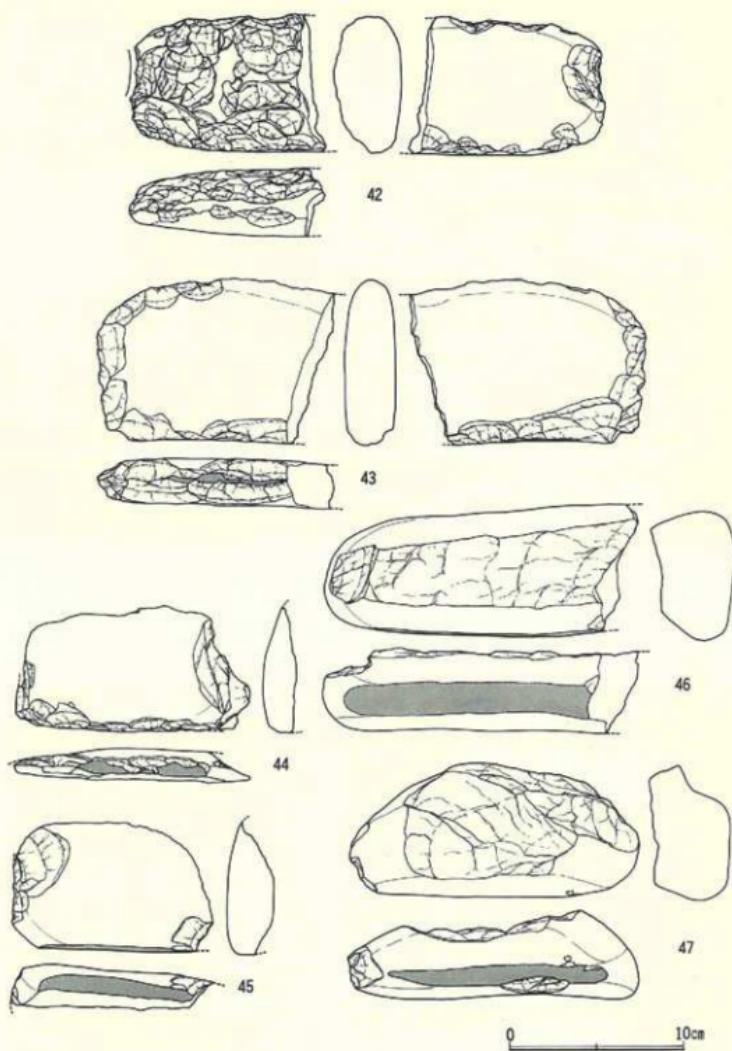
第112図 発掘区出土石器



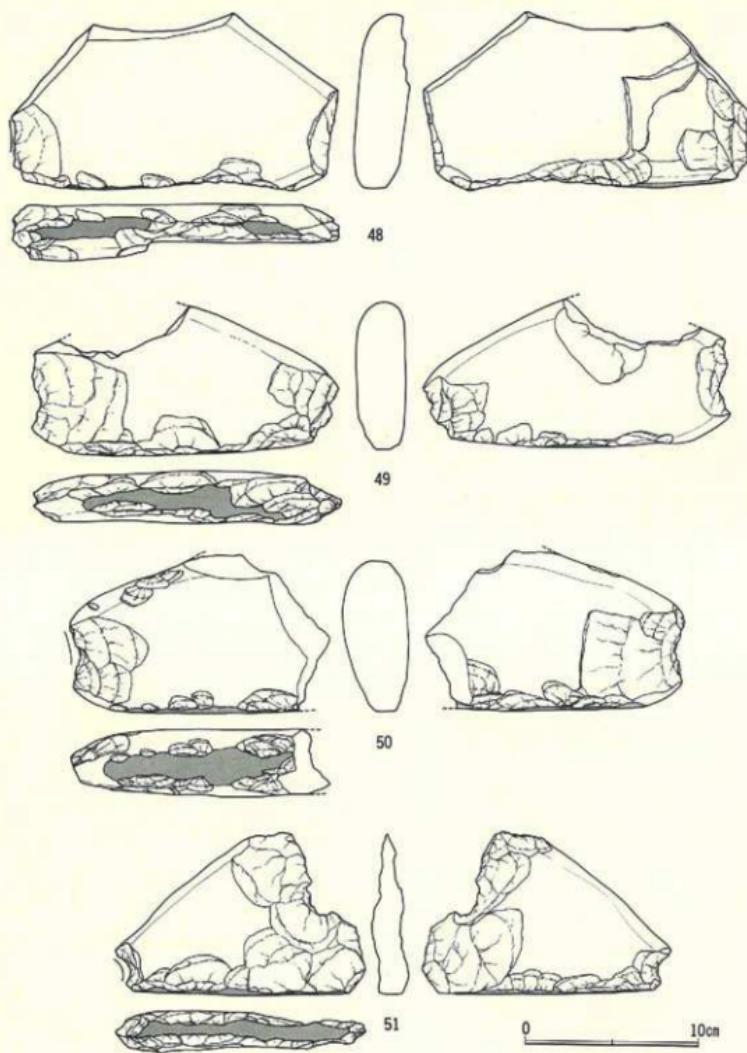
第113図 発掘区出土石器



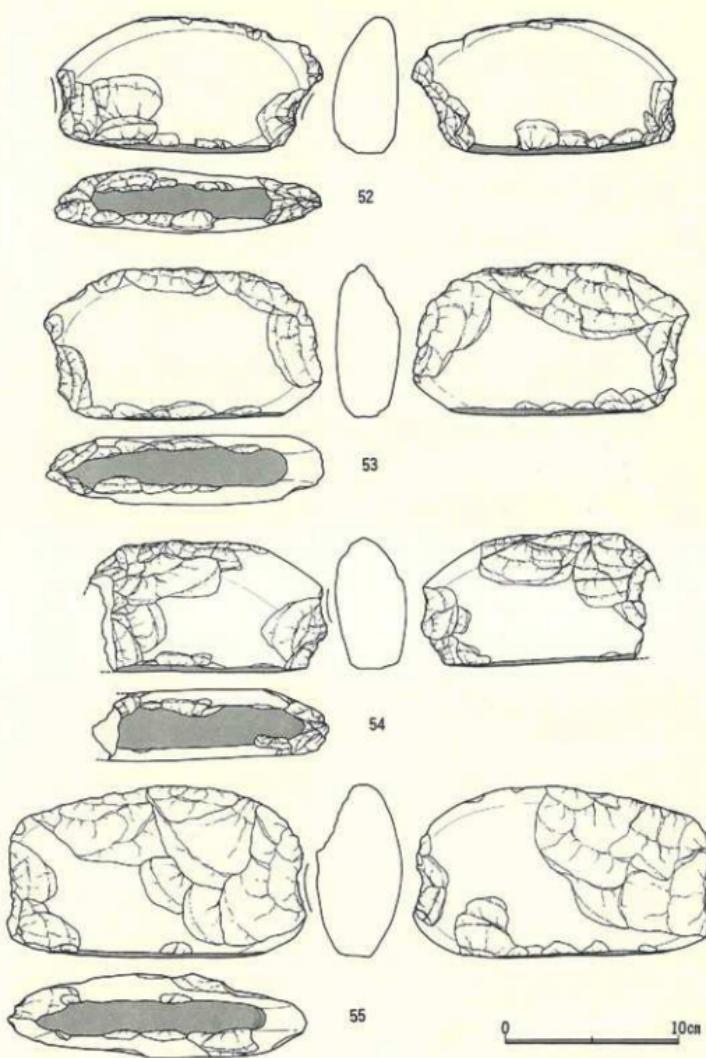
第114図 発掘区出土石器



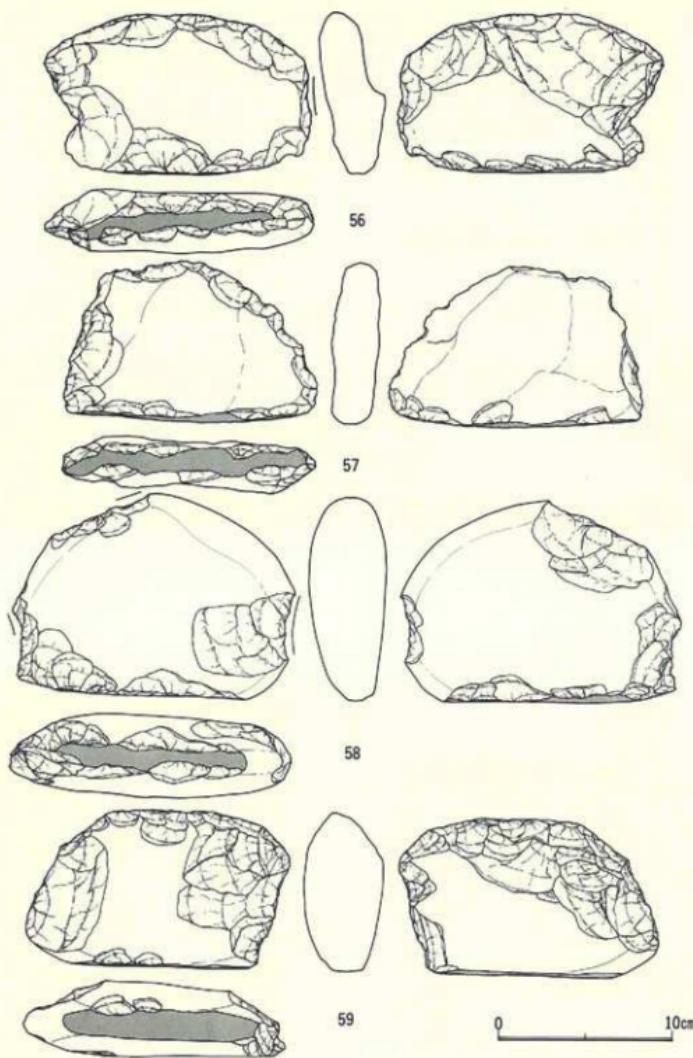
第115図 発掘区出土石器



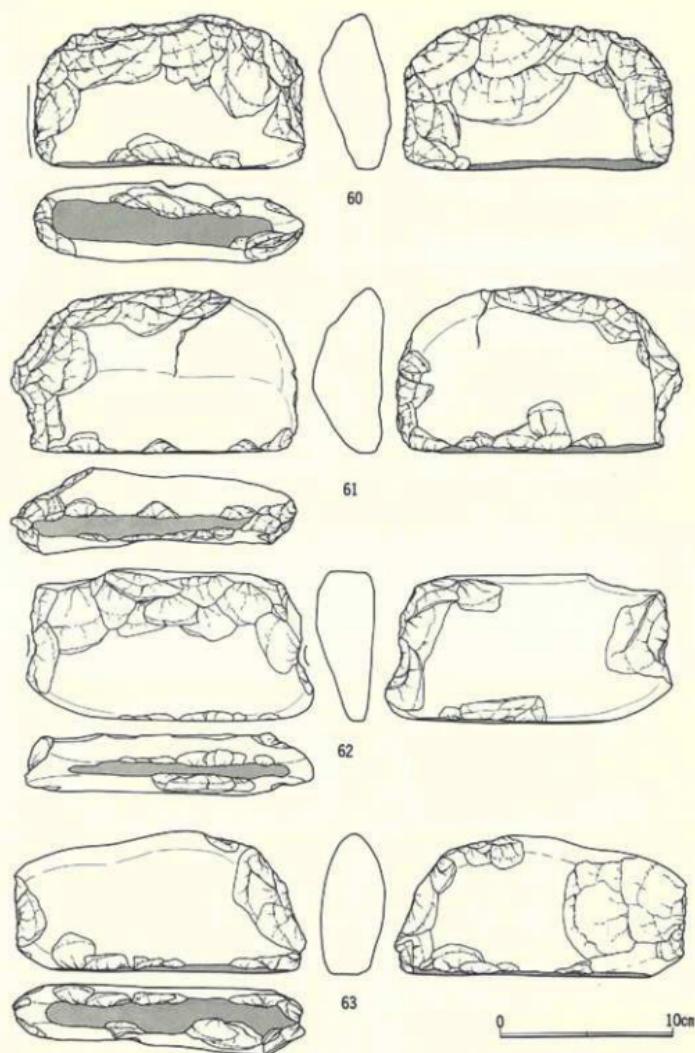
第116図 発掘区出土石器



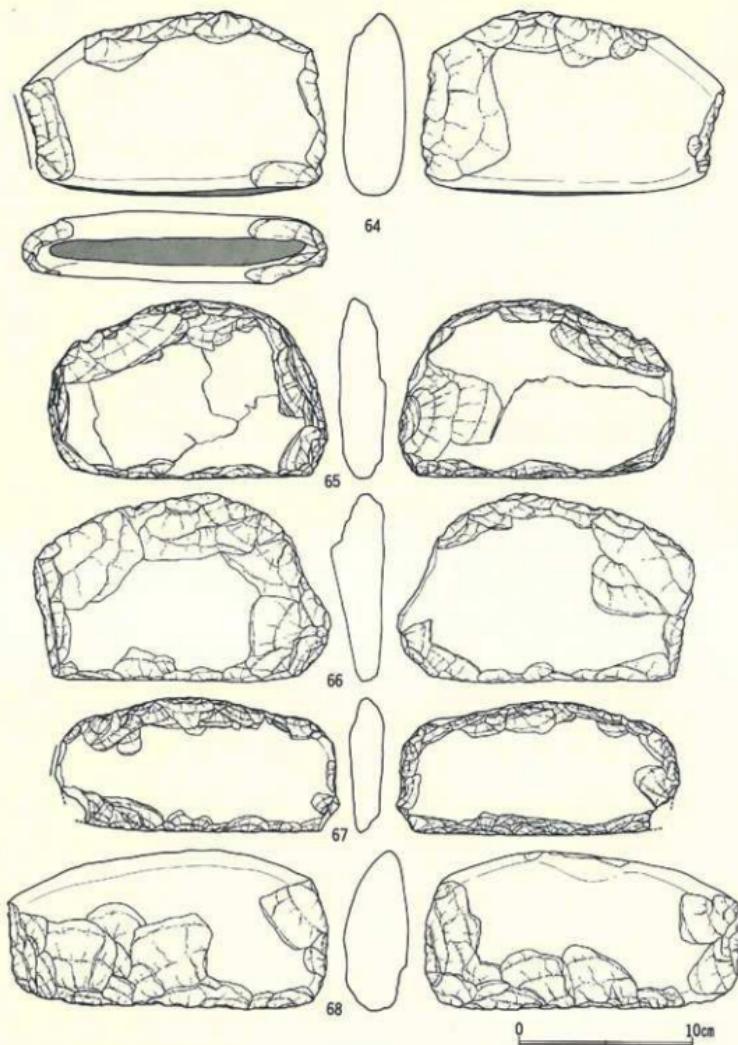
第117図 発掘区出土石器



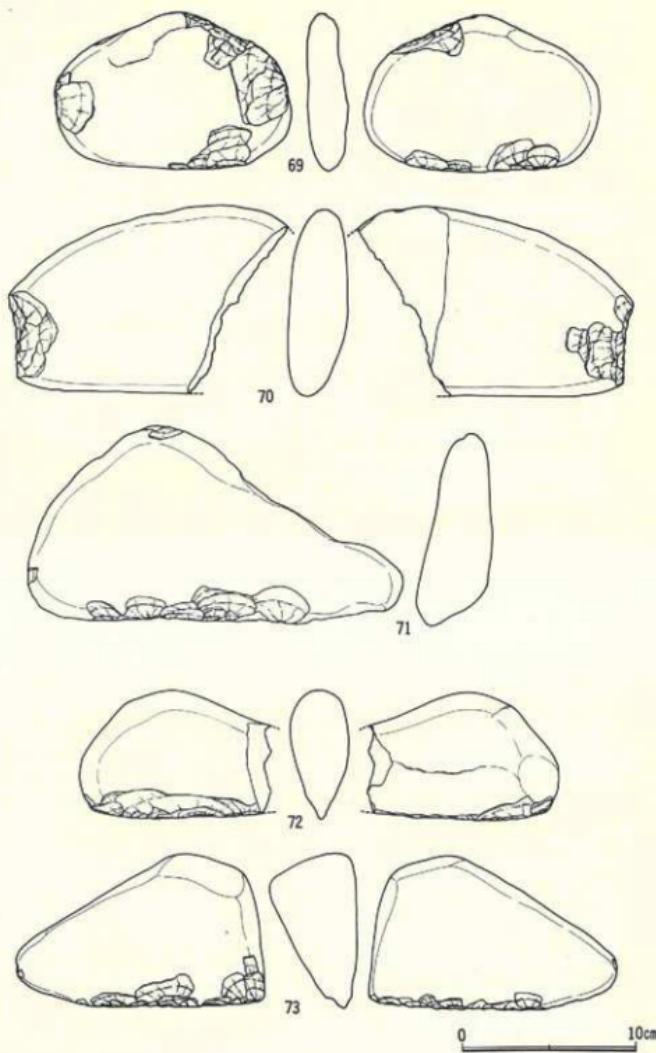
第118图 先振区出土石器



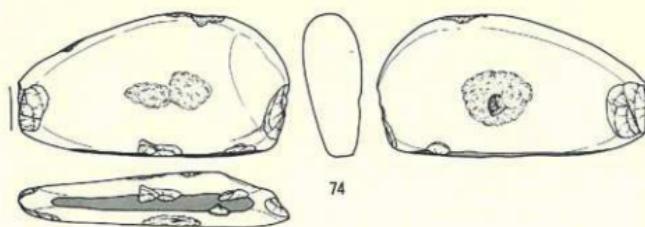
第119図 発掘区出土石器



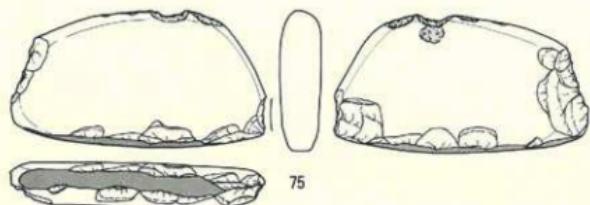
第120図 発掘区出土石器



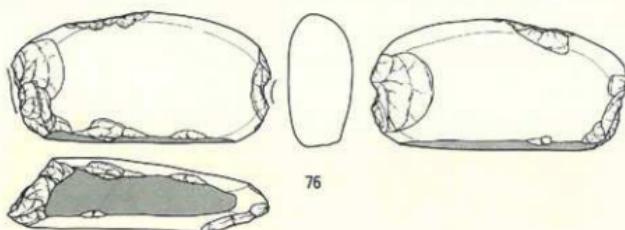
第121図 発掘区出土石器



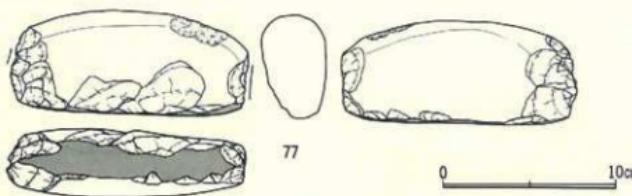
74



75



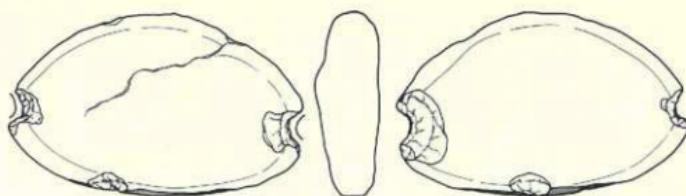
76



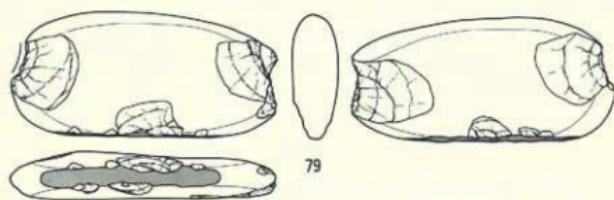
77

0 10cm

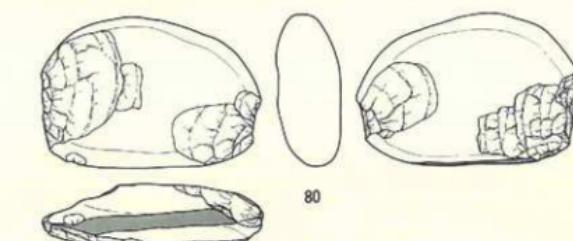
第122図 発掘区出土石器



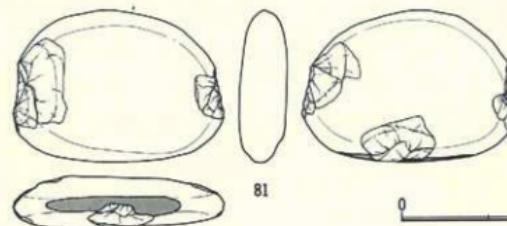
78



79

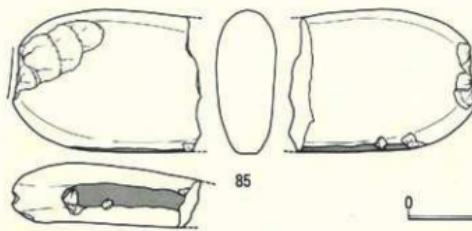
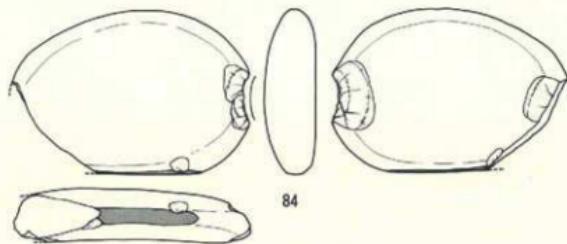
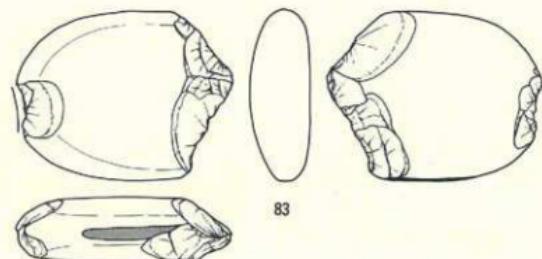
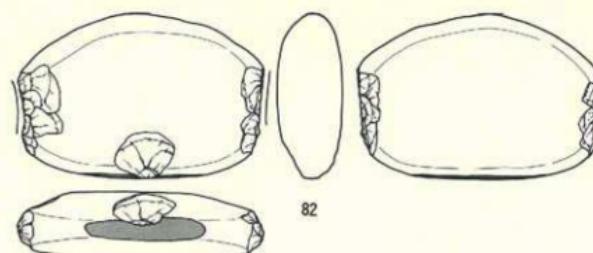


80



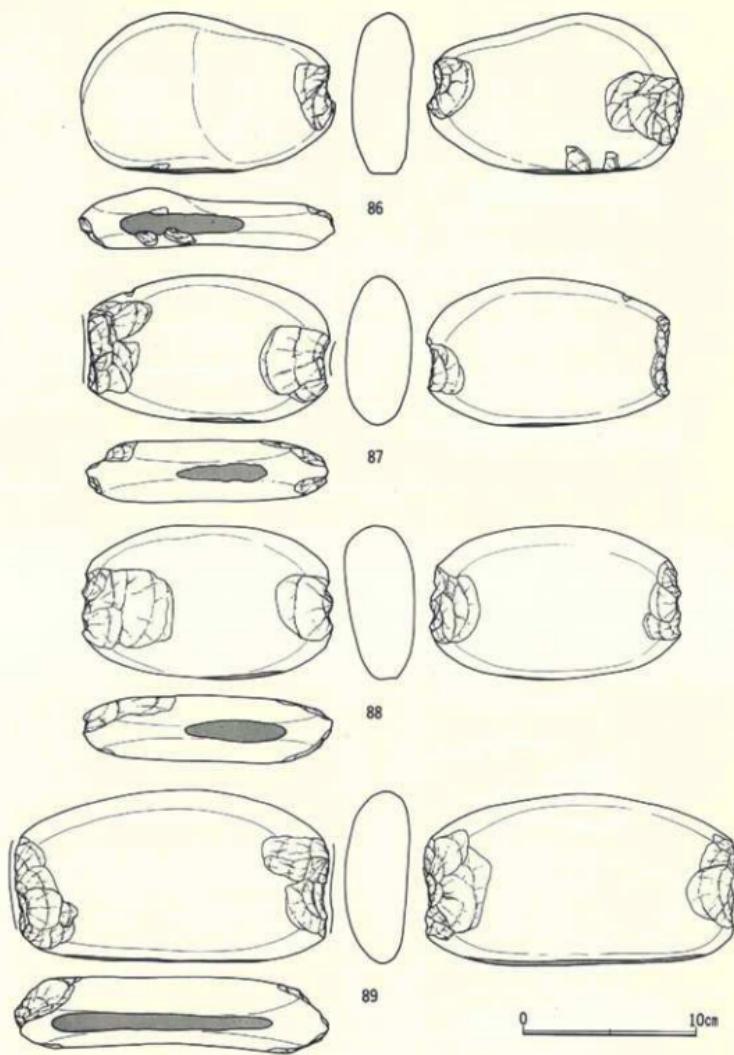
81

0 10cm

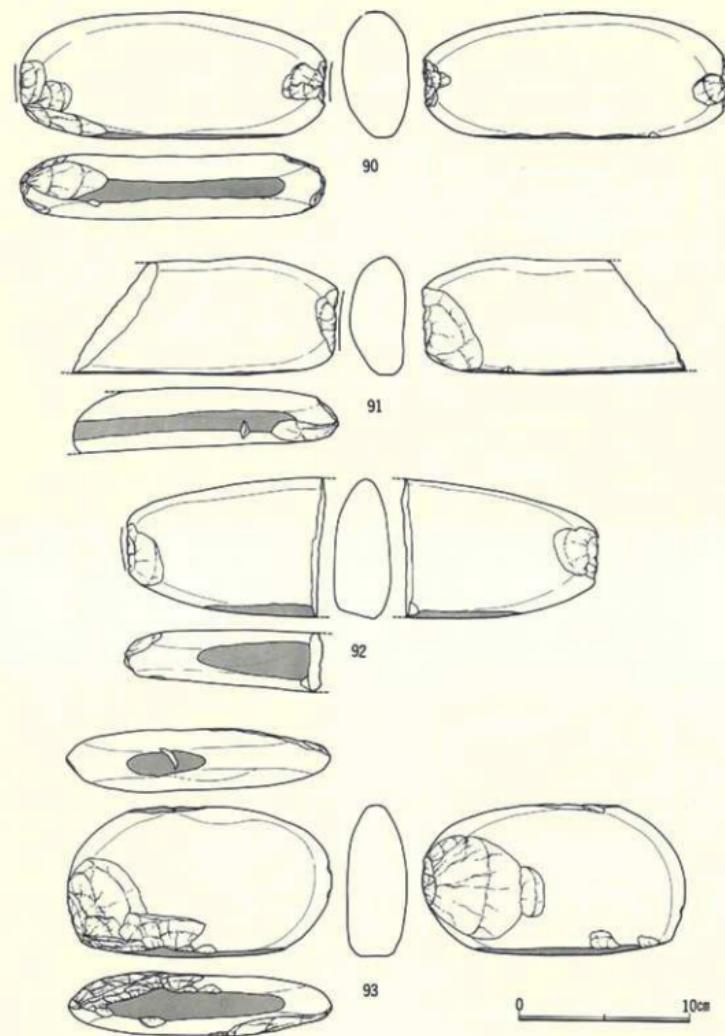


0 10cm

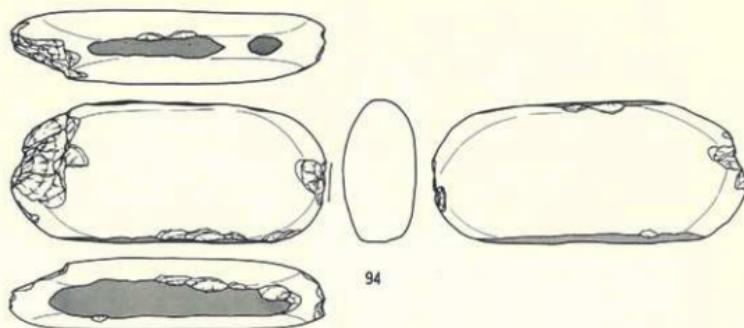
第124図 発掘区出土石器



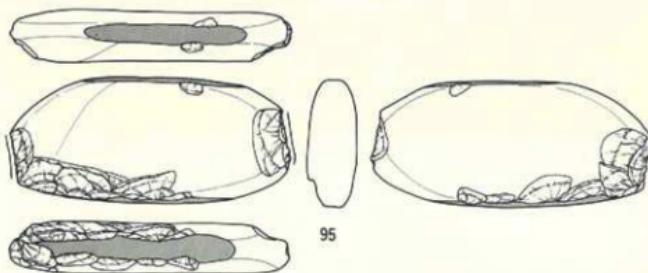
第125図 発掘区出土石器



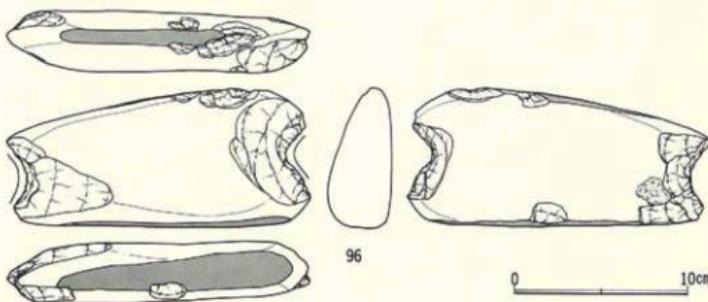
第126図 発掘区出土石器



94



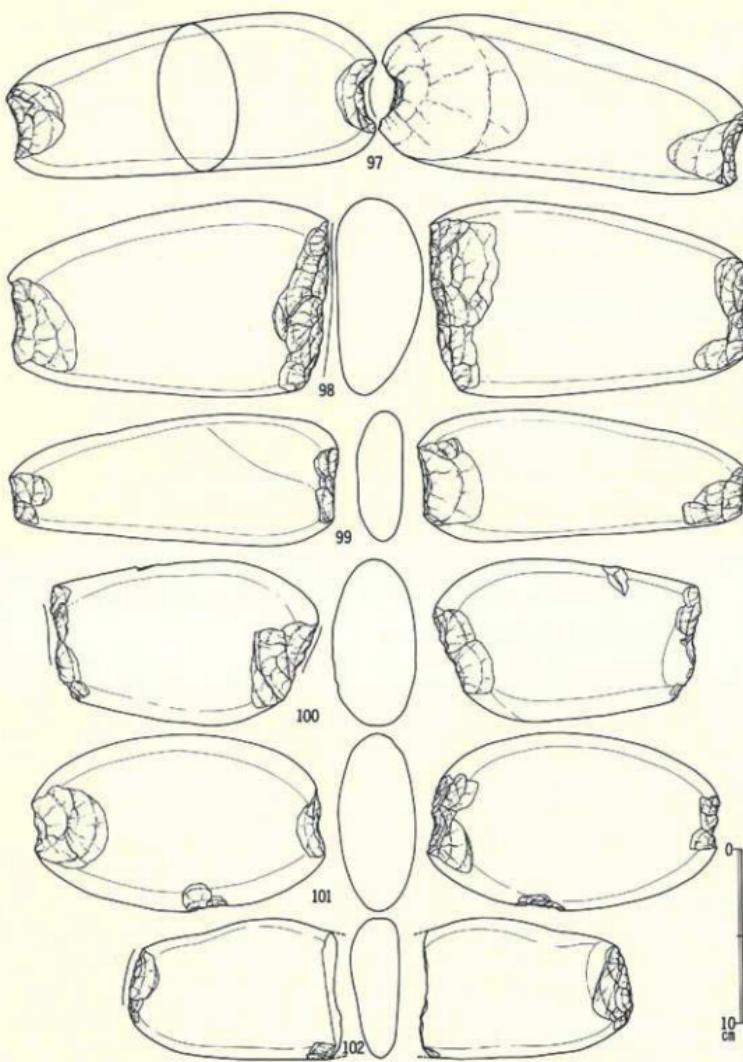
95



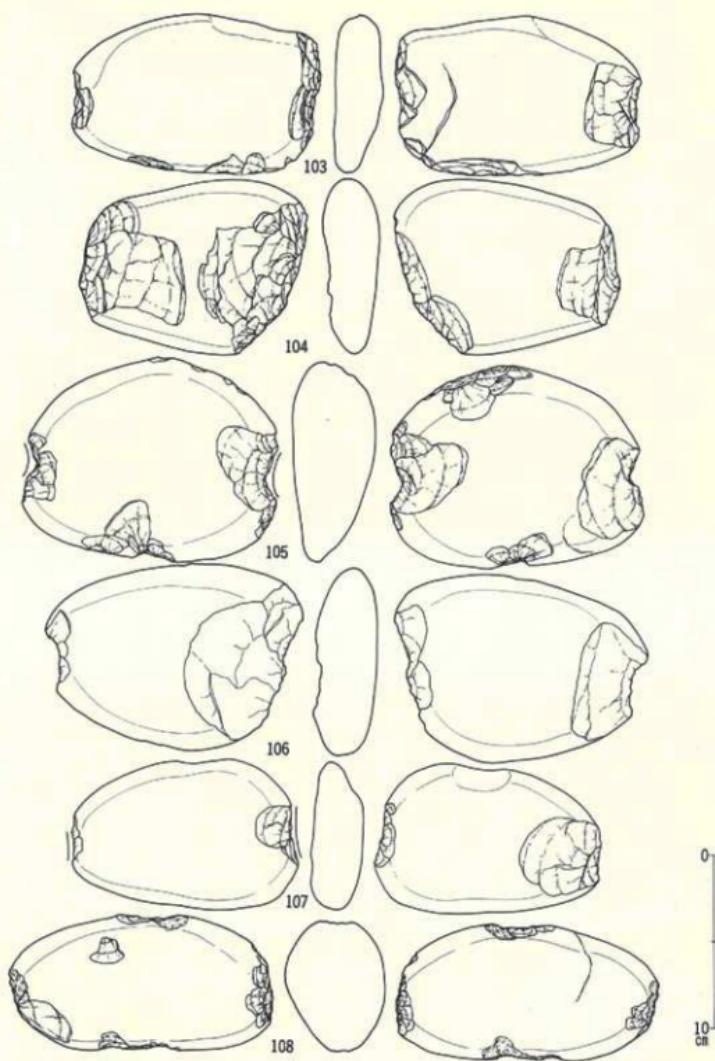
96

0 10cm

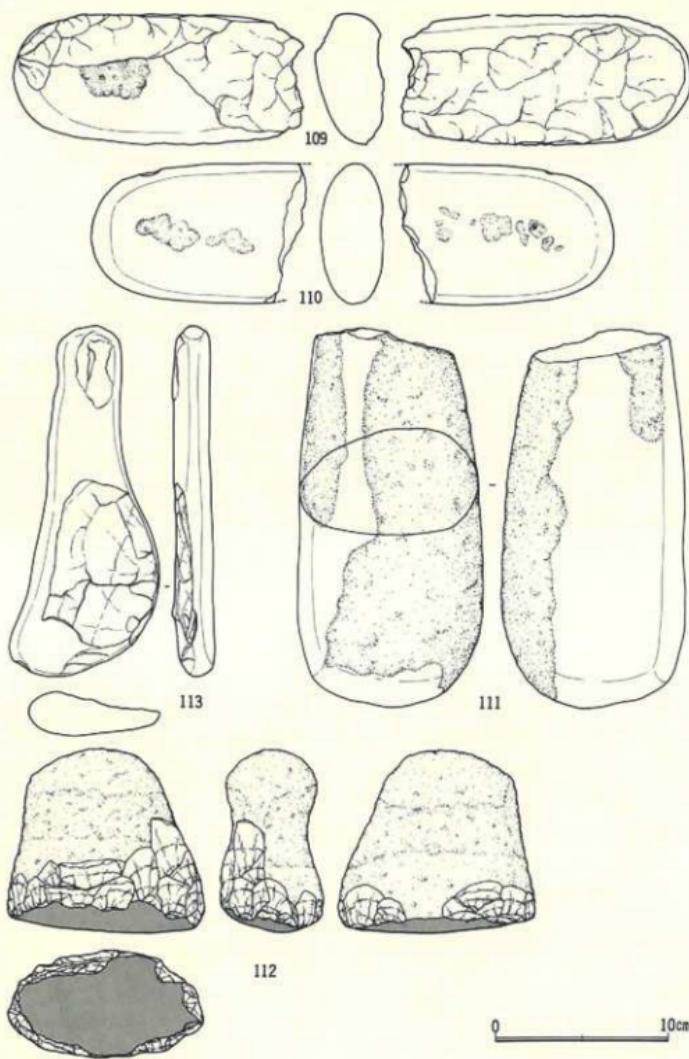
第127図 発掘区出土石器



第128図 発掘区出土石器



第129図 発掘区出土石器



第130図 発掘区出土石器

軸両端に打ち欠きを行ない、更に磨擦面の形成も行なわれている。面として割れ易い原石を使用しているため、この両端の打ち欠き、或いは磨擦面の両側の打ち欠きを加える際に片面が剥脱したものと考えられる。長辺の両側に打ち欠きを加えた後磨擦に使用している。49も同じく山形の石の頂部を欠く。長軸端に打ち欠きが加えられ、長辺の両側にも打ち欠きが見られる。長辺の磨擦は明晰な痕跡を示しておらず、敲打と磨擦の両方の用途に使用されたものである。50も、山形の石の頂部及びその半ばを欠失している。現存する長軸端の打ち欠きには磨耗の後が見られる。長辺の両側に打ち欠きを行なった後に磨擦面を形成している。なお、山形の辺の一つには、敲打に近い力による剥離を見る事ができる。51は、その半ばを欠失しており、残存部の長軸端の打ち欠きには磨耗が認められる。磨擦面の両側には、この辺を磨擦に使用する以前に打ち欠きを加えている。半分の欠損は、使用後のものである。

52~64は、いずれも楕円形の原石の長軸端に打ち欠きを加え、更に長軸の一縁に磨擦面を有するものである。

52は、長軸両端の打ち欠き部に磨耗が認められる。磨擦面の幅は、かなり広く、この両側に見られる打ち欠きは、痕跡を残すのみである。磨擦面と反対の縁はわずかに打ち欠きが見られるのみである。53は、長軸両端の打ち欠きに磨耗が見られない。磨擦面の幅は広く、両側の打ち欠きは痕跡を留めるに過ぎない。54は、長軸の一方を欠失する。残存部の打ち欠きの一部には、磨耗が見られる。磨擦面の幅は、かなり広くなるまで使用されている。55は、打ち欠きの一方に磨耗が見られる。両方の打ち欠きは、それぞれ異なる面に大きく欠いている。磨擦面の両側に行なわれた打ち欠きが痕跡のみを残す程度使用されている。56の両端の打ち欠きのうち片方には著しい磨耗が見られる。他の方は、かなり大きく打ち欠いている。磨擦面の両側に見られる打ち欠きは、それ程磨擦によつて減じていない。57は、大きな原石を打ち削って扁平の石を作り出して使用している。全縁に打ち欠きが見られるため、特に、長軸両端の打ち欠きを指摘することができない。長辺を磨擦面として使用している。58は、半円状の形態を示す。両端には磨耗痕のある打ち欠きがある。磨擦面の両側に打ち欠きが加えられた後磨擦に使用している。磨擦面と他の縁には、一部に打ち欠きが見られるのみである。59は、磨擦面を除く全縁に打ち欠きが行なわれている。磨擦面の片側2ヶ所に小さな打ち欠いた痕が見られる。また磨擦面と反対の縁には磨耗痕を認める事ができる。60も磨擦面を除く全縁に打ち欠きが加えられる。そのうち長軸の一端に磨耗が見られ、その磨耗痕は磨擦面の反対縁にまで続く。磨擦面は、あまり幅広くなく両側には、磨擦面の作られる以前の打ち欠きが見られる。61は、長軸の両端に打ち欠きを加え更に、磨擦面のはば音にも打ち欠きが見られる。磨擦面両側には、磨擦より古い打ち欠きがある。62は、断面が楔形の原石を使用し、その尖端の辺を磨擦面としている。両端の打ち欠きは抉りとなっており、磨耗が著しい。磨擦面の両側には、敲打による程度の打ち欠きが見られ、また、この反対の辺には、片面方向にのみ打ち欠きが行なわれている。63は、両端に打ち欠きを加え、磨擦面と反対に縁の一部にわずかな打ち欠きを行なうものである。磨擦面両側には、磨擦より古い打ち欠きが見られる。64は、両端の打ち欠きのうち一方に磨耗が認められる。磨擦面と反対の縁には一部を除いて打ち欠きが見られる。

第5類（第120図65～68、第121図）（図版57～65～73）

本類は总数11個出土し、そのうち9個を図示した。

形態的には、第3類、第4類に当るものであるが、磨擦面の見られないことを特徴とする。

65は、板状節理の石を使用し、その全縁に打ち欠きを加えている。66も65に同様であるが、底辺をなす部分は、他に比してそれ程鋭角な刃を作出していない。67も全縁に打ち欠きが見られる。そのうち長軸両端の打ち欠き部が磨耗している。68は、幅広い方の縁を両側に打ち欠いて更に、これに敲打を加えている。この反対の縁は、一部に敲打に近い打ち欠きを見るのみである。長軸両端に打ち欠きが見られる。69は、山形の石の長辺と他の一辺に打ち欠きを加える。70は、長軸端に打ち欠きを行なっている。約半分を失するが、現存部には、明瞭な擦痕を認めることができない。71は、山形の原石の長辺に打ち欠きを加える。72、73も同様である。いづれも打ち欠きの見られる辺は、かなり鋭い刃部を形成している。73の鋭角をなす部分には敲打痕が見られる。

第6類（第112図）（図版57～74、図版58～75～77）

本類は总数7個出土しており、そのうち4個を図示した。

山形ないし、楕円形の石の一様に磨擦面を有し、これと対称の縁に敲打痕の見られるものである。

74は、長軸両端に打ち欠きがありその一方が磨耗している。長辺に磨擦面が見られる。この磨擦面は、磨擦による痕のみでなく敲打痕も見られる。更に、これと対称の縁にも敲打痕がある。75は、同じく両端に打ち欠きがあり、更にその一方が磨耗している。磨擦面も74と同じような状態を示す。他の一縁にも敲打痕が見られる。76、77は、それぞれ似たような形の原石を使用しており、長軸端の打ち欠きの両方に磨耗が認められる。77の磨擦面の片側には、かなり大きな打ち欠きが見られる。両者ともに幅広の磨擦面が作られている。また、磨擦面の反対の縁に敲打の痕がある。

第7類（第123～127図）（図版58～78～86、図版59）

本類は、总数25個出土しており、そのうち19個を図示した。

楕円形の原石の長軸端を打ち欠き、長軸の1縁、あるいは2縁に磨擦面を有する。第8類に極めて近似するものであるが、両端の打ち欠きを結ぶ縁と対称形に近い点、磨擦面の両側に加えられる打ち欠きが極めて少ないが、全く見られないものが多いところから別にして取り扱った。即ち、本類の磨擦面両側に見られる打ち欠きは、明らかに使用の途中に生じたものと認められるものが多い。いわゆる石錐に近い形態を示すものである。

78は、両端の打ち欠きが深い挿りとなっているもので、この部分の磨耗が著しい。磨擦面に敲打による程度の小さな打ち欠きがある。79も両端の打ち欠きのうち片方に磨耗が見られる。磨擦面の片側にやや大きい打ち欠きがある。80は、両端の打ち欠きと1縁の磨擦面のみである。81は、磨擦面の片側にやや大きな打ち欠きがある。82も、両端の打ち欠きが著しく磨耗している点を除けば81に同じである。83は、おおよそ半ばから消失している。これは使用後の欠損である。打ち欠き部分の磨耗が著しい。磨擦面に打ち欠きは認められない。84も一部を消失している。両端に打ち欠きがあったと思われる。残存部の打ち欠きは磨耗しており、また欠損の生じた後も磨擦に使用している。磨擦面の一部に、小さな剝離がある。85は、使用後にその半ばを消失している。残存の打ち欠き部

分の磨耗が著しい。磨擦面は、単に磨擦の目的のみでなく敲打にも使用したと思われる明瞭な痕がある。86も、両端の打ち欠きに磨耗が認められない点を除けば、85に同様である。87は、両端の打ち欠きに磨耗が見られ、磨擦面を有するものである。88は、両端の打ち欠き部に磨耗が認められず他は87に同じである。89は、両端の打ち欠きに磨耗が見られ、磨擦面は、磨擦と敲打に使用されている。90~92は、他のものに比して細長い原石を使用しており、91~92は、その半ばを失するか、いづれも長軸両端の打ち欠き部に磨耗が認められる。90の磨擦面は、磨擦と敲打の両方の用途に使用されている。

93~96は、長軸の長縁に磨擦面の見られるものである。93は、両端をそれぞれ反対の面へ打ち欠いている。長軸の両縁に磨擦面を有する。94は、長軸端の片方は敲打により調整し、他方は大きく打ち欠いている。一方の磨擦面には敲打による痕跡も認められる。95は、両端の打ち欠きが磨耗しており、2面見られる磨擦面のうち一方の両側には、かなり大きな打ち欠きが加えられ、この後も使用されている。96は、両端の打ち欠きが深く抉れており、磨耗が著しい。一方の磨擦面の一部両側に打ち欠きが見られる。また、平面の片側一部に敲打痕が見られる。

第8類（第128図、第129図103~107）（図版60、図版61~107）

本類は13個発見され、そのうち11個を図示した。形態そのものから言えば大型の石錐として取り扱うことができよう。しかし、特に本報告書のなかで石錐として扱ったものより格段に大きく、磨擦面を持たない点を除けば第7類に近いので、一応便宜的にここで扱うこととした。大型の石錐として扱っても異議のないものであろう。

97は、両端の打ち欠きが深く抉られて、その一方が磨耗している。98は、両端の打ち欠きを行なって、更にその一方を敲打により調整している。99は、両端の打ち欠きに磨耗が認められない。100は、両端を打ち欠いた後磨耗が著しく見られる。101は、両端の打ち欠きと、長軸の1縁に小さな打痕の見られるもの。102は、半ばを失しているが現存の打ち欠き部の磨耗が見られるもの。103は、長軸の一縁にも打ち欠きの加えられるもの。104は、両端を大きく打ち欠いている。105は、両端の打ち欠きが深く抉れており磨耗が認められる。また、他の縁にも打ち欠いた痕が見られる。106は、両端をそれぞれ反対の面に大きく打ち欠いている。107は、打ち欠きに磨耗が認められる。

第9類（第106図4、第130図112）（図版51~4、図版61~112）

いわゆる北海道式石冠と呼ばれる仲間に属するものである。他の擦石の類に比して磨擦面が大きく、特に112は、表面全体を敲打と打ち欠きによって入念に整形している。

敲打痕のある石器（第129図108、第130図109~111）（図版61~118、109~111）

108は、断面形の楕円の石を使用しており、断面形の長軸両端の一部と平面形の長軸両端にかなり多くの敲打痕が見られる。109から111は、いわゆる擦石に近い形態を有するが、磨擦面が顕著でなく、面の部分に敲打痕があるものである。109は、片面に敲打痕の見られる原石面があり、その裏面は半削されている。110は、両面に敲打の痕が見られる。111は、他のものと異なり、周囲の一部に原石面を残すのみで、他を入念に敲打している。また長軸の一辺に、かすかな擦痕が認められる。

青竜刀形石器（第 130 図 113）（図版 61—113）

全長約 20 cm 弱の小型のものである。刃部にあたる部分に打撃を加えたと思われ、かなり大きな打ち欠きが生じている。

石皿（第 131～134 図）（図版 62～64）

本遺跡の発掘調査によって発掘区から発見された大型の石は、おおよそ 39 個を数えることができる。これらの石の多くは、本遺跡の崖下の海岸で見られるような石が多く、本来的には台地上に存在していなかったと思われる石が多いこと、更に、これらの石のすべてが遺物包含層から発見されていることなどを考え合せると、当時の人々が何らかの使用目的のもと/or 人為的に搬入したものであると考えることが妥当であろう。推測をたくましくすれば、いわゆる擦石と呼ばれる石器群との関連において捉えることができるのかもしれない。

ここでは、いわゆる石皿と從来から言われている用途に用いられた痕跡の明らかなもののうちから、代表的な数点を図示した。

112 は、長径約 40.6 cm、短径約 36 cm の不整円形で厚さ約 11.6 cm の石を使用している。表面は、やや湾曲する程に使用している。一部にかなり強い打撃による破損が見られる。周囲及び裏面は自然面そのままである。

115、1 辺 36.6 cm と 35 cm のやや方形に近い石で、厚さ約 8 cm である。表面は、かなり平らになるまで使用している。周囲及び裏面は原石面のままである。

116、長辺は約 40.4 cm、短辺約 34 cm の不整形の石で、厚さは約 11.2 cm である。表面は、全体的に水平に近い状態に使用している。他の面は、一部に欠損が見られるのみで自然面を多く残している。

117、長辺約 34 cm、短辺約 29 cm のほぼ方形で厚さ約 11 cm の石である。表面は、ほぼ水平になるように使用されている。1 辺を削って整形している。また、他の 2 辺も表面角を打ち割ることによって整形している。裏面と現存する長辺は原石面そのままである。

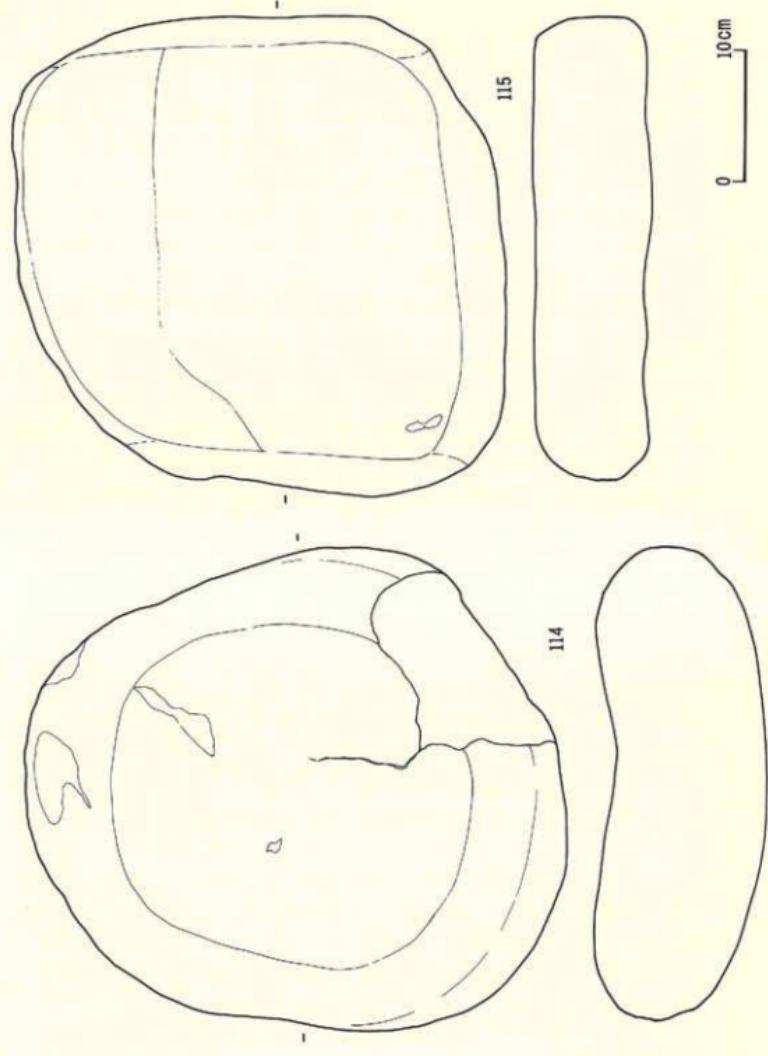
118、長径約 36.4 cm、短径約 24.6 cm の卵型に近い平面形で、厚さ 10.5 cm。表面中央部がやや凹みを見せる程度に使用している。他の面は、自然面そのままである。

119、現存部は長辺約 31 cm、短辺約 19.4 cm 1 角を欠くがほぼ方形であり、厚さ約 11.8 cm。現存部で見る限り、表裏ともに石皿としての用途に使用されている。更に、図示するように一面は、中央部が卵型に近い凹を作るまで使用されている。

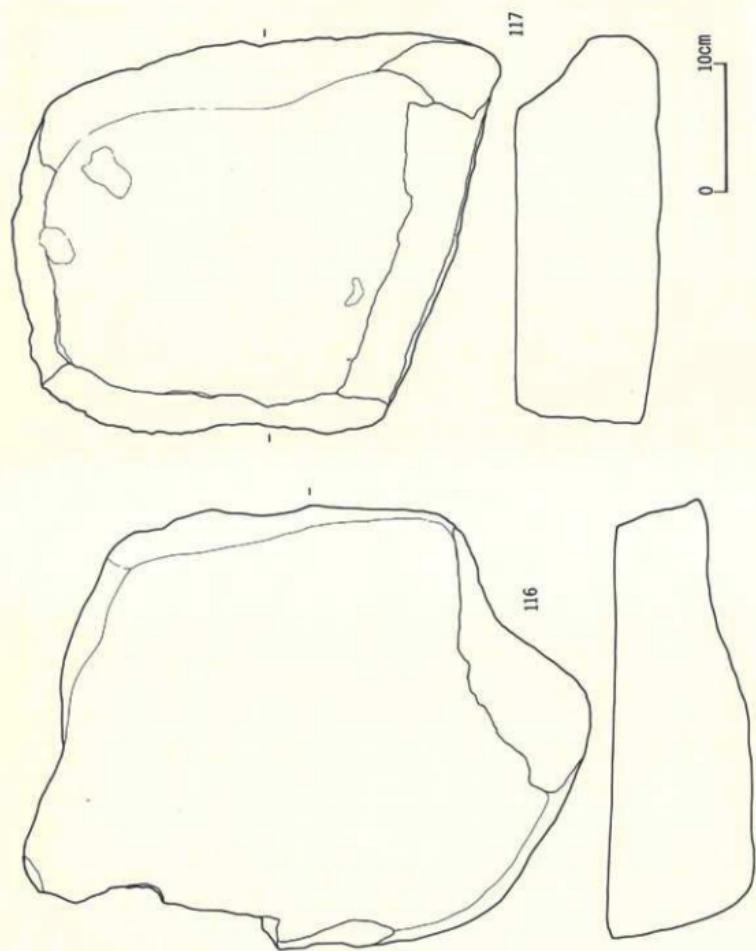
120、長辺約 29.6 cm、短辺約 20.6 cm、厚さ約 9.4 cm である。ほぼ方形を構成する自然石を利用している。表面は、かなり使用の痕が見られ、更に敲打痕も認められる。一つの角をかなり新しい力により欠失している他は自然面を残す。

121、長径約 36.4 cm、短径約 23.9 cm、現存厚最大約 7 cm、約 1 角を欠失するが平面形は卵型を呈するであろう。表面は、中央部が凹む程度に使用されている。尚、裏面は、欠損している。

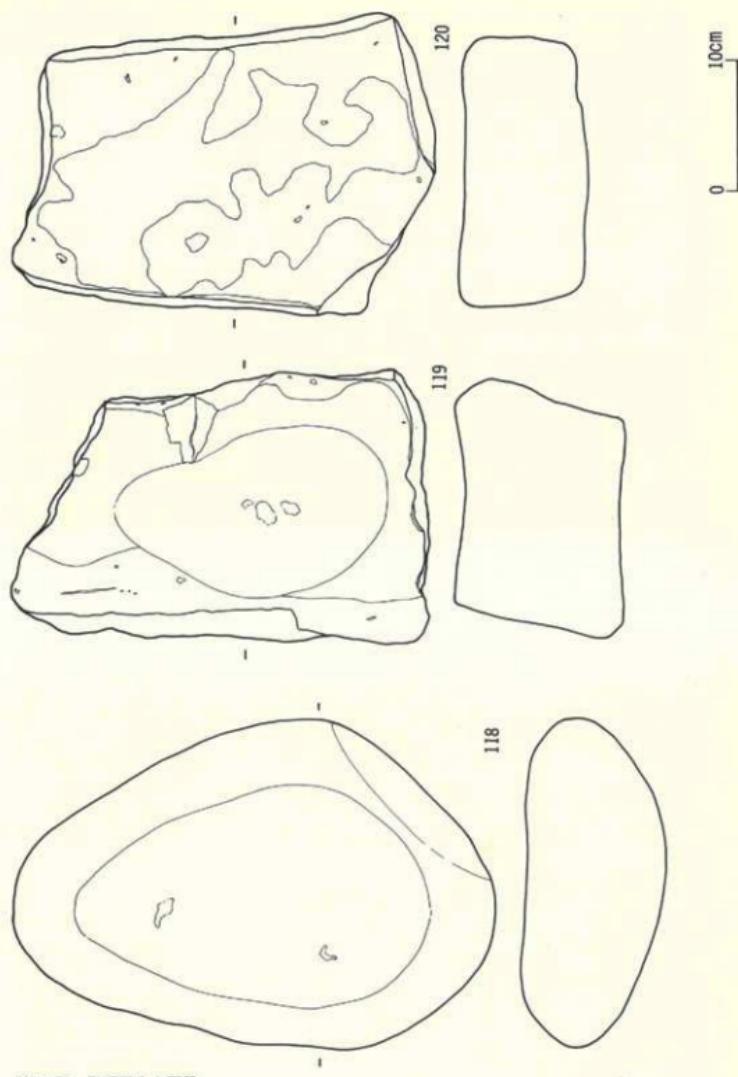
122、長径約 42 cm、短径約 27.4 cm、最大厚約 17 cm である。平面形は、方形を呈する。表面の使用以外は自然面である。



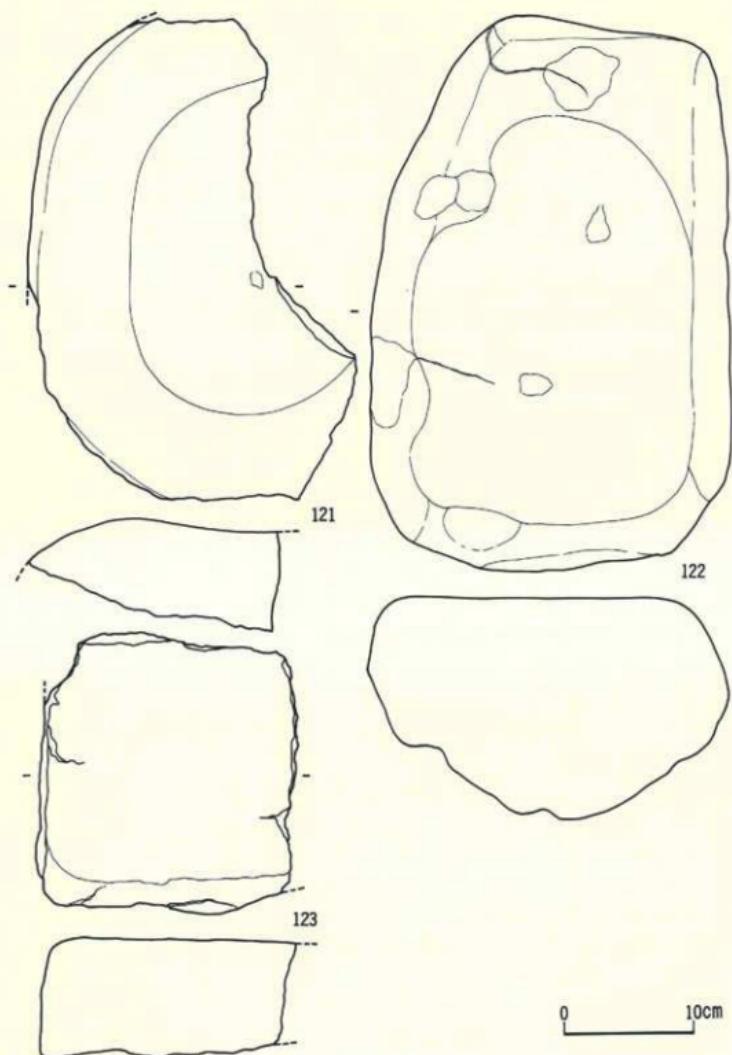
第131図 発掘区出土石器



第132図 発掘区出土石器



第133図 発掘区出土石器



第134図 発掘区出土石器

123、1辺約20cm×19.4cmの方形を呈する。厚さ約9cm、使用面は水平である。使用後に2辺が欠失しており、その原形を窺えないが本来はこれより大きかったものと思われる。

本遺跡の発掘調査によって出土した石器のうちで、特に礫を使用した石器の量の多さが目につく。更に、そのなかでもいわゆる擦石の範疇で捉えた石器が圧倒的多数を占める。これらの石器で、第5類及び第8類としたものは、いずれも磨擦に使用した明瞭な痕跡を認めることはできないが、一応形態的な特徴から便宜的に擦り石としての分類に入れたものである。第5類は、その形態が第3類・第4類に酷似するものであり、第8類は第7類に近いものである。特に第8類は、大型の石錐として取り扱うのが妥当であろう。

さて、本遺跡出土の擦石としたもののうち、第1類及び第2類に分類したものは、道内の縄文時代早期の遺跡に割合多く見ることができ、第3類から第7類は、前期・中期の遺跡に比較的多く見ることができる。特に、第2類から第7類としたものは、東北地方北半の縄文時代前期の遺跡で多く見られる、いわゆる横刃石斧、あるいは、半円状偏平打製石器等と呼ばれているものである。また、その用途についても、石斧に変わる用途を持ったもの、石よりやわらかいものを擦り切る等の見解が示されている。これらの説については村越潔氏（村越1974）、小笠原幸範氏（小笠原1978）によって詳細に論じられている。これらの見解に従って、本遺跡から発見された石器についての概観を述べるならば、次の如くとなろう。

第5類、第8類を除く石器のすべてには、長軸辺に磨擦に使用した痕を認めることができるため、本石器群が明らかに何物かを擦る、あるいは擦り切る目的のもとに使用されたことは、疑う余地のないところである。ただここで問題となるのは、磨擦面の両側に見られる打ち欠きがある。本遺跡出土石器のそのほとんどは、打ち欠きを加えた後磨擦に使用している。されば、この打ち欠きを加える理由としては、次の三点が挙げられよう。1) 第5類に見るように刃部を作出することを目的とする。2) 長軸の長く幅のせまい磨擦面を必要とする目的から調整を加えること。3) 磨擦に使用する過程で、物を打ち欠く目的にも使用することによって、使用途次に加えられた打撃により生じたもの。

以上の3点のうち、まず第1点についてであるが、第4類と第3類の多くを見ると確かに、この目的を肯定することもできる。しかし、第3類のなかには、刃部作出の目的とは認められない打ち欠きも見ることができるし、磨擦面の形成されている辺と反対の辺が鋭角をなし、直線的であるという例も見受けられる。更に、第7類に至っては、磨擦面両側の打ち欠きが全く見られないものが静数を占め、更に打ち欠きが加えられていても、刃部作出の目的とは考えられないものがほとんどである。このように見ると第4類を除いては、積極的に鋭利な刃部を必要としない磨擦に使用したものとも考えることができる。

第2の点についても同様な問題を指摘しうる。

第3の点は、第2類、第3類の一部、第7類にこれを認めることができる。

このように見て來ると、第5類を中心とした石器のように、何物かを切りそして擦る目的と、更

には、第2類、第7類を主とする石器のように、敲きそして擦るという目的に、それぞれある程度異なった2つの目的のもとに使用されたものと見ることができよう。

更に、長軸の両端に見られる打ち欠きについても、これが抉り込む状態になっているものとそうでないもの、また、第2類のように打ち欠きの全く見られないもの等がある。

これらの点を合せ考えると、本類の石器が從来言われているような單一対象物に対する目的のみに使用されたものではなく、かなり複数の対象物に使われたと考えができるのではなかろうか。例えば、從来言われているような樹木を擦り切ったり、樹皮を鞣したりの單一の用途のみでなく、その出土数の多量さと、本遺跡から多量に出土した石皿様の大型の石との関連などから、日常の食料加工、あるいは再加工の目的等の使用も併せ考えていくことも必要であろう。

ともあれ、ほんの近年に至るまで該種の石器は、土器、あるいは剝片石器等に比べて、その研究はおろか、報告書中における取り扱いについてまで、かなり等閑に付されてきたといえよう。本報告書では、その形状の窺い得るもののはんどんを詳細に図示することによって、今後の研究への一助としたいものと考えている。

(加藤邦雄)

引用参考文献

- 村越潔 1974 『円筒土器文化』
小笠原帝範 1978 『熊沢遺跡－東北縦貫自動車道路建設埋蔵文化財発掘調査報告書』

第6章 結 語

検山郡上ノ国町小砂子遺跡の発掘調査の概要については、各章、各節に分けて述べて来た。

本遺跡の発掘調査は、第1章でも述べた如く、小砂子港の整備にともなう関連道路敷設工事予定期内の事前調査である。そのために発掘区域が道路幅約10m～15mに限定された範囲内ののみであった。即ち、ほぼ台地上の全域に広がる小砂子遺跡のはんの一部の内容のみ明らかにしたにすぎない。しかし、この限定された範囲の発掘調査によって、我々は、かなり多くのことを知ることができた。発見した土器は、縄文時代早期・中期・後期そして晚期とすべての時期にわたって見ることができる。そのなかでも、今回の発掘調査では、縄文時代中期のノグッブII式、あるいは、本州の大木系土器の影響下におかれる土器が主体的に発見された。本州北部と道南は、津軽海峡によつて一衣帶水の関係にあり、両者は常に相互に大きな影響を与えながら文化を発展させて来たと言えよう。

発見した遺構は、竪穴住居跡10軒、埋甕1個である。これらの住居跡は、いづれも縄文時代中期ノグッブII式土器か、或は、それに近い時期の住居跡である。ただ、誠に残念なことに、本遺跡の住居跡のすべてが、かなりの降雨後の条件のよい時でなければ、その平面プランを確認することが困難であったということである。そのため、発掘した住居跡の多くは、発掘調査によってその一部を破壊した後に、そのセクションをもって始めて確認したという状況であるために、その全形を全うするものが非常に少ないとある。これは、調査員一同の力量不足に帰するものであろう。今後は、このように難解な遺跡のあるべきことを肝に銘記し、二度と同じ誤ちを繰り返さないようにしたい。

発見した石器のうち、その半分は、いわゆる擦石、あるいは半円状偏平打製石器と呼ばれる礫石器である。これらの石器は、これまでほとんどかえり見られることもなく過されて来たとも言えよう。本報告書では、ある程度の時間的、金錢的無駄を覚悟の上で、従来よりもやや詳細な実測図と写真を掲げることによって、今後の研究への一石となればと念じている。

(加藤邦雄)



第1表 堅穴住居跡一覧表

住居跡	発掘区	平面形	規 模		長軸 方向	備 考
			平 面 (m)	深さ(cm)		
1	B-8, 9	隅丸方形	3.15以上×3.0	20	北西-南東	
2	I-3, 4	楕円形	4.4×3.15	30	北東-南西	石器1点
3	D-6, E-6	楕円形	3.5×3.1	20	北東-南西	
4	G-4, H-4	隅丸方形	3.25×2.65	25	東-西	焼土無し、壁・床軟弱(住居跡?)
5	I-2, 3, J-2, 3	楕円形	3.55内外×2.8内外	20	北東-南西	
6	E-4, 5	楕円形	3.0以上×3.1	20	南-北	
7	G-2, 3, H-2, 3	円 形	4.2×4	35	南-北	焼土3ヶ所、石棒、遺物多い
8	F-3, 4, G-3, 4	楕円形	4.05×3.1	18	北東-南西	石棒
9	H-2, I-2, 3	楕円形	3.5内外×2.55	25	北北東-南南西	灰のつまつたビット
10	H-3, 4	楕円形	2.9×2.3	15	北北東-南南西	

第2表 ピット一覧表

ピット	発掘区	平 面 形	構 造	規 模			長軸 方向	備 考
				開 濟 部 (m)	墳 底 部 (m)	深さ(cm)		
1	G-4, 5	長楕円形	溝状	2.01×0.5	1.81×0.18	0.5	東-西	石器1点
2	F-3	長楕円形	溝状	2.5×0.54	2.42×0.17	0.7	東-西	
3	G-5, F-5	長楕円形	溝状	2.0以上×0.54	1.5以上×0.15	0.54	北東-南西	土器若干、石器1点
4	I-2	長楕円形	溝状	1.96×0.45	1.1×0.15	0.45	北西-南東	

第3表 造構内出土石器計測一覧表

探査番号	出土地区	類別	全長(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	重量(g)	石質	備考
6-1	第1号住居跡	石錐	41	18	10	2	Sha.	
10-1	第2号住居跡	石錐	39	13	7	2.9	Sha.	
2	+	+	44	15	7	3.8	Sha.	
3	+	+	46	18	8	3.3	Sha.	
4	+	+	32	14	6	2.1	Sha.	
5	+	+	26	13	4	1.0	Sha.	
6	+	+	33	16	7	2.5	Sha.	
7	+	削器	61	22	6	6.1	Sha.	
8	+	+	61	28	7	14.0	Sha.	
9	+	石斧	79	28	10	41.4	Gre.-mu.	
15-1	第3号住居跡	石錐	(27)	(22)	(8)	(4)	Sha.	
2	+	削器	(35)	(34)	(7)	(9.3)	Sha.	片面加工、石器の刃部?
3	+	+	61	36	9	19.1	Sha.	
4	+	石錐	63	58	23	133.1	Che.	
5	+	擦石	132	89	44	820	Gne.	
6	+	石皿	(332)	(126)	110	11,950	An.	
17-1	第4号住居跡	鈎先	(36)	19	(7)	(3.8)	Sha.	尖頭部片面削脱
20-2	+	擦石	114	164	34	1,000	And.	第7類
22-1	第5号住居跡	石錐	28	13	4	1.2	Sha.	
2	+	+	38	12	5	1.5	Sha.	
3	+	+	40	16	6	2.6	Sha.	
4	+	鈎先	(60)	25	10	(11.0)	Sha.	柄部一部欠損
5	+	石斧	59	14	6	6.5	Mu.	
24-6	+	擦石	101	156	32	550	Tu.	第6類
7	+	+	90	110	34	550	And.	第3類
8	+	+	88	152	24	350	And.	第3類
26-1	第6号住居跡	石錐	31	16	4	1.7	Sha.	未成品?
2	+	石錐	44	17	5	3.5	Sha.	
3	+	削器	37	31	13	14.3	Sha.	
4	+	+	82	42	20	79.1	Mu.	
29-5	+	擦石	62	106	22	180	And.	第4類
6	+	+	80	102	32	310	And.	第3類
35-7	+	砾石or石皿?	390	218	92	9,400	And.	
32-2	第7号住居跡	石錐	(25)	17	5	(1.7)	Sha.	尖頭部欠損
3	+	削器	(33)	24	6	(4.9)	Sha.	
4	+	+	46	31	11	15.5	Sha.	
5	+	+	34	39	8	12.7	Sha.	

第4表 発掘区出土石器・石製品計測一覧表

検査番号	出 土 地 区	類 別	全長(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	重量(g)	石質	備 考
91-1	A-8 1層	石 繩	23	13	2	0.5	Sha.	
2	B-16 1層	◆	32	10.5	4	1	Sha.	
3	A-13 2層	◆	29	10	4	1	Aga.	
4	I-3 2層	◆	40.5	14	7	3.4	Mu.	
5	G-4 3層	◆	43.5	14	5	2.3	Sha.	
6	I-3	◆	29	14	4	1.5	Sha.	
7	I-3	◆	34	14.5	7	2.3	Sha.	
8	H-4 3層	◆	30.5	14	6	0.9	Sha.	
9	A-8 2層	◆	42	16	8	4	Sha.	
10	表 採	◆	45	17	8	5.7	Sha.	
11	C-8 2層下	◆	34	15	7	2.4	Sha.	
12	I-3 1層	◆	31	11	6	1.2	Sha.	
13	G-3 3層	◆	44.5	14	6	2.6	Obs.	
14	D-4 2層	◆	30	14	4	1.7	Mu.	
15	I-3	◆	22	9	3	0.4	Obs.	
16	C-10	◆	49.5	16	7	4	Sha.	
17	I-3 3層	◆	28	14.5	5	1.8	Sha.	
18	I-3	◆	27	14	5	1.3	Sha.	
19	B-7 2層	◆	38	14	6	2.3	Sha.	
20	G-3 3層	◆	(27)	14	5	(1.5)	Sha.	尖頭部欠損
21	I-3 2層	◆	(25)	28	4	(1.7)	Sha.	*
22	H-3 2層	◆	29	10.5	4.5	1.6	Sha.	
23	C-8 2層	◆	24	13	4	0.8	Obs.	
24	E-6 2層	◆	34	14	8	2.1	Sha.	
25	A-10 1層	◆	(40)	18	7	(4.4)	Che.	尖頭部欠損
26	E-6 2層	◆	35	15.5	6	2.5	Sha.	
27	H-2 2層	◆	28	15	6	1.8	Obs.	
28	D-8 1層	◆	29	15	7	2.2	Sha.	
29	G-2 3層	◆	25	13	4	1	Obs.	
30	D-6 3層	◆	29	15	4	1.6	Sha.	
31	D-6 2層	◆	30	14.5	4	1.7	Sha.	
32	G-2 1層	◆	(30.5)	14	6	(1.6)	Sha.	尖頭部欠損
33	I-3	◆	(21)	14	5	(1)	Obs.	*
34	E-6 3層	◆	(25)	17.5	8	(2.8)	Sha.	基部欠損
35	I-3	◆	(34)	21	5	(2.2)	Sha.	尖頭部欠損
36	I-3 3層	◆	28	15	4	1.3	Sha.	
37	H-3 2層	◆	(22)	14	4	(1)	Sha.	尖頭部欠損
92-38	I-3	◆	36	14	6	3	Sha.	
39	H-3 2層	◆	38	14	5	2.1	Sha.	
40	I-3 3層	◆	30	16	5	2.2	Sha.	
41	G-2 2層	◆	33	18	6	3.2	Mu.	
42	H-4 表土	◆	36	16	3	1.9	Sha.	
43	H-3 3層	◆	49	15	6	3.8	Sha.	
44	B-8 2層	◆	41	13	6	2.3	Sha.	

捲筒番号	出 土 地 区	類 別	全長(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	重量(g)	石質	備 考
92-45	C - 6 2層	石 鐵	31	14	4	1.2	Sha,	
46	H - 3 1層	*	29	12	5	1.3	Sha,	
47	E - 6 3層	*	35	12.5	4	1.7	Obs,	
48	D - 5 3層	*	26	11	3	0.8	Sha,	
49	B - 11 1層	*	39	15.5	4	1.8	Mu,	
50	D - 8 3層	*	42	16	5	2.8	Sha,	
51	I - 2 3層	*	32	12	5	1.6	Sha,	
52	E - 6 2層	*	33	13	6	2.2	Sha,	
53	H - 2 2層	*	40	11.5	7	2.8	Sha,	
54	I - 3	*	31	12	5	1.6	Mu,	
55	B - 13 2層	*	(37)	13	7	(2.4)	硅化木	
56	E - 6 2層	*	32	11	4	1.1	Sha,	
57	B - 11 1層	*	28	17	5	2.2	Sha,	
58	H - 4 表土	*	28	16	6	1.6	Sha,	
59	A - 8 1層	*	27	14	7	2.1	Sha,	
60	J - 2 1層	*	(24)	15	4	(1.5)	Obs,	尖頭部欠損
61	F - 6 1層	*	(28)	15	4	(1.4)	Mn,	*
62	E - 6 3層	*	(23)	14	5	(0.8)	Sha,	基部欠損
63	I - 3	*	29	16	5	1.6	Sha,	
64	H - 3 2層	*	18	10	3	0.5	Sha,	
65	H - 3 1層	*	(20)	(10)	5	(0.8)	Obs,	欠 損 品
66	I - 3	*	28	13	4	1.3	Sha,	
67	A - 8 3層	*	22 3	14	6	1.7	Mu,	
68	G - 6 1層	*	33	16	6	2.7	Sha,	
69	III - 1	*	32	9.5	5	1.3	Sha,	
70	G - 4 3層	*	(30)	14	5	(1.5)	Sha,	尖頭部欠損
71	A - 8 3層	*	23	13	3	0.8	Aga,	
72	B - 9 2層	*	(18)	14	4	(0.8)	Obs,	尖頭部欠損
73	A - 9	*	(29)	17	3	(1.5)	Obs,	*
74	B - 10	*	37	16	3	1.3	Sha,	
75	B - 10 2層	*	(28)	16	4	(1.9)	Obs,	尖頭部、基部欠損
93-76	B - 12 2層	話 先	43	21	6	4.6	Cle,	
77	F - 2 2層	*	40	21	3	2.1	Sha,	
78	B - 10	*	(41)	17.5	4	(2.2)	Cle,	基部の一部欠損
79	G - 3 3層	*	37	22	4	2.6	Sha,	
80	H - 4 表土	*	50	19	4	7.6	Sha,	
81	H - 3 2層	*	58	20	3	6.7	Sha,	
82	E - 6 2層	*	62	19	10	8.5	Sha,	
83	E - 6 2層	*	68	22	11	13.8	Sha,	
84	I - 3	石 錐	29.5	13	7	2.3	Sha,	
85	B - 6 4層	*	35	13	8	2.5	Sha,	
86	G - 6 1層	*	36	13	8	2.5	Sha,	
87	I - 3	*	29	13	7	2.5	Sha,	
88	I - 3 3	*	(29)	13	7	(2.3)	Sha,	基部の一部欠損
89	G - 3 3層	*	29	13	8	2	Sha,	

採集番号	出 土 地 区	類 別	全長(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	重量(g)	石質	備 考
93-90	B-9	石 錐	41	18	10	5.6	Sha.	
91	E-6 2層	♦	(26)	12	8	(1.6)	Sha.	基部欠損
92	H-4 4層	♦	30	13	5	2.3	Sha.	
93	G-5 3層	♦	41	15.5	4	3.1	Sha.	
94	E-6 2層	♦	22	11	3	0.5	Sha.	
95	E-6 2層	♦	38	20.5	12	7.1	Sha.	
96	E-5 1層	♦	30	9	4	0.9	Sha.	
97	I-3	♦	(18)	18	4	(1.1)	Sha.	バブル部欠損
98	E-5 1層	♦	26	14	4	1	Sha.	
99	I-3	♦	34	20	11	6.6	Sha.	
100	B-10	♦	40	14	7	3.5	Sha.	
101	E-5 2層	♦	34	21	4	3.4	Sha.	
102	A-12 2層	♦	(40)	14	4	(2.5)	Sha.	バブル部欠損
103	I-3	♦	41	34	10	8.6	Sha.	
94-104	A-9 1層	ナイフ状石器	78	37.5	7	22.5	Sha.	
105	B-8	♦	(70)	54	11	(54.7)	Sha.	刃部欠損
106	A-8 1層	♦	(59)	42	9	(23.8)	Sha.	♦
107	B-9 2層	♦	79	24	7	17	Sha.	
108	E-2 3層	♦	(93)	43	19	(63.9)	Sha.	刃部先端欠損
109	D-8 1層	♦	55	27	11	17.2	Sha.	
110	C-10 1層	♦	(32)	21	9	(6.2)	Che.	尖頭部、基部欠損
111	H-4 2層	♦	33	20	6	5.3	Sha.	
112	E-6 2層	♦	41	23	9	7.3	Sha.	
113	A-13 2層	♦	(39)	34	7	(8.6)	Sha.	刃部のみ
114	H-4 2層	♦	(36)	26	8	(8.4)	Sha.	♦
115	I-3	♦	37	19	8	4.9	Sha.	
116	H-3 1層	♦	43	27.5	9	8	Sha.	
95-117	B-12 2層	♦	43	28	6	7.8	Sha.	
118	G-4 1層	♦	58	20	10	13.1	Sha.	
119	F-4 3層	♦	47	36	11	20.2	Che.	
120	H-3 3層	♦	50	21	12	11.2	Sha.	
121	G-5 2層	♦	40	23	11	6.8	Sha.	
122	B-6 3層	♦	(45)	36	12	(18.5)	Sha.	刃部のみ
123	C-8 表土	♦	58	34	12	16	Sha.	
124	I-3 3層	♦	30	25	9	7.1	Sha.	
125	A-9 1層	♦	68	55	9	27.4	Sha.	
126	H-4 2層	♦	(50)	28	11	(17.7)	Sha.	刃部のみ
127	E-4 3層	♦	53	45	12	35.4	Sha.	
128	E-4 3層	♦	(33)	34	9	(11.8)	Sha.	刃部のみ
129	C-11 2層	搔 器	(28)	27	9	(9.1)	Sha.	エンド・スクレーパー
130	A-8 1層	♦	70	39	13	33.2	Sha.	♦
131	C-5 2層	♦	39	29	12	14.2	Sha.	♦
95-132	B-11 2層	♦	51	50	9	24.3	Sha.	ラウンド・スクレーパー
133	表 採 石 黒	105	38	11	39.3	Sha.		
134	I-3	♦	36	12	5	2.7	Sha.	

捲回番号	出 土 地 区	類 別	全長(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	重量(g)	石質	備 考
96-135	H-2 3層	石 匙	36	18	5	4.2	Sha.	
136	H-2 3層	*	91	18	6	11.2	Sha.	
137	B-9 3層	*	85	19	9	13.7	Sha.	
138	E-4 3層	*	66	19	6	7.1	Sha.	
139	G-4 1層	*	60	26	6	9.7	Sha.	
140	B-9 2層	*	92	30	12	32.8	Sha.	
141	E-4 3層	*	63	25	6	9.7	Sha.	
142	G-3 3層	*	81	26	6	15.5	Sha.	
143	B-13 2層下	*	62	32	9	18.7	Sha.	
144	H-2 3層	*	64	29	7	11.4	Sha.	
145	B-18	*	110	33	7	25.3	Sha.	
97-146	A-8 1層	*	48	25	8	9.7	Che.	
147	C-10 1層	*	60	21	9	9.6	Sha.	
148	H-2 3層	*	83	43	8	23.1	Sha.	
149	A-14 2層	*	68	26	7	12.2	Sha.	
150	H-3 2層	*	54	15	7	6.3	Che.	
151	B-9 2層	*	69	31	12	22.6	Aga.	
152	H-2 3層	*	51	28	10	11.6	Sha.	
153	E-6 3層	*	63	30	10	18.1	Sha.	
154	A-13 2層	*	47	30	5	6.3	Sha.	
155	H-4 2層	*	67	24	6	11.3	Sha.	
156	H-4 3層	*	40	53	10.5	16.9	Sha.	
157	E-6 2層	*	46	31	9	10.9	Sha.	
158	E-6 2層	*	42	25	6	(7.9)	Sha.	刃部の破片
98-159	I-3	削 器	91	32	6	18.9	Sha.	
160	I-3	*	66	22	9.5	13.6	Sha.	
161	I-3 1層	*	72	34	10	29.8	Sha.	
162	B-7 2層	*	85	50	16	64.9	Sha.	
163	C-8 2層	*	65	28	12	21.6	Sha.	
164	H-4 2層	*	86	52.5	9	91.6	Sha.	
165	H-4 2層	*	66	31	13	27	Sha.	
166	H-3 2層	*	69	22	10	17.3	Sha.	
167	C-5 2層	*	84	40	7	26.6	Sha.	
168	J-2 2層	*	38	28	9	(9.2)	Sha.	刃部破損
169	I-3	*	57	32	9.5	16.6	Sha.	
170	D-6 3層	*	52	19	7	8.8	Sha.	
171	B-9	*	54	23	7	7.1	Sha.	
172	B-12 2層	*	60	16	6	6.1	Sha.	
99-173	F-2 2層	*	56	26	6	9.7	Sha.	
174	B-8 3層	*	68	19	10	13.5	Sha.	
175	C-7 2層	*	40	25	6	6.9	Sha.	
176	G-2 3層	*	65	25	9	15.3	Sha.	
177	I-3 3層	*	56	28	12	16.3	Sha.	
178	J-2 2層	*	47	26	7	5.7	Che.	
179	B-12 2層	*	53	33	7	14	Sha.	

辨認番号	出 土 地 区	類 別	全長(mm)	最 大 幅(mm)	最 大 厚(mm)	重 量(g)	石 質	備 寄
99-180	B-11	削 器	(32)	23	6	(6.4)	Sha.	破損品
181	I-3 3層	◆	54	30	8.5	17.4	Sha.	
182	A-8 1層	◆	(30)	30	4	(4.8)	Sha.	破損品
183	H-4 表土	◆	41	34	9	10.4	Sha.	
184	H-4 2層	◆	55.5	38	11	21.5	Sha.	
185	H-2 3層	◆	35	40	12	17.8	Che.	
186	E-4 3層	◆	40.5	22	5	7.3	Che.	
187	I-3 2層	◆	44	21.5	10	7.7	Sha.	
188	H-2 3層	◆	44	32	10	14.3	Sha.	
189	G-2 1層	◆	35.5	24	8.5	7.2	Sha.	
190	H-4 2層	◆	43	30	13	13.8	Sha.	
191	I-3 3層	◆	(31)	24	5.5	(5)	Sha.	破損品
192	G-4 1層	◆	(26)	25	6	(3.6)	Sha.	*
100-193	A-8 1層	◆	80	57	13	64	Che.	
194	E-6 2層	◆	36	19	8	5.3	Sha.	
195	E-6 2層	◆	27.5	29	6	4.9	Sha.	
196	B-13 2層	◆	80	45	14	42.2	Sha.	
197	G-3 3層	◆	34	64	11	16.1	Sha.	
198	I-3	◆	67	27	7	25.2	Sha.	
199	H-4 表土	◆	59.5	35	11	17.6	Sha.	
200	I-4 3層	◆	40	34	10	17.6	Che.	
201	B-10 2層	◆	44	82	11	34.6	Sha.	
202	H-3 2層	◆	(23)	24.5	6	(3.9)	Sha.	破損品
203	B-8	◆	40	38	11	12.8	Sha.	
204	H-3 1層	◆	53	40.5	10	27.3	Sha.	
205	B-9 2層	◆	60	24	11	17.4	Che.	
206	E-4 3層	◆	49.5	54	10	27.7	Sch.	
207	E-5 1層	◆	39	28	8	8.9	Sch.	
208	B-14 1層	◆	35	18	4	2.9	Sch.	
101-209	H-2 3層	◆	101	58	19	150	Ba. -an.	礮核削器
210	G-3 2層 石	斧	(78)	46	14	(84.5)	Gre. -mu.	刀部破損
211	H-3 1層	◆	87	35	12	65.8	Mu.	
212	B-8 2層	◆	(94)	50	16	(94)	Gre. -mu.	破損部多い
213	H-4 2層	◆	164	50	33	470	And.	接合資料
214	J-3 1層	◆	(159)	39	20	(210)	Bl. -sch.	刀部破損
102-215	F-4 2層	◆	(51)	44	19	(63.9)	Tal. -mu.	刀部破片
216	I-3 3層 玉	◆	29	16	6	3.4	Tal.	破 損
217	B-7 2層	◆	45	32	9	17.9	Sa.	*
218	H-4 表土 異 形 石 器	◆	62	29	8	18.1	Mu.	
219	I-3 3層 石 鏊	◆	67	44	17	93.2	Sa.	
220	D-6 3層	◆	75	64	36	230	Sa.	
221	A-8 3層	◆	64	51	16	75.2	Mu.	
222	E-4 3層	◆	94	78	32	360	And.	
103-223	表 採	◆	57	51	15	61.7	Ba. -and.	
224	A-8 3層	◆	70	47	14	83.8	Sa.	

標図番号	出土地区	類別	全長(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	重量(g)	石質	備考
103-225	H-2 3層	石錐	87	91	44	520	And.	
226	G-3 3層	敲石	89	43	18	102.6	And.	
227	F-4 2層	*	112	38	32	260	Gra.	
104-228	表 採	*	135	72	24	300	And.	
229	H-3 1層	砥石	38	54	9.5	19.2	Sa.	
230	F-3 2層	*	97	104	23	169.3	Sa.	
231	E-5 3層	*	54	45	11	37.4	Sa.	
232	G-4	*	90	94	23	200	Sa.	
105-233	表 採	くぼみ石	(97)	57	35	(225)	And.	両端部欠損
234	E-6 2層	*	119	61	36	340	And.	
235	E-2 2層	*	141	57	26	260	And.	
236	D-4 2層	*	108	70	44	490	And.	
106-1	G-4	擦石・第1類	147	68	50	650	And.	
2	A-13 2層	*	(147)	73	61	(670)	Gra.	
3	表 採	*	114	90	51	750	Sa.	
4	G-3 3層	*	(149)	111	75	(1,500)	And.	
5	D-5 3層	*	第9類	(106)	104	54	820	Sa.
6	F-6	*	第2類	(137)	89	49	(570)	And.
107-7	F-4 表土	*	第1類	183	113	64	1,660	And.
8	D-5 3層	*	第2類	139	103	52	800	Mu.
9	E-4 3層	*	*	143	79	30	490	And.
10	表 採	*	*	161	87	45	1,010	And.
11	H-4 3層	*	*	155	103	36	940	Sa.
12	A-14	*	*	127	92	34	640	Mu. -sch.
108-13	B-9 2層	*	第3類	141	97	46	(820)	Oli.
14	G-4 1層	*	*	(110)	100	45	(730)	And.
15	D-5 2層	*	*	114	77	29	320	Sa.
16	B-10 2層	*	*	171	101	49	1,200	And.
109-17	H-2 2層	*	*	162	104	30	800	Gra.
18	E-6	*	*	155	109	39	1,050	Sa.
19	G-6 3層	*	*	(138)	120	33	(800)	And.
20	G-3 3層	*	*	142	(85)	32	(800)	Tu.
110-21	B-22	*	*	(122)	75	32	(550)	And.
22	表 採	*	*	145	94	34	(500)	And.
23	表 採	*	*	154	79	25	450	Tu. -bre.
24	H-3 1層	*	*	160	81	34	710	And.
111-25	I-3	*	*	162	90	35	770	And.
26	F-4 表土	*	*	161	92	29	650	Sa.
27	I-3	*	*	159	94	27	520	And.
28	C-7	*	*	153	81	36	700	And.
112-29	G-4	*	*	169	90	39	950	Sa.
30	H-2 2層	*	*	127	97	34	650	And.
31	H-4 2層	*	*	127	70	25	310	And.
32	G-3 3層	*	*	134	75	24	370	And.
113-33	I-3	*	*	141	71	35	610	Sa.

標団番号	出 土 地 区	類 別	全長(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	重量(g)	石質	備 考
113-34	表 採	礫石・第3類	137	79	30	510	And,	
35	E - 5	* *	128	82	29	490	And,	
36	E - 6 3層	* *	132	75	33	410	And,	
37	表 採	* *	132	63	28	360	And,	
114-38	G - 5	* *	176	84	46	950	And,	
39	H - 4 3層	* *	180	91	42	790	Tu. - bre.	
40	表 採	* *	177	95	30	760	And,	
41	H - 2 2層	* *	181	90	34	690	And,	
115-42	H - 4 2層	* *	(105)	78	39	(450)	And,	
43	F - 4 表土	* *	(132)	93	27	(510)	And,	
44	E - 5 2層	* *	(133)	(72)	(18)	(220)	Mu,	
45	I - 3 2層	* *	(114)	(74)	(25)	(260)	And,	
46	E - 4 1層	* *	(163)	75	47	(920)	And,	
47	G - 3 3層	* *	164	77	50	800	And,	
116-48	H - 2 3層	* 第4類	185	97	31	650	Propy.	
49	E - 6 2層	* *	174	(85)	30	(540)	And,	
50	G - 4 1層	* *	(148)	(91)	38	(700)	Propy.	
51	I - 3	* *	142	93	24	300	Propy.	
117-52	表 採	* *	152	77	36	480	And,	
53	C - 9 1層	* *	153	87	40	720	And,	
54	表 採	* *	(128)	75	40	(600)	And,	
55	J - 3 2層	* *	168	98	48	1,000	And,	
118-56	E - 6	* *	149	92	36	570	And,	
57	A - 11	* *	144	92	29	370	Pu,	
58	C - 7	* *	158	116	47	1,170	And,	
59	H - 4	* *	138	90	43	780	And,	
119-60	I - 3 2層	* *	155	88	45	800	And,	
61	H - 4 3層	* *	164	95	46	870	And,	
62	A - 23	* *	165	86	35	780	Sa,	
63	J - 3 2層	* *	166	81	38	670	And,	
120-64	D - 5 1層	* *	168	106	40	1,220	We. -tu.	
65	表 採	* 第5類	157	102	12	550	Mu,	
66	D - 4 2層	* *	164	108	23	750	We. -tu.	
67	H - 3 1層	* *	(160)	77	19	(390)	We. -tu.	
68	表 採	* *	182	90	32	800	Propy.	
121-69	表 採	* *	135	89	23	450	Congl.	
70	F - 6	* *	(160)	108	31	(610)	And,	
71	I - 3	* *	214	111	37	950	And,	
72	I - 2 3層	* *	(110)	74	31	(340)	Mu,	
73	E - 6 3層	* *	143	88	47	670	And,	
122-74	E - 6 2層	* 第6類	156	83	32	500	Tu,	
75	J - 3 2層	* *	146	78	25	450	And,	
76	I - 3 1層	* *	149	75	41	750	Sa,	
77	F - 5 3層	* *	136	59	39	470	And,	
123-78	H - 4 3層	* 第7類	169	104	35	740	And,	

標印番号	出 土 地 区	類 別	全長(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	重量(g)	石質	備 考
123-79	I - 3 2層	擦石・第7類	152	71	28	460	And,	
80	B - 10 2層	✧ ✧	127	87	35	550	And,	
81	E - 6 2層	✧ ✧	120	87	30	410	And,	
124-82	表 採	✧ ✧	141	95	37	750	And,	
83	H - 4 3層	✧ ✧	124	97	37	650	And,	
84	G - 4 3層	✧ ✧	(136)	94	30	(600)	Sa,	
85	G - 3 3層	✧ ✧	(108)	82	34	(420)	And,	
125-86	G - 3 3層	✧ ✧	146	92	35	600	And,	
87	I - 3	✧ ✧	139	85	35	670	And,	
88	H - 4 2層	✧ ✧	144	88	38	750	And,	
89	I - 3 2層	✧ ✧	181	99	40	1,280	And,	
126-90	H - 4	✧ ✧	179	73	37	800	And,	
91	I - 3	✧ ✧	(154)	69	35	(570)	And,	
92	J - 3 2層	✧ ✧	(115)	82	35	(540)	And,	
93	H - 3 1層	✧ ✧	154	88	36	850	And,	
127-94	G - 3 3層	✧ ✧	181	82	42	900	And,	
95	E - 6 3層	✧ ✧	161	72	30	620	And,	
96	F - 6	✧ ✧	174	78	35	650	And,	
128-97	H - 3 1層	✧ 第8類	209	88	45	1,300	And,	
98	G - 5	✧ ✧	184	112	49	1,540	And,	
99	H - 2 2層	✧ ✧	188	75	27	600	And,	
100	I - 3	✧ ✧	153	95	47	1,000	Gra,	
101	J - 2 3層	✧ ✧	167	102	44	1,010	And,	
102	D - 6	✧ ✧	(122)	81	28	(370)	Tu,	
129-103	C - 10 1層	✧ ✧	142	91	27	550	Mu,	
104	I - 3 1層	✧ ✧	130	100	32	600	And,	
105	G - 3 3層	✧ ✧	146	117	47	1,000	And,	
106	表 採	✧ ✧	148	108	35	750	And,	
107	表 採	✧ ✧	152	78	48	1,100	And,	
108	E - 4 3層	✧ 磨石?	130	87	29	500	And,	敲打痕のある石器
130-109	A - 11	✧ ✧	156	75	36	450	And,	✧
110	B - 9	✧ ✧	(124)	80	36	(550)	And,	✧
111	B - 8 1層	✧ ✧	217	106	61	2,420	And;	✧
112	I - 4 表土	✧ 第9類	105	113	61	940	And,	
113	E - 6 3層	✧ 磨石	202	86	24	360	Tu,	青竜刀形石器
131-114	表 採	✧ 石 盆	404	364	120		And,	
115	表 採	✧ ✧	364	362	90		And,	
132-116	H - 2 石 盆	皿	406	338	112		Sa,	
117	表 採	✧	350	302	112		And,	
133-118	E - 4	✧	364	250	104		And,	
119	表 採	✧	314	204	128		And,	
120	G - 4	✧	298	222	96		And,	
134-121	C - 7	✧	366	238	76		And,	
122	F - 4	✧	424	276	168		And,	
123	表 採	✧	208	196	90		And,	

- Aga. (Agate) : 瑪瑙
 And. (Andesite) : 安山岩
 Ba. -and. (Basaltic-andesite) : 玄武岩質安山岩
 Bl.-sch. (Black-schist) : 黑色片岩
 Che. (Chert) : 雖岩
 Congl. (Conglomerate) : 碎岩
 Gne. (Gneiss) : 片麻岩
 Gra. (Granodiorite) : 花崗閃綠岩
 Gre.-mu. (Green-mud stone) : 綠色泥岩
 Mi.-sch. (Mica-schist) : 雲母片岩
 Mu. (Mud stone) : 泥岩
 Obs. (Obsidian) : 黑曜石
 Oli. (Olivin) : 橄欖石
 Propy. (Propyrite) : 變鈣安山岩
 Pu. (Pumice) : 絲石
 Sa. (Sand stone) : 砂岩
 Sha. (Hard shale) : 硬質頁岩
 Tal. (Talc) : 清石
 Tu. (Tuff) : 凝灰岩
 Tu.-bre. (Tuff-breccia) : 凝灰角砾岩
 We.-tu. (Welded-tuff) : 溶結凝灰岩

図 版

土器：縮尺約 3 分の 1

石器：図版17, 45~50 縮尺約 2 分の 1

図版19~21, 51~61 縮尺約 3 分の 1

図版18 縮尺約 4 分の 1

図版22, 62~64 縮尺約 5 分の 1



A 遠路遠景



B 発掘風景



A セクション



B 第3号竪穴住居跡



A 第2号竖穴住居跡



B 第2号竖穴住居跡石組炉址



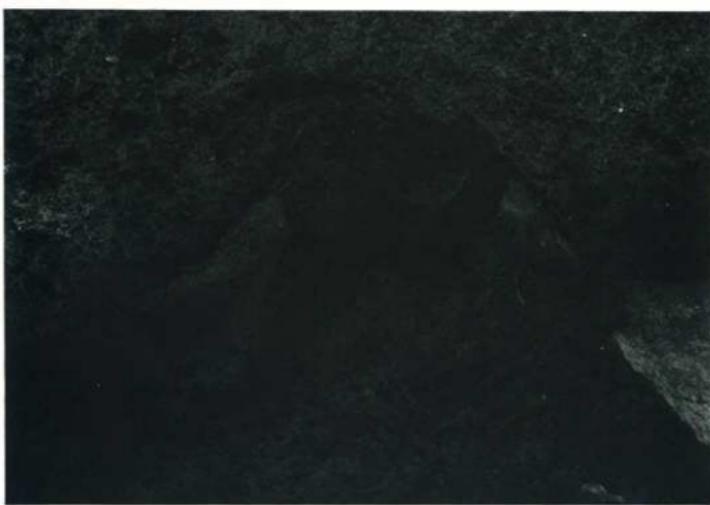
A 第4号竖穴住居跡



B 第10号竖穴住居跡



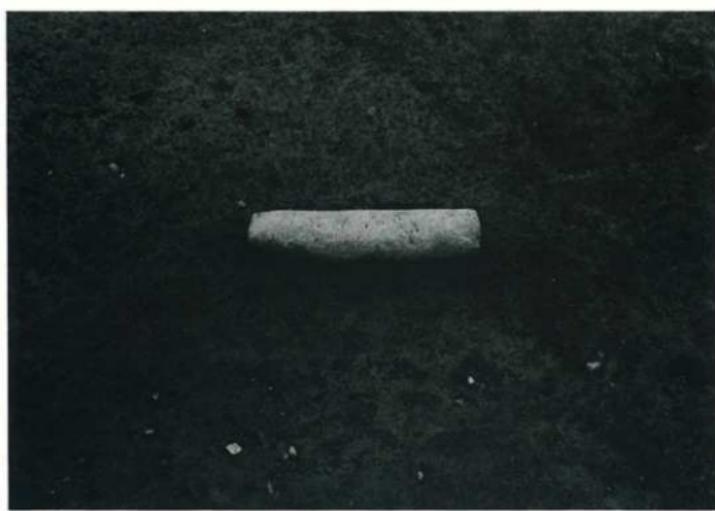
A 第7号竖穴住居跡



B 第7号竖穴住居跡出土海獸骨



A 第8号竖穴住居跡



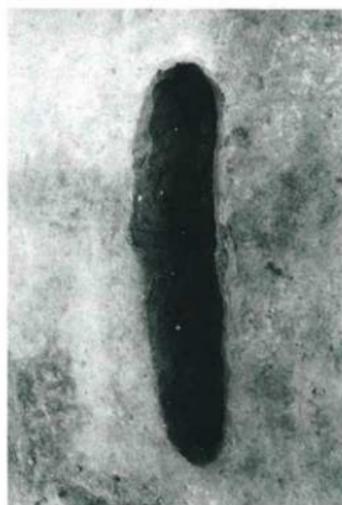
B 第8号竖穴住居跡床面出土石棒



A 埋 窜



B 第1号ビット



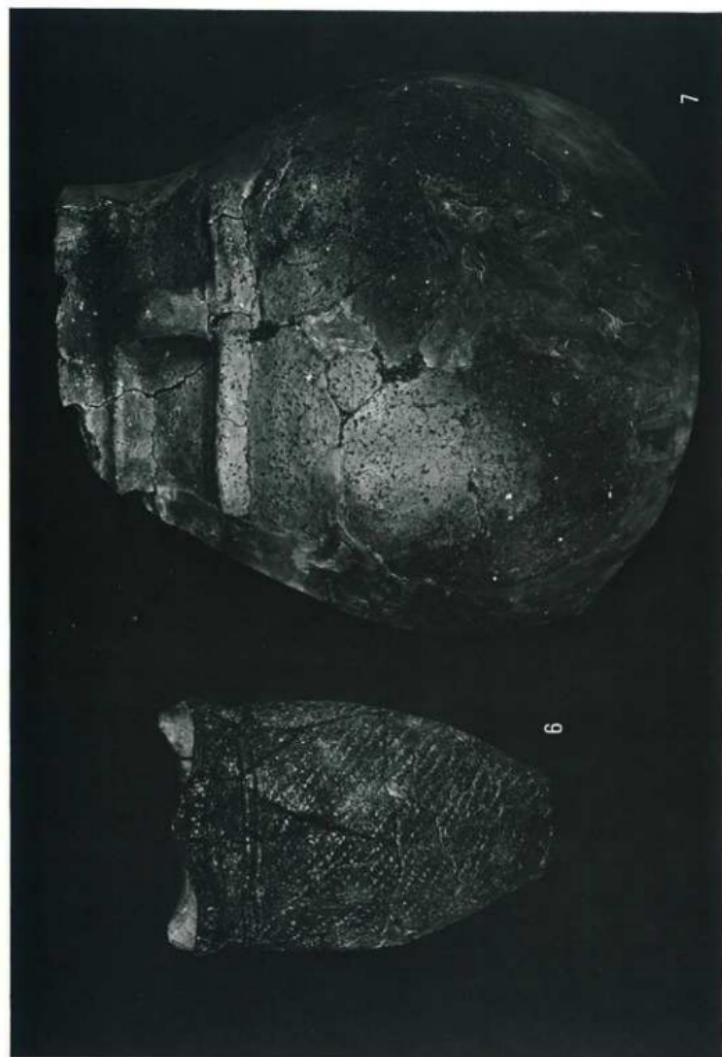
C 第2号ビット



第2号竖穴住居跡出土土器



竖穴住居出土土器 (3:第2号竖穴住居跡 4:第4号竖穴住居跡 5:第3号竖穴住居跡)



堅穴住居跡出土土器（6：第7号堅穴住居跡 7：第10号堅穴住居跡）



埋 瓷

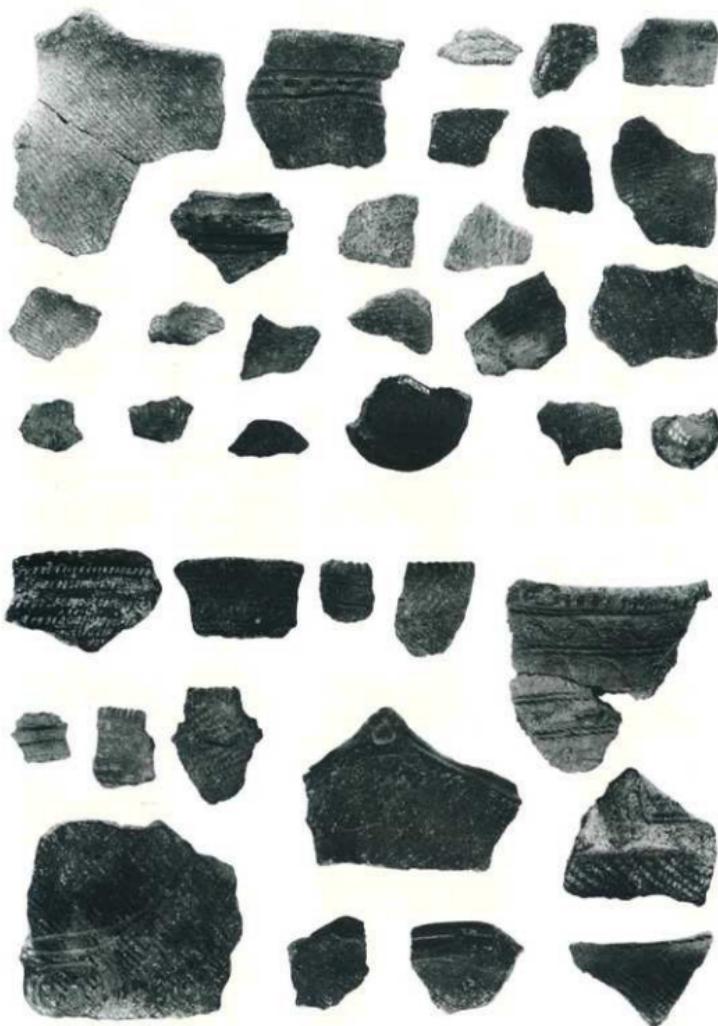


整穴住居跡出土土器
(上段：第1号整穴住居跡 中段：第2号整穴住居跡 下段：第3号整穴住居跡)

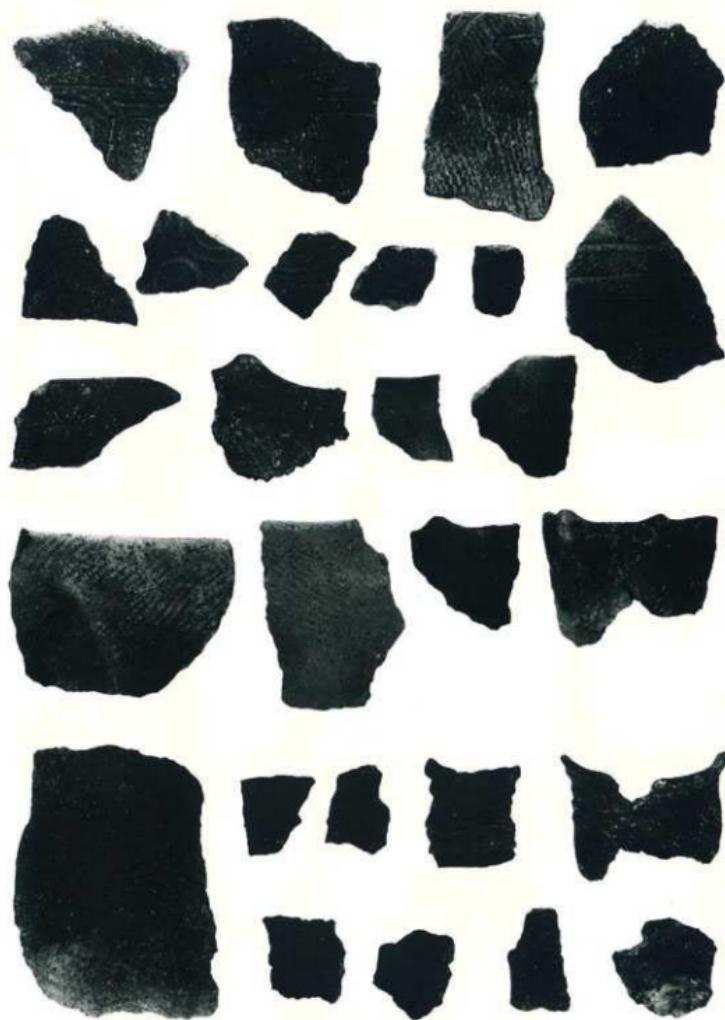


竖穴住居跡出土土器

(上段：第4号竖穴住居跡 中段：第5号竖穴住居跡 下段：第6号竖穴住居跡)



竖穴住居跡出土土器
(上段：第6号竖穴住居跡 下段：第7号竖穴住居跡)

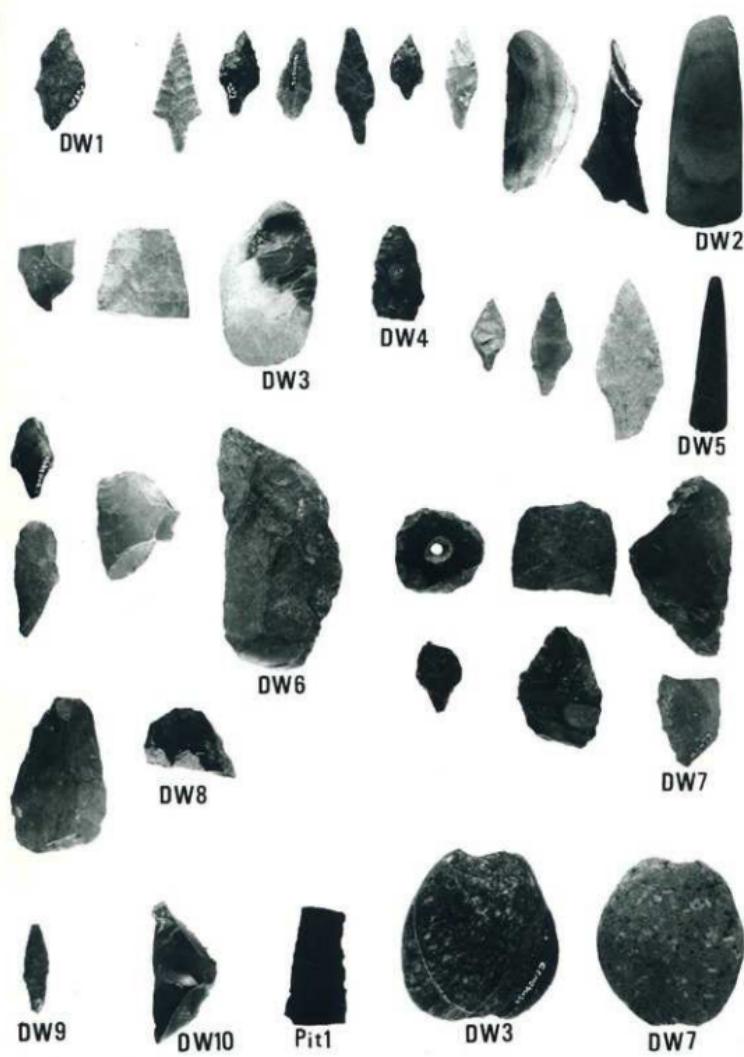


第7号竖穴住居跡出土土器



竪穴住居跡・ピット出土土器

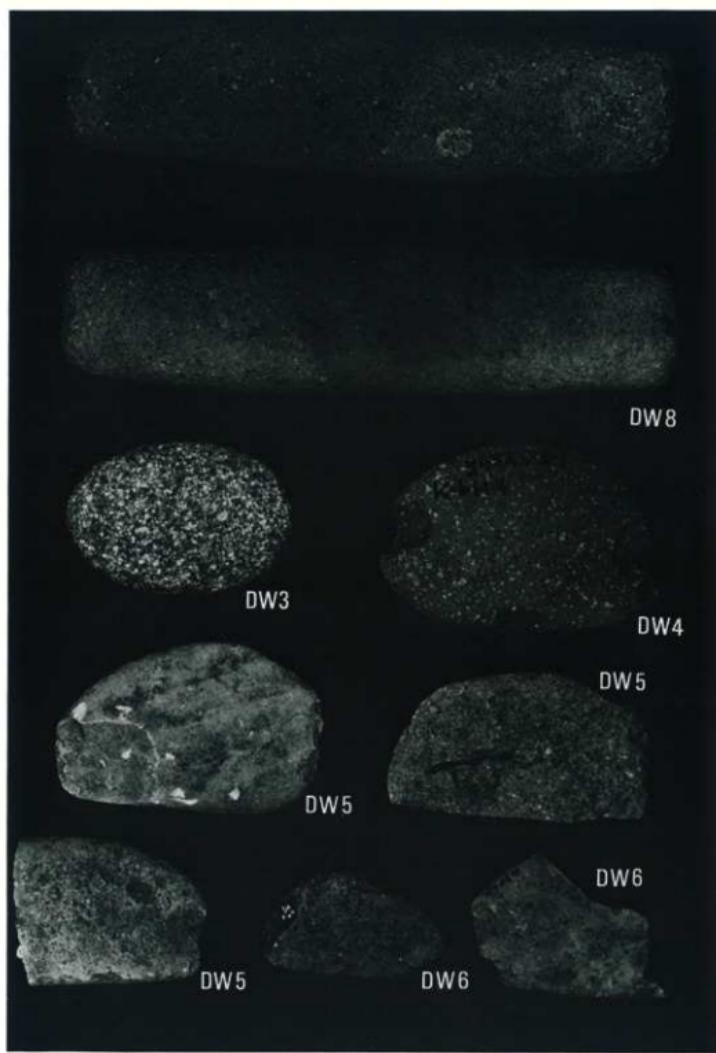
上段：第8号竪穴住居跡 中段：第9号竪穴住居跡 下段左：第10号竪穴住居跡 下段右：第3号ピット)



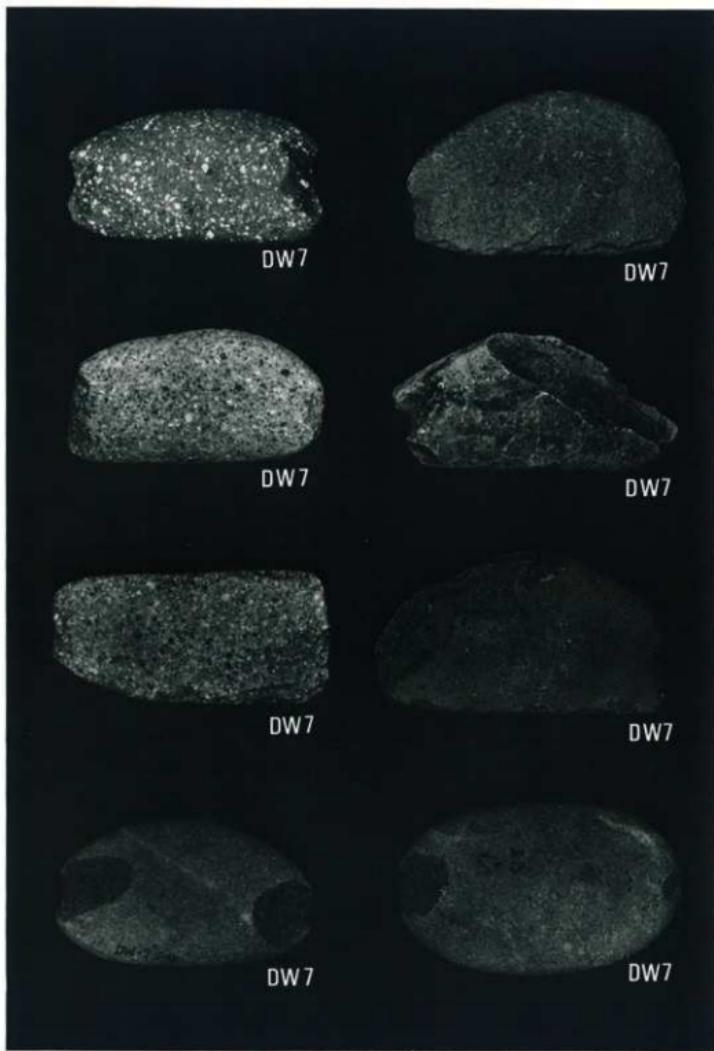
豊穴住居跡、ピット出土石器・土製品



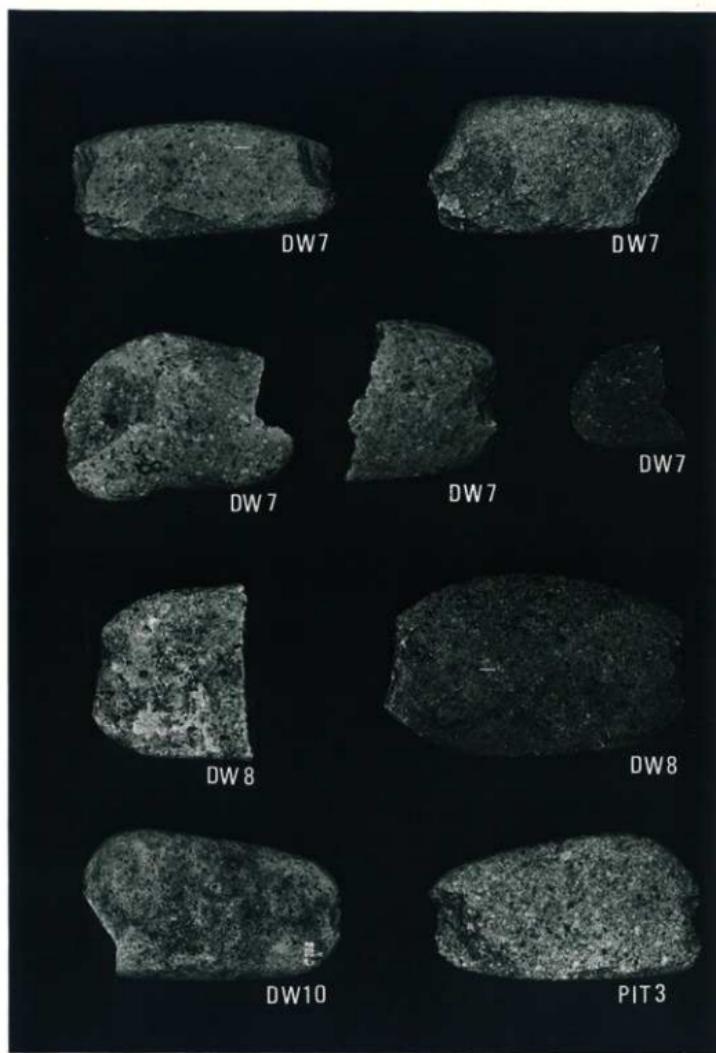
第7号竖穴住居跡出土石棒



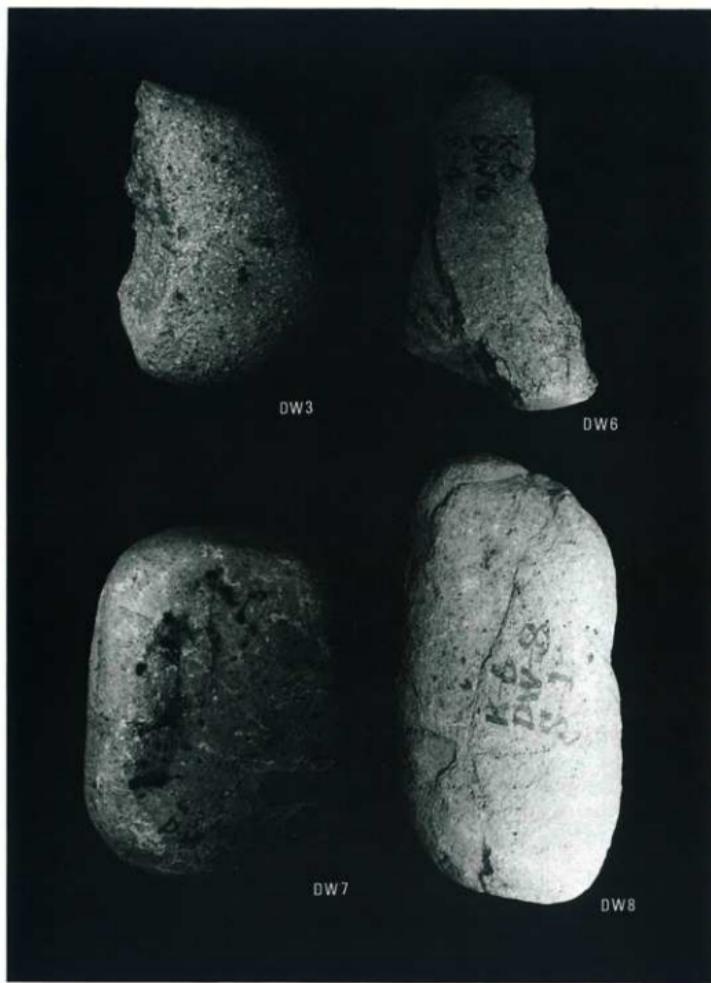
整穴住居跡出土石器



第7号竖穴住居跡出土石器



堅穴住居跡・ピット出土石器



竖穴住居跡出土石器



發掘區出土土器



堯振區出土土器



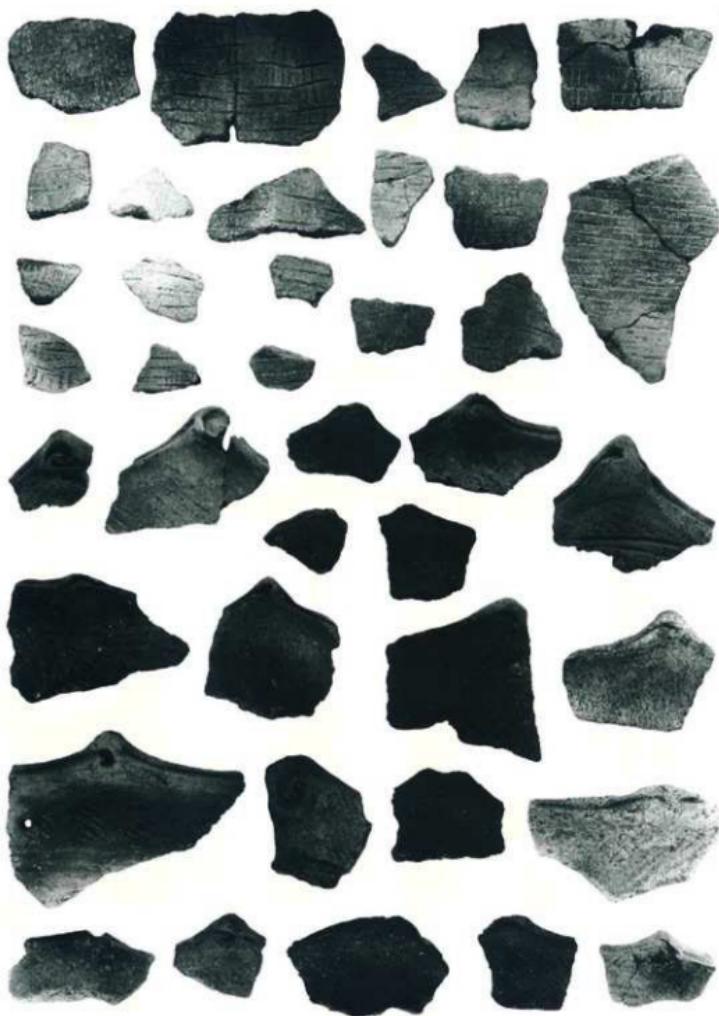
發掘區出土土器



亮都区出土土器



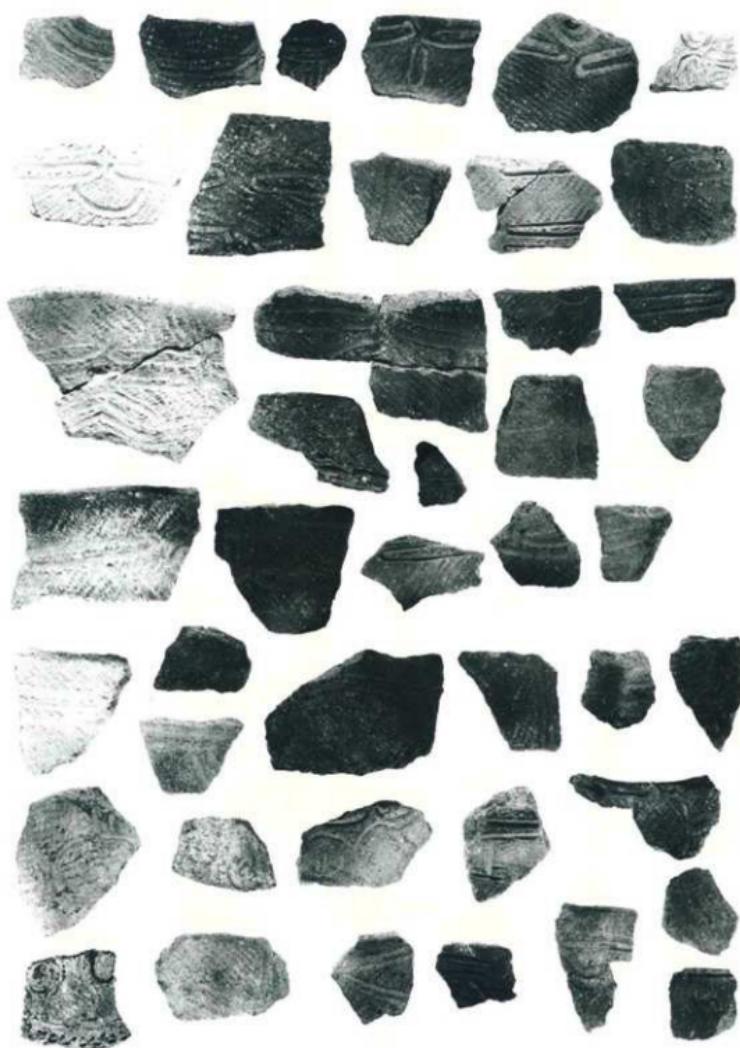
發掘區出土土器



發掘區出土土器



發掘區出土土器



发掘区出土土器



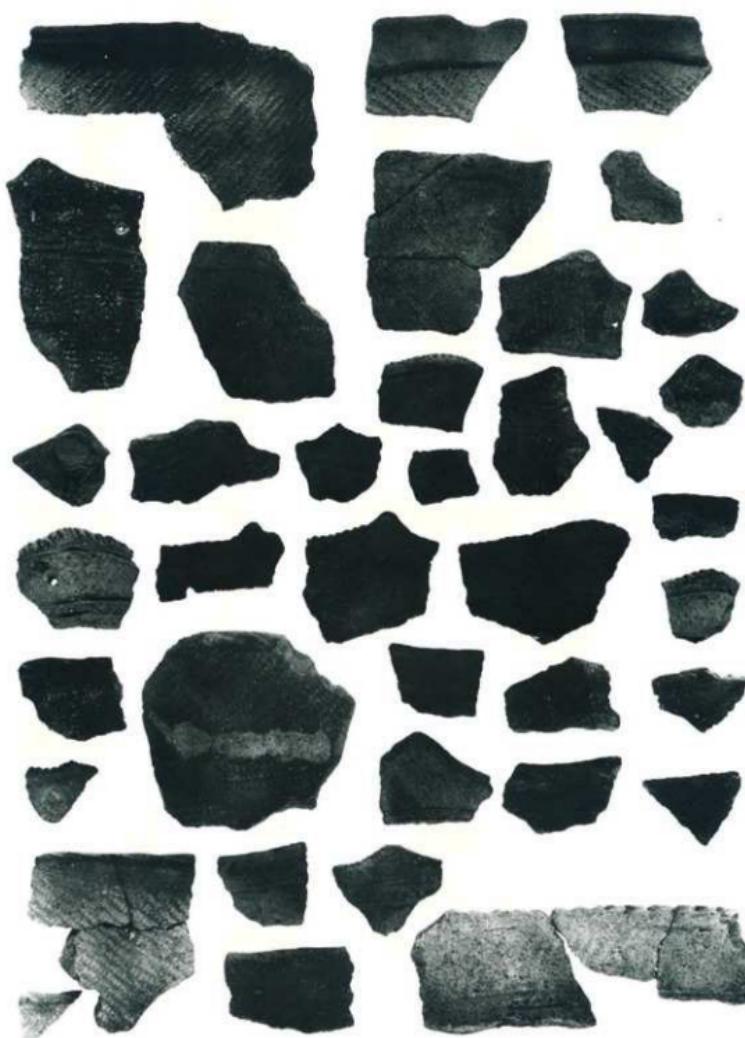
發掘區出土土器



發掘區出土土器



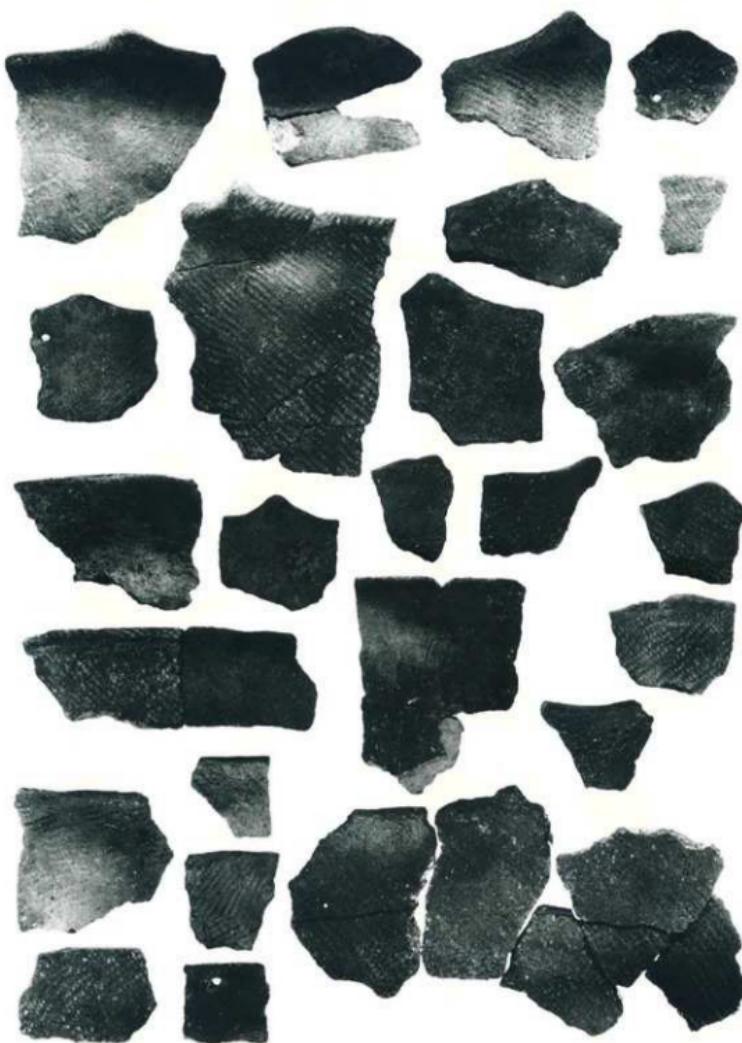
發掘區出土土器



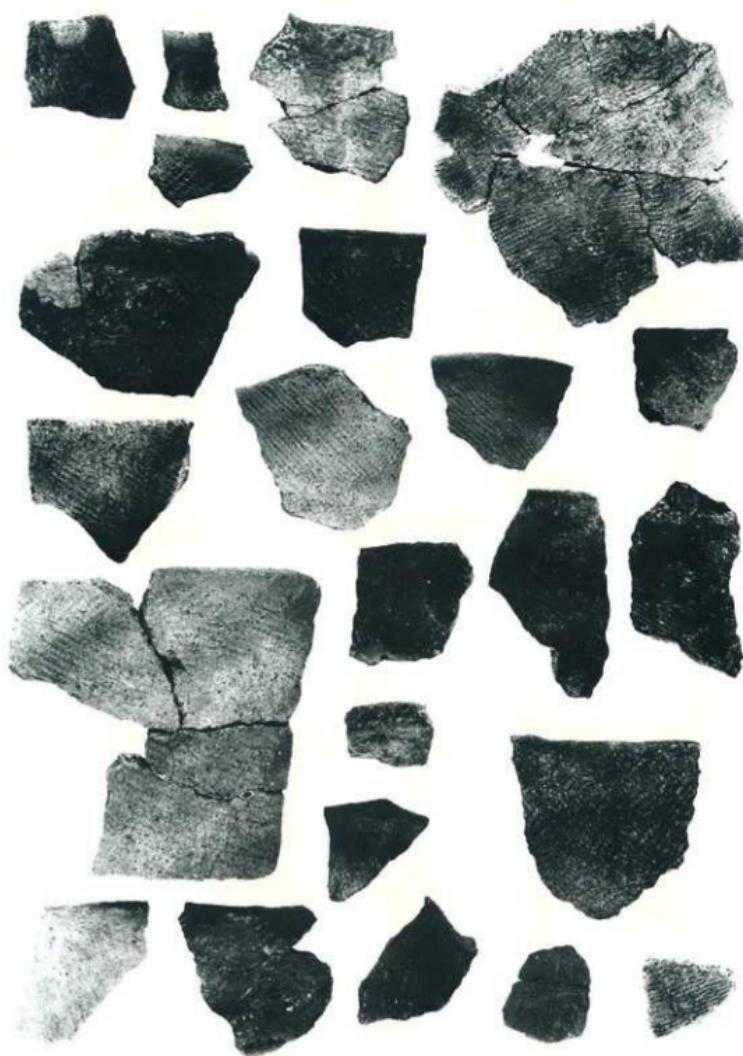
發掘區出土土器



発掘区出土土器



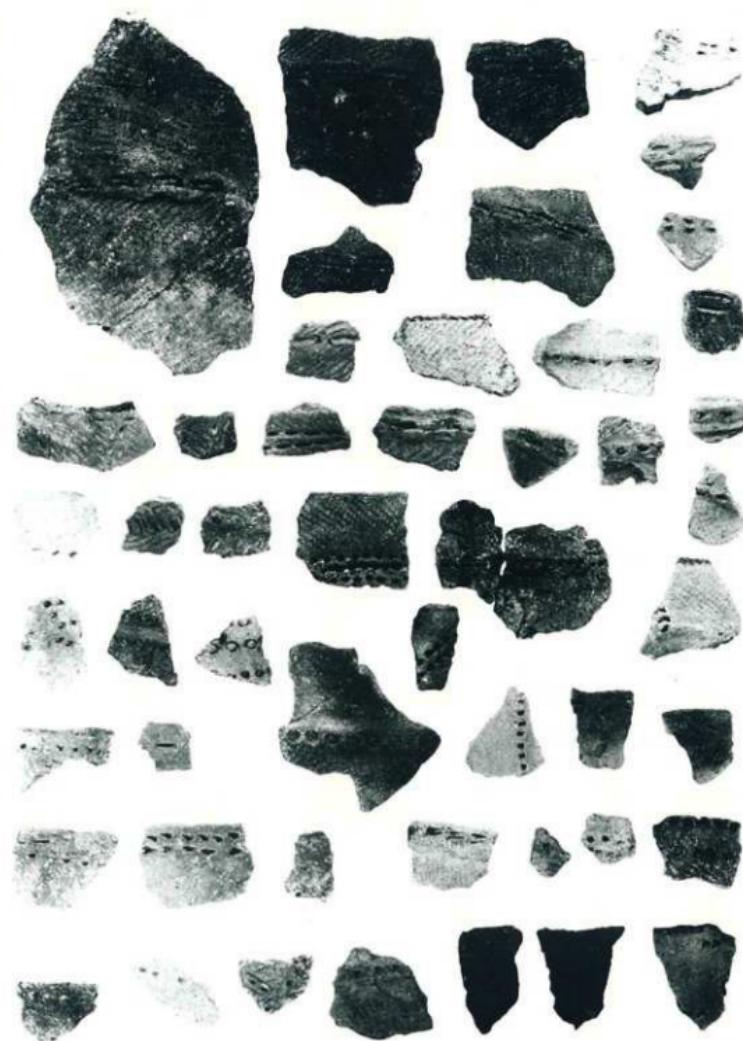
發掘區出土土器



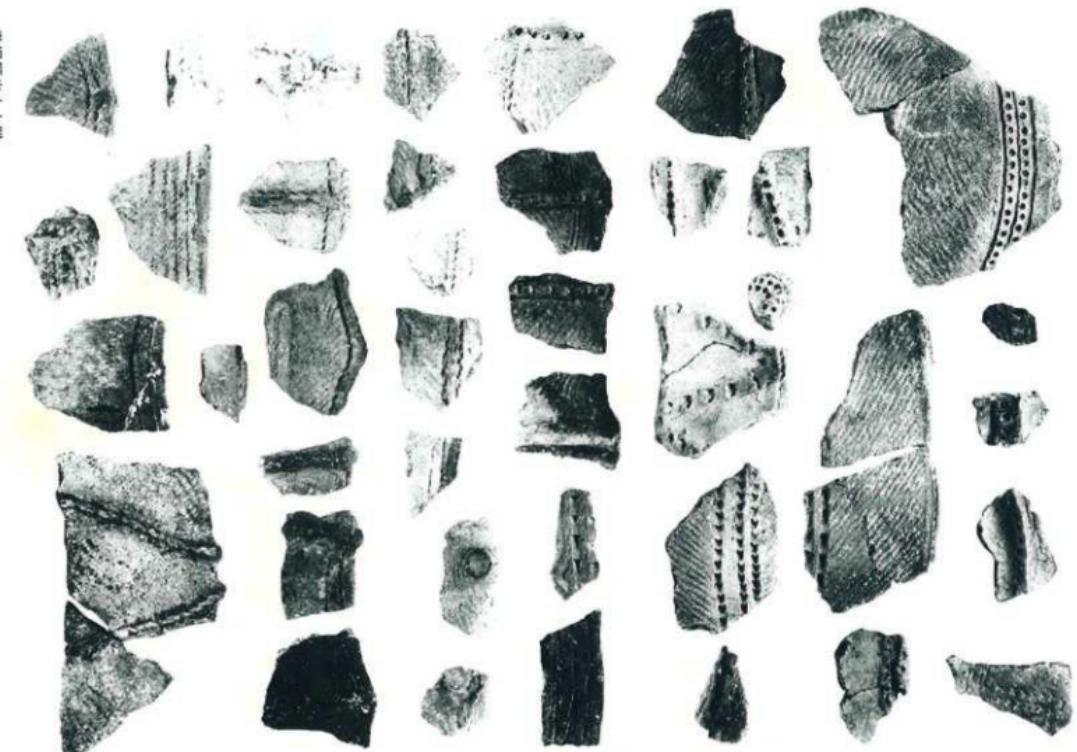
発掘区出土土器



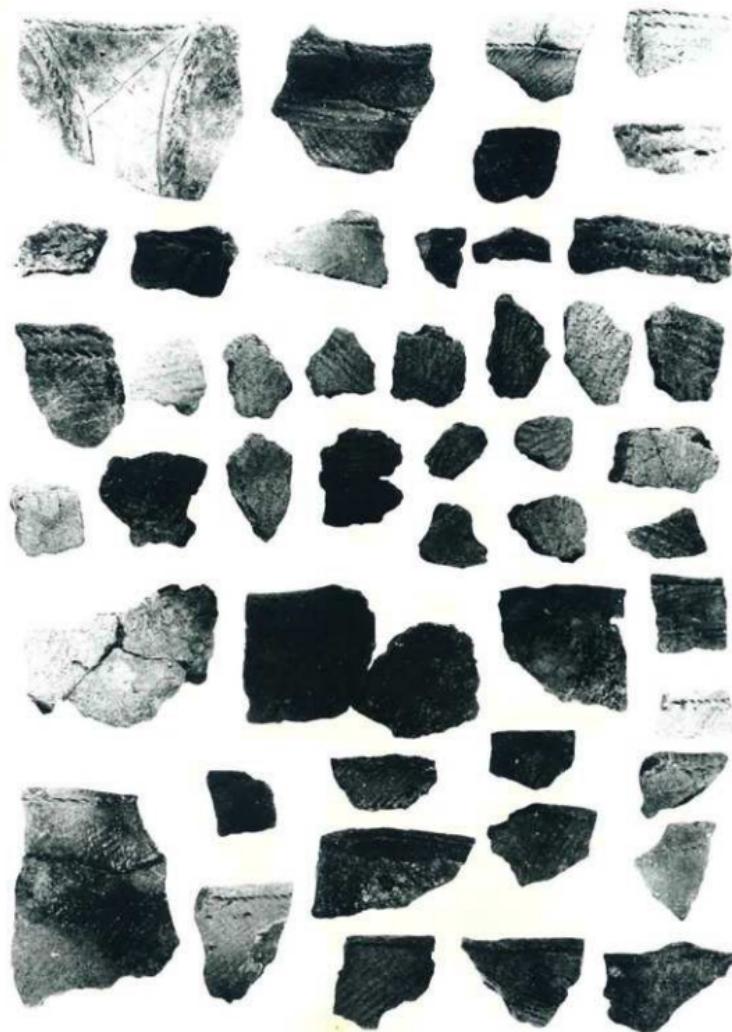
發掘區出土土器



發掘區出土土器



发掘区出土土器



発掘区出土土器



發掘區出土土器



发掘区出土土器



发掘区出土土器



發掘區出土石器



夷都区出土石器



堯鄉區出土石器



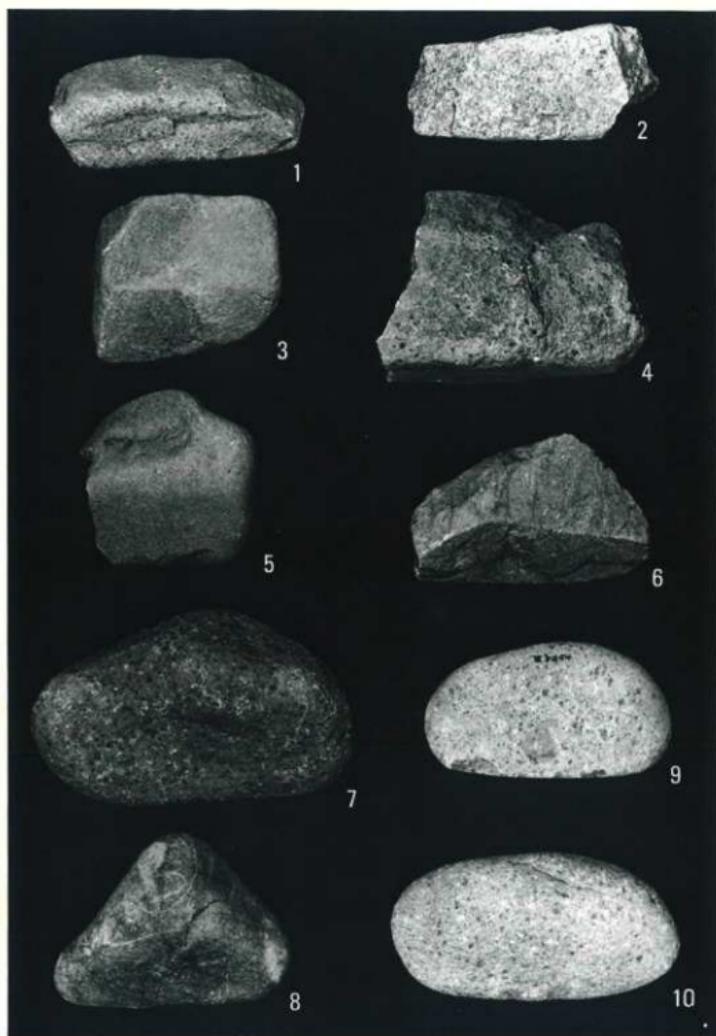
发掘区出土石器



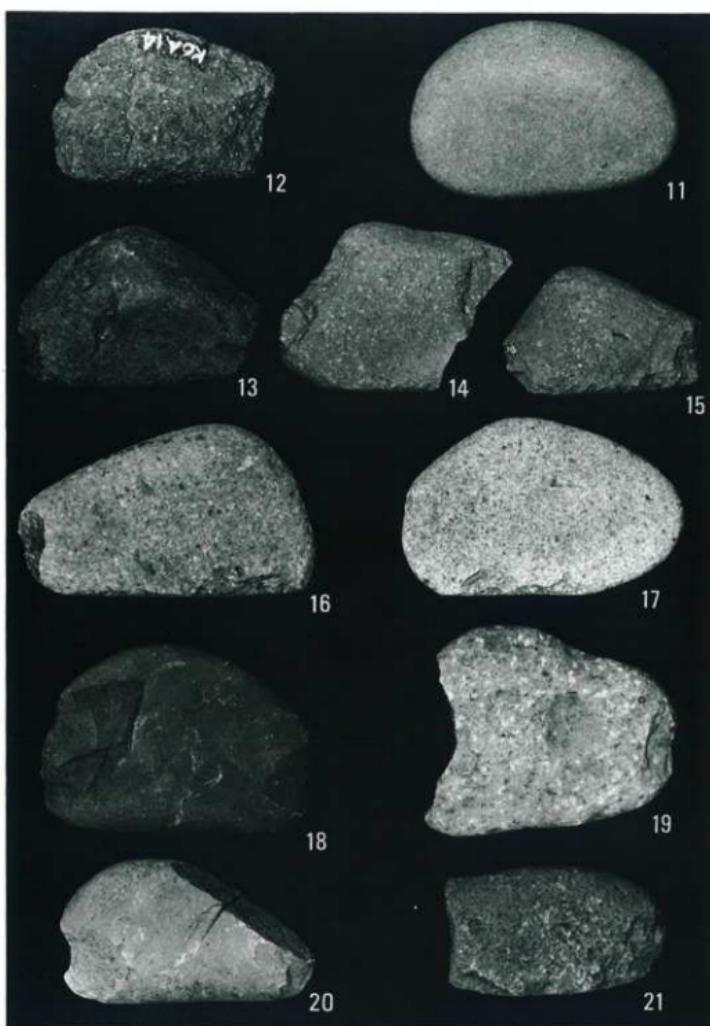
堯振區出土石器



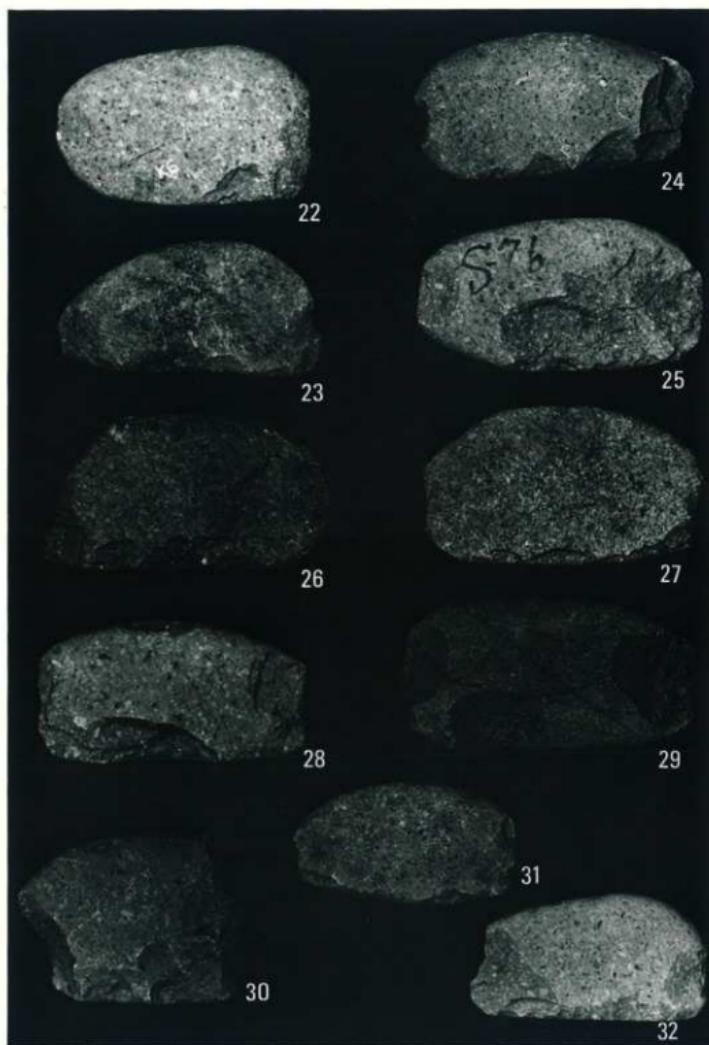
發掘區出土石器



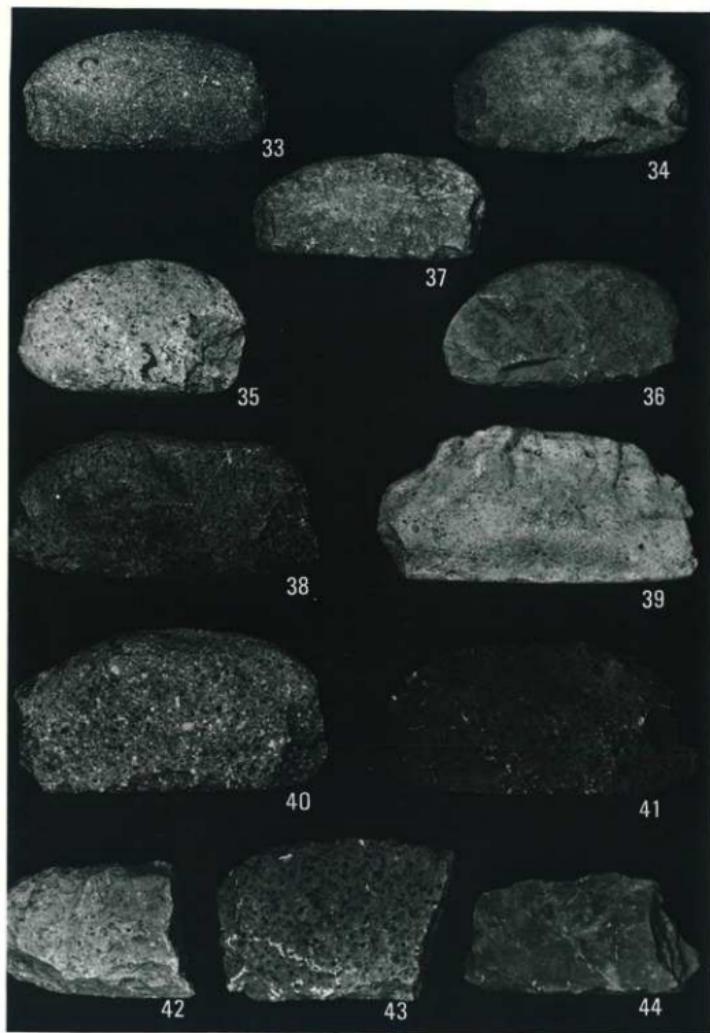
發掘區出土石器



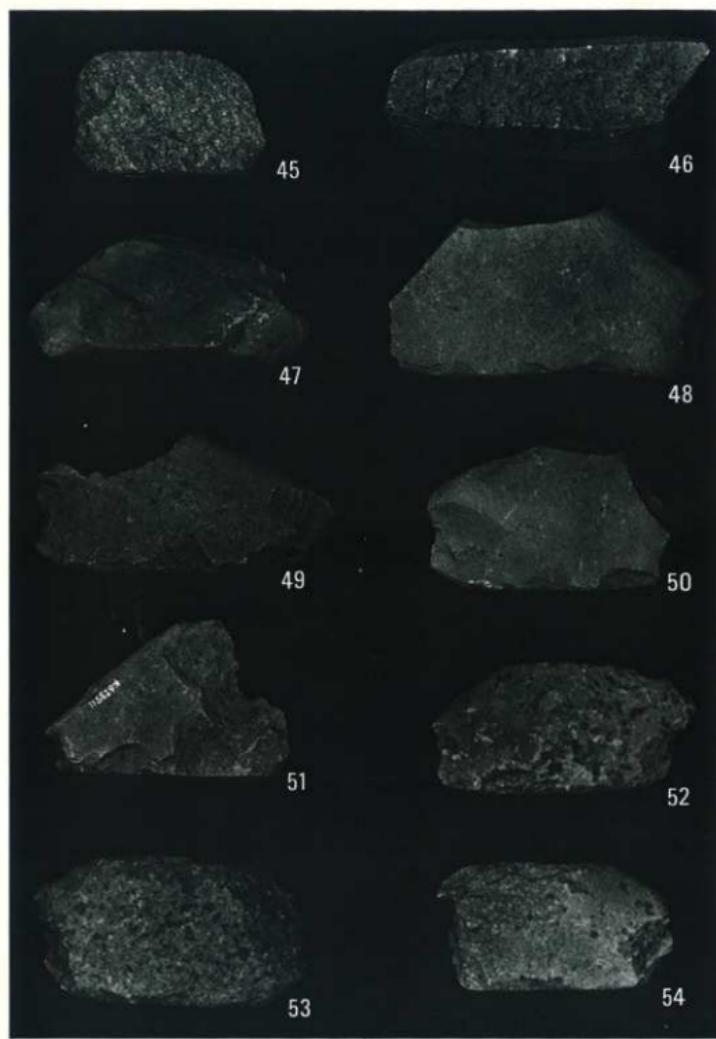
堯都區出土石器



發掘區出土石器



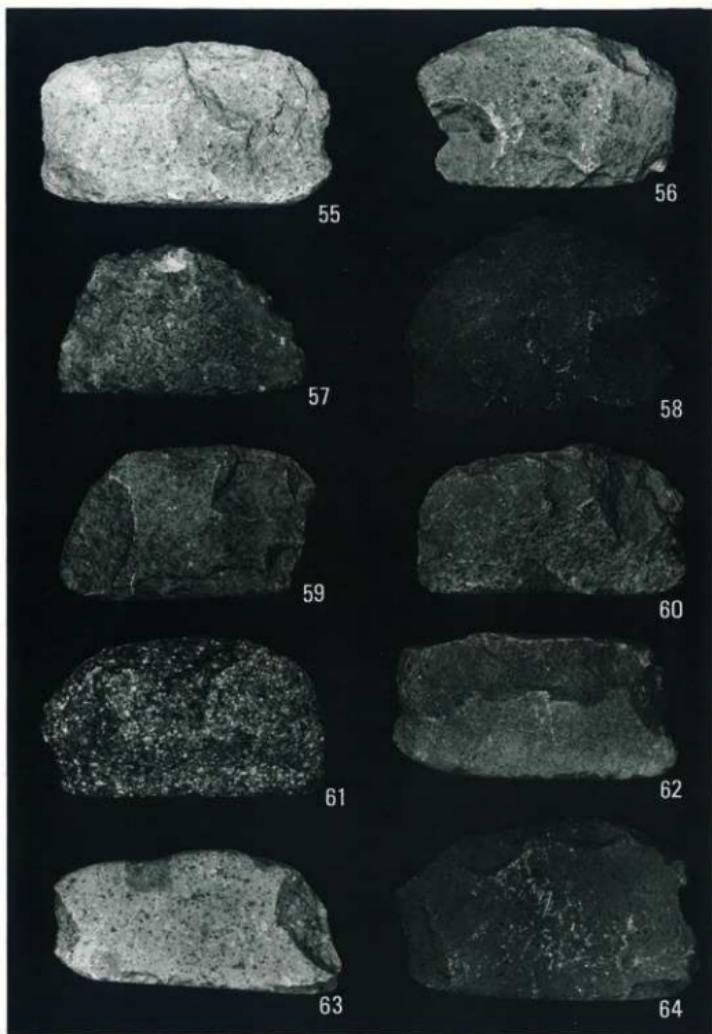
冕撫区出土石器



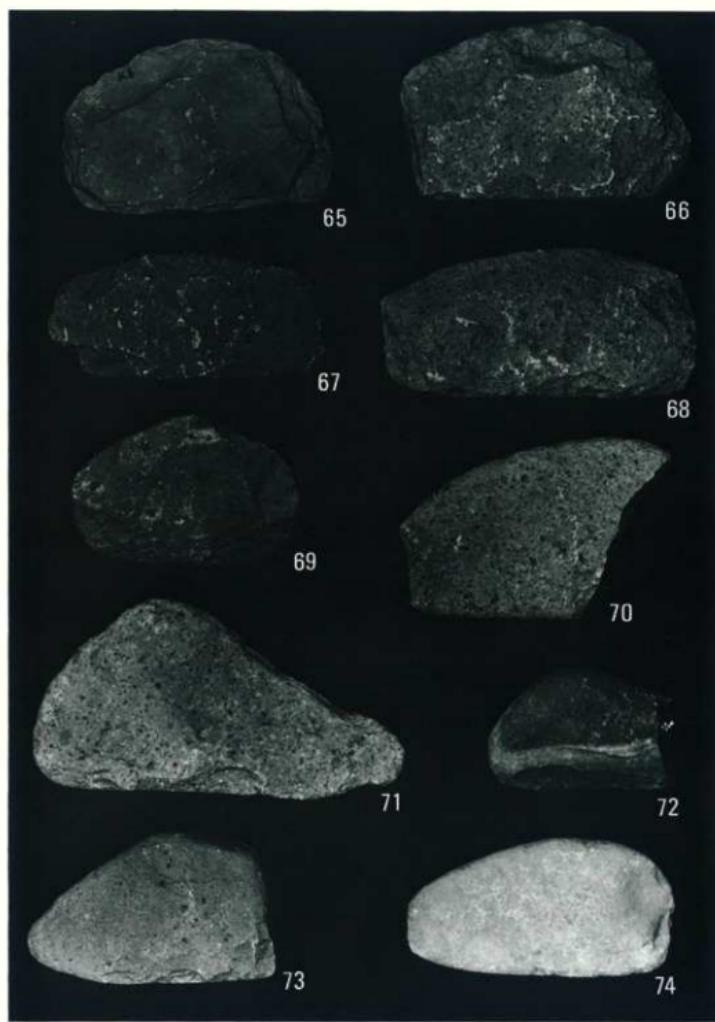
発掘区出土石器

圖版

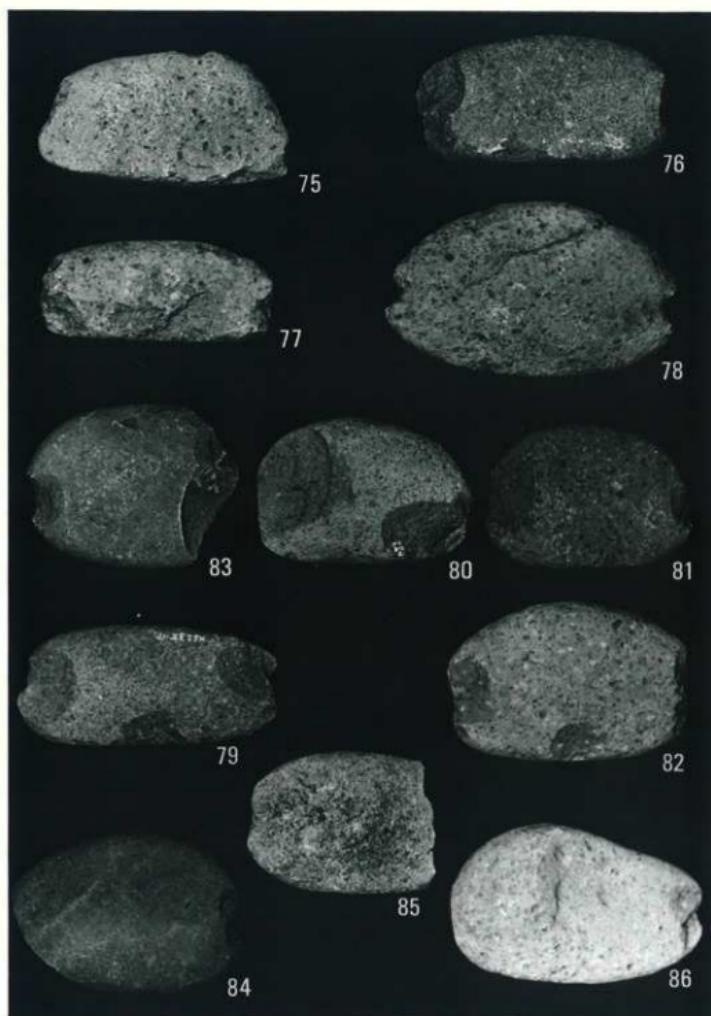
56



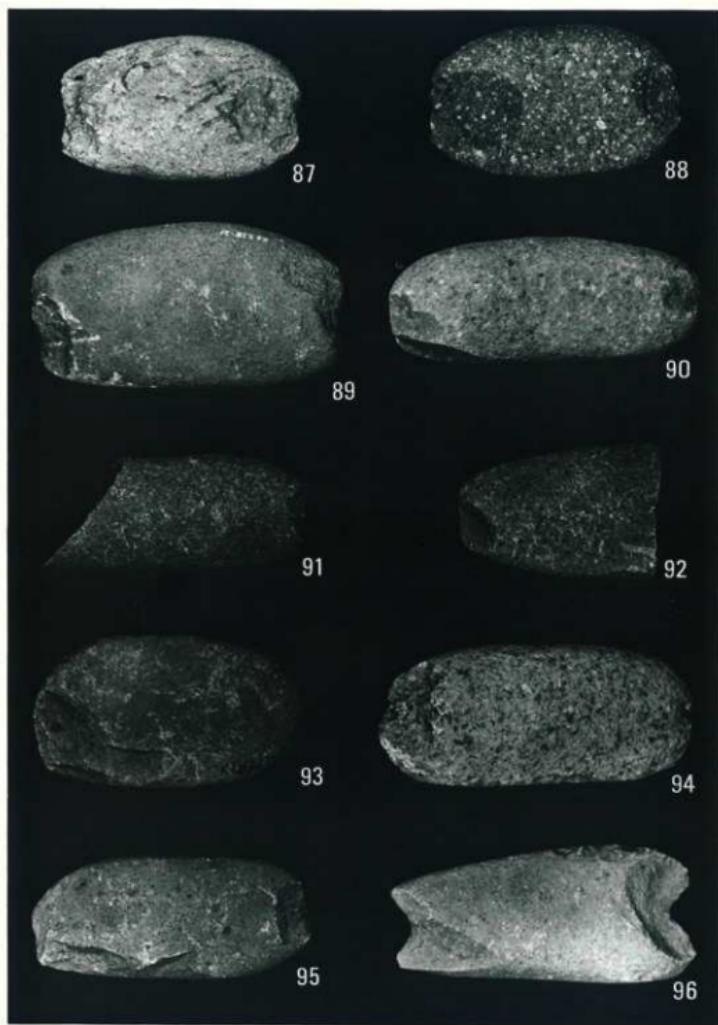
發掘區出土石器



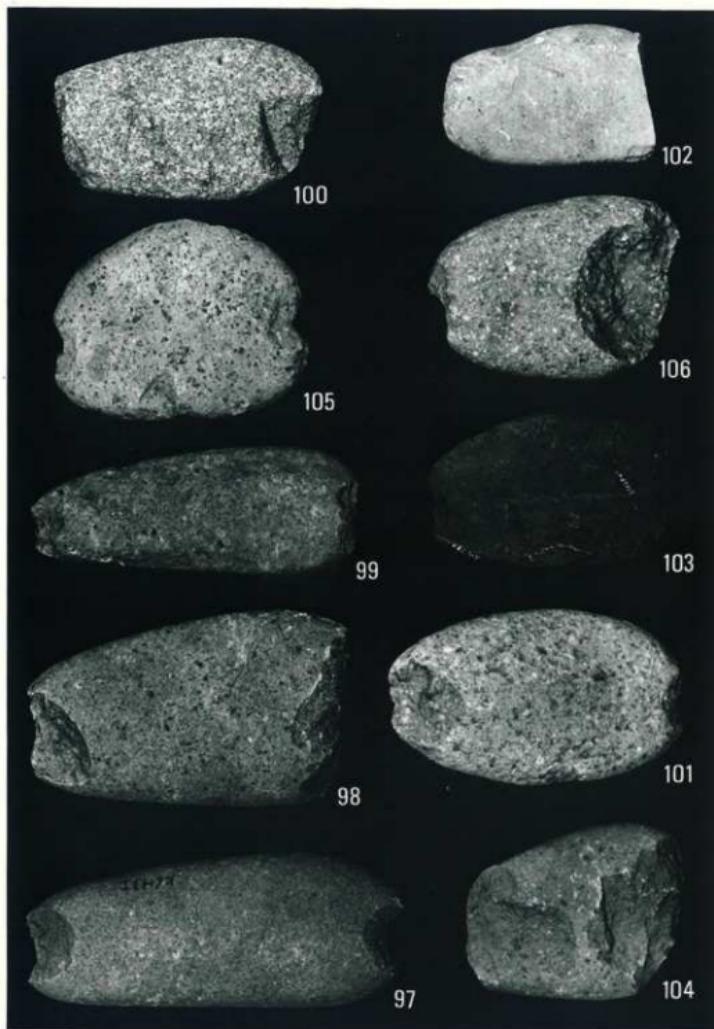
發掘區出土石器



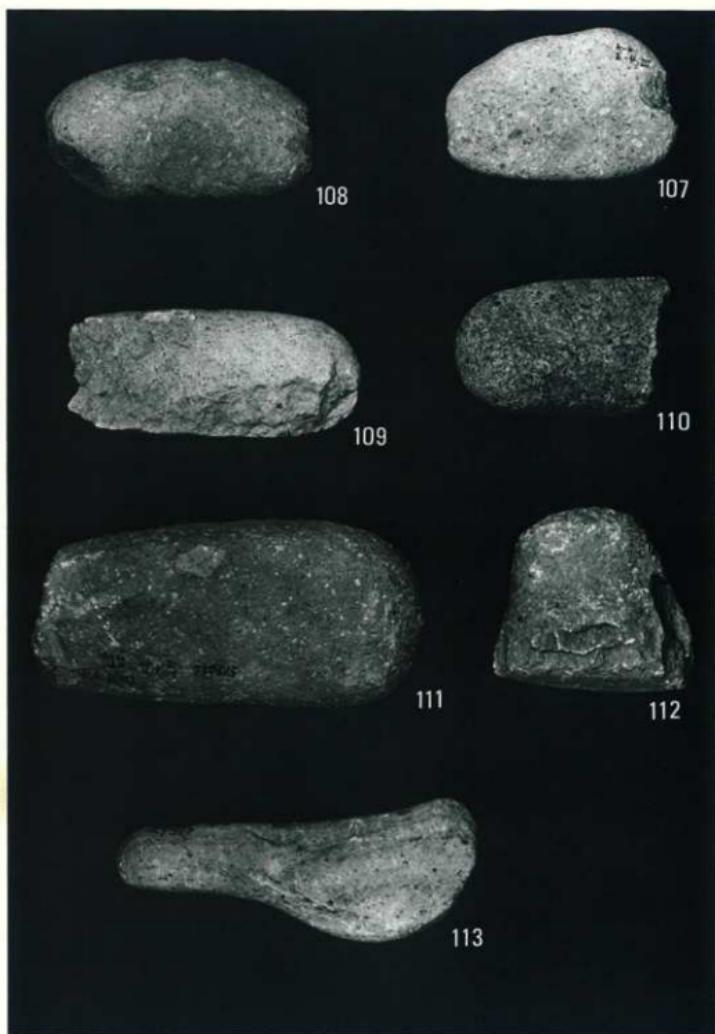
冕彌區出土石器



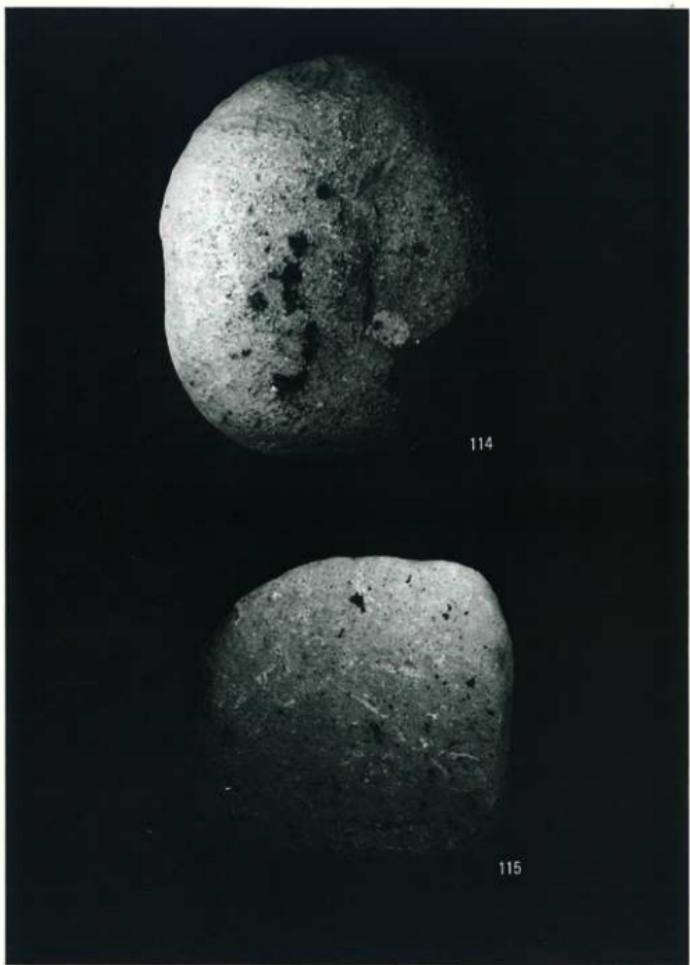
癰塢区出土石器



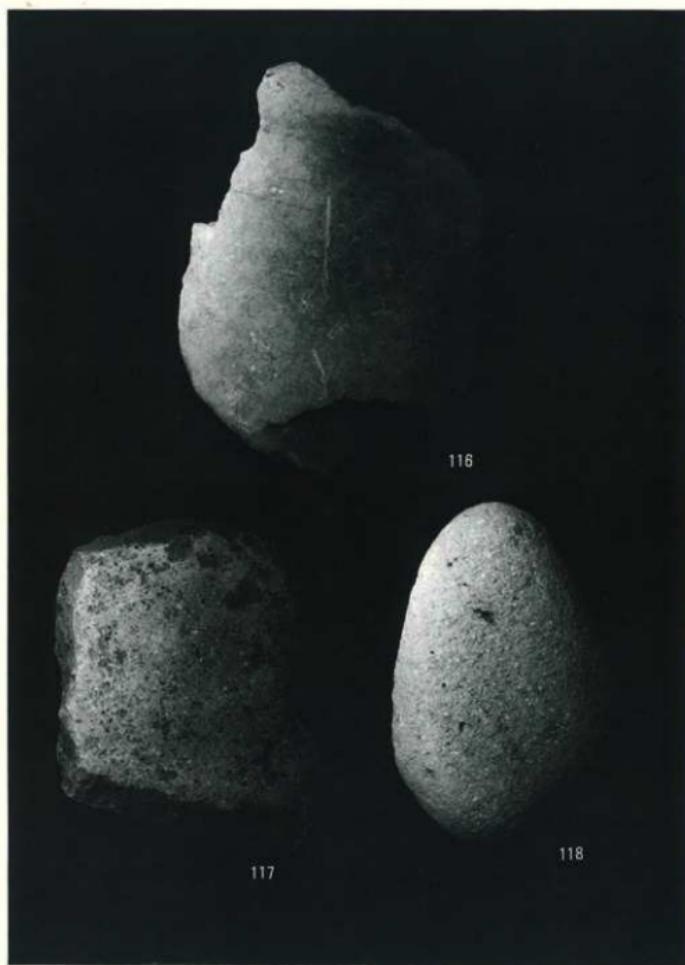
半坡区出土石器



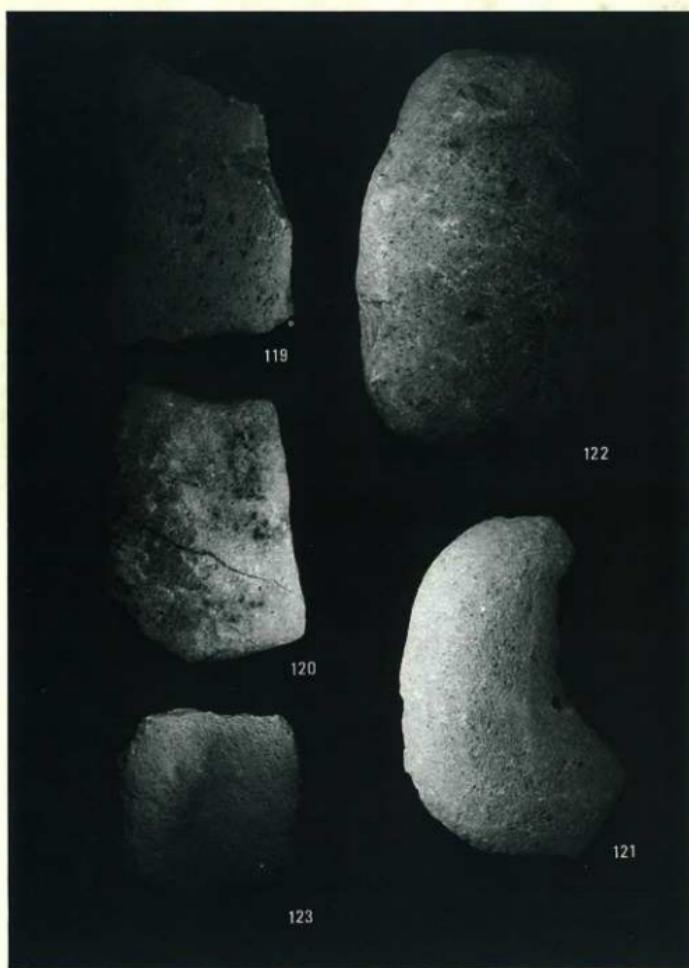
癲癇區出土石器



發掘區出土石器



余姚区出土石器



发掘区出土石器

小砂子遺跡

昭和54年 3月24日印刷
昭和54年 3月31日発行

発行者 上ノ国町教育委員会

印 刷 北海道図書企画

